

ISSN 1342-6818

滋賀県立大学

国際教育センター研究紀要

第7号

2002年12月



*Academic Reports
of
The University Center for Intercultural Education,
The University of Shiga Prefecture*

Hikone, Japan

December 2002, No.7

は し が き

本年も全構成員の寄稿を得て、ここに『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第7号をお届けできますことは、私の大きな喜びであるとともに、また誇りともするところであります。大学の一般教育が、外国語教育をも含めて大綱化され、かつて教養部と呼ばれていた機関が、ほとんどの国公立大学において姿を消し、学部組織へ、さらには大学院組織へと吸収され、それまで一般教育ないし語学教育を担当していた者たちがそれら上部組織による学問分野上や講義担当上の制約から、さまざまな困難に直面している中であって、当滋賀県立大学が設立されるに当って設置された「国際教育センター」の制度が、「教養」教育重視が近年改めて論議の日程にのぼりつつあることともあいまって、いかに先見の明ある人々によって創設されたかが、今こそ証明されつつある、と私には思えてなりません。なぜならば、当センターは、一般教育および語学教育担当義務という、重要ではありますが幅の広い制約のみの上に立って、全構成員はそれぞれの専攻分野で自由闊達に活躍できる、という制度が保障され、我々の努力次第で精気あふれる学問活動が期待できる状況にあるからであります。その努力の成果の主なる一端が、この紀要でありますれば、何卒例年に変わりませず関係各位の御批判、御高評をお願い申上げる次第であります。

さて、次に御報告申し上げねばならぬのは、まことに残念ながら、本年度をもって大谷泰照教授が定年退職されることでもあります。大谷教授が平成8年本学着任以来、諸委員としてはもちろんのこと、わけでも評議員として当時の栗山センター長を長らく補佐されたのち、平成11年度より2年間、国際教育センター長として、当センターのみならず、全学のため、文字通り寝食を忘れて尽力されましたことは、何日も帰宅もせず研究室で管理業務に、はたまた研究に没頭される教授のお姿を、隣室にあつて日々目撃していた者として、私が一番よく証言し得るところであります。さらにその後、教授は、請われて国際交流委員会委員長の重責を担われ、本学の国際交流のため今日まで献身してこられました。大谷教授は、異言語・異文化理解教育の史的研究・英語文化圏の異言語教育政策の研究等を御専門とされ、とりわけ異言語教育の理論と政策に関する研究の分野では、日本におけるパイオニア的存在であり、今もその第一人者であります。教授が本学を去られますことはその意味でも誠に残念ではありますが、まだまだ未啓発のこの分野において、今後も益々の御活躍を期待申上げるとともに、一層の御健勝を祈念いたすものであります。なお、幸いにも来年度は、新しく外国語教育系列にお二人の教授をお迎えできる予定であり、この重鎮らの新たなる参加によって、当センターの一層の発展が期待され得るものと喜んでおります。

平成14年12月25日

滋賀県立大学
国際教育センター長
深見 茂

目次 (Table of Contents)

— 研究論文 —

- 大谷 泰照 (Yasuteru OTANI)
異文化接触の様態 —近代の日本と日本人—
(*Cultural Awareness in a Historical Context*)1
- 上村 盛人 (Morito UEMURA)
Walter Pater's Aestheticism Seen through His "Dante Gabriel Rossetti" 17
- 石田 法雄 (Hoyu ISHIDA)
A Bodhisattva Ideal in the Here and Now33
- クリンガー ウォルター (Walter KLINGER)
Factors for Success in Second Language Learning55
- 小栗 裕子 (Yuko OGURI)
英語学習の動機づけ —大学2年次の初めと終わりを比較して—
(*A Study of Learners' Motivation for English*
—Focusing on Second Year University Students—)75
- 山本 薫 (Kaoru YAMOMOTO)
『台風』—MacWhirr 船長の性格描写について—
(*Typhoon—Characterization of Captain MacWhirr—*)85
- 深見 茂 (Shigeru FUKAMI)
シュトルムの短篇小説『遅咲きの薔薇』における
トリスタン・モティーフについて
(*The Tristan-Motif in Theodor Storm's Novella "Späte Rosen"*)99
- 長島 律子 (Ritsuko NAGASHIMA)
Aperçus sur l'Épisode de la « Conversion de la Comtesse »
dans le Journal d'un curé de campagne119

- 呉 凌非 (WU Lingfei)
動詞の周期から見る「一」に関する副詞
(*An Analysis on Some Adverbs Beginning with the Word "Ichi" from the Point of View of Verb Cycle*)131
- 亀田 彰喜・岡田 章彦 (Akiyoshi KAMEDA & Akihiko OKADA)
情報化社会における情報倫理の意義
(*Significance of Information Ethics in Information Society*)139
- 宮城 成幸・酒井 英昭 (Shigeyuki MIYAGI & Hideaki SAKAI)
通過域外乱を低減した周期的ANCシステムの安定解析
(*Stability Analysis of Periodic ANC Systems with Reducing Passband Disturbances*)149
- 岡本 進 (Susumu OKAMOTO)
大学スキー実習におけるスノーボードの運動強度
(*Exercise Intensity of Snowboarding in Physical Education Classes*)157
- 寄本 明 (Akira YORIMOTO)
高齢者の転倒危険因子および体力に及ぼす
ウォーキングと転倒予防体操の効果
(*Effects of Walking and Physical Conditioning Exercise on Risk Factors of Falling and Physical Fitness in the Elderly*)165

— 国際教育センターの活動の紹介 —

国際教育センターに対する研究費交付一覧	175
滋賀県立大学特別研究費報告	177
石田法雄	
在外研修報告	179
石田法雄	179
宮城成幸	181
教員による学界ならびに社会活動	183

研 究 論 文

異文化接触の様態 —近代の日本と日本人—

Cultural Awareness in a Historical Context

大谷 泰照
Yasuteru OTANI

時代の様態

1) 40年のサイクル

一般人の海外渡航がまだ厳しい国禁であった幕末から、毎年一千数百万人もの観光客が大挙して国外へあふれ出る平成の今日にいたる 130 余年。この間に、異言語・異文化に対する日本人の姿勢は、たしかに劇的なまでの変貌を遂げた。しかしそれは、われわれの異言語・異文化理解のありようが、一般に信じられているほど直線的・上昇的に発展を続けてきたということ、必ずしも意味しない。この間、われわれは直線的・上昇的發展というよりも、むしろ、それとは対照的に、回帰的・反復的な一種の往復運動を繰り返しながら今日にいたったとみるべきではないか。

実は、この 130 余年を子細に点検してみると、ほぼ 40 年の周期で、英語一辺倒のいわば英語蜜月段階（「親英」的段階）と、一転して英語に対して拒否的反應を強める英語不適合段階（「反英」的段階）とを、交互にそれぞれ 3 回繰り返しながら今日に及んでいると考えることができる。¹⁾しかし、この 40 年周期の第 3 サイクルの完結時期を平成 10 年頃とした平成 10 年段階の拙論²⁾は、その前後の急激な状況の変化にともない、21 世紀をむかえた今日の目からみると、いくぶんの修正が必要であると考えられる。³⁾改めてこの 130 余年の推移を整理すると、以下のようにまとめることができる。

幕末は攘夷運動の激しい「反英」的時代であった。「夷狄斬るべし」と公然といわれ、外国人に対する刃傷沙汰が絶えなかった。その結果、薩英・馬関の 2 つの戦争まで引き起こした。ところが、これらの戦いで欧米の力をまざまざとみせつけられると、途端に日本人は手のひらを返すように「親英」に急転換して明治が始まる。

明治 5 年には、「英書の大洪水」⁴⁾といわれる英語異常ブームをむかえ、翌明治 6 年には、森有禮の英語国語化論や黒田清隆らの日本人の人種改良計画まで現れる。明治 16 年には、文字通り西欧風俗模倣のための舞台ともいべき鹿鳴館が完成し、以後この欧化主義的傾向が明治 20 年代初め頃ま

で続くとみてよい。明治 19 年には、中学校英語の週授業時間数が 1、2、3 学年で各 6、6、7 時間と定まり、英語教育強化の体制が整う。

しかし、明治も 20 年代に入り、帝国憲法が公布され（22 年）、教育勅語が発布される（23 年）頃から、次第に国家主義的傾向が強まる。井上毅文相は、それまでの外国語教育奨励の方針から国語教育強化の方針に転じる（26 年）。とくに 27 年からの日清戦争、37 年からの日露戦争にかけては、国家主義が大きな高まりをみせた時期である。35 年には、ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）は東大を追われて、夏目漱石によってとって代わられる。このように、明治初年から明治 40 年頃までのほぼ 40 年を第 1 回目のサイクルとみることができる。その前半の約 20 年を「親英」的時代、後半の約 20 年を「反英」的時代と呼ぶことができる。

大国相手の 2 つの戦いに勝利をおさめた日本は、再び欧米への関心を強め、欧米に急接近することになる。大正デモクラシーの時代である。英語だけでなく、ドイツ語、フランス語、ロシア語、支那語（中国語）などの外国語の学習熱が高まり、翻訳書が街にあふれた。大正 8 年には、中学校の外国語授業時間数は 1、2、3 学年それぞれに週 6、7、7 時間となり、外国語に力を入れた明治の「親英」期をもさらに上回ったほどである。再び外国人教師が呼び戻され、大正 11 年にはハロルド・E・パーマー（Harold E. Palmer）が来日、文部省英語教授研究所所長に就任した。しかし、こんな風潮も、せいぜい大正の末年までであった。

昭和に入ると藤村作の英語教育廃止論が現れ（昭和 2 年）、英語教育排斥の動きが強まる。中学校の外国語授業時間数も、1、2、3 学年各 5、5、6 時間に削減された（昭和 6 年）。昭和 16 年の太平洋戦争突入以後は、英語は「敵性語」と呼ばれ、学校における英語教育も抑圧されることになる。幕末の「夷狄斬るべし」の攘夷運動さながらに、「見敵必殺」をスローガンとする時代となる。こうして明治 40 年頃から昭和 20 年までの約 40 年の期間を第 2 回目のサイクルとみることができる。前半の約 20 年は欧米への傾斜を強める「親英」の時代、後半の約 20 年は欧米から離反する「反英」の時代である。

昭和 20 年、敗戦の一夜が明けると、またもや手のひらを返したように、昨日まで「鬼畜米英」「敵国語排斥」を唱えていた日本人は、「一億総英語学習」に急転する。敗戦の翌月に出た『日米會話手帳』は、実に国民の 20 人に 1 人が買ったというわが国空前の大ベストセラーとなった。明治の初期にも似て、再び英語国語化論（昭和 25 年、尾崎行雄）やフランス語国語化論（昭和 21 年、志賀直哉）がとび出すことになる。中学校の外国語授業時間数もまた、明治初期の第 1 回サイクル前半や明治末年からの第 2 回サイクル前半に近いレベルにまで回復した。

ところが、敗戦直後は文字通り英語一辺倒であった日本も、その後、焦土のなかから経済復興、経済発展を遂げるにつれて、中学校の外国語授業時間数は「週最低 3 時間」（昭和 33 年）、さらに「週標準 3 時間」（昭和 44 年）と次第に削減を重ねて、ついに昭和 52 年には、明治以来最低レベルの「週 3 時間」にまで縮小してしまった。昭和 54 年、エズラ・ヴォーゲル（Ezra Vogel）の *Japan as*

Number One が出るに及んで、「21 世紀は日本の世紀」などと思い上がる日本人が目立つようになった。現職の首相をはじめ、日本の政治的指導者たちの間からは、それまではほとんど耳にすることのなかった他民族蔑視発言が次々ととび出すようになった。そして平成 3 年、日本経済は突如、バブルの崩壊に見舞われ、平成の大不況に襲われることになる。昭和 20 年からこの平成 3 年までの 40 数年を、第 3 回目のサイクルと考えることができる。その前半の約 20 年を英語一辺倒の時代とすれば、後半の 20 数年は英語に対して次第にアレルギーを強めた時代であった。「親英」から「反英」へ、あるいは「自信喪失」から「自信過剰」へ転じた 40 数年である。

平成 10 年段階の拙論⁹⁾では、「敗戦から平成の今日にいたる 50 年ばかり」を「第 3 回目のサイクル」とみる考え方を示した。しかし、その後のこの国の言語文化意識の推移を、世紀も改まった今日の段階からふり返ってみると、第 3 回目のサイクルは、上述のように、すでに平成 3 年をもって完結済みであるとする修正が必要であると考えられる。

エズラ・ヴォーゲルのご託宣（昭和 54 年）通りであれば、この国の経済は 20 世紀末もなお、右肩上がりの成長を続けて、「21 世紀は日本の世紀」になるはずであった。ところが、昭和 60 年を過ぎる頃から、株式や不動産への投資・投機が加熱した、いわゆるバブル景気に突入し、国全体がまさに文字通りマネーに踊った。われわれは *Japan as Number One* などとおだてられ、慢心し、バブルに酔いしれてしまった。

そして平成 3 年、そのバブルが突如崩壊するや一転、平成大不況がこの国を覆った。まさかの銀行、証券会社、生命保険会社、大手デパートが次々に倒産し、金融界は厳しい再編やリストラを迫られることになる。平成 3 年当時の大手市中銀行で、今日もそのままの名前で存続している銀行は、ほとんどなくなってしまった。わが国の歴史にも、かつて例をみなかったことである。あわてた政府は、大手 15 銀行に対して 7 兆円を超える公的資金の注入にまで踏み切らざるを得なくなった。そして、平成 13 年 3 月には、国家財政そのものについても、宮沢財務大臣自らが、「国の財政破局が近い」と発言するまでになった。

これより先、1999 年 8 月 1 日の米『ニューヨーク・タイムズ』紙は、その第 1 面に日本についての大型記事を組み、「今世紀の前半には軍事大国として、後半には経済大国として繁栄した日本が、再び輝きを取り戻すことはない」として、日本の没落に歯止めはかからないとみる論説を載せた。その後、2002 年 2 月 16 日の英『エコノミスト』誌もまた、「日本経済は回復の可能性はない。問題はその崩壊のスピードだけだ。あと数か月か数年で日本経済は完全に破綻するであろう」と報じている。

20 世紀末のこんな絶頂から奈落へのどんでん返しを体験して、今日では「21 世紀は日本の世紀」などと本気で考える日本人は、さすがに少なくなった。バブルの崩壊とともに、日本の政治家たちの他民族侮蔑発言も、ぴたりと鳴りをひそめた。いささか自信過剰気味であったわれわれは、今や自信を大きく喪失してしまったといえるかも知れない。尊大傲慢になりすぎていたわれわれは、今や何とも卑屈になり下がったとさえみえる。

アメリカの当代きっての知日家といわれる MIT のジョン・W・ダワー(John W. Dower)教授は、第2次大戦敗戦後の日本社会を分析した大著 *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II* によって 2000 年 4 月にピューリッツァー賞を受賞した。その際に彼は、戦後 46 年目に日本が体験した「第2の敗戦」に触れて次のように語った。

日本は、かつてナンバーワンであると錯覚した時期があったが、正気の沙汰ではない。どん底状態にある今の日本にアメリカがまったく同情しないのは、当時の傲岸不遜な態度が原因だろう。⁶⁾

そんな日本で、この数年、再び目立ってきたのが英語に対する異常なまでの急接近ぶりである。平成 12 年 1 月、小淵首相の私的諮問機関「21 世紀日本の構想」懇談会は、英語をわが国の第2公用語とするという衝撃的な報告書を首相に提出した。「社会人になるまでに日本人全員が実用英語を習得する」ことを目標として、「公的機関の刊行物は和英2か国語で作成することを義務づけ」ようとするものである。バブル崩壊以前には考えられもしなかったことである。懇談会の河合隼雄座長によれば、報告書作成の段階で、英語を事実上の第1公用語とするシンガポールのリー・クアン・ユー (Lee Kuan Yew) 上級相に面会して教えを乞い、「シンガポールの実状などを見聞するうちに気持ちが変わった」⁷⁾ 結果、英語の第2公用語化の提案に踏み切ったという。この頃から、日本国内で小学校から英語を日常の教育言語としている沼津市の加藤学園が世間の注目を浴びはじめた。平成 12 年 11 月には、加藤学園はその「英語教育」が評価されて、異例の大学英語教育学会賞を受賞した。平成 13 年に入ると、日本の一般の学校教育においても、可能な教科から、教育言語を現在の日本語から英語に切り替える必要を説く声が、公的教育関係機関の中からさえ出はじめた。平成 14 年には、小学校、中学校、高校の一貫校を作り、国語以外はすべて英語で教えようとする群馬県太田市のような自治体まで出現した。

このような平成の英語「第2公用語化」論や英語「教育言語化」論は、日本人の国際的姿勢が自信過剰の「反英」から、自信喪失の「親英」に転じた途端に浮上してくるという点で、明治以来、繰り返し現れた英語「国語化」論の場合と軌を一にするものとみることができる。いいかえれば、過去の英語「国語化」論が異文化との決定的な衝突、すなわち薩英戦争・馬関戦争や太平洋戦争という軍事衝突による敗戦の産物であったと同様に、平成の英語「第2公用語化」論・英語「教育言語化」論もまた、日米経済戦争という経済的衝突による「日本の第2の敗戦」の産物であるといえそうである。そして、同時にこのことは、日米経済戦争の「敗戦」によって、われわれはまたもや、飽きることもなく、明治以来第4回目の「親英」「反英」の新しいサイクルに足を踏み入れようとしていることを意味するが、われわれの間には、そんな自覚はいまもってほとんどない。さらに第4回目のサイクルに踏み込もうとするこの際、過去3回のサイクルを振り返り、その教訓に学ぼうとする姿勢もまたほとんど認められない。「歴史は繰り返さない、もし人が歴史から学ぶならば」というあの有名な先人の教えは、われわれにとってはまったく無縁であるかのようにさえ見える。

2) 異文化の衝突

軍事的・経済的戦争という異文化との決定的な衝突を体験する度ごとに、われわれは「反英」から大きく反転して「親英」に向かう。しかも、そんな豹変ぶりが、いかにわれわれに特異な反応であるかについて、改めて自ら意識することさえあまりない。しかし、たとえば、同じく第2次大戦の敗戦を体験したドイツ人と比較してみると、日本人の反応の特異さがよくわかる。

第2次大戦中、日本人は対戦相手のアメリカ人やイギリス人を、ことごとに「鬼畜米英」と蔑み、一方、自らの国は「神国日本」と呼ぶほどの思い上がりようであった。ところがドイツ人は、たしかに自らアリア人種の優越を信じ、ユダヤ人のホロコーストを敢えてする蛮行は犯しながらも、敵対する連合国人を「鬼畜」とはけっして呼ばなかった。

その大戦中、日本では英語は「敵性語」とみなされ、英語教育は極度に抑圧された。昭和19年には、同志社大学や関西大学では英文科まで廃止してしまったほどである。「敵色の根源は英語だ」⁸⁾と信じられていたからである。日本のこれほどまでの「反英」ぶりに対して、ドイツはまるで違っていた。ナチス是对戦国の言語を「敵性語」とはみなさなかった。英語については、その教育を抑圧するどころか、むしろ第1外国語として敗戦まで戦前同様に教え続けた。フランス語についても、同盟国語のイタリア語と同等の扱いで、その教育を縮小したり禁止することはなかった。

交戦中、日本人ほど極端な「反英」的傲慢に凝り固まらなかったドイツ人兵は、たとえ米軍の捕虜になっても、日本人兵のように手のひらを返したような極端な「親英」的卑屈さには変身しなかった。戦争中、捕虜の取り調べに当たった経験をもつDonald Keeneは、ヨーロッパ戦線のドイツ人捕虜からドイツ軍の機密を聞き出すことは容易でなかったが、日本人捕虜は、「相手にとられた将棋の駒のように」「知っていることをすべて自分からしゃべり出した」という。尋問にあたるアメリカ兵がうっかり質問をし忘れた時など、日本人捕虜の方から「地雷原のことは〔話さなくて〕よろしいんでしょうか」とさえいってアメリカ軍に協力したと述べている。⁹⁾

こんな日独の対照的なまでの「対英」姿勢の差は、両国の敗戦後にも折りにふれて目立った。

たとえば、戦後ただちにアメリカは、日独の民主化を図るために、両国の教育改革に乗り出した。そのためのアメリカ教育使節団が、1946年3月には日本へ、同年8月にはドイツへ派遣され、実地調査の結果を報告書にまとめた。その報告書にもとづき、占領軍は日本に対してアメリカ式6-3-3-4制の一元的学校教育制度の導入を迫った。日本は、その要求に対して一切の抵抗を示さず、ただ唯々諾々として応じた。ところが、ドイツは違っていた。ドイツはたとえ武力では敗れても、言論の場では一歩もあとへ引かなかった。教育については自らの制度に対する強い自信を失わなかったドイツは、アメリカが迫るアメリカ流一元的学校教育制度の導入には頑強に抵抗を貫き、ついに戦前からのドイツ流多元的学校制度を守り通した。¹⁰⁾

そんなドイツからみると、早くも敗戦の翌年には、将来の日本国天皇を予定されるはずの皇太子の教育を、日本人教師ではなく、こともあろうに1年前までの敵国アメリカから招いたアメリカ人の女

性家庭教師の手に委ねてしまうという日本側の姿勢は、戦争中の日本人捕虜の場合と同様に、哀れにも卑屈なものと同映ったはずである。さらに日本では、当代一流の知的指導者と目されていた人々が、次々に日本語をすてて、代わりに英語やフランス語を国語化するよう提唱した。ところが同じ敗戦国でもドイツは、ドイツ語をすてて、英語を国語化しようなどという発言は、戦後この方、一度として出てきたためしはない。

このようにみると、異文化との決定的な衝突による敗北を契機にして、日本人がみせる「反英」から「親英」へ、自信過剰から自信喪失へ、傲慢から卑屈への極端なまでの変貌ぶりは、基本的には異文化そのものの過小評価と過大評価、つまりは異文化理解の甘さや未熟さに起因するものと考えざるを得ない。昭和 26 年、連合軍最高司令官を解任されたマッカーサー (Douglas M. MacArthur) が、アメリカ上院軍事外交委員会で行った「文化的にみると、ドイツ人は 45 歳の壮年であり、日本人は 12 歳の少年である」という証言も、こんな日独の異文化理解にみられる成熟度の差を指してのこととみるべきであろう。

人間の様態

1) 「英語の達人」

これまで見た日本人の対異文化姿勢の「ゆれ」の大きさは、つまるところは日本人の異文化理解そのものの貧困に由来するものといわなければならない。それは、わが国を代表する知的指導者であり、いわば異文化理解のプロと目されていたはずの文化人たちが、かつて、とりわけ決定的な異文化衝突の場面で、実際にどのような行動をとったかをみれば、よくわかる。

この問題を考えるためには、第 2 次世界大戦前後のわが国の状況を振り返ってみるのが便利であろう。当時、海外旅行も外国語学習も、日本人のなかの極く限られた一部の人のものでしかなかったことを考えると、欧米の言語や文化への窓口であり、それについての語り部であったのは、当然、主として英語英文学関係者たちであった。彼らの異文化に関する発言が国民に及ぼす影響は、とうてい今日の比ではなかった。

昭和 16 年 12 月 8 日、太平洋戦争が勃発すると、英語は「敵性語」として排斥され、英語教育の縮小・廃止を求める声が日増しに強まっていった。こんな際にこそ、英語や英米文化のありのままの姿を国民に知らしめる窓口や語り部としての英語英文学関係者の役割が問われたはずである。しかし、米英をもっともよく知るはずの「英語の達人」たちでさえ、総じて世間のこんな動きに抗うどころか、むしろ、そんな世論のアジテーターの役割さえ演じた。わずかに中野好夫 (英文学・東京帝国大学助教授) が、時流に抗して次のように発言し続けたのが目立った程度であった。

アメリカ心やイギリス心は、彼らに對する僕等の無知によって克服しうるものと思つたら大間違ひだ。無知こそ最大の危険であるのだ。英語全廢や削減をもって米英克服の道だなどと思ふのはと

んでもない見當違ひである。¹¹⁾

中野は、当時の「敵性語」攻撃の風潮に対しても少しも屈せず、次のように明確な反撃をこころみている。

好きな英語なら自信をもって、世間の取沙汰など餘りにしないでやるがよい。・・・その成果こそ、やがて英語排斥論などと稱する時局便乗論を、實に炳たる具體的事實をもって一舉に粉碎し去ってくれるものであらう。¹²⁾

こんな中野とは逆に、戦時中の英語英文学関係者のなかには、むしろ時勢に迎合し、好戦的な発言を敢えてする人々が目立った。たとえば当時、日本の英文学界の指導的立場にあった大和資雄（英文学・日本大学教授）は、開戦3か月目の昭和17年3月10日に『英文學の話』¹³⁾を出した。彼はその序文の冒頭と、さらに末尾にも、それぞれ

屠れ米英 われらの敵だ！

分捕れ沙翁もわがものだ！

のローガンの特活字で掲げた。その序文で、大和は「獸性」をもつ米英の「殘虐」さを非難して、「彼等が我國の朝鮮の政治に口幅たいことを言へた義理か？」と問い、「米英を屠るには・・・本書は、時局下わが東洋民族の必讀すべきものの一つであると信ずる」と述べて、「大和魂を鼓舞」する必要を説いている。

同じ頃、英語教育排撃の先頭に立った英文科出身の「文化人」がいた。当時の文壇の大御所菊池寛である。

彼を知る鈴木氏亨によれば、菊池は、すでに高松中学の生徒時代から神田乃武の英和辞典をすべて暗記して、「英語の天才」として近郷にとどろいていたという。¹⁴⁾一高でも京大でも、彼の英語の力は抜群で、教師をも感嘆させることが多かった。京大在学中に発表した『ヒヤシンス・ハルヴェイ訳早見表』はグレゴリー（Lady Augusta Gregory）の作品の日本語訳の誤りを鋭く指摘したもので、プロの翻訳家たちを恐れさせた。すこぶる博覧で、たとえばアイルランドの劇作家ダンセーニ（Lord Dunsany）については、京大の厨川白村がわが国に紹介するより1年も前に、学生の菊池はすでにその作品を読んでいたといわれる。¹⁵⁾京大英文科の卒業論文『英國及び愛蘭の近代劇』は、彼のこんな知識の該博さをよく示すものであった。

菊池はやがて、旺盛な文筆活動を開始するが、そのかわり、『文藝春秋』を創刊し、文芸家協会を設立し、芥川・直木賞を創設し、自ら芸術院会員にも選ばれた。

その彼が、昭和14年夏に対英問題講演会を開いた。席上彼は、わが国の学校英語教育を俎上に載せて、とくに英語の学習時間数を大幅に削減するよう強く提唱している。彼はその年の『文藝春秋』9月号誌上でも次のように述べている。

日本に於て、中等教育に於てまで、あんなに英語を重視するのか、明治40年以前の西洋文明吸収時代の教育を、今もなほ續けねばならないのか、自分には到底理解することが出来ない。

さらに翌 15 年春、陸軍の諸学校が英語を採用試験から除外すると、菊池はただちにそれを支持して、『文藝春秋』5月号に次のように書いた。

陸軍の三學校が、外國語を入學試験から、取り除いたと云ふことは、大賛成である。日本のあらゆる學校に於ても、外國語を徐々に取り除くべきであると思ふ。中學校や女學校で、英語の會話などをやって、一生涯に役に立つ人は、一萬人の中、二、三人ではないかと思ふ。

そして、昭和 16 年 12 月に太平洋戦争が勃発すると、早速 17 年 1 月号の『文藝春秋』で、菊池は次のような決意を表明している。

雑誌の經營編集は・・・國家の國防體制の一翼として國家の意志を意志とし、國策の具現を目標として經營編集せられるべきである・・・僕以下社員一同はあらゆる私心私情を捨てて、本誌を國防思想陣の一大戰車として、國家目的具現のため直往邁進する決心である。

すでにこれより早く、菊池は自らの『文藝春秋』を、もっぱら英語教育排斥論者側のメディアとして、彼らを積極的に支援してきた。伊庭孝「英語削除の提案」(昭和 8 年 2 月)、楚人冠「外國語と芝居氣」(昭和 9 年 2 月)、藤村作「中學英語科全廢論」(昭和 13 年 3 月)などである。

一高でも京大でも、教師をも驚嘆させるほどの英語の学力をもち、しかも英文学専攻でありながら、菊池の英米文化に対する理解は、はなはだ中正を欠いたものであることに驚かされる。彼の英米文学観は次のような発言によく表れている。

およそ日本の新聞などが、シェイクスピアを無條件に擔ぎ上げるなど、英國の評価をそのままに受け賣りしてゐるのである。日本人で、シェイクスピアを讀んで心から感心した人が幾人あるだらうか。日本の文壇にシェイクスピアの影響がどれだけあるといふのだ。¹⁶⁾

およそ文學に關する限り、昔から米英的思想の影響など受けたことは、皆無と云つてよいのである。日本の文壇は、昔から・・・米國や英國の文學を認めていないのである。・・・米國の文學などは、その水準において、世界の二流文學である。¹⁷⁾

菊池は戦時中、日独伊三国同盟を強引に推し進めた陸軍に極めて協力的であったが、彼の文章にもそれが随所に出てくる。当時の他の総合雑誌では考えられないことであつた。

シーザー、アレキサンダー、ジンギスカン、ナポレオンといったやうな大英雄は、もはや出現の餘地はないと思はれた近代史において、ヒットラーのやうな人物が出たことは、一大驚異である。¹⁸⁾

實際の戦争においては、日本はすでに不敗の地位を占めており、米國がいくら軍備を増強しても、その國民性を鍛へ直さない限り、日本へ侵攻して來ることなど至難であると考へられるが、英國が崩壞する可能性は濃厚である・・・¹⁹⁾

本誌は・・・昨年は陸軍報道部から感謝状さへいただいてゐる。これは総合雑誌中、本誌だけではないかと思つてゐる。²⁰⁾

このようにみると、当時、いわばわが国きつての「英語の達人」であり、英語や英米文化をもっともよく知るはずの菊池が、実際には英米の実像を大きく歪曲し、英語教育問題をふくめて、いかに積

極的に当時の国策に順応しようとしたかが明瞭であろう。

しかし、われわれ日本人は、昭和 20 年 8 月 15 日の敗戦の一夜が明けたとたん、まるで手のひらを返すように、それまでの極端なまでの反米英から、一転、今度は極端なまでの親米英に豹変した。敗戦の 1 か月半後に出た『日米會話手帳』²¹⁾は、その後 1 年間で 360 万部を売る空前の大ベストセラーとなり、「国民総英語會話」の時代を現出した。

昭和 25 年には、かねて英語を家庭内言語としていた尾崎行雄は、次のように日本語に代えて英語を国語とする提唱を行ったほどである。

デモクラシーとか民主主義とかいふが、元來漢字や日本語にはこんな言葉がなかったから、日本人が民主主義を體得するには今の國語を思ひ切って英語にした方がよい。²²⁾

尾崎はまた、昭和 25 年 5 月、アメリカの日本問題審議会の招待により渡米中、ニューヨークにおける記者会見で、日本の共産化を防ぐために、「日本全國到る所を軍事基地として供與すべきである。それはアメリカから求められて應ずるのではなく日本から提供すべきである」とまで述べている。²³⁾

あれほどまでに戦争を讚美し、軍部に協力的であった菊池寛も、昭和 20 年 8 月以後、その発言は次のように急転した。

連合軍の進駐に對して、戦々恐々たる人が多かった。しかし、自分は相手が民衆に對して非道なことをするはずはないと信じてゐた。が、實際来てみると、自分が信じてゐた以上に、彼らは紳士的である・・・肩で風を切っていた日本の軍人に比べて、何といふ相違であらう。²⁴⁾

おそらく、東西の歴史を探しても、こんな無謀な、準備のない、しなくともいい戦争を始め、しかもこんな惨敗を喫した國家はないだらう。²⁵⁾

敗戦を境にして、わが「英語の達人」たちの「反英」から「親英」への大変貌は、これほどまでに劇的であった。

2) 「異文化理解の達人」

「英語の達人」たちでさえも正常な感覚を失ってしまったあの戦時中に、実は平常心と國際感覺とを見事に持ち続けた日本人が少数ながらいたことも、同時にまた見落としてはならない。そんな日本人のなかに、当時の帝国海軍の一部の提督たちがいたことは注目に値する。

前大戦末期の沖縄戦は、米陸軍第 10 軍団（沖縄占領部隊）のバックナー（S.B.Buckner）総司令官自らが命を落としたほどに熾烈を極め、イギリスのチャーチル（Sir Winston Churchill）首相をして、その *The Second World War*（1948-53）で「軍事史上もっとも苛烈で、もっとも有名な戦い」といわせた激戦であった。この戦闘では、多くの沖縄県民が日本軍守備隊の楯代わりになり、日本軍の手で虐殺されたものも少なくなかった。そんな沖縄で、海軍沖縄方面根拠地隊司令官大田實中將は、最後まで県民の安全に心を砕いたことで、今も県民の間に広く知られ、敬慕されている。上陸した米軍の包圍網が狭まるなか、彼が自決を前にして海軍次官あてに打電した訣別電報（昭和 20 年 6 月 6

日 20 時 16 分) は、青壮年男子はいうまでもなく、老幼婦女子にいたるまで、沖縄県民がいかに献身的に戦闘遂行に協力したかを述べ、以下のように締めくくられている。

・・・一木一草焦土ト化セン 糧食六月一杯ヲ支フルノミナリト謂フ 沖縄縣民斯克戦ヘリ縣民ニ對シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ²⁶⁾

牛島満や長勇など、旧陸軍第 32 軍司令官たちに対する沖縄の厳しい県民感情とは対照的に、豊見城の大田海軍中将自決の地には、県民の協力でいち早く海軍戦没者慰霊之塔が建立された。かたわらの資料館には、大田がしたためた次のようなメモが今も残されている。

米國ハ排日ヲナシ不都合ナリト責ムル日本人ハ、朝鮮人ニ對シ、臺灣人ニ對シ如何ニナシアリヤヲ考ヘテ後、米國ヲ責ムル幾人アリヤ。

2・26 事件以後、陸軍や右翼の横車に頑強に抵抗し、米英戦を回避するために日独伊三国同盟の締結に反対し続けたのは米内光政、山本五十六、井上成美の海軍提督トリオであった。

当時、陸軍を代表する偉材といわれた宇垣一成朝鮮総督は、朝鮮人の完全な日本人化の必要を説き、「日本は神の使ひとして他國まで導き安んじてやらねばならぬ。これが皇道精神であり、天業である」と考えていた。²⁷⁾ やはり陸軍の天才戦術家といわれた関東軍参謀石原莞爾も、「東西兩文明を統一し・・・建國以來の大理想を世界に宣揚するのは天業・・・。世界戦に勝たねばならぬのは、世界人類を救ふ天職の爲」²⁸⁾ と考え、昭和 6 年 9 月、世界統一戦争に向けてまず満州争変を引き起こし、満州国創設を推進することになる。

こんな陸軍に対して、海軍の米内光政は、

東西兩洋の文明を統一融合して世界の平和を指導するのは、大和民族の使命であると威張るその意氣は至極結構だが、地上から足を浮かして雲を掴むやうなウヌボレと空元氣では將來は思ひやられる。²⁹⁾

と述べて、日本人の思い上がりを厳しく批判した。ヒトラーの『我が闘争』を読んでいた米内は、単に宇垣や石原だけでなく、いわゆる欧州の新秩序を完成することがアーリア人種の使命であるなどと考えるヒトラーのウヌボレに対してもまた批判的で、陸軍の主張するヒトラーのドイツとの同盟にも強く反対し続けた。こんな米内が首相に就くと、右翼団体による米内の暗殺未遂事件が起こったのは昭和 15 年 7 月初めのことであった。

山本五十六もまた、昭和 11 年より 14 年までの海軍次官在任中、その時間と精力の大半を、日独伊三国同盟の阻止に費やしたという。³⁰⁾ そんな山本に対して、右翼団体からは「天二代ハリテ山本五十六ヲ誅スルモノナリ」などの暗殺予告が送りつけられた。³¹⁾

山本は、太平洋戦争突入直前の昭和 16 年 9 月 18 日、東京の学士会館で行った講演で次のように話している。

米國人が贅澤だとか弱いかか思うてゐる人が、澤山日本にあるやうだが、これは大間違ひだ。米國人は正義感が強く偉大なる闘争心と冒険心が旺盛である。特に科學を基礎に置いて學問の上から

割り出しての実行力は恐る可きものである。然かも世界無比の裏付ある資源と工業力とがあるに於てをやである。米國の真相をもっとよく見直さねばいけない。米國を馬鹿にして戦争をするなどといふのは、大間違ひの話だ。³²⁾

井上成美は、海軍航空本部長時代の昭和 16 年 1 月末、海軍大臣および次官に対して「新軍備計画論」と題する意見書を提出している。それには、「日本ガ米國ヲ破リ彼ヲ屈伏スル事ハ不可能ナリ、其ノ理由ハ極メテ明白簡單」として工業生産力が質量ともにまるで違うこと、その上、明治の頭で昭和の軍備を考えていては勝てるわけがないことが詳細に説明されていた。³³⁾

井上成美は、昭和 17 年 11 月、海兵校長に着任すると、「外國語の一つも出来ないやうなものは海軍士官には要らない」³⁴⁾と明言して、対米英戦の最中に、陸軍関係学校とは逆に、むしろ英語教育を強化している。辞書も英和辞典の使用を禁止して、英英辞典だけを使わせ、授業も日本語を使わず、教官も生徒も英語だけでやりとりする新しい授業に切りかえてしまった。³⁵⁾

彼は海兵校長としては、戦争が激化してもなお最後まで、軍事学（軍事専門）よりも普通学（一般教養）に力を入れ、軍人教育よりも国際人教育を重視した。交戦相手であれ、米英国民の美点は美点としての的確に指摘し、皇国史観教育を排し続けた。兵学校の卒業式では、戦時下といえども軍楽隊が盛大に敵国スコットランドの民謡「オールド・ラング・サイン（蛍の光）」を演奏した。井上が、「名曲は、敵味方を絶して名曲である」と考えたからである。³⁶⁾

なお、わが国でヒトラーの『我が闘争』の日本語訳が出たのは昭和 12 年末のことであった。しかし、当時すでにそれを原典で読んでいた井上成美は、日本語訳にはヒトラーの日本民族蔑視の部分が完全に削除されていることに気づいた。彼は削除部分の訳文を印刷して海軍省部内に配布し、日独伊三国同盟の動きが強まるなかで、ヒトラーの日本接近の真意を取り違えることのないよう注意を促している。その部分とは、世界制覇の夢を追うヒトラーが、日本人は想像力の欠如した劣等民族だが、小器用であって、ドイツ人が手足として使うには便利であると述べた数節である。この日本語訳は、実は原典の英訳本からの重訳であったが、日本人のヒトラー理解を歪めるそんな翻訳を故意に行ったのもまた、英語英文学に造詣の深いはずのある高名な翻訳家・米文学史家であった。³⁷⁾

海軍大将鈴木貫太郎は、陸軍の手で始めたともいえる太平洋戦争を自ら終戦に導き、陸軍のなお主張してゆずれなかった徹底抗戦、本土決戦、一億玉砕の惨禍からこの国を救った首相として記憶される。この鈴木の間際感覚をよく示しているのが、大正 7 年、アメリカ・ロサンゼルス日本人会で行った次のようなスピーチである。

君たちは本國を去ってアメリカに來てゐる。アメリカの保護に委嘱してゐる。その地にゐる人はその地に盡くすといふ重大な責任がある。だから君たちは日米戦争が始まったから日本に歸って忠節を盡くさねばならんとか、この地にゐて日本のためにやらうなどと考へるなら、初めからアメリカに來なければよかつたのだ・・・この土地にゐてこの土地に盡くし、日本のことを忘れよとはいはぬが、この土地この土地の風習をよりよく學んで日米戦争の起こらないやうに努力し、將來君た

ちの子孫が大統領にでもなることを考へたらどうだ。³⁸⁾

第2次世界大戦末期の昭和20年4月12日、対戦国アメリカのルーズベルト (Franklin D. Roosevelt) 大統領が急死した。2日後の4月14日、朝日新聞は彼の死を次のように報じた。

ルーズヴェルトが死んだ、あっけなく死んでしまった、騒ぐのは大人気ないが国民は何か小気味よさを感じるのだ。

しかし、時の総理大臣、鈴木貫太郎はメッセージを発表して、ルーズベルトの政治的功績を認め、「深い哀悼の意をアメリカ国民に送る」と述べた。これが同盟通信を通して海外へ伝えられると、欧米では大きな反響を呼んだ。

4月15日の『ニューヨーク・タイムズ』は、鈴木首相の発言を次のように報じた。

私は、ルーズベルト大統領の極めてすぐれた指導力が今日のアメリカの優位をもたらしたと認めざるを得ない・・・従って、大統領の死が、アメリカ国民にあたえた重大な損失を思い、アメリカ国民に深甚なる哀悼の意を表するものである。³⁹⁾

そして、この哀悼の辞は、「新首相〔鈴木首相〕のような度量の大きい人物のことばとしては、少しも不思議ではないと直ちに納得できた」と記者はつけ加えている。

また、中立国スイスの『バーゼル報知』は、その社説で鈴木首相の発言を取り上げ、次のように評している。

敵國の元首の死に哀悼の意を捧げた、日本の首相のこの心ばえはまことに立派である。これこそ日本武士道精神の発露であらう。ヒトラーが、この偉大な指導者の死に際してすら誹謗の言葉を浴びせて恥じなかったのとは、何といふ大きな相違であらうか。連日にわたってアメリカ空軍の爆撃にさらされながら、敵國アメリカの元首の死に哀悼の意を表することを忘れなかった日本の首相の禮儀正しさに深い敬意を表したい。⁴⁰⁾

折からアメリカへ亡命中のドイツのノーベル賞作家トーマス・マン (Thomas Mann) は、故人ルーズベルトに対して節度を欠いた呪詛のことばを繰り返すヒトラーと対比して、次のように日本人の品位と騎士道精神を称えるラジオ放送を故国に向けて行っている。

ドイツ人諸君、日本帝国の総理大臣が故人〔ルーズベルト〕を偉大な指導者と呼び、アメリカ国民にこの喪失に対する日本国の哀悼の意を表明したことに對して、諸君は何といいますか？

これは呆れるばかりのことではありませんか。日本はアメリカと生死をかけた戦争をしています。野心的な封建君主のグループが、日本をこの戦争に導いたのです。しかしこの階層の危険な支配が、道徳的な破壊と麻痺を醸成し、ちょうど私たちのあわれなドイツで民族社会主義がやっけてのけることができたと同じように、国を零落させたのだなどというのは、はなはだしい見当ちがいです。あの東方の国には、騎士道精神と人間の品位に対する感覚が、死と偉大性に対する畏敬が、まだ存在するのです。⁴¹⁾

そして、それから4か月後、陸軍の総力をあげての抵抗を押し切って、敗色一方の大戦を収めると

いう、いわば終戦の「偉業」を成し遂げた鈴木貫太郎は、そのために陸軍の軍人たちによって自宅を焼き討ちされ、敗戦の翌日からは、刺客の目を逃れて、ひそかに身を隠さざるを得なかった。⁴²⁾

このように考えると、文字通り狂信的な国粹主義の時代に、身の危険をもちかえりみず、揺らぐことの少ない平常心と広い国際的視野を持ち続けたこれら海軍提督たちは、時流に乗って豹変する「英語の達人」たちをはるかに超えた「異文化理解の達人」たちであったと認めざるを得ない。

われわれ日本人は、幕末以来今日まで130余年間、異文化に対して卑屈ともいえる自信喪失の「親英」時期と、一転して傲慢ともいえる自信過剰の「反英」時期の、いわば2極間の往復運動を、ほぼ40年周期で3たび繰り返してきた。そして、またもや飽きることもなく「親英・反英」の第4回目のサイクルに足を踏み入れようとするいま、われわれは、われわれ自身のこのような対異文化姿勢のありようを、改めて厳しく点検する必要があるのではないか。そのために、「親英」・「反英」のサイクルを超えた、いわば「知英」派海軍提督たちの戦時中の生き方は、われわれにとっては、まさに頂門の一針というべきではないか。おそらく、このような反省なしには、われわれは今後も、いたずらに政治や経済の目先の動向に振り回された、いわば移ろいやすい心情的「親英・反英」のサイクルを重ねて、言語や文化についての深い理解に根ざした覚めた目の「知英」⁴³⁾の域に達することは困難と思われるからである。

これを学校教育における異言語教育の立場からみれば、おそらく、いま本当に問われているのは、異言語の単なる運用技能や目先の実用効果よりも、むしろその教育に対する基本的な姿勢そのものであるといわなければならない。異言語を通しての異文化理解教育とは、異言語の単なる技能や知識の教育にとどまらず、それを通してなによりも絶対的な自己中心の発想から、多様で相対的な世界の認識への脱皮を促すものでなければならないはずである。それは、いいかえれば、わが国を機軸として世界を認識する「言語・文化的天動説」から、世界の視点からわが国を考え直す「言語・文化的地動説」へのコペルニクス的転回を意味する。大和や菊池ら「英語の達人」たちと鈴木や井上ら海軍提督たちの国際感覚や文化意識の差も、しょせんはこんな基本的な認識の差に起因するものと考えざるを得ない。

[注]

- 1) このような私見を最初に発表したのは、昭和44年7月23日、大学英語教育学会夏期セミナー（八王子・大学セミナーハウス）での研究発表「日本の異言語教育の動向」においてであった。さらに昭和60年10月26日の大学英語教育学会全国大会（名古屋・椋山女学園大学）シンポジウム「現代の学生とこれからの英語教育」において、40年周期の第3サイクルの可能性について論じた。そして、平成10年12月、『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第3号の拙論「日本人の言語意識を問う」において、幕末以来の40年周期の第3サイクルが、ほぼ平成10

年頃をもって完結したとみる考え方を示した。

- 2) 大谷泰照「日本人の言語意識を問う」『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』第3号、1998年12月
- 3) 「[表] 言語文化意識の変化の指標」参照。
- 4) 大和田建樹『明治文學史』(博文館、明治27年)、4ページ
- 5) 前掲「日本人の言語意識を問う」
- 6) *AERA* (朝日新聞社)、2000年6月19日、41ページ
- 7) 『朝日新聞』平成12年4月4日
- 8) 武藤貞一「敵色の根源は英語だ」『報知新聞』昭和17年3月2日
- 9) ドナルド・キーン『日本との出会い』(中央公論社、昭和50年)、34ページ
- 10) 杉谷眞佐子「ドイツ連邦共和国」『「先進諸国」の外国語教育—日本の外国語教育への示唆—』(大学英語教育学会関西支部「海外の外国語教育」研究会、2002年3月)、19ページ
- 11) 中野好夫「直言する」『英語青年』(英語青年社)、昭和18年2月1日
- 12) 中野好夫「夏日有感」『英語研究』(研究社)、昭和17年8月
- 13) 大和資雄『英文學の話』(健文社、昭和17年)
- 14) 鈴木氏亨『菊池寛傳』(實業之日本社、昭和12年)、50-53ページ
- 15) 同上、168ページ
- 16) 『文藝春秋』(文藝春秋社)、昭和10年4月
- 17) 同上、昭和17年7月
- 18) 同上、昭和16年8月
- 19) 同上、昭和17年2月
- 20) 同上、昭和19年3月
- 21) 『日米會話手帳』(東京神田錦町2の5:科學教材社、昭和20年10月1日、80錢)
- 22) 「目覚めよ、日本國民」『毎日新聞』、昭和25年6月11日
- 23) 伊佐秀雄『尾崎行雄傳』(尾崎行雄傳刊行會、昭和26年4月)、1346ページ
- 24) 『文藝春秋』昭和21年1月
- 25) 同上
- 26) 田村洋三『沖縄県民斯克戦へり—大田實海軍中將一家の昭和史』(講談社、1994年3月)、380-81ページ
- 27) 宇垣一成日記(昭和11年11月)。高田万亀子『米内光政の手紙』(原書房、1993年10月)、25ページ
- 28) 同上、24ページ
- 29) 阿川弘之『米内光政 上巻』(新潮社、昭和53年12月15日)、83ページ

- 30) 反町栄一『人間 山本五十六 一元帥の生涯—』(光和堂、昭和 53 年 12 月 8 日)、415 ページ
- 31) 阿川弘之『新版 山本五十六』(新潮社、昭和 44 年 11 月 25 日)、173 ページ
- 32) 反町栄一 上掲書、450 ページ
- 33) 阿川弘之『米内光政 下巻』(新潮社、昭和 53 年 12 月 15 日)、63 ページ
- 34) 『元海軍大将井上成美談話収録』(水交會、昭和 34 年 11 月)
- 35) 井上成美「海軍兵学校と私」『海軍兵学校』(朝日新聞社、昭和 45 年)
- 36) 阿川弘之『井上成美』(新潮社、1986 年 9 月 25 日)、345, 355, 365-6 ページ
- 37) 同上
- 38) 鈴木一編『鈴木貫太郎自伝』(時事通信社、昭和 43 年 4 月 1 日)、200 ページ
- 39) 'I must admit Roosevelt's leadership has been very effective and has been responsible for the Americans' advantageous position today. . . . For that reason I can easily understand the great loss his passing means to the American people and my profound sympathy goes to them.' . . . he quickly realized it as not strange coming from a man of large caliber as the new Premier is.
- 40) 小堀桂一郎『宰相 鈴木貫太郎』(文藝春秋、1982 年 8 月 15 日)、68 ページ
- 41) 1945 年 4 月 19 日放送。伊藤利男訳「ドイツの聴取者諸君!」『トーマス・マン全集 10』(新潮社、1972 年 5 月)、654 ページ
- 42) 『日本海軍の本・総解説』(自由国民社、1984 年 12 月 25 日)、23 ページ
- 43) 前掲「日本人の言語意識を問う」、29-32 ページ参照。

Abstract

It is no accident that our society is marked by a high degree of cultural parochialism. This is partly because of the linguistic policies adopted by the Ministry of Education which have not favored the introduction of cultural plurilingualism in our schools. The purpose of this paper is to revisit the situation of our linguistic and cultural awareness from the historical perspectives and illuminate some educational problems which are endemic in our community to a degree rarely found in other societies.

〔表〕言語文化意識の変化の指標

文久3 (1863)	攘夷運動：「夷狄斬るべし」
元治元 (1864)	薩英戦争
明治元 (1868)	馬関戦争
5 (1872)	英語異常ブーム
6 (1873)	英語「国語化」論・日本人種改造論
16 (1883)	鹿鳴館落成
19 (1886)	中学外国語時数 6-6-7
22 (1889)	帝国憲法公布
26 (1893)	国語教育強化論
27-28 (1894-5)	日清戦争
35 (1902)	ハーン、東大を追われる
37-38 (1904-5)	日露戦争
明治40 (1907)	
大正8 (1919)	中学外国語時数 6-7-7
11 (1922)	パーマー、文部省英語教授研究所々長に就任
昭和2 (1927)	英語教育廃止論
6 (1931)	中学外国語時数 5-5-6
15 (1940)	陸軍関係学校、入試科目から外国語削除
16-20 (1941-5)	太平洋戦争：「鬼畜米英」「見敵必殺」
18 (1943)	中学外国語時数 4-4-4 (選択)
昭和20 (1945)	敗戦
	『日米会話手帳』空前のベストセラー
21 (1946)	フランス語「国語化」論
22 (1947)	義務教育に英語導入（「1週6時間が理想的な時数であり、1週4時間以下は効果が極めて減る」）
25 (1950)	英語「国語化」論
33 (1958)	中学外国語時数「週最低3時間」
44 (1969)	中学外国語時数「週標準3時間」
49 (1974)	平泉案（「わが国では外国語の能力のないことは事実としては全く不便を来さない」）
52 (1977)	中学外国語時数週3時間
54 (1979)	<u>Japan as Number One</u>
61 (1986)	中曽根首相「アメリカ人の知的水準」発言
平成元 (1989)	中学外国語時数週3～4時間
平成3 (1991)	バブル崩壊・平成大不況
9 (1997)	銀行、証券会社、生命保険会社の倒産始まる
12 (2000)	英語「第2公用語化」論・加藤学園へ JACET賞
13 (2001)	英語「教育言語化」論・宮沢財務相「国の財政破局近い」発言

Walter Pater's Aestheticism Seen through His "Dante Gabriel Rossetti"

Morito UEMURA

I

Walter Pater wrote an essay on Dante Gabriel Rossetti in 1883, one year after the death of the Pre-Raphaelite artist. Then in 1889 Pater incorporated this essay in his *Appreciations*, a book of collected essays and reviews, where "Dante Gabriel Rossetti" was placed immediately after "Aesthetic Poetry." "Aesthetic Poetry" derives from a review of William Morris's poetry, originally written in 1868, in which Pater introduces a new trend in English poetry, that is, aesthetic poetry, discussing the rebellious movement of young artists using Morris as one of such aesthetic models. In the very last sentence which concludes "Aesthetic Poetry," Pater writes, "But that complexion of sentiment is at its height in another 'aesthetic' poet of whom I have to speak next, Dante Gabriel Rossetti."¹ Therefore, in the 1889 edition of *Appreciations*, "Aesthetic Poetry" and "Dante Gabriel Rossetti" make a serial pair with regard to Pater's idea of aestheticism, the former giving a general introduction to aesthetic poetry and the latter expatiating on it with special reference to Rossetti as a leading figure of the rising group of rebellious artists. While "Aesthetic Poetry" consists of 14 paragraphs, "Dante Gabriel Rossetti" comprises 13 paragraphs. Each of the paired essays covers almost identical nine pages excluding the notes provided to the text by Bloom. These textual constructions also suggest a strong resemblance between the two essays. The aim of this paper is to take a close look at each paragraph of "Dante Gabriel Rossetti" in an attempt to detect some characteristic features of Pater's aestheticism.

II

"Dante Gabriel Rossetti" begins with a typically Paterian tortuous sentence: "It was

¹ "Aesthetic Poetry" included in Harold Bloom ed., *Selected Writings of Walter Pater* (New York: Columbia Univ. Press, 1974), p. 198. Future page references to this edition are cited parenthetically in the text as "AP."

characteristic of a poet who had ever something about him of mystic isolation, and will still appeal perhaps, though with a name it may seem now established in English literature, to a special and limited audience, that some of his poems had won a kind of exquisite fame before they were in the full sense published.”² Here Pater introduces Rossetti as a poet of “mystic isolation” who has always appealed, however, to “a special and limited audience” as a well-established name even before the publication of his poetry. In 1882, one year prior to Pater’s writing “Dante Gabriel Rossetti,” Walter Hamilton in his *The Aesthetic Movement in England*, the first book on English aestheticism, recognizes Rossetti as “a typical representative” of the aesthetic movement, stating, “And if he [Rossetti] was not the actual founder of the school [Pre-Raphaelite Brotherhood], his great and admitted abilities, both in poetry and painting, rendered him a typical representative of the [aesthetic] movement.”³ According to Pater, only “a special and limited audience” can really appreciate the aesthetic quality in Rossetti. This limited eligibility of aesthetic appreciation is indeed a characteristic notion with Pater since he repeatedly expresses the same idea throughout his works. In “Aesthetic Poetry,” for example, he says, “It is in the *Blue Closet* that this delirium reaches its height with a singular beauty, reserved perhaps for the enjoyment of the few” (“AP,” p. 193), thus indicating that the “singular beauty” of the poem by Morris is “reserved” only “for the enjoyment of *the few*” [italics added]. And in *Marius the Epicurean* Pater adopts such phrases as “the select few” and “the rare minority of *élite* intelligences.”⁴ In the midst of general sentiment of scorn and criticism towards things aesthetic, typically exemplified in the tremendous theatrical success of *Patience*, Gilbert and Sullivan’s comic opera of 1881, Pater insists that only “a special and limited audience” can really appreciate the essence of aestheticism.

Pater goes on to describe the charm of “The Blessed Damozel,” one of Rossetti’s earliest works, and his other poems. He recognizes “the same peculiar kind of interest” (“DGR,” p. 199) in Rossetti as a painter as well as a poet. Like Hamilton, Pater introduces Rossetti as “the leader [,] of a new school then rising into note” (“DGR,” p. 199). The “new school then rising into note” is of course the group of Pre-Raphaelite artists. The Pre-Raphaelite Brotherhood (PRB) had been initially organized in 1848 by revolting young artists

² “Dante Gabriel Rossetti” included in Harold Bloom ed., *Selected Writings of Walter Pater*, p. 199. Future page references to this edition are cited parenthetically in the text as “DGR.”

³ Walter Hamilton, *The Aesthetic Movement in England* (London: Reeves & Turner, 1882), p. 5.

⁴ Walter Pater, *Marius the Epicurean*, ed. Ian Small (1885; Oxford & New York: Oxford Univ. Press, 1986), pp. 138, 145. Future page references to this edition are cited parenthetically in the text as *Marius*.

with their manifesto statements as ambitious young men who refused to be trammelled by old conventions and traditions. Though Pater never mentions the term "Pre-Raphaelite" here, by aestheticism he means Pre-Raphaelitism. As has been mentioned above, Pater has already written an essay on aesthetic poetry, in which he stresses the "rebellious" ("AP," p. 191) and "antinomian" ("AP," p. 192) element as a characteristic feature in aesthetic poetry.

Here in "Dante Gabriel Rossetti," however, Pater pays attention to the quality of "sincerity" as the common significant feature in Rossetti and his group:

... a perfect sincerity, taking effect in the deliberate use of the most direct and unconventional expression, for the conveyance of a poetic sense which recognised no conventional standard of what poetry was called upon to be. ... here was certainly one new poet more, with a structure and music of verse, a vocabulary, an accent, unmistakably novel, yet felt to be no mere tricks of manner adopted with a view to forcing attention—an accent which might rather count as the very seal of reality on one man's own proper speech; as that speech itself was the wholly natural expression of certain wonderful things he really felt and saw. ("DGR," p. 199)

The "poetic sense which recognised no conventional standard of what poetry was called upon to be" indicates distinctly the "rebellious" and "antinomian" element Pater has emphasized in "Aesthetic Poetry" ("AP," pp. 191-192). And "the wholly natural expression of certain wonderful things he [a poet] really felt and saw" also has resonances with what Pater has stressed in the "Preface" to *The Renaissance*, saying, "in aesthetic criticism the first step towards seeing one's object as it really is, is to know one's own impression as it really is, to discriminate it, to realise it distinctly."⁵

Pater then points out that Rossetti had the "gift of transparency in language—the control of a style which did but obediently shift and shape itself to the mental motion, as a well-trained hand can follow on the tracing-paper the outline of an original drawing below it," so that he could produce "a volume of typically perfect translations from the delightful but difficult 'early Italian poets': such transparency being indeed the secret of all genuine style, of all such style as can truly belong to one man and not to another" ("DGR," p. 200). By repeating the same word emphatically in such a short space of one sentence, Pater highlights

⁵ Walter Pater, *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*, ed. Donald L. Hill (1893; Berkeley: Univ. of California Press, 1980), p. xix. Future page references to this edition are cited parenthetically in the text as *Renaissance*.

“transparency,” and this word immediately reminds us of a title and a passage of the essay Pater prepared in 1864 for Old Mortality Society at Oxford. The essay is titled “Diaphaneité.” According to *le Petit Larousse illustré* (1992), the French word “diaphane” comes from the Greek origin, *diaphanês*, which means “transparent” (p. 332). In “Diaphaneité” Pater states:

It is just this sort of entire transparency of nature that lets through unconsciously all that is really lifegiving in the established order of things; it detects without difficulty all sorts of affinities between its own elements, and the nobler elements in that order. But then its wistfulness and a confidence in perfection it has makes it love the lords of change. What makes revolutionists is either self-pity, or indignation for the sake of others, or a sympathetic perception of the dominant undercurrent of progress in things.⁶

With his “gift of transparency” Rossetti “must be one discontented with society as it is” (“D,” p. 254). That is to say, he is one of the “rebellious” (“AP,” p. 191) “revolutionists” (“D,” p. 251) in the field of arts like “antinomian” aesthetic poets delineated in “Aesthetic Poetry.”

After focussing on Rossetti’s resemblance to Dante, “the great Italian poet,” in his handling the technique of “particularisation” as “the first condition of the poetic way of seeing and presenting things” (“DGR,” p. 200), Pater notes another of Rossetti’s “conformities to Dante, the really imaginative vividness ... of his personifications” (“DGR,” p. 201) after a fashion of *Frankenstein*, the artificially created being in Mary Shelley’s novel of 1818. Here Pater tries to align Rossetti with not only Dante but Mary Shelley’s *Frankenstein*, implying that Rossetti’s aestheticism has affinity with Dante’s medievalism and Mary Shelley’s romanticism. Pater has already made an identical argument in the second paragraph of “Aesthetic Poetry”: “The writings of the ‘romantic school,’ of which the aesthetic poetry is an afterthought. ... [A]nd a return to true Hellenism was as much a part of this reaction as the sudden preoccupation with things mediaeval” (“AP,” pp. 190-191).

In the short paragraph 4, Pater discusses the significant existence of “mania” in poetry, utilizing Plato’s *Phaedrus*:

Poetry as a *mania*—one of Plato’s two higher forms of “divine” mania—has, in all

⁶ Walter Pater, “Diaphaneité” included in *Miscellaneous Studies: A Series of Essays* (London: Macmillan and Co., 1910), pp. 251-252. Future page references to this edition are cited parenthetically in the text as “D.”

its species, a mere insanity incidental to it, the "defect of its quality," into which it may lapse in its moment of weakness; and the insanity which follows a vivid poetic anthropomorphism like that of Rossetti may be noted here and there in his work, in a forced and almost grotesque materialising of abstractions, as Dante also became at times a mere subject of the scholastic realism of the Middle Age. ("DGR," p. 201)

Plato in *Phaedrus* argues about "a third kind of possession and madness" that "comes from the Muses." The Greek philosopher states:

This takes hold upon a gentle and pure soul, arouses it and inspires it to songs and other poetry, and thus by adorning countless deeds of the ancients educates later generations. But he who without the divine madness comes to the doors of the Muses, confident that he will be a good poet by art, meets with no success, and the poetry of the sane man vanishes into nothingness before that of the inspired madmen.⁷

By saying that "the insanity which follows a vivid poetic anthropomorphism like that of Rossetti may be noted here and there in his work," Pater seeks to imply that one could treat Plato as if he were, like Dante, an earlier aesthetic writer with his understanding and use of "the divine madness." And in *Plato and Platonism*, published in 1893, Pater treats Plato as if the Greek philosopher were an aesthetic writer like Rossetti, as Richard L. Stein points out:

Pater manages to portray the idealist-philosopher [Plato] as an artist, using phrases that link Plato to the tradition of Romantic writers described in *Appreciations*. Like Rossetti, for example, Plato is a "lover" after the manner of Dante, displaying an "intimate concern with, his power over, the sensible world." ... He [Plato] is, in fact, "the earliest critic of the fine arts," who "anticipates the modern notion that art as such has no end but its own perfection, — 'art for art's sake.'"⁸

"[T]he insanity which follows a vivid poetic anthropomorphism" ("DGR," p. 201) has resonances with "a beautiful disease or disorder of senses" in paragraph 5 of "Aesthetic Poetry" ("AP," p. 192) and with a passage in paragraph 6 as well: "the whole attitude of

⁷ Plato, *Euthyphro, Apology, Crito, Phaedo, Phaedrus*, tr. Harold North Fowler (London and Cambridge, MA: William Heinemann and Harvard Univ. Press, 1914 ["The Loeb Classical Library"]), p. 469.

⁸ Richard L. Stein, *The Ritual of Interpretation: The Fine Arts As Literature in Ruskin, Rossetti, and Pater* (London and Cambridge, MA: Harvard Univ. Press, 1975), pp. 289-290.

nature ... bent as by miracle or magic to the service of human passion" ("AP," p. 193). These statements have been given in explaining the connection between the aesthetic poetry of Morris and the poetry of Provence.

In the 5th paragraph of "Dante Gabriel Rossetti," Pater refers to two poems by Rossetti, that is, "Love's Nocturn" and "The Stream's Secret," because they exemplify "insanity of realism," and Pater goes on to say, "Such artifices, indeed, were not unknown in the old Provençal poetry" ("DGR," p. 202). When we note the title of the first poem by Rossetti mentioned above, we are reminded that Pater has given explanatory information to the word, "nocturn," at the beginning of the 7th paragraph of "Aesthetic Poetry." "The most popular and gracious form of Provençal poetry was the *nocturn*, sung by the lover at night at the door or under the window of his mistress" ("AP," p. 193), says Pater, and then he quotes a poem by Morris. What Pater has stated in terms of Provençal poetry in paragraph 7 of "Aesthetic Poetry" has its echo in paragraph 5 of "Dante Gabriel Rossetti," but here again Pater underlines Rossetti's seriousness and sincerity. "Only, in Rossetti at least," says Pater, "they [artifices employed in the old Provençal poetry] are redeemed by a serious purpose, by that sincerity of his, which allies itself readily to a serious beauty, a sort of grandeur of literary workmanship, to a great style. One seems to hear there a really new kind of poetic utterance, with effects which have nothing else like them ... like the narrative of Jacob's Dream in *Genesis*, or Blake's design of the Singing of the Morning Stars, or Addison's Nineteenth Psalms" ("DGR," p. 202). Here again, with the works of Plato and Dante, the narrative of Jacob's Dream in *Genesis*, or Blake's design of the Singing of the Morning Stars, or Addison's Nineteenth Psalms are regarded to have been imbued with Rossetian aestheticism.

Paragraph 6 begins with reconfirmation of the existence of "a vivid poetic anthropomorphism" ("DGR," p. 201) in Rossetti's poetry. Then comes a typically Paterian long-winded sentence:

The lovely little sceneries scattered up and down his poems, glimpses of a landscape, not indeed of broad open-air effects, but rather that of a painter concentrated upon the picturesque effect of one or two selected objects at a time—the "hollow brimmed with mist," or the "ruined weir," as he sees it from one of the windows, or reflected in one of the mirrors of his "house of life" (the vignettes for instance seen by Rose Mary in the magic beryl) attest, by their very freshness and simplicity, to a pictorial

or descriptive power in dealing with the inanimate world, which is certainly also one half of the charm, in that other, more remote and mystic, use of it. ("DGR," p. 202)

This is a recapitulation, citing "Rose Mary" as an example, of Rossetti's technique of "particularisation," which Pater has already explained in paragraph 2. A passage written about a landscape "reflected in one of the mirrors of his 'house of life'" strongly reminds the reader of the magic mirror of Tennyson's "The Lady of Shalott": "And moving through a mirror clear / That hangs before her all the year, / Shadows of the world appear."⁹ After hinting an association with Tennyson's poetry in this way, Pater actually quotes, two sentences later, lines from a poem by Tennyson, not "The Lady of Shalott," but "Godiva." Pater is good at engaging the reader's attention in this way. A similar strategic technique is employed in Pater's use of the phrase, "house of life," in the above-quoted sentence. Here Pater intends to have a "house of life" signify the general meaning that one finds in a dictionary, that is, a "house where one lives." Pater has calculated, however, to re-employ this same phrase, making it italicized and partly capitalized, in paragraphs 8,9, and 10, in which *The House of Life* comes to have much more significantly impregnated meaning in addition to being a title of Rossetti's book of sonnet sequence. Pater has already employed a similar strategy, using the phrase, "earthly paradise," in paragraphs 1, 8, and 13 of his "Aesthetic Poetry."

III

In paragraph 7 Pater points out that "Rossetti is one with him [Dante]" in his conception that "the material and the spiritual are fused and blent" ("DGR," p. 203). Here Pater focusses on "a false contrast or antagonism by schoolmen" between spirit and matter and considers that sort of contrast as an abstract "artificial creation." As an aesthetic critic Pater makes much of "our actual concrete experience":

In our actual concrete experience, the two trains of phenomena which the words *matter* and *spirit* do but roughly distinguish, play inextricably into each other. Practically, the church of the Middle Age by its aesthetic worship, its sacramentalism, its real faith in the resurrection of the flesh, had set itself against that Manichean

⁹ *The Poems of Tennyson*, ed. Christopher Ricks, 3 vols. (Berkeley: Univ. of California Press, 1987), I, 390-391.

opposition of spirit and matter, and its results in men's way of taking life; and in this, Dante is the central representative of its spirit. ("DGR," p. 203)

Pater clearly denounces the dualism between matter (body) and spirit (soul) which has been inculcated overwhelmingly in Victorian age through bourgeois education, humiliating the former and stressing the importance of the latter. Pater's stance with respect to the issue of body and soul is almost identical to the "antinomian mysticism" which Swinburne has explained in his critical essay on Blake:

[D]o what you will with your body, as long as you refuse it leave to disprove or deny the life eternally inherent in your soul. That ... is what people call or have called by some such name as "antinomian mysticism:" do anything but doubt, and you shall not in the end be utterly lost. Clearly enough it was Blake's faith; and one assuredly grounded not on mere contempt of the body, but on an equal reverence for spirit and flesh as the two sides or halves of a completed creature: a faith which will allow to neither license to confute or control the other. The body shall not deny, and the spirit shall not restrain; the one shall not prescribe doubt through reasoning; the other shall not preach salvation through abstinence.¹⁰

In "A Ballad of Death," one of the pair of opening poems, introductory to the book of poetry, *Poems and Ballads*, published in 1866, Swinburne depicts a blissful state of Lucrezia Borgia "in the days when God did good" to her and the narrator: "In the good days when God kept sight of us; / Love lay upon her eyes, / And on that hair whereof the world takes heed; / And all her body was more virtuous / Than souls of women fashioned otherwise."¹¹ Swinburne goes so far as to say here that "body was more virtuous / Than souls," employing biblical diction obliquely. As Kenneth Haynes notes, "Swinburne's two poems ["A Ballad of Life" and "A Ballad of Death"] are 'Italian *canzoni* of the exactest type,' in the words of William Rossetti, who adds that they have taken 'the tinge which works of this class have assumed in Mr. Dante G. Rossetti's volume of translation *The Early Italian Poets* [1861] .'"¹² In

¹⁰ Swinburne, *William Blake: A Critical Essay*, ed. Hugh J. Luke, (1868; Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1970), p. 96.

¹¹ *The Poems of Algernon Charles Swinburne*, 6 vols. (1904; rpt., New York: AMS Press, 1972), I, 7.

¹² Kenneth Haynes, "Notes" to his edited *Algernon Charles Swinburne: Poems and Ballads & Atalanta in Calydon* (*Poems and Ballads* first published 1866; *Atalanta in Calydon* first published 1865: Published together in Penguin Classics 2000 [Harmondsworth: Penguin Books Ltd.]), p. 324.

Swinburne's defense of Rossetti's poetry in 1870, he discusses Rossetti's "House of Life," praising Rossetti's ability to unify spirit and sense in which a synesthetic effect is realized. Swinburne states, "Spirit and sense together, eyesight and hearing and thought, are absorbed in splendour of sounds and glory of colours distinguishable only by delight."¹³ Pater may have been influenced by Swinburne for his idea of aesthetic relationship between body and soul.

"Aesthetic Poetry" also contains a similar discussion in paragraph 8, in which Pater has employed Morris's *The Earthly Paradise* as an example of the aesthetic poetry: "Here there is no delirium or illusion, no experiences of mere soul while the body and the bodily sense sleep, or wake with convulsed intensity at the prompting of imaginative love ... This simplification interests us, not merely for the sake of an individual poet—full of charm as he is—but chiefly because it explains through him a transition which, under many forms, is one law of the life of the human spirit, and of which what we call the Renaissance is only a supreme instance" ("AP," pp. 194-195). The aesthetic condition in which body and soul are "fused and blent" is "one law of the life of the human spirit," says Pater. He continues to maintain that "what we call the Renaissance is only a supreme instance" of it. From this we may deduce that the collection of essays and portraits included in Pater's *The Renaissance* is nothing but a "supreme instance" of such "human spirit." Pater here declares that such "human spirit" can be found at any time and anywhere, as long as human life exists.

IV

In the brief paragraph 8, the words, *The House of Life*, are reintroduced as the title to Rossetti's book of sonnet sequence, after their first appearance in small letters, i. e., "house of life," as we have noted, in paragraph 6. Paragraph 9 is one of the most significant of all paragraphs in "Dante Gabriel Rossetti," since Pater argues here his notion of literary architecture, using *The House of Life* as a point of departure:

The dwelling-place in which one finds oneself by chance or destiny, yet can partly fashion for oneself; never properly one's own at all ... in which every object has its associations—the dim mirrors, the portraits, the lamps, the books, the hair-tresses of

¹³ Algernon Charles Swinburne, "The Poems of Dante Gabriel Rossetti", included in Edmund Gosse and Thomas James Wise, eds., *The Complete Works of Algernon Charles Swinburne*, 20 vols. (1925-27; rpt., New York: Russell & Russell, 1968), XV, 7. Future page references to this edition are cited parenthetically in the text as "PDGR."

the dead and visionary magic crystals in the secret drawers, the names and words scratched on the windows, windows open upon prospects the saddest or the sweetest; the house one must quit, yet taking perhaps, how much of its quietly active light and colour along with us!—grown now to be a kind of raiment to one's body, as the body ... is but the raiment of the soul—under that image, the whole of Rossetti's work might count as a *House of Life*, of which he is but the "Interpreter." And it is a "haunted" house. ("DGR," p. 204)

The house as a "dwelling-place in which one finds oneself by chance or destiny" is very important, says Pater, to one's aesthetic education, because "every object" of the house with "its associations" given through the senses grows "to be a kind of raiment to one's body, as the body ... is but the raiment of the soul." As one grows up in the house which is "haunted" with every associated object in it, one becomes an "interpreter," while undergoing an aesthetic education during one's stay there. Even after leaving it, one always aspires to the old house with a sense of homesickness. A "haunted" house, an "Interpreter", "homesickness"; Pater is indeed obsessed with the imagery associated with his unique "dwelling-place," and he repeatedly employs the imagery in a slightly different form in his other writings. Taking note of "a long, allusive passage [in Pater's "Dante Gabriel Rossetti"] on the connotations of the phrase 'house of life,' Stein argues that the phrase applies as well to Pater's own story ["The Child in the House"]: "Much like *The House of Life*, 'The Child in the House' ... is the author's 'story of his spirit ... that process of brain-building by which we are, each one of us, what we are'" [Stein, p.279].

"The Child in the House," first published in 1878, depicts the process how Florian, the child in the house, grows up receiving aesthetic education. Pater states:

In that half-spiritualised house he could watch the better, over again, the gradual expansion of the soul which had come to be there—of which indeed, through the law which makes the material objects about them so large an element in children's lives, it had actually become a part; inward and outward being woven through and through each other into one inextricable texture—half, tint and trace and accident of homely colour and form, from the wood and the bricks; half, mere soul-stuff, floated thither from who knows how far.¹⁴

¹⁴ Walter Pater, "The Child in the House" included in *Miscellaneous Studies: A Series of Essays*, p. 173. Future page references to this edition are cited parenthetically in the text as "CIH."

In this way Pater describes the spontaneous process of "our brain-building" in the "house of thought" ("CIH," p. 184). And the child, the protagonist of this story, evolves the notion that the house is haunted because it seems that "not all those dead people had really departed to the churchyard, nor were quite so motionless as they looked, but led a secret, half-fugitive life in their old homes" ("CIH," p. 191). At the end of the story, just before leaving his old house for the last time, "a clinging back toward it" possesses him, "but himself in an agony of home-sickness" he is "driven quickly away" into the country road ("CIH," p. 196). Apropos of the "brain-building," Pater discusses the importance of "the airy building of the brain" in an essay on Wordsworth.¹⁵ In "Postscript," originally published in 1876 under the title of "Romanticism," Pater, borrowing the term from John Bunyan's *The Pilgrim's Progress*, refers to "that House Beautiful, which the creative minds of all generations ... are always building together, for the refreshment of the human spirit" and he also refers to "the *Interpreter of the House Beautiful*, the true aesthetic critic."¹⁶ And in "Sir Thomas Browne," written in 1886, Pater employs the expression, "mental abodes," to have it mean such great writers of the age as Browne, Burton, and Fuller who are likened "to the little old private houses of some historic town grouped about its grand public structures, which, when they have survived at all, posterity is loth to part with."¹⁷ Summarizing Pater's idiosyncratic obsession with the notion of the house as a place of "our brain-building," Jay Fellows says, "Yet the model architecture-become-'mental abodes'-become-House for a Child is a place ... to which one always returns."¹⁸ In a passage of his essay on Rossetti, quoted above, Pater proposes to regard Rossetti's entire work as a *House of Life* ("DGR," p. 204). After our brief survey of Pater's obsessive use of house imagery scattered extensively in his works, we could say that the whole of Pater's work also "might count as a *House of Life*."

"A sense of power in love ... of unutterable desire penetrating into the world of sleep," states Pater, "was one of those anticipative notes obscurely struck in *The Blessed Damozel*. ... Dream-land ... with its 'phantoms of the body,' deftly coming and going on love's service, is to him [Rossetti], in no mere fancy or figure of speech, a real country, a

¹⁵ Walter Pater, "Wordsworth" included in *Appreciations: with an Essay on Style* (London: Macmillan and Co., 1910), p. 45.

¹⁶ Walter Pater, "Postscript" included in *Appreciations*, p. 241.

¹⁷ Walter Pater, "Sir Thomas Browne" included in *Appreciations*, p. 127.

¹⁸ Jay Fellows, *Despoiled and Haunted: "Under-Textures" and "After-Thoughts" in Walter Pater* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1991), p. 53.

veritable expansion of, or addition to, our waking life” (“DGR,” p. 204). Thus Pater tries to define Rossetti as a poet of love who can handle the world of one’s dream and can make it “a real country” by mobilizing his “phantoms of the body” that come and go between the phantasmal and the real as his messengers of love. As a matter of fact, in Rossetti’s “Love’s Nocturne” the narrator addresses Love: “... but oh! do thou, / Master, from thy shadowkind / Call my body’s phantom now: / Bid it bear its face declin’d / Till its flight her slumbers find, / And her brow / Feel its presence bow like wind.”¹⁹ In paragraph 10, Pater extols Rossetti’s unfailing power in his second volume of *Ballads and Sonnets*, published one year prior to his death. Pater recommends “Soothsay” as a “monumental, gnomic piece” which “testifies ... to the reflective force, the dry reason, always at work behind his imaginative creations, which at no time dispensed with a genuine intellectual structure” (“DGR,” p. 205). “[T]he dry reason” reminds us of a “dry light” which Pater mentions in *Marius the Epicurean* (*Marius*, p. 81). Pater seems to mean by these phrases a sober reasoning state united with sympathetic feeling, i.e., a condition in which body and soul are fused.

At the outset of paragraph 11, Pater eulogizes his own age that has seen a “spontaneous growth” of Rossetti’s poetry, utilizing a rather exaggerated style which is uncommon to him: “Have there, in very deed, been ages, in which the external conditions of poetry such as Rossetti’s were of more spontaneous growth than in our own” (“DGR,” p. 205) ? And “the words of Stendhal” that Pater quotes, “*ces siècles de passions où les âmes pouvaient se livrer franchement à la plus haute exaltation, quand les passions qui font la possibilité comme les sujets des beaux arts existaient*” (“DGR,” p. 205), are a reminder of “the words of Mérimée”, which Pater has cited in paragraph 6, i.e., “*se passionnent pour la passion*” (“DGR,” p. 203). As Pater states at the end of paragraph 6, Rossetti is “one of Love’s lovers” (“DGR,” p. 203). In other words, Rossetti’s poetry represents love for love’s sake, which is a universal sentiment among aesthetic people either “in the age of Chaucer, or of Ronsard” (“DGR,” p. 205). Rossetti as a poet of love for love’s sake is an image that has already been expressed by Swinburne in his essay on Rossetti’s poetry. Writing about Rossetti’s “The House of Life,” Swinburne says, “All passion and regret and strenuous hope and fiery contemplation, all beauty and glory of thought and vision, are built into this golden house where the life that reigns is love”(“PDGR,” pp.8-9). That Rossetti as an aesthetic poet

¹⁹ Jan Marsh ed., *Dante Gabriel Rossetti: Collected Writings* (Chicago: New Amsterdam Books, 2000), p. 228.

of love finds his predecessor either in Chaucer or in Ronsard ("DGR," p. 205) is a modified reverberation of the first sentence of paragraph 12 of "Aesthetic Poetry," in which Pater has stated: "The modern poet or artist who treats in this way a classical story comes very near, if not to the Hellenism of Homer, yet to the Hellenism of Chaucer, the Hellenism of the Middle Age, or rather of that exquisite first period of the Renaissance within it" ("AP," p. 196). Here is expressed Pater's idea of the universality of aesthetic spirit: One can find some kind of aesthetic poetry, in no matter what age one may find oneself, whether it is the age of Homer, Chaucer, Ronsard or Rossetti. Yet the important thing, Pater implies, is that such aesthetic poetry appeals only "to a special and limited audience" ("DGR," p. 199).

In paragraphs 11, 12, and 13, Pater refers to Rossetti's "The King's Tragedy" and recommends the poem "to readers desiring to make acquaintance with him [Rossetti] for the first time" ("DGR," p. 206). The recommendation of the poem as one of the best of Rossetti's works is strange and does not hold true, because the poem is, as David G. Riede points out, "loosely organized," and "include[s] far too much insignificant detail."²⁰ Unlike "Aesthetic Poetry," "Dante Gabriel Rossetti" ends somewhat abruptly with concluding paragraphs which are anticlimactic. In the final paragraph, however, Pater reemphasizes the esoteric power of Rossetti's poetry, saying, "his [Rossetti's] work ... was mainly of the esoteric order" (pp. 206-207). Pater means to say that Rossetti's work was intelligible only to those with special knowledge on aestheticism. That is, only aesthetic artists and critics, including Pater himself, can really appreciate Rossetti's work. This is another repetition of Pater's insistent idea on aestheticism that aesthetic poetry is understood only by "a special and limited audience" ("DGR," p. 199), which Pater has declared in the first paragraph of the essay. He concludes the essay with his appraisal of Rossetti as the founder of English aesthetic poetry: "Rossetti did something, something excellent, of the former kind [the poetry that reveals ... 'the ideal aspects of common things']; but his characteristic, his really revealing work, lay in the adding to poetry of fresh poetic material, of a new order of phenomena, in the creation of a new ideal" ("DGR," p. 207).

V

Swinburne published an essay on Rossetti's poetry in 1870, and Pater wrote his

²⁰ David G. Riede, *Dante Gabriel Rossetti and the Limits of Victorian Vision* (Ithaca and London: Cornell Univ. Press, 1983), p. 208.

“Dante Gabriel Rossetti” in 1883. Their essays are, as Riede argues, “[t]he two finest nineteenth-century appreciations of Rossetti” [Riede, p. 272]. Swinburne’s essay was a review of Rossetti’s newly published book of poetry and he wrote it as one of Rossetti’s friends who banded together as Pre-Raphaelite artists. Though Pater himself did not belong to the Pre-Raphaelite circle, he was situated in a place very close to Rossetti and his Pre-Raphaelite group. He was a member of the Old Mortality Society, a discussion club of liberal-minded students at Oxford, founded in 1857 and the society was close to PRB in their celebration of the Middle Ages and their pursuit of an aesthetic beauty in religion.²¹ Swinburne, one of the founding members of the society, was strongly attracted by Pre-Raphaelite artists through his direct contact with them. Though there is no record which testifies to Pater’s actual meeting with Rossetti, Pater is supposed to have been familiar with general ambience around Rossetti and his Pre-Raphaelite circle through Swinburne and Simeon Solomon who were acquainted with both Rossetti and Pater. Pater’s understanding of Rossetti’s poetry is accurate and his essay on Rossetti is, as Jerome McGann notes, “superb” and the essay “set Rossetti apart as the most original poet of the age, the one writer who had made truly novel technical and artistic advances.”²²

Pater’s “Dante Gabriel Rossetti,” as we have seen above, has many verbal references to his “Aesthetic Poetry” and his other works as well as works of literature by other writers, past and present, English and foreign. The intertextuality of “Dante Gabriel Rossetti” to Pater’s own writings and works by other writers is one of the important features of his aestheticism. To borrow a phrase from “The Child in the House,” [Pater’s] “inward and outward [texts are] woven through and through each other into one inextricable texture” [“CIH,” p. 173]. As Elizabeth Prettejohn appositely argues, “Pater’s essays are ‘works of art’ in a much more precise sense, a sense distinctive to British Aestheticism. They are not only explorations of the theory of Aestheticism but also examples of its practice.”²³ Yeats was

²¹ Gerald Monsman, *Oxford University’s Old Mortality Society: A Study in Victorian Romanticism* (Lewiston • Queenston • Lampeter: The Edwin Mellen Press, 1998), p. 63.

²² Jerome McGann, *Dante Gabriel Rossetti and the Game that Must Be Lost* (New Haven, CT and London: Yale Univ. Press, 2000), p. 43.

²³ Elizabeth Prettejohn, “Walter Pater and aesthetic painting,” in her edited, *After the Pre-Raphaelites: Art and Aestheticism in Victorian England* (New Brunswick, NJ: Rutgers Univ. Press, 1999), p. 36. From this point of view, Rick’s attack on Pater’s use of intertextuality is irrelevant because Ricks criticizes Pater’s mode of quoting works by other writers giving no consideration to the possibility that Pater’s essays are themselves “works of art.” See Christopher Ricks, “Walter Pater, Matthew Arnold and Misquotation” in his *The Force of Poetry* (Oxford: Clarendon Press, 1984), pp. 392-416.

right when he regarded Pater's famous passage of the Mona Lisa as a work of art and anthologized it as one of the first modern poems in his 1936 edition of *The Oxford Book of Modern Verse*. Not only the Mona Lisa passage in *The Renaissance* but Pater's writings altogether can be considered as "works of art" that exemplify his aesthetic theory. Prettejohn goes on to say that "the practice of intertextual reference constitutes a defining feature of the Aesthetic work of art—a feature that does not arch over all examples, but can only be traced in innumerable concrete links between particular cases." "The pattern," she states, "might be compared to that of the Internet, where (in theory) any two among a limitless number of computer workstations can communicate without supervision from a presiding computer" (Prettejohn, p. 37). Pater's "Dante Gabriel Rossetti" is not just a theoretical essay on aestheticism in Rossetti's poetry but is a "work of art" itself and constitutes a link among the world wide web of Pater's vast intertextuality.

A Bodhisattva Ideal in the Here and Now

Hoyu ISHIDA

INTRODUCTION

Observing a phenomenon, or an event, as we might call a “spot” or “point” of time-space, we often find a contradiction or inconsistency in our words and deeds, for we interpret and compare them taking place at different times and places respectively. As an example, we understand that the food we consume with gusto is inconsistent with the movement of bowels that we evacuate with an offensive odor: they are two different things. If we come to see, however, a “line”—a continuum of spots or points, or a “continuum of non-continuity,” then we are able to realize that food and bowels are not of a different nature. They are crucially essential and important to our life. Both are to be appreciated equally.

In talking about the idea of viewing things in a “line” in this way, this paper deals with the time-space interformation and symbiosis in the here and now. This paper contends that the notions of the past, the present and the future are merely concepts, and that the existential time is called “now,” in which we live “here” as we realize and activate space. Talking about symbiosis, the paper discusses an “individual” or “I” consisting of both a “distinct piece,” as a self-centered personality different from others, and yet a part of the continuum sharing the whole of reality. We then aspire to fulfill the needs of ourselves and others, and this has to be carried out in the here and now. A Bodhisattva, therefore, establishes vows to attain enlightenment (benefiting oneself; *jiri* in Japanese) and to save suffering beings (benefiting others; *rita*), and thus sets out on a course of practice that requires a long period of time to complete. In this regard, this paper tries to seek and reflect a meaning of a Bodhisattva ideal in terms of how we are able to live in, and for, the Vow, according to our limited capability, in this contemporary world of science and technology.

TIME

We generally divide the notion of time into three segments such as the past, the present and the future. The past, the present and the future, however, are simply concepts that

we have invented or created for the sake of our own convenience. They are not able to exist independently of each other. For things to exist or stand, space is also of vital necessity, being mutually interfused with time. The time we experience is called “now,” in which the continuous transformation of the present including- and limited by- both the past and the future reveals itself in “here.” The past, the present and the future are all interdependently interfused into “now,” and we live in the place called “here,” realizing and activating space. Time and space thus cannot be separated from each other, and we always live in the here and now, the very place where religious experience takes place as well.¹ We do experience and realize things in the here and now; yet we usually live in a world of concepts, very vague concepts, such as the past, the present and the future. We would now like to examine how vague these concepts are.

Regarding the vagueness of the time concept, let us start with the past. The problem is that we are not able, for example, to identify what the past specifically refers to. Does it imply a few seconds ago, a few weeks ago, last year, ten years ago, our nursery school days, two years before our birth into this world, or a time before the formation of our galaxy? We cannot specify the past when we think of it in this manner. Some people, then, define the past as something that refers to or includes all of the above, and then we may feel that we somehow understand it. But when we deeply think and wonder if the past, as we see it, exists independently, we easily realize that the past does not stand all alone. The past cannot exist or stand by itself.

The same thing can be said with the vagueness of the future. We are not able to specify what the future precisely refers to. A few seconds later, several weeks later, next year, twenty years from now, two years after our death, or the time when our planet comes to be extinguished? We become confused again if we think of what the future specifically refers to. And what is the future after all? In the same way as the past, when some people say and define the future as something that refers to, or includes, all of the above, then we may feel

¹ Shinran, the founder of Jōdo Shinshu or Shin Buddhism, says in Chapter I of the *Tannishō* (*A Record in Lament of Divergences*), “Saved by the inconceivable working of Amida’s Vow, I shall realize birth in the Pure Land”: **the moment you entrust yourself thus to the Vow, so that** the mind set upon saying the nembutsu arises within you, you are **immediately** brought to share in the benefit of being grasped by Amida, never to be abandoned. (emphasis mine) “The moment you entrust yourself thus to the Vow, so that...immediately” (*okoru toki sunawachi*) refers to the moment of Shinran’s realization of Amida’s Vow in the very here and now, in which all the past, the present and the future are incorporated together. *The Collected Works of Shinran* (hereafter abbreviated *CWS*) 1, Shin Buddhism Translation series (Kyoto: Jōdo Shinshū Hongwanji-ha, 1997), p. 773.

that we somehow understand it. But when we deeply think and wonder if the future as we see it exists independently, we realize that the future does not stand all alone. The future cannot exist or stand by itself. Both the past and the future are merely vague concepts, and they have been invented and used, for our convenience's sake, to describe two modes of time with another mode, the present.

The concept of the present, which seems to be rather concrete, or more concrete than that of the past or the future, is also vague as to what it specifically refers to. Some people may insist that the present refers to this very moment. Yet we still cannot comprehend it. We then gaze at the second hand of a watch. It shows the present time or hour, but we are not able to grasp the concept of time identifying the present. The watch is just showing our appointed, or agreed, point of time. In order to define the length of time, we resort to such units as century, year, month, week, hour and minute; with the second being the smallest unit. Suppose we say the moment of the present signifies a second exemplifying the shortest length of time. There is yet a shorter moment than a second—one-tenth of a second, one-hundredth of a second and one-billionth of a second. One-billionth of a second can be further divided into shorter moments. There seems to be no end or limit of dividing things into smaller units or substances. Therefore, understanding or interpreting the present as a moment does not give a convincing notion of the concept of the present as to what length of period the present specifically refers to. We cannot define the length of the present. Depending on our realization or awareness, it can be short or long.² Time as the present thus cannot be defined or identified as a "specific when" or "how long," and cannot be independent. The present is a concept, and so are the past and the future.

Time we experience in reality is called "now," in which the past, the present and the future are all included and interfused interdependently. In other words, the transformation of the present including- and limited by- the past and the future continuously reveals itself. A point or instant of the past, present or future does not exist separately, individually or independently. Time as "now," in which the whole past, the whole present and the whole future are interfused together, is existential and realistic. Although the notion of "now" can be a concept, realizing time in terms of "now" associated with our daily life allows us to have a

² The length of our life is sometimes likened to a "moment" or an "instance" (*setsuna* in Japanese or *kṣaṇa* in Sanskrit). Even though we live a long life, when our life is nearing an end, we may feel that it's been just a matter of a moment.

dynamic understanding of our experience.

LIMITED-BY-THE PAST & LIMITED-BY-THE FUTURE

“Limited-by-the past” (*kako kara no gentei*) means that we are in existence now because of various events and factors, direct and indirect, that we have experienced and received up to now. What this means is that we are able, for example, to read because we have learned to read at either school or home in the past. We can think because we have studied and been taught at first hand. “Limited,” here, means that our way of thinking is greatly influenced by, or from, whom we have learned and studied, and through what process we have come to learn or study. In this sense, our way of thinking and behaving is, to a great extent, determined and “limited” by the past—the books we have read, the places where we have learned, people we have met, the conditions under which we have studied, our former emotions or feelings, and so on.

The facts that have taken place up to now cannot be changed, since they are accomplished or established facts. The facts limited by the past cannot be altered. We were born, for example, because of our parents. Without them, we could not come into existence. We are genetically formed, and limited, by our parents and ancestors. The modern technology of science has made the knowledge of the arrangement of DNA possible, yet the fact that we were born from our parents remains as a fact. Our parents were born from their own respective parents. They are, or were, determined and limited by their own parents. This means that we have been determined and limited indirectly by our grandparents. We are also affected and limited, more or less, by things like books that our grandparents might have read. Even if we had never met them, we must have received some influence from the fact that they had read books. It cannot be said that there is absolutely no influence. It could be very close to zero or extremely high. Thus, directly or indirectly, we give and receive some or considerable influence to, and from, each other. We come into being due to all of what has happened to us and what has been accumulated before us up to now. We have been living and lived, limited by a numerous amount of events and factors we have experienced and received up till now. Enlightened or awakened ones may say that we have been limited and allowed to come into being by the whole of existence, that all things in the universe have been concerned with us,

and that they have worked upon us.³

“Limited-by-the future” (*mirai kara no gentei*) means that we are in existence now because of various events and factors, direct and indirect, that we will have and receive from now on. We are living now owing to things that have not yet taken place but which are affecting and limiting us. Our present actions are greatly influenced and determined not only by the past but also by the future. “Limited” thus includes both the past and the future simultaneously.

Things that took place in the past cannot be changed, for they are accomplished facts; yet, the meaning for us of past things can change, or the way we see or accept them can change, even though they were once so painful and hateful. This change in the way we accept the past happens when the future gets bright or is foreseen in the now, in which we are revived and strengthened: we are able to overcome ill incidents that occurred in the past or things that we hated about ourselves. It is a matter of realization or awakening by which the way of seeing things in the world greatly changes. In Buddhism the word *buddha* in Sanskrit is the past passive participle of the root verb \sqrt{budh} , which means “to awake, or to become aware of.” Therefore, *buddha* means “awakened, enlightened or realized,” and in noun form “awakened one, enlightened one or realized one.”⁴

With realization, we are able to come to accept things that we thought of as limited or annoying, some of which could have been avoided, while others not. Having fallen into a bottomless pit, lost and tortured by unbearable long-lasting pain, we discover the bright future in the now and we come up with the heart/mind which is eased and filled with joy as deep as the pain and sorrow we had before. Our world, which had once disappeared, revives and comes to life again. Things manifest as they are in the now. We then realize that there has

³ Dōgen says in “Genjōkōan” (“Things as They Are, Revealed in the Present”), now a part of his major work *Shōbōgenzō* (*Eye-Store-house of the Right Dharma*), “Delusion is one’s practicing and authenticating myriad things while carrying one’s self to them. Enlightenment is myriad things’ naturally practicing and authenticating the self.” *Dōgen zenji zenshū* (hereafter abbreviated *DZZ*) 1, ed. Dōshū Ōkubo (Tokyo: Chikuma Shobō, 1989), p. 7.

Shinran says in the Preface of the *Kyōgyōshinshō*, “If you should come to realize this practice and shinjin, rejoice at the conditions from the distant past that have brought it about.” *CWS* 1, p. 4. Shinran is saying that it is difficult to realize shinjin, but that once one attains it, one should appreciate the distant past (*tōku shukuen*), which has brought about one’s realization of shinjin through the working of Amida’s Vow. The distance past refers to literally the Vow that has been working upon us regardless of our consciousness or unconsciousness in the past up to now. But the distant past should not be restricted only to the past. It should include and embrace the future to come.

⁴ Shin Buddhism tends to use the translation of awakening to describe shinjin (entrusting mind/heart or awakened heart/mind), while Zen Buddhism uses enlightenment for satori.

been nothing meaningless in the whole world. We see the sky, the wind and the trees. We feel that things are all real. We hear birds and the sound of the earth. Our eyes and mind are wide open. And we feel both sorrow and joy.⁵ When the future is dark or not clear, however, we actually experience its darkness now. There is no progress if we hold on to a yearning for the old days or blame some past bad incidents, claiming that they are causing us misery. We blame others. We cannot afford to recognize, accept or forgive others. There is no space to live in, as we cannot breathe. There is no room for our mind to be free. Self-destruction takes place. If we see that the future gets bright, however, we are able to endure the hardship that is taking place now. “Limited-by-the future” plays an important role in the now.⁶

Like the past, the future is not only limiting but also influencing our actions in the now. We work hard now, for example, for an examination we will have tomorrow (future). We sometimes cram, studying intensely, and it is hard. If we start preparing for the exam a bit earlier (past), then it is much easier now. Thus, the amount of work we do now as determined by the examination tomorrow is also limited by how much preparation we have done in the past. Furthermore, if the exam tomorrow is not so important, then we do not have to work very hard now. But if the examination tomorrow means a lot to us, we work harder accordingly. Depending on the importance or value of what we are doing now, our way of coping with problems varies. We are thus limited by the future.⁷

⁵ John Lennon, the late leader of the Beatles writes in *Oh My Love*, “Oh my love for the first time in my life, my eyes are wide open. Oh my lover for the first time in my life, my eyes can see. I see the wind, oh I see the trees. Everything is clear in my heart. I see the clouds, oh I see the sky. Everything is clear in our world. Oh my love for the first time in my life, my mind is wide open. Oh my lover for the first time in my life, my mind can feel. I feel sorrow, oh I feel dreams. Everything is clear in my heart. I feel life, oh I feel love. Everything is clear in our world.” These lyrics must have been written after Lennon had overcome difficulties and distressed circumstances and discovered the future in the now.

Lennon, after having being inspired by Bashô Matsuo, it is said, wrote *Across the Universe*, saying, “...Pools of sorrow, waves of joy are drifting through my opened mind, possessing and caressing me....Sounds of laughter, shades of earth are ringing through my opened views, inciting and inviting me. Limitless, undying love which shines around me like a million suns, and it calls me on and on across the universe....” Lennon’s opened world is filled with “pools of sorrow, waves of joy” and “sounds of laughter, shades of earth,” and this can be found in many of his other works.

⁶ Paul Tillich, the German theologian, says, “The image of the future produces contrasting feeling in man. The expectation of the future gives one a feeling of joy. It is a great thing to have a future in which one can actualize one’s possibilities, in which one can experience the abundance of life, in which one can create something new—be it new work, a new living being, a new way of life, or the regeneration of one’s own being.” Paul Tillich, *The Eternal Now* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1963), pp. 123-4.

⁷ We would like to examine another example. When we want to cook a meal in order to serve someone, we have to know how to cook. We learn cooking at cooking school, from our parents, from our brothers or sisters or from our friends. Depending on where or from whom we have learned, the meal may taste different. If we have learned from Teacher A, then we may cook the way he or she has taught us; if

Things that have taken place as accomplished facts cannot be changed, as mentioned before. Though we are limited by the future, it is flexible and still open, since things have not occurred yet, or certain events have yet to occur. Thus, if we want to live better, then the problem becomes by what future, or in which way, do we want to get limited? Fear and anxiety take place when we are not able to see the future, or the future is dark. In other words, even though we may have to greatly sacrifice ourselves now, we are able to bear it when we see the future as bright. Today's pain can be endured with the foreseeable future. On the contrary, even if we have no problem today, if we know that something awful or hateful will be coming up tomorrow or in the near future, we experience awfulness or hatefulness in the now. If there is no hope or dream for tomorrow, we sometimes lose our ground, and our existence is extinguished. We cannot separate the past, the present and the future from one another: we live them all in the now, in which our actions take place as being limited.

The place where we are acting now is "space" in "here" versus "time" in "now." Time and space are in existence, being interfused simultaneously together: they coincide with each other. We would now like to look more closely at the notion of space.

THE UNIVERSE OR EXISTENCE

The universe contains two contradictory phases; namely, cosmos and chaos. In other words, all things in nature come into being as they envelop simultaneously two different modes of being—order and disorder. This way of existence having spontaneously two opposite features can be applied to the whole universe itself, an individual, a cell and even fractionated or subdivided pieces of an atom. The universe we know of through science originated or formed from a small piece of mass by a "big bang." Macrocosmically speaking,

we have learned from Teacher B, then we may cook the meal differently. We are limited by the past in this way. Our action in the now, however, is limited by the future at the same time. For instance, we may be cooking the same food, but the way we cook changes depending on for whom and for what we are cooking now. If we are cooking for someone we care for as we invite that person at home for the first time, then we may get a little nervous wondering if the person would like the meal—from appetizer and the main dish to dessert. We may wonder what drinks we should serve with the dish. If we cook the same meal, however, at a restaurant where we work part-time, then the way we are engaged in cooking differs. We may wonder as we are working, for example, how much more time is left before the shift is over, watching the clock. Though the menu is the same, the way we cook makes a difference. This is because "limited-by-the future" differs. Our actions change according to how we are limited by the future. Both the past and the future determine and limit our way of feeling, thinking and acting.

My phrases, "limited-by-the past" and "limited-by-the future," were inspired by Enji Nakayama's *Bukkyō to Nishida-Tanabe tetsugaku [Buddhism and Nishida and Tanabe Philosophies]* (Kyoto: Hyakkaen, 1979), pp. 3-87.

the universe endlessly stretches out outwardly and, microcosmically speaking, the universe can be unlimitedly divided or subdivided into smaller sets or units, an atom being able to be disunited limitlessly. Each set or unit has the same arrangement for existence at any level of its certain phase or stage, as things go and return at the same time not in a straight line but in a spiral, in which all are interdependently interrelated and mutually interfused. It can be said, therefore, that any piece as a unit in the universe includes the whole. The way of the piece as a unit throughout the universe which conceives the whole within itself is very similar to that of the time concept of the now as discussed before.

We would now like to focus on an examination of two contrary or opposite phases of the universe. From an individual's point of view, to be born into the world means to come into existence, and death means extinction of the self. Reflecting on the whole of existence, we come to realize that being or becoming has both life and death. Birth-and-death is the fundamental norm of existence, called *samsâra*. If we interpret life and death as totally different modes of existence, then we often see things in terms of chaos or disorder. This is the observation of a phenomenon or an event in terms of a spot or point of time-space. We usually live in such a world. However, when we see that life is supported by death and that death is sustained by life—viewing things in a “line”—, then we come to realize that the universe is functioning according to an orderly law. In a world containing two opposite norms such as cosmos, or order, and chaos, or disorder, we are living and dying simultaneously.

When we get a tan, the skin peels off. The skin peeling off is dying, but the new skin or cell is coming about from within. The skin peeling off and the new skin coming about are taking opposite phases of existence. As far as our body is concerned, however, the dead skin and the new skin belong to us, and both are evenly important. Thus, to live coincides with dying, and to die or be dead coincides with living. Things that look totally opposite or contrary to each other are deeply interrelated or interconnected in terms of the coincidence of the two opposites. The way we take, interpret and accept things or phenomena then becomes our problem, a matter of recognition or realization. Though we think we are living, we may be dead; though we are dead, we can be recognized as being alive. Though we are physically dead, we may live for a long time in the hearts and minds of people. Though we are living, we may suffer from pain, sometimes more painful than death. Putting the matter in a different way, we can say that things exist in two fundamentally opposite ways—natural selection and symbiosis. To live means we have survived well having maintained this balance, and to be

able to survive well is quite rare. We then feel that we are living and come to realize that we are being made to live.

Taking a look at nature itself, we understand that things totally opposite to each other can be seen as having two contrary phases at the same time. Things in nature can be viewed as something beautiful or ugly. Nature nourishes and destroys us at the same time. Snow, which falls on the mountains around Lake Biwa in Japan, is so beautiful to view in winter, but the same snow falling on the streets in cities becomes trouble. Snow is no longer beautiful but troublesome. It is even ugly when it gets mixed with soil. For mountaineers who want to climb snow-capped mountains, snow poses a constant danger. A spring shallow in a mountain after a cold winter calms and eases our hearts and minds, but the river flooded by a heavy rainfall takes our lives. Water is necessary and inevitable to us all, yet it can be dangerous and destructive, depending on its mode or way of being.

Nature, being cosmic or orderly, can be chaotic or disorderly when it turns out to be inconvenient or dangerous to us. Natural phenomena such as typhoons, avalanches and volcanic eruptions, when they cause us disaster, are chaotic. That is, disorder or chaos simply refers to a situation where things appear to be chaotic to us when they do not go the way we want them to be; but nature is orderly itself in accordance with its own laws. Without typhoons, snow slides and volcanic eruptions, the ecology of this planet cannot be in existence according to the Order including both order and disorder. Creation and destruction seem to be opposite phenomena, but the Order contains both. If we observe a phenomenon or an event in terms of a partial spot or point of time-space, things often seem to be contradictory or inconsistent, but the Order contains polarity.

A POINT IN TIME-SPACE

This reciprocal action or relationship of order and disorder can be seen in an individual's experience as well. We generally understand that love and hate are two opposite feelings that we have. Though they seem to have opposed entities or qualities, love and hate are derived from the same place in our mind called "ego," manifesting differently according to the way our ego feels. A form of love manifests when things go the way we want them to, while hate manifests itself when things do not go the way we want them to. When we are deeply involved in an affair or event and betrayed by others, then we get desperately hurt. When we are indifferent to things or others, we do not have much feeling or involvement to

them, so that we do not care for them as much, nor do we dislike them so much. We simply cannot care for or dislike them. If our involvement is great, then its return or retribution is also considerable. Love, when it is not granted, quite often gets turned into hate. Love and hate generally take place respectively according to varying conditions. In this regard, love and hate are not of a different nature. When love and hate are viewed separately, they look different and opposite to each other. But love and hate, when both are seen as coming from the same ego, are not different in essence—they constitute a polarity.

In our hearts and minds, various feelings freely come about as being influenced and determined by our condition or the situation of each moment. We can hardly control our emotions, living in feelings of happiness, anger, humor or pathos. The way our feelings arise is essentially self-centered. This is the way our ego is; there is nothing wrong about it, nor is it a matter of good or bad. Our ego is purely self-centered. If we try to satisfy our own ego, however, then we come to suffer. When our suffering or struggle comes in moderation, it often brings us some stimulation or even encouragement; but, if it exceeds its limitation, then we suffer from pain as a result of hurting ourselves and others.

It is not too much to say that life is a battle against oneself or one's mental functions, such as greed, anger and ignorance (*sandoku no bonnô* in Japanese; defilements or passions of the three poisons), which annoy oneself and others and represent the nature of our ego. We are all endowed with them without exception, and we are consciously or unconsciously hurting and harming others and ourselves. It is easy to blame others but difficult to blame ourselves. If we blame ourselves overly much, it may lead us to self-destruction, which is also a misery. We think we know that we should live in peace and harmony together; but, when jealousy, for example, overtakes us for whatever reason, we may destroy the whole. We are living in such a world, in which any disaster or tragedy may happen at any time and any place. Being governed and controlled by our defilements or passions and viewing things only partially, we lead a life of anger and ignorance most of the time.

A LINE

A TV special program was broadcasted on NHK about ten years ago, as the United Nations was promoting the Year of the Handicapped. It was a very inspirational and heartfelt documentary of a man whose leg became disabled from infantile paralysis or polio when he was a child. The man was talking to children in a school gymnasium, who were all seated

listening to him with curiosity. He talked to the children about how he used to dislike physical education classes and athletic meetings, for he was not able to participate in the classes and events and could only watch other children running and jumping around. He then always thought he would have been able to do the same as others did, if only his leg had not been disabled. He strongly felt resentment at his bad leg, recollecting that he would have been much better off without it, and that he would not have been badly teased or ill-treated.

The man came down to the floor, where the children were seated, and said, “Boys and girls, I really look funny when you see me walking like this, right? I walk strange, right? I used to be laughed at by everybody when I was a child.” He walked again in front of the children, and they laughed with the man. He then said, “When I was small, I didn’t want other children to watch me walk like this and used to resent it. But, I do not feel that way any more now.” The children were puzzled as they listened to him but seemed to be fascinated by the man who looked totally carefree. The man again repeated, “If it were not for this bad leg, I would have had a happier childhood.” He continued to talk about his early days and how he used to receive treatment under the good care of the nurses at hospital. And he explained how he came to overcome his warped or perverse mind as he grew up. He then introduced a moving episode:

When I was receiving treatment for my leg at the hospital, there was a nurse who took good care of me. She always tried to help and encourage me when I was demoralized or broken in spirit. One day, we were talking about this bad leg as I was complaining about it and tapping it over and over again, saying, “I hate this leg.” She then said to me as she was crying, “You always say that. You know I like you. And what I like about you the most is this very leg that you hate.” She said this to me as she was patting me on the leg. At that moment, I was thrilled and overwhelmed. She is now my wife.

It can be understood that this is a story of a couple that have been able to see and realize a “line” in a profound world. They must have experienced encountering a good person when they met each other. The man had a hatred for his bad leg for a long time but came to realize that, thanks to the very leg, he was able to meet a good person, and that the leg played an important role in discovering something far greater than what he would have not experienced without his condition. He must have thanked her with deep appreciation, and his leg with a profound sense of apology, being filled with gratitude. The man must have realized the things

that he thought were “useless” or “burdensome” are not really so but have meanings and roles respectively. The man and woman coincided with each other: they must have come to see light through realizing a “line.”

SPACE AND TIME—LIGHT AND LIFE

When we come to realize a “line” from dots, spots or points, it begins to activate itself like cell division. A line splits into two lines and then three lines. From an individual and personal experience, we become free from a closed or blockaded world bound by inconsistent spots and get led to a dynamically opened world. When three lines are crossed on a plane, space (a triangle) emerges.⁸ When the lines freely evolve vertically and horizontally, three-dimensional space emerges, where we can breathe and live. We generally understand that space exists in the same way for all of us in the first place; but, without our realization of its profundity, space does not reveal itself and does not have much value or meaning to us. It seems that we do not experience space as space without realization. As far as we observe a world in terms of broken dots, spots or points, we do not see the universe. We cannot see the sky, the wind and the trees. We cannot hear the birds. We cannot come to our senses. Recognition or realization is closed in. There is no sorrow and joy. Realization consists of two seemingly opposed modes of feelings or experiences—sorrow and joy.

Realization is an awareness of two opposite phases of one thing and of the coincidence of those two phases. When we come to see the line and live in space, then our heart/mind gets softened and calms down, forgives others and ourselves and acknowledges ourselves and others. We will be able to share a life with each other, as seen in the case of the couple mentioned above. Recognizing and facing hardships and good fortune, we live in the world, which is real with sorrow and joy, and find room where our heart/mind can dwell. We live the world of the heart/mind with the medium of things or materials. We get liberated from closed space and come to realize the place called “here,” in which light incomprehensibly shines through. Where space emerges, light is shed.

In Pure Land Buddhism, the light that is shed or shines in the space of our heart/mind is called *Amitâbha*, which means “Immeasurable Light.” Immeasurable Light then refers to

⁸ When four lines are crossed, a tetragon emerges; and five lines, a pentagon. With an infinite number of lines, a circle emerges where there is no corner. The circle is a line without corners and often symbolizes enlightenment.

the light that dispels the darkness of our ignorant mind/heart in which Wisdom (*prajñā* in Sanskrit) partakes.⁹ Wisdom is what is needed for becoming enlightened and the light that shines into the space of our ignorant heart/mind. We are able to see then the bright and foreseeing future. We get encouraged to continue to live as we find the future active and dynamic in the now, which enables us to get out of a closed or isolated world, take an action, move on and live the day. This is the transformation of space into time.

Time, as examined previously, does not refer to the past, the present and the future divided separately or independently. It signifies the now, in which the continuous transformation of the present including the past and the future reveals itself—time as the “continuum of non-continuity” (*hirenzoku no renzoku*). This transformation of time taking place in this very place is called *Amitâyus*, meaning “Immeasurable Life.” Immeasurable Life then refers to the ways of our “living” as we aspire for the Vow through realizing time as the now—we are always living in the now. While *Amitâbha* is Wisdom, *Amitâyus* is Compassion (*karuṇā*). When Wisdom is partaken in us with realization of Amida’s Vow, the heart/mind with which we aspire for sharing that Wisdom with others simultaneously arises. Compassion means our acts of benefiting others and the sharing of that Wisdom with others. Just like time and space are interfused and coincide with each other, Wisdom and Compassion coincide with each other and are two qualities or features of “realization” or *shinjin*, which can be referred to as an essence of the Bodhisattva ideal.

We generally think that time and space are in existence in the same way to everyone, but this view seems to be mistaken. Things are present as they are, but the way we observe them greatly varies depending on the conditions, as examined before. Time and space unfold according to the degree of our respective recognition or realization; they are sometimes closed, while they are, at other times, boundlessly open. The ways we experience time and

⁹ Shinran says in “Hymns Based on Gathas in Praise of Amida Buddha” of the *Jôdo-wasan* (*Hymns of the Pure Land*),

Amida has passed through ten kalpas now
 Since realizing Buddhahood;
 Dharma-body’s wheel of light is without bound,
 Shining on the blind and ignorant of the world.

The light of wisdom exceeds all measure,
 And every finite living being
 Receives this illumination that is like the dawn,
 So take refuge in Amida, the true and real light.

CWS 1, p. 325.

space differ greatly from one another. Without realization, we are trapped in closed time and space: time freezes and space does not activate. The transformation of time into space as well as the transformation of space into time does not take place smoothly.

NON-VACILLATION AND THE HEAVENLY ORDER

To realize a “line” emerging from spots or points, and “space” from lines, is to get settled at one point in life, which can be, according to Confucius, “non-vacillation” (*fuwaku* in Japanese). Confucius says, “At forty, I became free from vacillation.” We should be able to say that we have lived well, and that we are gratified with what we have had, whatever it might have been, without any regret. This does not imply the fulfillment of our own self-satisfaction but refers to the ways of our lives which we are able to accept as they are, though they have been incomplete or imperfect, through having lived our lives with subjectivity and putting our hearts and minds to the fullest extent into the Way. We come to be free from vacillation. Becoming free from vacillation, however, does not mean that we are no longer in vacillation, but that, though it seems to be contradictory, we come to realize that we are really in the midst of vacillation.¹⁰

We are not able to get rid of our self-centered mode of being, for it is the way of our innate nature. Thus, only through becoming aware of this nature, are we able to cultivate the understanding of people, thereby becoming free from vacillation. In other words, it can be said that when we come to realize that we are really deluded or illusory, we come to be free, in a sense, from delusion or illusion. Our mundane and daily sufferings or problems, however, increase and can be seen much more clearly.¹¹ We come to see the sufferings and contradictions of not only ourselves but also of others, and sufferings of others begin to concern us even more so as if they were our own sufferings. We begin to see the universe as a whole. This is a shift from benefiting-oneself to benefiting-others, which, in an ultimate sense, takes place simultaneously, and it is not too much to say that the zest or the real taste of life

¹⁰ Dōgen says in “Genjōkōan,” “Those who greatly become aware of delusion are Buddhas. Those who are greatly lost in enlightenment are sentient beings. Moreover, there are persons who attain enlightenment upon enlightenment and there are also persons who are deluded in their delusion. When Buddhas are truly Buddhas, they do not need to realize that they themselves are Buddhas. Yet, they are authenticating Buddhahood.” *DZZ* 1, p. 7.

¹¹ Shinran says in the *Ichinen tanen mon'i* (*Notes on Once-Calling and Many-Calling*) at the age of 85, “We are full of ignorance and blind passion. Our desires are countless, and anger, wrath, jealousy, and envy are overwhelming, arising without pause; to the very last moment of life they do not cease, or disappear, or exhaust themselves.” *CWS* 1, p. 488.

starts with this.

Confucius says, after becoming free from vacillation at forty, he came to realize the will of heaven (*tenmei* in Japanese) at fifty. Yasushi Inoue (1907-91), a prominent novelist in modern Japan, says that we have to try to live in accord with the will of heaven in turbulent times, as Confucius did.¹² Though our age, the twenty-first century, with its highly developed technology and science, greatly differs from the time of Confucius, we are also living in his time, in turbulent times with various distrusts, society with distorted deviations, drug abuse, family disruption, vicious crimes, and so on. Japan has recovered remarkably from the devastation of World War II and become an economically prosperous country in the world. What we have lost, however, as a result of having sought material affluence, namely gratitude for a plain and simple life, is incalculable and cannot be recompensed.

We are facing many problems living in the twenty-first century. Yet we cannot clearly see what the problems really are and cannot easily answer how to cope with these problems. Love alone is not able to solve our problems. Material goods alone are not the answer. And one ideology, no matter how excellent it is, cannot save the world. Indeed, if we try by force to govern the world with a single ideology, then the world will be in danger and crisis. We are living in a complex world with many different ideas and values. In an ultimate sense, the universe contains two opposite phases such as cosmos and chaos, or order and disorder. Therefore, there is essentially nothing we can do about changing the world and solving all the problems. That is why a Bodhisattva comes down to help us all. Can we then leave the problems unsolved and do nothing about them? The question is, how we should

¹² Inoue says, referring to the will of heaven, "To realize the will of heaven is to hear the voice of heaven saying you are doing fine in what you are wishing to do. Confucius then said he was able to be engaged in a work to do what heaven wanted him to do—i.e., working for the well-being of people—at fifty." Inoue continues that since Confucius' philosophy was derived from turbulent times, the will of heaven is severe, strict and even fearful: "He became aware, however, that heaven would not help him at all. Doing good for society has nothing to do with heaven's help. Heaven may even interfere with his good works; yet he still wishes to do good in the world. This is the meaning of realizing the will of heaven. Confucius lived in turbulent times. Once you step out from home, you run into thieves and enemies and do not know what will happen to you. Sickness or disease is prevalent and spread all over. Being in such a world, you cannot live with an idea that heaven will help you because you are doing good. You must still try to do good, but heaven will not help you; yet you continue to do good—this is realization of the will of heaven. You need this resolution or decision living in turbulent times."

Yasushi Inoue, *Jinsei no kyōshi, Kōshi [Confucius, Teacher for Mankind]* Literary Studies: East and West ed. Jean Toyama and Nobuko Ochner (Honolulu: University of Hawaii, 1990), p. 28.

See also Hoyu Ishida, "Salvation for Oneself and Others: 'The Wish to Save All Beings' in the Present" in *The Pure Land*, New Series. Nos. 13-14. The Journal of the International Association of Shin Buddhism, 1997.

cope with the problems as we face them, no matter how little or seemingly inconsequential our endeavor is.

In the end, there is no other place than the place where the self can achieve a deed, the very place where the self carries through an undertaking: the universe in which time and space are unfolding. And the self always goes out from and comes back to the very self itself, and only in that self does the self find some answer, though it is “answer of non-answer.” There is no rigid or fixed answer; but, whatever the self finds at each moment with realization can be shared with others: that is the world of return or repayment (*kangen* in Japanese) as also seen in the will of heaven by Confucius. We live in the world of return, trying to do good according to and within our capacity and capability. We try to live in, and for, the Vow as the Bodhisattva has established.¹³ This is the world of benefiting-others emerging from benefiting-oneself. In Buddhist philosophy, benefiting-oneself and benefiting-others simultaneously take place; they are not two different things, and they coincide with each other. We are living as self-centered individuals and as part of the whole at the same time. We would therefore like to hold from time to time “noble aspirations” (*kôshô na akogare*). These noble aspirations are the treasure of our heart/mind as an individual as well as the treasure of the universe as the whole (*uchû no takara*)—life in the Vow.

NATURAL SELECTION AND SYMBIOSIS

Symbiosis here is used to mean that different life forms as we know them live together in correlation in terms of their mutually interdependent actions and deeds, including physiological phenomena. We give life to each other as being lived by one another. Before examining symbiosis, we would like to discuss natural selection, the principle of which was put forth by Darwin as a term used with adaptive evolution. Natural selection is an objective observation or interpretation of evolutionary phenomena of life. We are not insisting here that natural selection is the one to be criticized and blamed, while only symbiosis is to be praised.

¹³ The First and Second Vows of Dharmakara in the Larger Sutra read, “(1) If, when I attain Buddhahood, there should be in my land a hell, a realm of hungry spirits or a realm of animals, may I not attain perfect enlightenment.” “(2) If, when I attain Buddhahood, humans and devas in my land should after death fall again into the three evil realms, may I not attain perfect enlightenment.” The Vows established by Dharmakara should refer to the current occurrences of this world. The “three realms” of hell, hungry spirits, and animals or the “six realms” of rebirth are our day-to-day experiences.

The English translation cited here is from Hisao Inagaki, *The Three Pure Land Sutras: A Study and Translation* (Kyoto: Nagata Bunshodo, 1994), p. 241.

If we evaluate and define the meaning of existence only from a point of view of natural selection, however, there arises a problem. “The survival of the fittest” and “the stronger prey on the weaker” are emphasized, and “the weak becomes the victim of the strong” can be our common agreement as a natural phenomenon. In the process of evolution, this might be unavoidable when we see things through an objective observation or interpretation of adaptive evolution. Yet determining and concluding from the first place “the weak becomes the victim of the strong” should be claimed to be wrong. The secularization in a selfish and bad sense will increasingly continue to sprawl.

It seems that as we witness the rapid development of modern science and its technology, the progress of recent civilization has already exceeded the limitation that humans are able to face or control with their reason. The speed of development and progress is amazingly fast, and we even fear the “irreversibility” (*fukagyakusei*) that the nature of civilization contains within itself. Technological development is particularly breathtaking, so is the development of medical science. Organ transplantation in the United States is a daily practice, and in Japan it has been exercised with the introduction of brain death. Recently, cloning has been experimented with. Genetic treatment in Japan has started and been experimented with as well. We have already heard the news of genetic treatment in the United States, but in Japan we are still arguing and debating this issue from such various fields as morality, ethics, religion and humanity. There are still many problems before us.

In terms of the prolongation of human life, medical science has made significant contributions. The other essential quest, however, that humans have been seeking in an ultimate sense—“What is the meaning of life and existence?” or “How should we live?”—has been put aside. Today’s human activities of just prolonging life through medical advancements may actually deprive us of the working out of our quest of seeking and striving for the meaning of life and existence. Though it is almost impossible to say what that is, to “think” what life is all about plays a crucial role for humans as we live in harmony with nature or the universe.

As we live on, in debt to medical science for our comfortable daily life, we are not complaining of or denying the development of medical science. Yet, we are concerned with the speed of its progress, and are somehow fearful about its consequence in the near future. The progress of medical science has much to do with the theory of natural selection. Observing the development of technology, we feel the same way in the improvement and

betterment of personal computers and cell phones. We are able to communicate with people all over the world in an instant using the Internet from a room at home. Taking advantage of this modern convenience and technology, we feel that the progress of our sciences has almost come to its peak and will put an end to human civilization sooner or later. Is this just a view of a minority?

Going back to the discussion of symbiosis, we believe that we cannot afford to determine the values of evolution and civilization only as a result of natural selection, and that the time seems to have come to pay serious attention to the way of existence in mutual dependence and coexistence. We should consider how we would be able to survive better in peace with the rest of beings on the planet, not just saying “the survival of the fittest,” “the stronger prey on the weaker” or “the weak becomes the victim of the strong.” Here, the way an individual lives has to be questioned and reexamined. Since it is the individual that recognizes and experiences reality, the individual and personal review of how we can live our life is of foremost importance. This brings us, in turn, to an examination of self-reliance (*jiritsu* in Japanese) of an individual in society.

Self-reliance is the establishment of an individual and can be divided into “self-support or self-sustenance” (*jikatsu*) and “independence” (*dokuritsushin*). “Self-support” has two aspects. The first is financial/economic self-support, which means we should be able to live without receiving financial assistance and help. The second has something to do with daily life and activities. We should be able to take care of ourselves in our daily lives—for example, washing our own faces and going to the toilet without any help from others. Self-support as independence refers to mental/spiritual independence. We should be able to take action on the basis of our own decisions and judgments and not rely on others. So independence here means that we form a judgment and take action with subjectivity and responsibility. Self-reliance in society can be defined as something mentioned above. According to the way the universe or existence is, however, it is clear and evident that there is ultimately nothing that can stand and support all by itself as an independent individual. Factors of self-support mentioned above are some qualities that we try to seek as we lead lives as members of society in an ideal sense.

Even though we say that we are able to support ourselves financially or economically since we are working or doing business, in reality it is made possible for us to work, by our playing a part or role in society. Suppose we have to receive some support or help in order to

live. We haven't lost the functions as a member of society at all. Those who are able to work have the conditions with which to work, while the others who are not able to work do not have the conditions with which to work. Those who are supporting others have the conditions with which to help, while the others who are receiving support have the conditions to be supported. Some who can extend help and others who need help are mutually interrelated with each other, and their relationship cannot take place without either of the two. Being so, however, those who are receiving support should not presume or impose upon the favor of others. Those who are helping others should not be too arrogant about it. Being able to help others is a pleasure and a joy.

As for self-support in daily activities, when we get sick, we need help from others. Our daily lives involve extending and receiving help to and from each other. Mental independence also involves our relationship with others: even if we believe that we are making our own judgment as to how to live, it is done in relation to others. Unless we are concerned with others, we are not often accepted in society and get isolated. It is in mutually depending on each other that individuals exist, and individuals coexist in mutual dependence. Yet, we find that it is extremely difficult to cope with and face the problems and complications emerging from a struggle between an individual seeking self-gratification and the whole or all individuals in mutual coexistence. That is to say, perfect self-reliance and symbiosis, or mutual dependence, are contradictory to each other in the first place. If an individual claims his or her own want or desire too much, it distorts mutual coexistence, while if mutual coexistence is over-emphasized, the individual loses his or her identity.

An individual is self-centered and often selfish. There is nothing wrong about this; that's the way the individual is, as mentioned before. The individual is attached to the self, which makes the self separated from others, and is fundamentally destined to be self-centered. The world or society consists of groups of those individuals, and it is natural that our world should have various problems. However, it is not right that the strong can insist that the world of natural selection leads to the survival of the fittest and say it cannot be helped, though they find problems and injustice in society. Or if people stand on the strong side, are they not any longer able to see the problems of the weak?

Though perfect self-reliance and symbiosis fundamentally contradict each other in nature, it is necessary that we continue to seek a well-balanced relationship based on the symbiotic mutual coexistence of individuals and the community to be able to live in the age

when value standards and judgments have been rapidly changing. We are not, however, appealing that an individual should stand up to make a social revolution, feeling the whole responsibility for it. If we alone try to carry all the problems of society on our shoulders and try to directly face and solve them, then we will get lost and puzzled, muttering, “How complicated and difficult all these problems are!” Then again, it seems to be easier to live in ignorance of these problems, but can we really escape from them? We may be incapable of coping with the problems, but an individual is able to start from the problem of oneself and try to deal with problems close to and next to one. Even though we try to tackle the problems in groups or organizations, the principle is that each individual should take them as a matter of subjectivity and realization. It should be carried out according to, and within, one’s capacity or capability with an aspiration for doing good to others and society, though there is no fixed or specific answer. The answers vary according to the situations and an individual’s capacity. We then try to live in, and for, the Vow that the Bodhisattva has established with the ideal of sharing Wisdom with others—in other words, helping others in the here and now.

CONCLUSION

We have defined that the universe, in which all things with contradictorily opposite qualities come and go at the same time as they interdependently and mutually interfuse with one another, stretches out endlessly and outwardly, and can be limitlessly subdivided into smaller sets or units, in a spiral. And the world that is existentially present to us is the universe unfolding in the here and now with our realization. Yet, when we observe events in terms of spots or points of time-space, we find an inconsistency among them, since we interpret them taking place at different times and places or we evaluate things with a partial view. Since the fundamental way of existence is contradictory in the first place, it is natural that things should look inconsistent when spots or points are observed and compared respectively. Living in such a world of *samsâra*, we often lead chaotic lives, usually not being able to see ourselves as we are, and easily misunderstanding others.

Realizing this, the moment we try tackling the problems of the world at first hand, we find that they are too complicated to be challenged in any way. The hardest of the hard is to live well-balanced lives in the contradictorily opposed modes of “natural selection” and “symbiosis.” It is difficult to accept the whole without gratifying oneself, while one loses one’s identity if one solely tries to please everyone: keeping the balance between an

individual and the whole is vitally important and difficult. One cannot live all by oneself, nor can one exist without the relationship with others.

An assembly of self-centered individuals is the whole, and the whole consists of the assembly of the individuals. In such a world, trying to get along well with others is almost impossible. This desire of trying to live well with others is also our selfish conceit, but what more can we do, or what is left for us? We should like to seek to return what we have been given, in accordance with our capacity. In the world of returning based on realization, we see a “line” and then “space,” in which light (*Amitâbha*) is shed through and we get encouraged to live on (*Amitâyus*). We may be filled with a sense of acknowledgement, “I have this much,” instead of with frustration, “Is this all I have?” This sense of fulfillment, like religious experience, does not last for a long time, but sustains the individual like a bamboo joint. We seek symbiosis and coexistence in and for the Vow, sharing sorrow and joy with all beings and things in nature, as we are living and dying, and dying and being lived in the here and now.¹⁴

¹⁴ This paper is a revised English edition from “*ima koko ni okeru kyôsei wo kangaeru—ten kara sen eno ninshiki wo tôshite—*” in *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 5, December 2000, pp. 47-66, and was partially presented at the 10th Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies at Otani University, Kyoto, in August, 2001.

Factors for Success in Second Language Learning

Walter KLINGER

Within a few short years, children are able to understand what they hear, and to speak and be understood, with a high degree of success. After what appears to be almost effortless acquisition of the fundamentals of language, largely from simple interactions with parents and peers, the child's knowledge of vocabulary and structures of the language is expanded and consolidated by formal instruction in spelling and grammar. Unlike learning the first or native language, the process of learning a second or third language seems much slower and often meets with limited success.

Mastering a second language depends on a number of biological, social, and educational factors, like *aptitude for languages, attitude, cognitive style, learning strategies, neurological factors, personality, previous experience with language learning, proficiency in the native language, sense modality preference, sex, etc.*, which we discuss in this article, with an aim of finding better ways of teaching and learning. We find 5 main groupings of factors for success in *SLA*, Second Language Acquisition:

- The amount of time available for study
- Differences in motivation to learn
- Individual intellectual & personality differences
- The age of the learner at the start of study
- The choice of lesson material and teaching techniques

TIME FACTORS

Children have plenty of time every day to puzzle out their native language, often referred to as *L1* (a bilingual child might have two *L1*s); moreover, children need to deal with just a limited range of vocabulary and uncomplicated grammar. Older learners, who attempt to learn a new language, referred to as *L2*, are usually busy with many scheduled

daily events and chores, and may be hard pressed to find time to devote to studies. L2 learners who have moved from an L1 country to a new home in another country are faced with a deluge of extensive, sophisticated vocabulary and grammar, and need to make sense of the L2 as quickly as possible for functioning in the L2 environment. These L2 students, if they are in an English-speaking environment, would probably attend classes in *ESL*, English as a Second Language, where techniques are often oriented to teaching language that is useful in quotidian life, work and school activities.

Students of English who are living in an environment where English is not the language of everyday use, are usually considered to be studying *EFL*, English as a Foreign Language. EFL learners might be under just as much time pressure as ESL learners, if, for example, they need to learn as much as possible, as quickly as possible, in order to pass school examinations. High school and college lesson material often focuses on academic skills, to understand the language in its written form for the purpose of passing written tests and exams, which typically involve such tasks as:

- ✧ *comprehending* and *translating* grammatically complicated selections from literature and scientific writings;
- ✧ *manipulating* language forms, e.g., changing sentences from active to passive voice, or from present to past tense;
- ✧ *deciding where* the stressed syllable of a word falls; *selecting which* preposition should be used in an expression; *deciding on* the correct use of other such “discrete points” of grammar, and so on.

EFL high school students in Japan have about 50 to 100 hours of English instruction per year; so, the teacher and students need to cover a lot of material in a short time to be ready for exams. Thus, lessons often focus less on gaining ability in speaking for lifestyle activities and more on memorization of grammar rules for accurate translation. EFL students in college also might spend most of their study time on comprehension and translation of written reference and research material, particularly as they have little immediate need for competency in daily conversation skills. (For a discussion on distinctions between a foreign and a second language, see Lambert 1990.)

Other adult EFL learners might study English after regular school hours or after work simply out of interest or for pleasure, or for non-urgent career needs. For them, the time factor is less crucial, and learning can proceed in a more leisurely fashion, with techniques involving more games, songs, and similar activities that do not demand a lot of memorization of grammar rules and vocabulary.

Either type of EFL student, the school student or the casual learner, doubtlessly has less daily exposure to English than an ESL student does. ESL students in an L2 environment have many more opportunities to hear, speak, read, and write English than EFL students in an L1 environment. No matter the situation of the learner, the time required to learn L2 is probably the same for all kinds of learners; the EFL learner may seem to take longer because of lack of exposure to and interaction with an L2 setting.

A conservative estimate of the time needed to acquire the L1 is 12,000-15,000 hours (Lightbown 1985). To learn L2 takes much less time once the L1 has been mastered. It takes over 720 hours of intensive L2 study at the U.S. Foreign Service Institute to become proficient at just the novice level (Omaggio-Hadley 1993:10). It takes thousands of contact hours in Spanish or French, and 4 to 5 times longer than that for languages dissimilar to English like Russian, Mandarin, Japanese, or Arabic, for an L1 English speaker to get beyond the tourist level of functioning ability (Brown 1997). Even where the community is L2, and the L2 learner gets a lot of input and practice outside of school, thousands of hours of school study are required. Spolsky (1989:190) notes that immersion students in Canada, L1 English speakers studying L2 French intensively, with all their school subjects taught in French, require 4500 hours of instruction to attain fairly high levels of fluency.

Berliner (1990) describes various aspects of “time” as they relate to education:

- ✧ *Pace* is the amount of content (material) covered during a period of time.
- ✧ *Allocated time* is the amount of time that the school or teacher provides to the student for instruction. Some *allocated time* is taken up by *transition time*, when the teacher takes attendance, gives back homework, etc., and by *waiting time*, when a student must wait to receive some instructional help; for example, waiting in line to have the teacher check work, or waiting for the teacher’s attention after raising his/her hand.
- ✧ *Engaged time* is when a student is paying attention to material or presentations that have instructional goals.
- ✧ *Time-on-task* is when the student is paying attention to just those activities that are desirable for the lesson at hand. (A student may be in *engaged time*, deeply involved in studying mathematics, during a time period that is meant to be spent on French language study.)
- ✧ *Academic learning time (ALT)* is when there is a measure of success involved. It is the time
 - “in which a student is engaged successfully in the activities, or with the materials to which he or she is exposed, and in which those activities and materials are related to educational outcomes that are valued” (Berliner 1990).

Success in learning, says Carroll (Carroll 1963, Carroll & Freedle 1972), is affected

by five variables:

- ✧ *Aptitude*: the time it takes an individual to learn the material;
- ✧ *Opportunity to learn*: the time allowed in school for learning;
- ✧ *Perseverance*: the amount of time a student will work on tasks;
- ✧ *Quality of Instruction*: the effectiveness of the materials and methods, and the clarity of directions; and
- ✧ *Ability of the student to understand instruction*: background experiences and knowledge of the student that are relevant to the new information being learned, language comprehension, knowledge of learning strategies, and figuring out what the learning tasks are.

Carroll regards *aptitude* as a variable of time, insofar as practically anyone can learn practically anything, given enough time. In this model, students are not characterized or labeled as being smart or dumb, bright or dull, gifted or disabled; only as fast or slow. Individual students do not necessarily display the same aptitude (i.e., do not need the same amount of time for successful learning) in different subjects like mathematics, reading, science, physical education, etc. Gettinger (1984) surveyed research results and found that measurements of *time to learn (TTL)* were usually as good, or better, predictors of success than conventional measures of intelligence. The system used in many schools and universities of assigning “Incomplete” grades for work that is not satisfactory, rather than “Failure,” derives from a time-based definition of aptitude.

Success as a factor of time in the *ALT* model is of particular significance, says Berliner (1990), because

it attempts to provide a time metric for the two non-time variables in the Carroll model: quality of instruction and ability to understand instruction.

While “Aptitude” is certainly dependent on time to a certain extent, I use a wider definition of aptitude, which is dependent on “Individual Differences” and “Age Factors.” Those two categories also subsume Carroll’s “Ability to Understand Instruction.” As for Carroll’s “Quality of Instruction,” I suggest that my category of “Choice of Material & Techniques” allows for self-study, not necessarily under the direction of a teacher.

MOTIVATIONAL FACTORS

In Carroll’s model, “Perseverance” is a variable of time. Here, I consider the various causes of perseverance, or what are the conditions from which perseverance can arise. Motivation can be seen in three aspects:

- ✧ *instrumental, external or resultative* motivation: the desire to achieve an external

- goal, such as getting a job, career success, or greater pay;
- ✧ *intrinsic*, or *internal* motivation: the desire for internal growth or satisfaction; and
- ✧ *integrative* motivation: the desire to communicate with or assimilate in a new community.

Different age groups and learners in different situations have different needs and wants, goals and desires, which drive them to succeed; conscientious teachers are careful to choose material and techniques that suit different motivations.

What motivates children is a natural positive curiosity and interest in learning about anything new, which is most of their environment. For children who are aware that the L2 is used by people in different parts of the world, the new language might have many attractive features. It could be an interesting new way to name things, and to say something they are already able to say in the L1. It may be a challenging way to acquire a new skill, like a different style of writing. If they watch a TV show like *Sesame Street*, L2 English might be the language of some of their favorite characters, and they would like to understand what they're saying. Some motivation might also come from the belief that learning English is important for their success in school and in their future.

When children are learning, they are often physically active. They mimic, repeat words, because they enjoy it, play make-believe, taking on new identities unselfconsciously, and are rather unconcerned if other children look, act, or talk differently. They will speak or produce any kind of sound if, and when they feel like it. They like to have fun; but are also willing and eager to start to learn the serious business of spelling, reading and writing. Teachers of children usually try to make lessons as active, playful, and cheerful as possible.

In later school years, learners have been trained to seek order in their studies. Study is serious and purposeful; tests and exams are required to give evidence of progress. They look forward to acquiring skills; but, may fear personal failure and so be reluctant to try and speak in the L2. They are anxious not to appear childish, and like to know what they are doing and why. Some have come to believe that in the classroom one is filled with facts, rather passively and silently. When studying English, they expect and even ask for teacher-led explanations, feedback, assignments and tests. Such quiet, studious, perhaps introverted, students may learn better with methods of grammar and translation exercises than more extroverted students (Hoven 1997).

Some school-age students may have developed attitudes of liking and disliking certain subjects. Some EFL students might not see any benefit in studying English. If it is a

compulsory school subject, more resentment and dislike may build up. For these students, the teacher has a challenge to make the lessons stimulating, involving, and unthreatening.

Adults may also have various motivations. They may need to prepare for study or work in a foreign country, or to be able to communicate as tourists. When studying for business purposes, adult learners might need to know technical report writing, how to compose business letters, and how to develop presentations. For them, and for others, like university students who need serious study to pass examinations and to reach academic goals, learning by having fun and playing games might seem besides the point, a waste of time, and immature. For these students, teachers need to use practical and productive techniques.

Other L2 learners in an L1 environment may want to learn a new language in order to develop their own sense of identity and worth, or because they are interested in the culture the language represents. As mentioned earlier, if there are no pressing time demands, material that is not exam-oriented can be used for these students.

Having motivation to study is perhaps not important in the short term for L2 success, for most people can learn a small amount of a new language in a short time and with little effort. But motivation is important over the long term: highly motivated students will study with more effort and persistence, and eventually do better than those who give up after their initial success.

Goals which are close at hand, such as passing exams, can be more motivating for some learners than abstract or far distant goals such as mastering the L2, which prove dishearteningly impossible, and are easily abandoned. Immigrant youth in an L2 environment may be more willing to make a larger initial investment in learning the L2 compared with their older counterparts, "because they can expect to enjoy a longer period of pay-back" (Beiser & Hou 2000). Being successful in learning L1 is obviously crucial for young children; for older learners of L2, very high levels of success in L2 are probably less crucial, and that may reduce motivation.

Motivation may be expected to improve when classes take into account students' likes in teaching styles and lesson material. About 800 students at a mixed-nationality English language school in Britain were surveyed (Adrian-Vallance 1992) to find out what they thought a good lesson involved. Most often mentioned was that the class atmosphere was good, that there was good rapport. The teacher communicated with them directly,

relating to them as individuals. In a good lesson, they had plenty of speaking practice, and the teacher helped them improve their listening ability. They learned language that they knew was useful. The content of the lesson was interesting and challenging without being overwhelming

Socio-cultural factors can positively or negatively affect personal motivation. Shortreed (1987) shows evidence that the child, who has emotional support from his or her family for bilingual language learning, may end up performing better than a monolingual child on IQ tests, psychological tests, and general academic achievement tests. Some socio-cultural factors, such as the attitudes of peers, learners' attitudes toward their learning situation, teachers' attitudes towards their students, and one's own attitudes towards one's own ethnicity, have been studied for their influence on SLA (Larsen-Freeman 1991).

INDIVIDUAL FACTORS

Some of the qualities that make one individual different from another are sources of motivation; however, individual traits can perhaps best be considered as a separate category.

People may be characterized by their personality or affective (emotional) traits: those who are confident vs. those who have low self-esteem; those who are self-reliant vs. those who are more dependent on other; and so on. Other aspects of personality include attitudes, degrees of extroversion and inhibition, reactions to anxiety, willingness to take risks, sensitivity to rejection, empathy, and tolerance of ambiguity (Brown 1994:61-64). Some research indicates that certain traits may be beneficial for SLA; for example, moderate anxiety, and moderate risk taking, like guessing meanings and trying to communicate even though mistakes may be produced (Hoven 1997).

Gardner (1983) proposed that individuals have unique sets of stronger or weaker "multiple intelligences," that develop in interaction with each other:

- ✧ Visual/Spatial Intelligence
- ✧ Verbal/Linguistic Intelligence
- ✧ Logical/Mathematical Intelligence
- ✧ Bodily/Kinesthetic Intelligence
- ✧ Musical/Rhythmic Intelligence
- ✧ Interpersonal Intelligence (understanding and interacting with others)
- ✧ Intrapersonal Intelligence (understanding and controlling oneself)

Gardner's theory has widely been incorporated in school curricula; for example, in the use of multimedia teaching material, student portfolios, independent projects, and

assigning creative tasks that appeal to different intelligences.

Preferred learning styles have been described as analytic, serialist and operation learners vs. holists and comprehension learners; surface learners vs. deep processors; etc.

Willing (1988) categorized 517 adult L2 English learners in Australia into four categories of learning style, based on their responses on a questionnaire:

- ✧ *Authority Oriented Learners* preferred the teacher to explain everything, and liked to have their own textbook, to write everything in a notebook, to study grammar, to learn by reading, and to learn new words by seeing them.
- ✧ *Analytical Learners* liked to study grammar, to study English books and read newspapers, to study alone, to find their own mistakes, and to work on problems set by the teacher.
- ✧ *Communicative Learners* liked to learn by watching and listening to native speakers, to talk to friends in English, to watch TV in English, to use English out of class in shops and trains, to learn new words by hearing them, and to learn by conversations.
- ✧ *Concrete Learners* liked using games, pictures, films, cassettes, and videos, talking in pairs, and practicing English outside of class.

Willing (1988) found that these learning preferences did not correlate significantly to any biographical variables of differences of age, ethnic group, level of previous education, length of residence in Australia, speaking level proficiency, or type of learning program, i.e., whether they were in full- or part-time courses. The teacher deciding on how to approach a lesson might take into consideration the style of learning preferred by the learners, who might like learning either more directly from the teacher or more from studying on their own, or who might prefer to learn more by oral speaking practice, or more from silent textbook study.

It may be possible to identify to some extent what qualities in individuals help them learn L2 easier. Humes-Bartlo (1989) reports that L1 Spanish-speaking children who learned L2 English faster also did well on tests of:

- ✧ Auditory discrimination (hearing differences in contrasting sounds such as *macho/nacho* and *beber/deber*),
- ✧ Ability to remember associated word pairs (*norte/sur*, *fruta/manzana*), and
- ✧ Analogical reasoning (*Mother is to father as sister is to ----*),

Students who were slower L2 English learners, on the other hand, had better skills in arithmetic, and in constructing and copying geometric block designs.

Teachers might consider using techniques that develop skills associated with successful language learners; such as, practice in listening to sound differences, learning

vocabulary in related word-groups, and developing logical reasoning skills. They may also use techniques appealing to visual intelligences, such as giving instruction in L2 for the design and building of structures and machines.

People differ widely in their linguistic ability; the age at which they begin speaking the L1, for example, or the speed with which they master it. There are cases of children in elementary school who seem to have been unable to “intuitively” learn the grammar of their L1: they need to stop and work out what they want to say, they struggle to phrase questions, and they confuse tenses, as in **Yesterday I jump the fence* (Whitfield 2001). There are cases of individuals with very low general cognitive skills; but, with surprisingly high language ability, like ‘Marta,’ an adolescent with an IQ below 45 and nonverbal capacities on the 2-year-old level, who produces morpho-syntactically complicated utterances like **He was saying that I lost my battery-powered watch that I loved* (Muller 1996).

There are reports of families, a number of whose members may suffer from SLI, Specific Language Impairment. One study concerns a teenager who is apparently highly intelligent, and at the top of his class in mathematics; but, is “grammar blind.” He makes random grammatical errors, such as **These boy eat two cookie*; while in a subsequent conversation he might say, **This boys eats two cookies* (Vajda n.d.).

Some theorists hope SLI could be the (long awaited) proof that ability or competence in grammar is not only quite separate from general intelligence, but, furthermore, is inherited. However, causes of SLI other than “innate language mechanisms” or language genes can be hypothesized. A distinctive feature of SLI is difficulty with the use of function morphemes (*the, a, is*), and other grammatical morphology; such as, the rule that verbs must be marked for tense and number (plural *-s*, past tense *-ed*). Short-term memory for speech sounds correlates highly with vocabulary acquisition and speech production; thus SLI could be explained as:

“a deficit in processing brief and/or rapidly-changing auditory information, and/or in remembering the temporal order of auditory information,” or
 “difficulties in perceiving grammatical forms which are generally brief in duration”
 (CUNY Developmental Neurolinguistics Lab n.d.).

Despite some exceptions such as these individuals, success in L1 learning is usually assured, while success in L2 learning varies much more. Humes-Bartlo (1989:43) points to a study that estimates that 11% of adults have a “negative prognosis” for foreign language study, and another 21% are “borderline.”

Neuropsychological studies of the areas of the brain responsible for the processing of linguistic, visuo-spatial abilities, reading, and other cognitive functions, reveal individual differences in brain organization. From the Darwinist point of view, says Muller (1996), inter-individual variation is indispensable: “Selection within a species can be effective only if members are different from each other.” Demonstrating genetic variation, about 10% of all right-handed people have language largely centered in the right hemisphere, as do about one-third of left-handed people (Genesee 2000). Another variable is sex, though research is far from conclusive about sex differences in language learning and abilities.

The left-brain, which for the majority of people controls most language functions and “patterns that progress step-by-step in a single dimension, such as our sense of time progression, or the logical steps required in performing feats of manual dexterity” (Vajda n.d.), develops faster in females than in males, which could partly explain girls’ ability to talk and read earlier, and have a better vocabulary and pronunciation, than boys. The right-brain, controlling “the awareness of position in space in all directions simultaneously” (Vajda n.d.), as is found in some aspects of sports, math, and construction (building things), develops faster in males than in females, which may partly explain why boys tend to be good at these tasks.

A variety of teaching methods, such as combining a language activity with physical movement for boys, and using role models “to engage girls in academic risk taking” (Gurian, Henley & Trueman 2001) may be used to address the different ways of learning of boys and girls. As adults, women tend to use their right-brains, which also controls many emotional functions, more than men; this may enhance awareness of emotionally relevant details, visual clues, verbal nuances, and hidden meanings in language (Moir & Jessel 1993).

Children, both as L1 and as L2 learners, typically exhibit more right hemispheric involvement in language processing than do adult L2 learners. During early stages of L1 learning, language capacity develops closely with manipulating objects (Muller 1996). The (right-brain controlled) left hand holds an object in space, while the (left-brain controlled) right hand “manipulates that object to perform tasks which require a step-by-step progression” (Vajda n.d.). In formal learning contexts, where there is often little to do physically but manipulate a pencil (though doing that well is a very difficult achievement in itself), left hemisphere processing seems dominant. In informal learning situations, where there are more varied stimuli, both hemispheres are stimulated to a greater degree (Hoven

1997). There is some justification in calling for L2 teaching materials that appeal to various different brain functions and to multiple intelligences (Klinger 1996).

AGE FACTORS

While study of an L2 can be begun at any age, much evidence indicates that the earlier the start, the more successful the result will be, at least as far as pronunciation is concerned. There are some concerns that starting a study of L2 while the L1 still has not been mastered will interfere with learning the L1. In a different theory, adults should be able to learn an L2 faster than children because of their advanced intellectual skills.

Infants soon come to understand that the sounds they hear are related to meaning, expressing emotions, desire for action, and naming functions. When they start producing words, they seem to be trying to find systematic patterns, testing the limits, parameters or constraints of definitions and rules, calling all men *Daddy*, for example, or any four-legged creature *dog*, or adding “-s” and “-ed” to produce **foots*, **mouses*, **go-ed*, or **sing-ed*. When one rule is established to be true, or at least seems to be to the child, other rules can be deduced. Rules seem to be acquired in a certain order, and new rules cannot be taught or learned until the learner is ready for them. Studies in developmental factors of SLA, particularly in syntactic morphemes, show that L2 learning also includes stages or orders of acquisition (Hoven 1997).

Children’s early attempts at language production imitate adults’ speech, though the grammar seems to be only partly based on the input, the information coming from parents and other children. The output, what the child says, is often very different from the input. Moreover, errors are not easily corrected, as shown in these two often-cited examples (Fromkin & Rodman 1983:333):

CHILD: Nobody don't like me.
 MOTHER: No. Say, “Nobody likes me.”
CHILD: Nobody don't like me. MOTHER: Nobody likes me.
CHILD: Nobody don't like me. MOTHER: Nobody likes me.
CHILD: Nobody don't like me.
 MOTHER: Now listen carefully. Say, “Nobody likes me.”
CHILD: Oh! Nobody don't likes me!

CHILD: Want other one spoon, Daddy.
 FATHER: You mean, you want “the other spoon.”
CHILD: Yes. I want other one spoon, please, Daddy.
 FATHER: Can you say “the other spoon”?
CHILD: Other...one...spoon.

FATHER: Say "other." CHILD: *Other.*
 FATHER: Spoon. CHILD: *Spoon.* FATHER: Other...spoon.
 CHILD: *Other...spoon. Now give me other one spoon?*

Perhaps learning a first language is not that easy after all; rather, the process is long, demanding, and frequently distressing and frustrating for the child, who is unable to express his or her needs and intentions (Hatch 1978:12). While we are looking for the best ways to learn a second or foreign language, we should keep in mind that learning any language, first or second, is a difficult process. Nonetheless, surely few adult L2 learners would need as long as the child above seems to, to understand the grammatical discrete points involved in *Nobody likes me and the other spoon.*

Adults have fully developed pragmatic and general cognitive skills, more developed and sophisticated than children's; that is, they know more things, they know how to do things better, and they know how to go about trying to do things. It is not surprising that adults are obviously better than children at language skills, as they have had many years of practice and improvement. Adults usually have a fairly good understanding of how their L1 works, from formal study of grammar in school, and can use metacognitive and metalinguistic strategies for planning, monitoring, and evaluating their L2 learning activity.

Rivers (1987:445-450) describes studies of young teenagers who learned L2 better than pre-teen children in both formal school-learning situations and in informal, naturalistic situations where they had no specific instruction in language. The teenagers, apparently, could apply their more developed intellectual abilities in their learning of the second language. Cummins and Nakajima (1987) conducted a survey of the L2 skills of 273 Japanese children in grades two to eight in Toronto, and found that the older the students were when they arrived in Canada, the better their English reading and, to a lesser degree, their writing skills.

Perecman (1989) shows that bilingual children took longer than monolingual children to name an object, while adult bilinguals showed no significant differences in reaction time to reading and list-learning tasks. Children learning two languages at the same time may have some difficulties dealing with two languages; but, by the time they are adult bilingual speakers, they no longer have noticeable problems in processing two languages.

The theory that prior literacy experience in L1 makes L2 learning easier has been called the *interdependency principle*, or the *sequential model*. There is some debate on what

level of proficiency, if any, in L1 needs to be obtained before L2 study can safely be undertaken. Some people believe that children should become quite proficient writers and speakers of L1 before attempting to become literate in L2, because there may be a danger that:

if L1 cognitive development is interrupted or inhibited during second language acquisition, the result may be decreased levels of L2 proficiency and reduced academic performance (Devlin 1997).

The interdependency hypothesis

provides the rationale for the kind of bilingual education that advocates the use of the child's mother tongue during the early stages of education, adding the second language only when she has developed higher-order cognitive and linguistic skills in the first (Hoffmann 1991:128).

But even adults, who start L2 study well after any danger of conflict with an emerging L1, fail to keep improving until a level of mastery; remaining, instead, at some stage of *interlanguage*. One symptom of this failure is *fossilization*, when errors become difficult to correct. Some errors seem to be the result of the conscious or unconscious application of the rules of the L1 onto the L2. Other common errors such as **on the meantime*, **put more attention to*, **take advantages of*, **a friend of her*, etc., suggest that adults have problems learning formulaic, conventionalized language (Yorio 1989). Children learning L1 English seem to use "whole chunks" of such high frequency expressions as *in the meantime*, *pay more attention to*, *take advantage of*, and *a friend of hers*, more accurately. Using formulaic utterances may be an example of right-hemisphere activity, says Brown (1994:55). As suggested earlier, adult L2 students typically underutilize their right-brains.

It has been hypothesized that the ability to acquire language the way children do, by mere exposure to it, may be lost by the age of puberty. Language then has to be learned by conscious effort; a much more difficult task. It cannot be said to be an impossible task, for

Whatever biological determinants there are of behaviors/capacities, they are unlikely to become totally unavailable after a certain age (Epstein, Flynn & Martohardjono 1996).

It is therefore preferable to speak of *sensitive*, rather than *critical*, periods when language must be acquired to be normal. Between the ages of about 2 and around puberty, the brain loses its plasticity; when brain functions can easily be localized in a variety of possible places and even re-form in different places after trauma to the original site. As the

brain matures, the forming of neural synapses, pathways, and connections decreases; synaptic connections that are not used, weaken and are eliminated.

By age 2 years, synaptic density is at its maximum; at about the same time when other components of cerebral cortex also cease growing and when total brain weight approaches that of the adult. Synaptic density declines subsequently; reaching by adolescence an adult value that is only about 60% of the maximum (Huttenlocher 1984).

This wealth of synapses is thought to be responsible for the striking plasticity of the immature brain that permits the learning of skills that can be learned only with much greater difficulty or not at all by the already pruned adult brain (Cziko 1995).

Language seems to be more resilient, less hard-wired, than other functions controlled by the brain; for example, visuo-spatial capacities are severely impaired after early right-hemisphere damage; and motor functions are seriously impaired after early damage to either hemisphere in cerebral palsy. “Thus, after extensive left hemisphere lesion in infancy, the right hemisphere appears to be capable of sustaining normal language acquisition that may, however, be slower than in the average normal child” (Muller 1996).

Pronunciation involves a motor function, the manipulation of muscles, so the way we sound out words may become a habit that is very hard to break or change; more difficult than even fossilized grammar patterns. There is a good deal of evidence that suggests that the earlier L2 study is begun, the better the outcome in mastering pronunciation. Munro, Derwing, & Flege (1999) show Canadian English adults who acquired phonetic aspects of an English regional variation (in Alabama); but listeners from either area could distinguish them from native speakers of either dialect. Flege, Yeni-Komshian & Liu (1999) show 240 speakers of L1 Korean who differed according to AOA, age of arrival, in the United States (1 to 23 years); but, who were all experienced in L2 English (mean length of residence = 15 years). As AOA increased, the foreign accents grew stronger. Ellis (1984: 485) refers to research showing that even the most advanced non-native speakers could not achieve native-like accuracy.

There is evidence that adults may show an advantage over children in a skill like mimicry, as Stapp (1999) suggests in a study of monolingual L1 Japanese adolescents who mimic English pronunciation of /r/ and /l/ better than younger children. However, most evidence indicates that younger L2 learners eventually overtake older L2 learners in pronunciation ability (Nagai 1997).

Noticing pronunciation is one of the first observable stages of learning language.

Exposure to a specific language, say Andruski & Kuhl (1996), changes the way infants perceive speech sounds by 6 months of age. Echols (1996:162) observes that infants between 4 days and 2 months old can distinguish native language speech from non-native speech. Werker & Tees (1984) demonstrate that children under one year old are able to distinguish between the speech sounds used by any language; but, by age 12 months, they begin to lose the ability to notice sounds that are not used in the L1, the language they hear every day. Mehler (1989) found that newly born Japanese infants could distinguish phonemes such as /r/ and /l/ that are non-distinctive in the Japanese maternal language.

Research is ongoing in investigating the sources of L2 pronunciation problems, and potential remedies. Masaki *et al* (1996) used Magnetic Resonance Imaging to see how Japanese and English speakers differ in their articulation of /r/ and /l/. Kewley-Port, Akahane-Yamada & Aikawa (1996) studied acoustic metrics (vowel properties, spectral target distance, formant dynamics and duration) of Japanese accented English vowels. Tsurutani (2002) studied problems in the acquisition of palatalized consonants for learners of Japanese both as L1 and L2. Hayes (2002) studied the differences in the perception of Japanese singleton and geminate consonant distinctions (e.g., /t/ versus /tt/) by native and non-native Japanese speakers.

The difficulty of mastering L2 pronunciation after puberty, and the importance of pronunciation in learning L1, suggest that pronunciation both needs to be, and should be, practiced more in L2 studies, along with other elements of prosody such as stress, rhythm and timing (Klinger 2001).

TECHNIQUES & MATERIAL FACTORS

A *technique* is one single procedure used in the classroom, such as oral repetition, substitution drills, translation exercises, card games, etc. The *material* used in the technique is a specific set of words, sentences, name of a game, etc. A *method* is a set or collection of techniques, perhaps arranged systematically, like the Direct Method or the Grammar-Translation Method. A *methodology* or *approach* is a theoretical or philosophical explanation of learning. Different *approaches* may share the same techniques and even the same methods. Different *methods* may also share the same techniques. Some techniques derive from particular methodologies; others have arisen independently. When speaking informally, the terms *approach* and *method* are often used to mean something more like

style, manner, behavior, mode, or even technique.

The teacher can select from a wide variety of techniques for developing skills in speaking, listening, reading, and writing, and of course create original ones. These techniques are generally quite standardized. For children's classes, common techniques are playing games, learning songs, imitating and repeating spoken language, and learning to recognize and write letters of the alphabet and words. For learners who have already had some years of academic training in school in their native language, the rules of grammar of the second language, and their applications in example spoken and written sentences are commonly studied, taking advantage of the older learners' intellectual abilities. Students can study one-on-one with the teacher, in large or small classes, practice in pairs, or do activities in small groups.

Class material for adults in the work force might deal with practical, functional language for business, housing, shopping, travel, government services, and other social communications. While children and adults might need, or want, more practical language practice, to learn how to express needs and desires for functional purposes, learners in academic institutions often study material that focuses more abstractly on intellectually comprehending the grammatical structures of the language; even though the example sentences are often isolated or removed from practical, everyday applications. It is the subject matter, even more than the techniques used to teach the subject matter, that is noticeably different in children's, high school-age students', and adults' second-language classes.

The teacher might choose techniques from among established teaching methodologies that focus to greater or lesser degrees on grammar study, repetition drills, or practice of conversation patterns for daily use; all intending to stimulate learning, but perhaps suitable for different learning needs and goals.

Lesson planning is influenced by philosophical and scientific musings and debates, of whether language is more biological or more socio-cultural; whether a speaker "knows" language or "performs" in language; whether a speaker is the "cause" of verbal behavior or is merely the "site" where language takes place. Is language learned by stimulus and response conditioning, by coaching and repetition? If it is, techniques include drills and manipulation of example sentence patterns, perhaps even rather mechanically and unthinkingly. Or, is language learned by an inherent ability, either specific for language, or

part of general intellectual skills? If so, techniques provide opportunities for experimenting with language in interactive encounters, allowing discovery and creativity to set into action automatic forces.

Behaviourism was the dominant paradigm in educational psychology for half of the last century, positing general laws of learning applicable to any learner, to rats as well as humans, to adults no less than babies. It is optimistic and democratic, in that anyone can learn anything, given enough time and the right drills. Cognitivism, the currently dominant paradigm, pays attention to differences among learners. It is humanistic, but perhaps realistically pessimistic in that it allows that some individuals will not succeed. In cognitive methodologies, classes are learner-centred; learners are active participants in learning, not passive recipients of knowledge. As much as these methodologies may be at opposed to each other philosophically, teachers typically use techniques based on both regularly.

The choice of what teaching method or techniques and actual material to use is usually determined by the teacher or the school administration, taking into account the amount of time available for study, the different intellectual abilities of the learners, and their goals or motivations. That is to say, what is taught in the lesson depends on how much time there is to spend on the topic, to what degree the learner is able to learn, and what the learner needs or wants to learn.

These factors, of available time, motivation, individual differences, and choice of material and technique, influence success in learning; for success in SLA, the factor of the age of the learner at the start of study is added.

References

- Adrian-Vallance, D. (1992). Ten qualities of a good lesson: The student's view. *The Language Teacher*, 16 (3), 25.
- Andruski, Jean E., & Kuhl, Patricia K. (1996). The Acoustic Structure of Vowels in Mothers' Speech to Infants and Adults. *Proc. 4th Int. Conf. on Spoken Language Processing (ICSLP '96)*. Retrieved September 30, 2002 from <http://www.asel.udel.edu/icslp/>
- Beiser, M., & Hou, F. (2000). Gender Differences in Language Acquisition and Employment Consequences among Southeast Asian Refugees in Canada. *Canadian Public Policy - Analyse de Politiques*, 26 (3), 311-330. Retrieved September 30, 2002 from <http://www.econ.queensu.ca/pub/cpp/Sep2000/Beiser.pdf>
- Berliner, David C. (1990). What's All the Fuss About Instructional Time? From: *The Nature of Time in Schools: Theoretical Concepts, Practitioner Perceptions*. New York and London: Teachers College Press; Teachers College, Columbia University. Retrieved September 30, 2002 from <http://courses.ed.asu.edu/berliner/readings/fuss/fuss.htm>
- Brown, Christine. (1997). A case for foreign languages: The Glastonbury Language Program. *Learning Languages*, 3 (8). Retrieved September 30, 2002 from <http://foreignlanguage.org/advocacy/case.html>
- Brown, H. Douglas. (1994). *Principles of Language Learning and Teaching*, 3rd ed. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall Regents.

- Carroll, J., & Freedle, R. (Eds.). (1972). *Language Comprehension & the Acquisition of Knowledge*. Washington: Winston & Sons.
- Carroll, J. B. (1963). A model of school learning. *Teachers College Record*, 64 (8), 723-33. Described in Berliner (1990).
- Cummins, J., & Nakajima, K. (1987). Age of arrival, length of residence, and interdependence of literacy skills among Japanese immigrant students. In Harley, B., Allen, P., Cummins, J. and Swain, M. (eds.) *The Development of Bilingual Proficiency: Final Report: Vol. 111. Social Context and Age*. Toronto: Modern Language Centre, Ontario Institute for Studies in Education, 183-199. Cited in Devlin (1997).
- CUNY Developmental Neurolinguistics Lab. (n.d.). CUNY Graduate School. Retrieved September 30, 2002 from <http://web.gc.cuny.edu/Speechandhearing/labs/dnl/sli.htm>
- Cziko, Gary. (1995). *Without Miracles: Universal Selection Theory and the Second Darwinian Revolution*. Cambridge, MA & London, England: The MIT Press. Retrieved September 30, 2002 from <http://faculty.ed.uiuc.edu/g-cziko/wm/>
- Devlin, Brian. (1997). Links between First and Second Language Instruction in Northern Territory Bilingual Programs: Evolving Policies, Theories and Practice. Retrieved September 30, 2002 from http://www.gu.edu.au/school/cls/clearinghouse/1997_bilingual/content03.html
- Echols, Catherine H. (1996). A Role for Stress in Early Speech Segmentation. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 151-170.
- Ellis, Rod. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Epstein, S.D., Flynn, S., & Martohardjono, G. (1996). Second language acquisition: Theoretical and experimental issues in contemporary research. *Behavioral and Brain Sciences* 19 (4), 677-758. Unedited preprint retrieved September 30, 2002 from <http://www.bbsonline.org/documents/a/00/00/05/62/bbs00000562-00/bbs.epstein.html>
- Flege, James Emil, Yeni-Komshian, Grace H., & Liu, Serena. (1999). Age Constraints on Second-Language Acquisition. *Journal of Memory and Language* 41 (1), 78-104.
- Fromkin, V., & Rodman, R. (1983). *An Introduction to Language*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Gardner, H. (1983). *Frames of Mind*. New York: Basic Books Inc.
- Genesee, Fred. (2000). Brain Research: Implications for Second Language Learning. Retrieved September 30, 2002 from <http://www.cal.org/ericll/digest/0012brain.html>
- Gettinger, M. (1984). Individual differences in time needed for learning: A review of the literature. *Educational Psychologist*, 19, 15-29. Cited in Berliner (1990).
- Gurian, Michael, Henley, Patricia, & Trueman, Terry. (2001). *Boys and Girls Learn Differently! A Guide for Teachers and Parents*. Jossey-Bass.
- Hatch, Evelyn M. (Ed.). (1978). *Second Language Acquisition: A Book of Readings*. Rowley MA: Newbury House.
- Hayes, Rachel. (2002). The Perception of Japanese Consonant Length By Non-native Listeners: Support for a Stochastic OT Model of Phonetic Category Acquisition. *LabPhon8: Eighth Conference on Laboratory Phonology*. Retrieved Sept. 30, 2002 from http://www.ling.yale.edu:16080/labphon8/Poster_Abstracts/Hayes.html
- Hoffmann, C. (1991). *An Introduction to Bilingualism*. London and New York: Longman. Cited in Devlin.
- Hoven, D. 1997. Improving the management of flow of control in computer-assisted listening comprehension tasks for second and foreign language learners. Brisbane: Unpublished doctoral dissertation, University of Queensland. Retrieved September 30, 2002 from <http://jcs120.jcs.uq.edu.au/~dlh/thesis/>
- Humes-Bartlo, M. (1989). Variations in children's ability to learn second languages. In K. Hyltenstam & L. Obler (Eds.), *Bilingualism across the Lifespan: Aspects of Acquisition, Maturity & Loss*. Cambridge: Cambridge University Press, 41-54.
- Huttenlocher, P. R. (1984). Synapse elimination and plasticity in developing human cerebral cortex. *American Journal of Mental Deficiency*, 88(5), 488-496. Cited in Cziko (1995).
- Kewley-Port, D., Akahane-Yamada, R., & Aikawa, K. (1996). Intelligibility and Acoustic Correlates of Japanese accented English Vowels. *Proc. 4th Int. Conf. on Spoken Language Processing (ICSLP '96)*. Retrieved September 30, 2002 from www.asel.udel.edu/icslp/cdrom/vol1/202/a202.pdf
- Klinger, Walter. (1996). Turning Language Studied Into Language Learned: Considering How The Brain Processes Information. *Academic Reports of The University Center for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture, 1*. Hikone, Japan, 65-78.
- Klinger, Walter. (2001). Learning Grammar by Listening. *Academic Reports of The University Center for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture, 6*. Hikone, Japan, 69-88. Retrieved September 30, 2002 from <http://www2.ice.usp.ac.jp/wklinger/research.htm>

- Lambert, Wallace E. (1990). Issues In Foreign Language And Second Language Education. *Proc. 1st Research Symposium on Limited English Proficient Student Issues, OBEMLA*. Retrieved September 30, 2002 from <http://www.ncela.gwu.edu/ncbepubs/symposia/first/issues.htm>
- Larsen-Freeman, Diane. (1991). Second Language Acquisition Research: Staking Out the Territory. *Tesol Quarterly*, 25, (2). Retrieved September 30, 2002 from http://www.coursestar.org/ku/markham/TL817/docs/larsen_freemanArt.html
- Lightbown, P. (1985). Great expectations: Second language acquisition research and classroom teaching. *Applied Linguistics*, 6 (2), 173-189. Cited in Larsen-Freeman (1991).
- Masaki, S., Akahane-Yamada, R., Tiede, M., Shimada, Y., & Fujimoto, I. (1996). An MRI-Based Analysis of the English /r/ and /l/ Articulations. *Proc. 4th Int. Conf. on Spoken Language Processing (ICSLP '96)*. Retrieved September 30, 2002 from www.asel.udel.edu/icslp/cdrom/vol3/330/a330.pdf
- Mehler, Jacques. (1989). Language at the initial state. In A.M. Galaburda (ed.), *From Reading to Neurons*. Cambridge (Mass.): MIT Press, 189-214. Quoted by Muller (1996).
- Moir, Anne, & Jessel, David. (1993). *Brain Sex: The Real Difference Between Men and Women*. Dell Books.
- Muller, Ralph-Axel. (1996). Innateness, autonomy, universality? Neurobiological approaches to language. *Behavioral and Brain Sciences*, 19 (4): 611-675. Prepublication version retrieved September 30, 2002 from http://cas.bellarmine.edu/tietjen/images/below_is_the_unedited_preprint.htm
- Munro, Murray J., Derwing, Tracey M., & Flege, James E. (1999). Canadians in Alabama: a perceptual study of dialect acquisition in adult. *Journal of Phonetics* 27 (4), 385-403.
- Nagai, Katsumi. (1997). A concept of 'critical period' for language acquisition. *Bulletin of the Society for the Study of English Education in Osaka*, 32:39-56. Retrieved September 30, 2002 from <http://www.tsuyama-ct.ac.jp/kats/papers/kn7/kn7.htm>
- Omaggio-Hadley, A. (1993). *Teaching language in context*. Boston, MA: Heinle and Heinle Publishers. Cited at <http://ivc.uidaho.edu/fles/factoids.html> Retrieved September 30, 2002.
- Perecman, E. (1989). Language processing in the bilingual: evidence from language mixing. In K. Hyltenstam & L. Obler (Eds.), *Bilingualism across the Lifespan: Aspects of Acquisition, Maturity & Loss*. Cambridge: Cambridge University Press, 227-244.
- Rivers, W. (1981). *Teaching Foreign-Language Skills (2nd edn)*. Chicago: University of Chicago Press.
- Shortreed, I. (1987). The Canadian immersion program: An experiment in Second Language Learning. *The Language Teacher*, 11, (10), 24-27.
- Spolsky, B. (1989). *Conditions for Second Language Learning*. Oxford: Oxford University Press.
- Stapp, Yvonne F. (1999). Neural Plasticity and the Issue of Mimicry Tasks in L2 Pronunciation Studies. *TESL-EJ*, 3 (4). Retrieved September 30, 2002 from <http://www-writing.berkeley.edu/TESL-EJ/ej12/a1.html>
- Wells, W. (1976). Validité du processus d'orientations. Ottawa: Public Service Commission. Cited in Humes-Bartlo (1989), 43.
- Tsurutani, C. (2002). Acquisition of Japanese Contracted Sounds in L1 Phonology. *LabPhon8: Eighth Conference on Laboratory Phonology*. Retrieved September 30, 2002 from http://www.ling.yale.edu:16080/labphon8/Poster_Abstracts/Tsurutani.html
- Vajda, E. (n.d.) Language and the brain. Retrieved September 30, 2002 from http://pandora.cii.wvu.edu/vajda/ling201/test4materials/language_and_the_brain.htm
- Werker, J. F., & Tees, R. C. (1984). Cross-language speech perception: Evidence for perceptual reorganization during the first year of life. *Infant Behavior and Development*, 7, 49-63. Cited in Cziko, Gary (1995).
- Willing, K. (1988). *Learning Styles in Adult Migrant Education*. Adelaide: National Curriculum Resources Centre. Cited in D. Nunan, Investigating Learner Behaviour in the Classroom, *The Language Teacher*, 13 (12), 15.
- Whitfield, John. (2001). Language gene found. *Nature Science Update*, 4 October. Retrieved September 30, 2002 from <http://www.nature.com/nsu/011004/011004-16.html>
- Yorio, C. (1989). Idiomaticity as an indicator of second language proficiency. In K. Hyltenstam & L. Obler (Eds.), *Bilingualism across the Lifespan: Aspects of Acquisition, Maturity & Loss*. Cambridge: Cambridge University Press, 55-70.

英語学習の動機づけ
—大学2年次の初めと終わりを比較して—

A Study of Learners' Motivation for English
—Focusing on Second Year University Students —

小栗裕子
Yuko OGURI

1. はじめに

英語学習の動機づけ研究は、ある時点における学習者の動機づけを探る横断的研究（例えば、Ely, 1986; Benson, 1991; 宮原ら, 1997）が多く、Berwick & Ross (1989) が指摘するように、学習者を長期的に捉えた縦断的研究はあまり行われていない。これは、後者が前者と比較して時間や労力に負担がかかり過ぎる点や、長期にわたり対象者を確保することが難しいという欠点を有しているからであろう。しかしながら、学習者の動機づけは、彼らを取りまく社会的環境の変化、特に大学入試以前とそれ以後や学力の向上によっておのずと変わっていくことが推測される。

それでは、大学入試を終え、就職活動にも充分余裕のある大学2年次の学習者にはどのような動機づけの変化が見られるであろうか。本研究では、これらの学習者に焦点を当て、彼らの動機づけをリスニング力との関連で、1年間でどのように変化するかを調査分析し、考察を加えた。

2. 方法

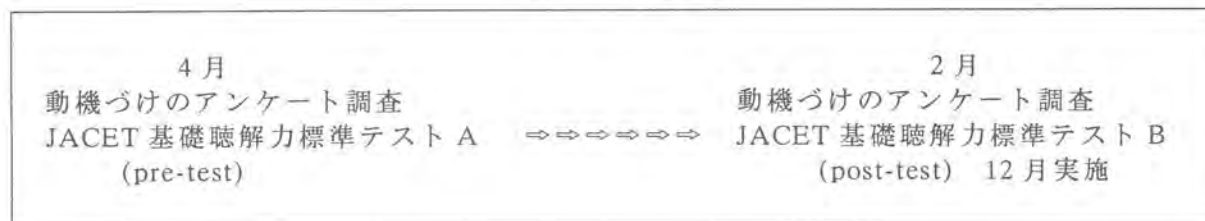
2.1 被験者

公立大学 2000/2001 年度の理系を専攻している2年生4クラス140名（内女性45名）。各クラスとも種目別や習熟度別編成ではなく、単に学籍番号順に構成されたものである。

2.2 手順

研究の手順を分かりやすくまとめると、表1のようになる。

表1 研究手順



1) リスニングテストとその結果

学生のリスニング能力を測るため、2回目の授業中にプリテストとして「JACET 基礎聴解力標準テスト A」を、そして12月初めにポストテストとして「JACET 基礎聴解力標準テスト B」を実施した。能力別に動機づけを比較するため、まず4月に実施した「JACET 基礎聴解力標準テスト A」の結果に基づき、学生を上・中・下位の3群に分類した。次に12月に行った「JACET 基礎聴解力標準テスト B」の結果と照らし、この3群をそれぞれに伸びた学習者（6点以上）と伸びなかった学習者（6点未満）に分けた。ここで使用した「伸びた学習者」の定義は、12月に実施したポストテストの全体の平均点 57.01（SD 8.6）から、4月のプリテストの平均点 50.99（SD 8.0）を引いた点、すなわち6点のことを言う。尚、プリテストとポストテストの相関係数は $r=0.75$ で、点数は開拓社から送られてきた標準点をそのまま使用した。

表2 4月と12月の JACET 基礎聴解力標準テスト得点と標準偏差

群	上位		中位		下位		
	伸びた (N=27)	伸びなかった (N=25)	伸びた (N=24)	伸びなかった (N=26)	伸びた (N=28)	伸びなかった (N=10)	
4月	mean	58.15	59.76	50.42	50.77	40.25	41.80
	SD	2.81	4.13	2.40	2.01	4.21	3.74
12月	mean	67.11	60.12	61.04	51.58	51.39	42.20
	SD	3.37	6.34	3.75	4.03	4.77	5.55

さらに、4月の時点では予測できなかった伸びた学生と伸びなかった学生を学力別に12月の結果から割り出し、これらの学生の得点を4月に遡って集計し、標準偏差と共に表2にまとめた。分散分析及び LSD による多重比較の結果、4月の段階では、 $F_{(2,134)} =$

221.21 ($p < 0.001$) で 3 群の間にもおのおのの群に有意差が認められ、これらを異なった集団と認めた。しかしながら、群内（伸びた学生と伸びなかった学生の間）は、 $F_{(1,134)} = 3.72$ で有意ではなかった。一方 12 月では、 $F_{(1,134)} = 29.82$ ($p < 0.001$) で同様に 3 群の間にもそれぞれ有意差が見られたばかりでなく、群内にも $F_{(1,134)} = 99.83$ ($p < 0.001$) で有意差が有り、伸びた学生と伸びなかった学生との間にも差が生じた。

2) 動機づけのアンケート

学生の動機づけを調べるため、2 年次の最初と最後の授業中（2 月初旬）に英語学習の目的に関係があると思われる 34 項目について、5 段階評価による記名式アンケート（項目の作成及び詳細に関しては小栗、2001 参照）を実施した。アンケートは 20 分程で、学生に内容の説明を加えながら行った。このアンケート項目の信頼性係数（クロンバック）は $\alpha = 0.92$ であった。

3. アンケート結果の分析と考察

3.1 各動機づけの平均値

2 年次初めと終了時のアンケート結果は、小栗（2001）の因子分析結果を参考に各因子ごとにまとめて集計し、平均を算出（表 3）、それぞれの動機づけごとに能力別の集団を比較分析した。

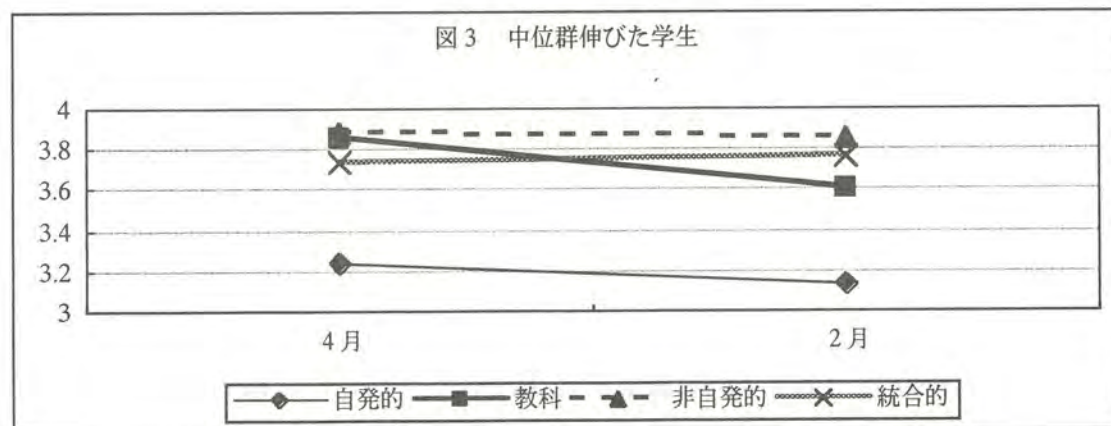
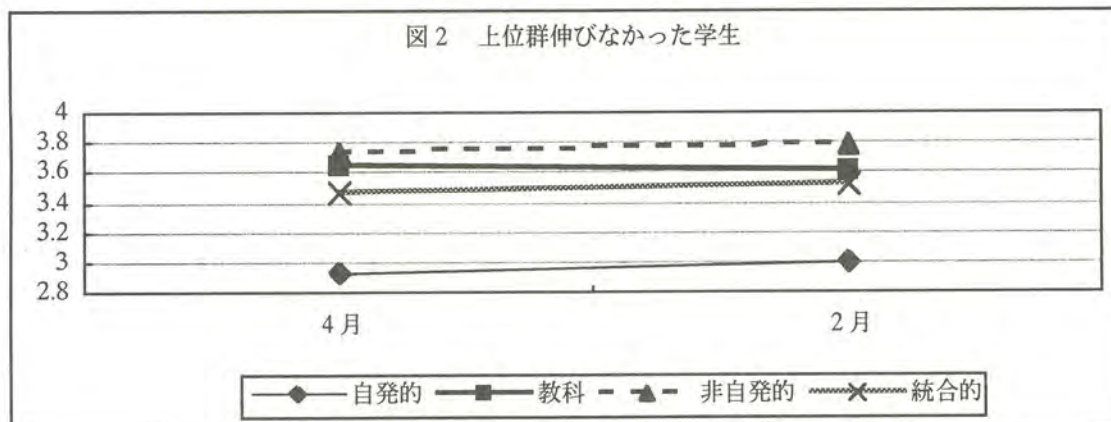
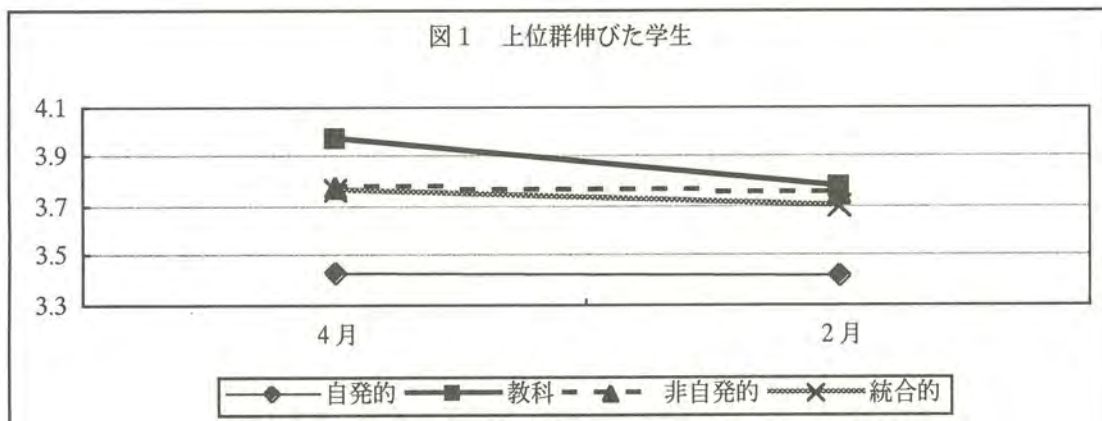
ここで定義した自発的言語使用動機とは、「～したいから学ぶ」や「好きだから学ぶ」のように学習者の積極的な意志が感じられる動機づけのことで、14 項目から構成されており、「学ぶのが楽しい」や「英語で色々な国の人と話したい」のような項目が含まれている。教科動機とは、英語を物理や数学と同じように捉えその教科を伸ばしたいという動機づけのことで、6 項目から成っており、「文法力を身につけたい」や「作文力を身につけたい」のような項目が含まれている。そして、自発性のない言語使用動機とは、「～に有利だから」や「～に必要だから」のように社会が要求するから学ぶという消極的な動機づけで、7 項目から構成されており、「就職に有利だから」や「科学技術の導入に英語は必要だから」のような項目である。最後の統合的動機に関しては、同化志向を表し、5 項目から成り立っており、「英語を話せたらカッコいい」や「英語圏の映画、ファッション、歌などに興味がある」などの項目を含んでいる。34 項目のうち「必修だから」と「海外旅行をしたい」はどの因子とも相関がなく、この 2 つは除外した。

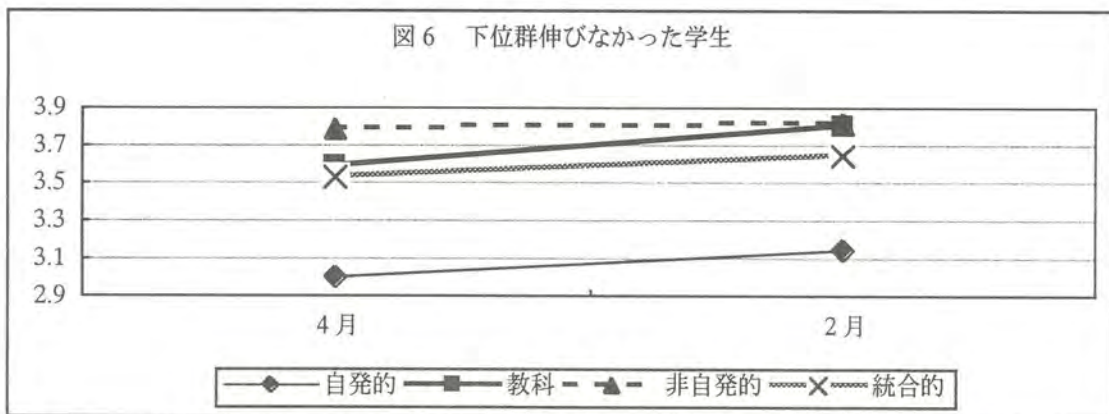
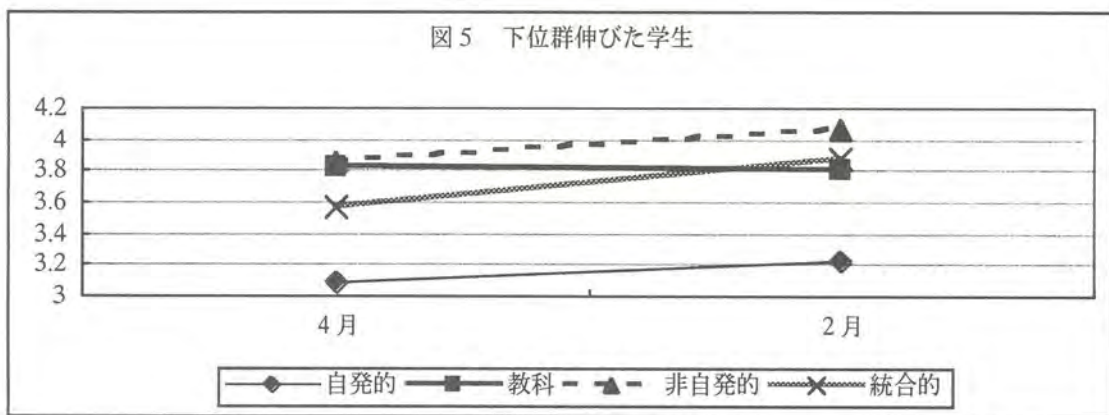
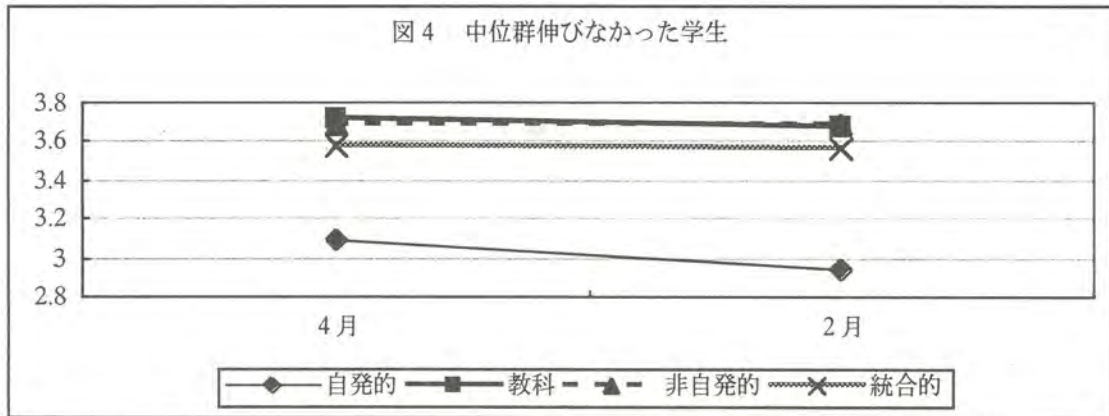
表3 2年次初めと1年後における能力別動機づけ強さの平均値と標準偏差

群			上位		中位		下位	
			伸びた (N=27)	伸びなかった (N=25)	伸びた (N=24)	伸びなかった (N=26)	伸びた (N=28)	伸びなかった (N=10)
自発的 言語 使用	4月	mean	3.43	2.92	3.24	3.09	3.08	3.00
		SD	0.64	0.61	0.51	0.69	0.62	0.43
教科 動機	4月	mean	3.97	3.64	3.85	3.72	3.83	3.58
		SD	0.53	0.77	0.63	0.74	0.46	0.38
自発 性言 語の ない 使用	4月	mean	3.78	3.73	3.88	3.69	3.86	3.78
		SD	0.49	0.60	0.62	0.56	0.47	0.55
統合 的動 機	4月	mean	3.76	3.46	3.74	3.58	3.56	3.53
		SD	0.71	0.68	0.56	0.87	0.59	0.68
	2月	mean	3.42	3.00	3.13	2.94	3.22	3.14
		SD	0.63	0.52	0.61	0.49	0.61	0.59
	2月	mean	3.78	3.60	3.61	3.68	3.80	3.80
		SD	0.64	0.73	0.64	0.51	0.57	0.61
	2月	mean	3.75	3.79	3.86	3.69	4.06	3.81
		SD	0.65	0.62	0.44	0.46	0.55	0.59
	2月	mean	3.70	3.51	3.76	3.57	3.87	3.65
		SD	0.79	0.71	0.62	0.80	0.59	0.64

表3の6群の学習者と4つの動機づけ項目を分かりやすく比較するために、図(1~6)にまとめた。理系専攻の学習者に共通している点は、自発的言語使用動機が1年を通して最も低く、他の3つの動機づけの強さには際だった差のないことである。特に、自発性のない言語使用動機においては6群の間の差は極めて少ないと言える。これは、学習者の多くが英語が好きだからや留学したいから学ぶというより、就職に有利だからや国際語だから学習していると感じていることを意味する。その中で上位群の伸びた学習者のみ、4つの動機づけ項目の間の差が少ないと言える。また、すべての動機づけ項目の平均値では上位群の伸びた学習者の得点が最も高く(3.74)、ついで中位群の伸びた学習者(3.68)、そして下位群の伸びた学習者(3.58)、中位群の伸びなかった学習者(3.52)、下位群の伸びな

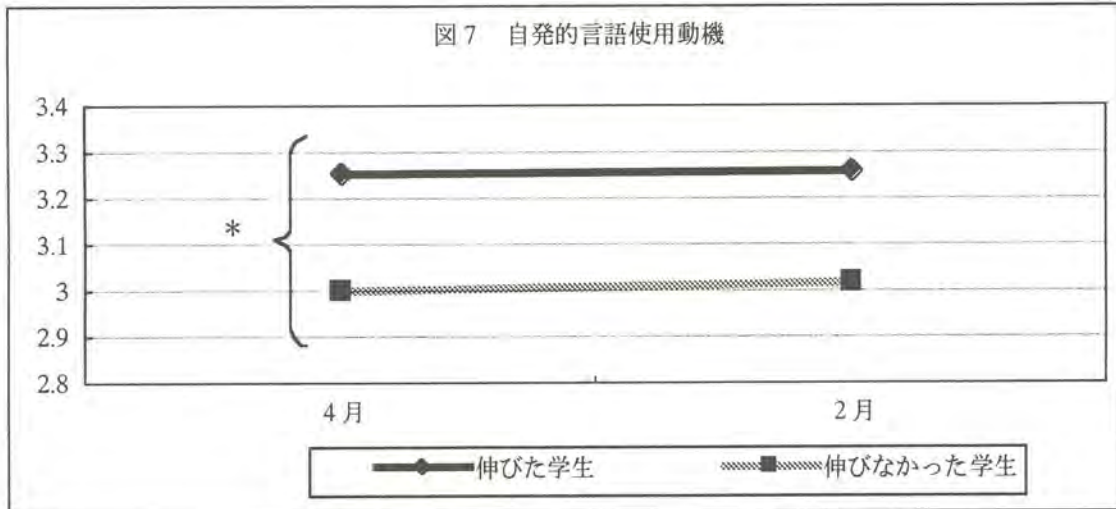
かった学習者(3.47)、最後に上位群の伸びなかった学習者(3.44)の順になる。しかしながら、伸びた学習者のすべての動機づけ項目得点が上昇した訳ではなく、上位群と中位群では1年間で教科動機が著しく低下しているし、下位群も若干ではあるが下降している。この傾向は上位群・中位群の伸びなかった学習者にも該当する。下位群の伸びなかった学生に関しては、すべての動機づけ項目得点が4月より1年後の方が上昇している点の特徴である。





3.2 3群の分析結果

各動機づけ項目ごとに3要因分散分析(群×伸びた/伸びない×プリ/ポスト)を行った結果、自発的言語使用動機のみにおいて、4月の時点で能力に関係なく伸びた学習者と伸びなかった学習者の間に、そして1年後もこれら2つの群の間に5%水準で有意($F_{(1,134)}=5.79$)に得点の高いことが認められた(図7)。



3.3 考察

上記の分析結果から、伸びた学習者は、2年生の初めての時点で既に自発的言語使用動機が伸びなかった学習者より有意に高く、これがリスニング力向上を予測する重要な鍵だと言える。この動機づけは、1年後も伸びた学習者の方が有意に高く、1年間授業を受けた後も各群わずかに上昇した以外は変化が見られなかった。言い換えれば、4月の段階で自発的言語使用動機の高い学習者については、他の動機づけ項目の高低に拘わらず、リスニング能力の向上が予想されよう。この結果は、自発的言語使用動機が主に英語を「道具」として何かをしたいと望む動機づけなので、聴く力を伸ばしコミュニケーション上達に役立てたいと願うのは当然だと言えるかもしれない。このことから、大学2年次における学習者の動機づけは、既に4月の段階である程度決まっていると言えるのかもしれない。

しかしながら、この結果は、大学1年生140名の被験者を同じ手法で調査分析した小栗(2002)の研究とは大きく異なっており、1年生の場合は、入学時から1年経た後で動機づけにかなりの変化が見られる。特に、自発的言語使用動機と自発性のない言語使用動機においては、すべての学習者が入学時より1年後の方が5%水準で有意に上昇しているし、他の2つの動機づけにも3群ではおのおのの違いが認められる。このことから判断すると、大学生の動機づけは、入学時から1年間の方が次の1年間より、はるかに影響を受けやすいと言えよう。学習者が入学後の1年間に、いかに急激にしかも現実のものとして、様々な社会的・文化的動機づけ要因に曝されているのかを考慮しなければならないであろう。

4. おわりに

大学2年次における学習者の動機づけは、リスニング能力との関連でどのように変化するかを調査分析した。統計的に有意差が生じた動機づけ項目は、英語を使って積極的に何かをしたいという「自発的言語使用動機」のみで、4月の時点で伸びた学習者のこの動機づけ得点が、伸びなかった学習者のそれと比較して5%水準で有意に高く、この結果は1年後も同じであった。このことから、問題の動機づけ項目がリスニング力向上を予知していると言えよう。

動機づけ研究は、Williams (1994) が "There is no room for simplistic approaches to such complex issues as motivation," (p.84)と述べているように、多面的角度からの取り組みが必要になってくる。鈴木 (2002) のように、教育する側からの視点で、いかに学習者の意欲を引き出すかという研究も当然重視されなければならないが、それと同時に学習者の社会的・文化的環境も考慮されなければならないであろう。その点からすると、先に指摘した大学生の英語学習は、2年次の1年間より入学時からの1年間の方が、はるかに影響を受けやすく、カリキュラム作成者や教える側は、この点を充分理解して学習者を教授する必要があるように思われる。

本稿は、平成14年8月に開催された第28回全国英語教育学会神戸研究大会で、筆者が発表した「英語学習の動機づけ—大学二年次の初めと終わりを比較して—」に加筆修正したものである。

参考文献

- Benson, M. (1991). Attitudes and motivation towards English: A survey of Japanese Freshman. *RELC Journal*, 22, 1, 34–48.
- Berwick, R. & Ross, S. (1989). Motivation after matriculation: Are Japanese learners of English still alive after exam hell? *JALT Journal*, 11, 2, 193–210.
- Ely, C. (1986). Language learning motivation: A descriptive and causal analysis. *Modern Language Journal*, 70, 28–35.
- 宮原文夫, 名本幹雄, 山中秀三, 村上隆太, 木下正義, 山本廣基. (1997). 『このままでいいのか大学英語教育』 東京: 松柏社

- 小栗裕子. (2001). 「理系学生のリスニング能力にみる動機づけの違い」『英語教育研究』
24号, 91-104. 関西英語教育学会紀要
- 小栗裕子. (2002). 「大学生の英語学習と動機づけ—入学時と一年後を比較して—」第41
回大学英語教育学会 (JACET) 全国大会 研究発表、於青山学院大学
- 鈴木誠. (2002). 『学ぶ意欲の処方箋』東京: 東洋館出版社
- Williams, A. (1994). Motivation in foreign and second language learning: An
interactive perspective. *Educational and Child Psychology*, 11, 77-84.

Abstract

This study examined the relationship between the learners' motivation for studying English and their listening proficiency. The relationship was studied through a pre and post test measure at the beginning and end of the second year at a public university in Japan. Listening proficiency was assessed concurrently with a motivation survey in the pre-test and post-test formats. One hundred and forty students, divided into three groups according to their listening abilities, participated in this study. A 3 x 2 x 2 multivariate analysis of variance (MANOVA) was used to compare the motivational differences with listening abilities.

Four motivational factors were considered: 1) volitional (self-motivated), 2) English as a school subject, 3) non-volitional (passively motivated), and 4) integrative. The findings show that volitional motivation was the predictor of listening proficiency. That is, those who had gained a higher-than-average listening score in the post-test had a significantly stronger ($p < 0.05$) volitional motivation at the beginning and end of the year. The other three motivational factors did not influence listening proficiency.

『台風』 – MacWhirr 船長の性格描写について –

Typhoon—Characterization of Captain MacWhirr—

山本 薫

Kaoru YAMAMOTO

1.

マックワー (MacWhirr) 船長は想像力の欠けた平凡な男であるが、シナ海上で台風に遭遇しながらも南山号 (the *Nan-Shan*) を指揮し中国人苦力^{クーラー}200人を福州まで運ぶという非凡な偉業を成し遂げる。複雑で難解な作品が多いコンラッドの正典の中では珍しく、『台風』 (*Typhoon*, 1902) はその単純さ故に賞賛されてきた。しかし、主人公マックワー船長の人物像は謎であり、彼が英雄的な人物なのかそれともただ単に愚鈍なのかという点について批評家の意見は分かれている。主流の批評家たちは、平凡ではあるが義務に忠実な船乗りたちの姿勢を賛美し、台風の目に向かって直進する船長の勇気と決断を英雄的なものとして称えてきた。¹ 例えば、リーヴィス (F.R. Leavis) は、船乗りたちの平凡さに「英雄的な崇高さ」 (“heroic sublimity”) を見出している。² 反対に、船長が戯画化されていることも指摘されてきた。モーザー (Thomas Moser) は、コンラッドがマックワー船長のような善良で単純なheroの存在を信じていないから、彼をからかっているのだと指摘している。³ イアン・ワット (Ian Watt) もマックワーが喜劇的に描かれていると考え、リーヴィスが賞賛する船乗りたちの平凡さはむしろユーモラスに扱われていると主張している。⁴ 一応はマックワー船長を英雄視しているゲラルド (Albert Guerard) でさえ、船長の性格描写に軽蔑の調子が伺えることも指摘しており、マックワーのような複雑でもなければ知的でもない人物をコンラッドがどこまで称賛しているのか、あるいは果たして称賛しているのかと疑問を投げかけている。⁵

船長の平凡さに対するリーヴィスとワットの正反対の評価を見てもわかる通り、船長が英雄なのか愚者なのかを判断することが難しいのは、彼が想像力が欠如しているために時にはただの愚か者にも見えるが、想像力が欠如しているからこそ果敢に台風に立ち向かっていくとも言えるからである。このことから最近では、『台風』は複雑な作品として見直されつつある。⁶ foolでもheroでもある船長は、

¹ 例えば、Albert Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1969) 295. Leo Gurko, *Joseph Conrad: Giant in Exile* (London: Frederick Muller Limited, 1965) 101. Douglas Hewitt, *Conrad: A Reassessment* (Cambridge: Bowes & Bowes, 1952) 112. Thomas Moser, *Achievement and Decline* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1957) 13.

² F.R. Leavis, *The Great Tradition* (1948; Harmondsworth: Penguin, 1986) 213.

³ Moser, 19.

⁴ Ian Watt, *Essays on Conrad* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000) 97.

⁵ Guerard, 297.

⁶ 例えば、Ted Billy, *A Wilderness of Words: Closure and Disclosure in Conrad's Short Fiction*

極限状況に置かれた人間の普遍的な姿を象徴しているとよく言われる。この場合、台風という極限状況に向かって自ら突き進んで行き、そこから脱出する船長は、“a token and promise of the continued presence of humanity”と見なされる。⁷ また、周りの人間には愚かだと思われていたマックワーこそ実は真の知恵者だという解釈も成り立つだろう。⁸ しかし、「あちこちの熱帯植民地で数年働いたあげく、福建州の故郷の村に帰る途中の苦力200人」⁹ を台風にも負けず「条約港」福州まで運ぶマックワー船長は帝国主義の先兵として英雄でなければならなかったはずだ。ところが、船長はもしかしたら愚者かもしれない。英雄主義と愚行を表裏一体のものとして描こうとする姿勢には、帝国に対するコンラッドの批判的な認識が伺えないだろうか。『台風』は、英雄的な主人公が活躍する典型的な海の物語の体裁を取っているだけに、そのような帝国批判の要素が看過されがちである。¹⁰ そこで、本論では、マックワーの人物像の曖昧さをもう一度詳細に検討し直すことによって、『台風』にも『闇の奥』 (*Heart of Darkness*) や『ロード・ジム』 (*Lord Jim*) から『ノストロモ』 (*Nostromo*) に至る難解な作品群と通低する問題意識が隠されていることを確認したい。

2.

マックワー船長は、「何でも文字通りに受け取る」たちで(22)、彼の「意識には事実しか映らない」(14)。船長には、「その日その日と一日を捌く分だけで、それ以上の想像力は持ち合せがない」(4)。冒頭で語り手は、船長の表情にはしっかりしたところ (firmness)、あるいは愚かさ (stupidity) を示すような目立った特徴はないと断っている(3)。通常、物語の語り手は主人公の際立った特徴を記述することを考えると、このような主人公の紹介の仕方には、船長が果たしてしっかり者か愚か者かという問題 (“firmness or stupidity”) に対する語り手のこだわりが伺える。語り手がこのように屈折した仕方で主人公の人物像に注意を喚起しているように、船長が愚か者か否かは実際容易には判別しがたい問題なのだが、語り手が船長を愚かな人物として描こうとしていると思われる箇所がテキストには多く散見され、ワットのように『台風』を喜劇として読もうとする批評家はそのような箇所を根拠に船長が戯画化されているとしてきた。ここではまず、船長の想像力の欠如という特質が「愚鈍さ」 (stupidity) の表れとしていかに具体的に特徴付けられているかを、少々長くなるが以下の引用で詳細に見ておきたい。

『ロード・ジム』のジム (Jim) との類似がよく指摘される一等航海士ジュークス (Jukes) は、船長とは反対に想像力旺盛で、現実を直視しない傾向がある。以下の場面は、対照的な2人の間で意志疎通がうまくはかかれていない様子がコミカルに描かれている。南山号を発注したシャム (Siam) のシ

(Texas: Texas University Press, 1997) 92-105.

⁷ Christof Wegelin, “MacWhirr and the Testimony of the Human Voice,” *Conradiana* 7 (1975): 45.

⁸ Watt, 110.

⁹ Joseph Conrad, *Typhoon and Other Tales* (Oxford: Oxford University Press, 1986) 6. 以下引用はすべてこの版から行い、ページ数を括弧内に記す。

¹⁰ 最近の論考にはもちろん帝国の問題を読み取ろうとするものがないわけではない。例えば、Joseph Kolupke, “Elephants, Empires and Blind Men: A Reading of the Figurative Language in Conrad’s *Typhoon*,” ed. Keith Carabine, *Joseph Conrad: Critical Assessments*, vol. III (Robertsbridge: Helm Information, 1992) 501-12. Paul Kirschner, introduction. *Typhoon and Other Stories*. by Joseph Conrad (Harmondsworth: Penguin, 1990) 3-35. しかし、結局は船長のクーリーへの対処に「良識」と「公平さ」を見出している点で本論とは趣旨を異にする。

グ父子商会 (Messrs. Sigg and Son) は、船籍を英国からシヤムへ変更する。これに対してジュークスは「まるで個人的に侮辱されたように」憤慨し(9)、仕事を辞めるとまで言い出す。新しい国旗が南山号の船尾に翻った最初の日、ジュークスはブリッジに立って口惜しげに見上げると、しばらく自分の感情と闘ったあげく、船長に以下のように言う。

“Queer flag for a man to sail under, sir.”

“What’s the matter with the flag?” inquired Captain MacWhirr. “Seems all right to me,” And he walked across to the end of the bridge to have a good look.

“Well, it looks queer to me,” burst out Jukes, greatly exasperated, and flung off the bridge.

Captain MacWhirr was amazed at these manners. After a while he stepped quietly into the chart-room, and opened his International Signal Code-book at the plate where the flags of all the nations are correctly figured in gaudy rows. He ran his finger over them, and when he came to Siam he contemplated with great attention the red field and the white elephant. Nothing could be more simple; but to make sure he brought the book out on the bridge for the purpose of comparing the coloured drawing with the real thing at the flagstaff astern. When next Jukes, who was carrying on the duty that day with a sort of suppressed fierceness, happened on the bridge, his commander observed:

“There’s nothing amiss with that flag.”

“Isn’t there?” mumbled Jukes, falling on his knees before a deck-locker and jerking therefrom viciously a spare lead-line.

“No. I looked up the book. Length twice the breadth and the elephant exactly in the middle. I thought the people ashore would know how to make the local flag. Stands to reason. You were wrong, Jukes....”

“Well, sir,” began Jukes, getting up excitedly, “all I can say”— He fumbled for the end of the coil of line with trembling hands. “That’s all right.” Captain MacWhirr soothed him, sitting heavily on a little canvas folding-stool he greatly affected. “All you have to do is to take care they don’t hoist the elephant upside-down before they get quite used to it.”

Jukes flung the new lead-line over on the fore-deck with a loud “Here you are, bo’ss’en—don’t forget to wet it thoroughly,” and turned with immense resolution towards his commander; but Captain MacWhirr spread his elbows on the bridge-rail comfortably.

“Because it would be, I suppose, understood as a signal of distress,” he went on. “What do you think? That elephant there, I take it, stands for something in the nature of the Union Jack in the flag....”

“Does it!” yelled Jukes, so that every head on the *Nan-Shan*’s decks looked towards the bridge. Then he sighed, and with sudden resignation: “It would certainly be a dam’ distressful sight,” he said, meekly. (10-1)

ここでのマックワー船長の言動の一つ一つは彼の想像力の欠如という点からすべて説明でき、船長の「愚鈍さ」の表れとして笑いを誘う。船長は旗がおかしいというジュークスの言葉を文字通りに受け取り、本当に旗に何か「異常」があると勘違いして、ブリッジの端までわざわざ歩いて行って旗を「しげしげと」見ている。「業を煮やした」ジュークスがふてくされたようにブリッジから飛び降りても尚、船長はジュークスのそのような態度の意味を理解するどころか、「呆気に取られている」。船長は慌てることもなく、「しばらくしてそっと」国際信号書でシャム国旗を探し、図柄に間違いがないかと「懸命に」眺めている。さらに今度は信号書をブリッジに持って上がり実物と図版を見比べて確認した上で、なんとか怒りを抑えていたジュークスに追い討ちをかけるように、またしても「異常はない」と繰り返す。ジュークスが、「そうですか」と言いつつも、いらだっていることは、彼が測鉛索を「乱暴に」引きずり出していることに伺えるだろう。しかし、そうとは想像もしない船長は、旗に異常がないということを事実即してしつこく説明しようとする。「長さが幅の2倍、象がぴったり中央にくる」という船長の説明は、彼の「何でも文字通りに受け取る」「事実には忠実な」性格を表している滑稽である。船長によれば、間違っているのはシャム国旗でもそれを作っただ元の人でもなく、ジュークスである。これにはジュークスも弁解を試みようとするが、船長はそれすら聞こうとせず、象を逆さにして旗を掲げたりしないようにという滑稽な命令を大真面目で発し、さらにジュークスを滅入らせる。たまりかねたジュークスは「とことん思いつめた様子で」船長に弁解しようとするが、船長は問題がもう解決したとばかりに、「いいんだよ」とジュークスをなぐさめ、くつろいで悦に入っただ様子である。さらに、船長はのうのうと滑稽な命令の理由を説明した上で、シャム国旗とユニオン・ジャックの図柄を同等に見なす発言をして、象の印の入った国旗を掲げさせられるくらいなら仕事を辞めるとまで言っていたジュークスを驚かせる。しかし、ジュークスは船長に理解してもらうことを諦め、おとなしく命令に従おうとする。船長には最後までジュークスがなぜ憤慨しているのかわからないままである。

3.

以下の一節で語り手は、想像力が欠如したこのような人物が果たして船長としてふさわしいのかと疑問を呈している。

Observing the steady fall of the barometer, Captain MacWhirr thought, "There's some dirty weather knocking about." This is precisely what he thought. He had had an experience of moderately dirty weather—the term dirty as applied to the weather implying only moderate discomfort to the seaman. Had he been informed by an indisputable authority that the end of the world was to be finally accomplished by a catastrophic disturbance of the atmosphere, he would have assimilated the information under the simple idea of dirty weather, and no other, because he had no experience of cataclysms, and belief does not necessarily imply comprehension. The wisdom of his country had pronounced by means of an Act of Parliament that before he could be considered as fit to take charge of a ship he should be able to answer certain simple questions on the subject of circular storms such as hurricanes, cyclones, typhoons; and apparently he had answered them, since

he was now in command of the *Nan-Shan* in the China seas during the season of typhoons. But if he had answered he remembered nothing of it. (20)

「計器の優秀性、季節、船の地球上での位置、と考えると、この気圧低下は不吉な兆しである」(6)と語り手は冒頭で意味ありげに読者に知らせていた。しかし、船長は気圧計の下降を単に時化がうろついているとしかとらえない。たとえある状況についての経験がなくても、想像することはできるだろう。ジムはその意味でマックワーとは対照的な人物である。若いジムは、経験未熟でも、いやむしろ経験未熟であるが故に現実から目を背け理想を追い求めて生きようとする。コンラッドは『ロード・ジム』で、そんなジムの共感と反感の入り混じった眼差しで見守っていた。船長には大天変地異の経験がないから理解できないという単純な説明は、理解できない船長を弁護しているものではあるまい。想像力を働かせてみようとしないう船長を語り手は完全にからかっている。「絶対最高の権威者」「とてつもない異常気象」「この世の終わり」といった大げさな表現は、単純な概念化が難しく、実際経験するより想像するしかないものばかりである。つまり、想像するしかないものに関しても、船長はこれを「単なる時化という概念」でしか把握できない。語り手の皮肉はこのように想像力の欠けた人物にわざわざ「国会制定法によって」船長の資格を与えた「彼の母国」英国にも向けられる。船長は何も覚えていないのだから、嵐に関する質問にちゃんと答えられる知力が彼にあるのかはあやしい。しかし、現に今彼が台風の時期にシナ海で南山号を指揮しているという「事実」を根拠に船長が質問に答えられたのだろうと語り手は判断している。このような短絡的な言い方は、事実には忠実なマックワーの態度を真似ている。国旗のエピソードでも確認したように、語り手は「事実」に忠実なマックワーの姿勢を笑っていたのだから、現に今マックワーが船長であるという「事実」を判断の根拠にすることに価値を認めていないはずだ。つまり、語り手はマックワーのような「愚鈍な」人物が船長として適任かどうか疑わしいし、それを適任とした彼の「母国」の判断も賢明とは言えないと考えているのである。

語り手が船長の想像力の欠如を「愚鈍さ」として笑い飛ばしていても、彼の母国が「国会制定法によって」マックワーには船長の資格があると判断しているということは、マックワーの想像力の欠如は英国的な「知恵」によると擁護できるということである。確かに、船長の言動の背後にある想像力の欠如とは、ホートン(W.E.Houghton)が以下に挙げているヴィクトリア朝英国人の姿勢——“anti-intellectualism”——として言い直すことができよう。

A practical bent of mind, deep respect for facts, pragmatic skill in the adaptation of means to ends, a ready appeal to common sense—and therefore, negatively, an indifference to abstract speculation and imaginative perception—have always been characteristic of the English people. What distinguishes the Victorians is that conditions of life in their period tended to increase this bias, and thus anti-intellectualism a conspicuous attitude of the time.¹¹

¹¹ W.E.Houghton, *The Victorian Frame of Mind 1830-1870* (New Haven: Yale University Press, 1957) 110.

船長はここに挙げられている英国的な特質によって、台風の日への直進を決め、通過し、台風の最中のクーリーたちの暴動にも冷静に対処し、結果として目的地に到達するのだと言える。まず、この点を整理しておこう。

南山号が掲げる国旗の変換に我慢ならず仕事を辞めると言うジュークスとは対照的に、船長は国旗の変換という事態に現実的に対処している。東洋人に対する「人種的優越感」 (“racial superiority”) (13)から、ユニオン・ジャックがシヤム国旗の「玩具箱の象みみたいなつまらない絵」(9)よりも絶対的に優れた意味を持つと考えるジュークスは、南山号がシヤム国旗を掲げてしまうと大英帝国とシヤムの間の優劣の関係が逆転してしまうとも言わんばかりに、“Queer flag for a man to sail under, sir”と船長に訴えている。一方、船長にとって旗は、ジュークスのように愛国心を投影するものではなく、単に海の上の出来事を意味する信号でしかない。皆が慣れるまで象の印を逆さにして旗を揚げたりしないようにという船長の指示は、船内の秩序維持を重視していると考えられるし、また、遭難信号と間違われて海の世界の秩序を乱さないためとも考えられる。感情的になってふてくされているジュークスとは対照的に、船長の態度には船乗りとしての良識が伺えるし、職務には忠実であるという点からは評価される。既に船が出発してしまっている以上、船がどこの国籍になろうとも、雇い主であるシグがそれを便利だと判断したのなら(しかも、雇い主はシヤムの商社である)、わざわざ大騒ぎして国旗の変換に異議を唱えることは賢明だろうか。そもそも、船長は口数が少なく、雇い主の指図に「文句をつけたりしないことが確実な」人物(9)であったから船長として雇われたのである。

台風の日に向かって直進するという判断にも、事実には忠実な船長の姿勢が表れている。暴風に対処する際に書物は頼りにならないと船長は何度もジュークスに言っている。船長にとって書物は、「言葉と忠告の洪水だが、全部頭の中だけの推理で、確実な事実の片鱗すらうかがえない」もので、彼はそれに「軽蔑をこめた怒りを覚えるだけ」である(33)。「手荒い嵐をうまく出し抜く」方法(35)を教えるウィルソン船長(Captain Wilson)の「嵐に対する作戦」 (“storm strategy”) (34)も、ジュークスの提案も退け、船長は船を直進させる。船長は頭の中で考えるのではなく、ただ黙々と台風に向かって直進し目的地に到達する。言葉や理論ではなく実践で示すのである。暴風で船の装備が次々と吹き飛ばされ、ジュークスが騒ぎ立てても船長は仕方ないと言うだけで少しも動じない。「何が起きようとも絶対おじげづかず」 (“Don't you be put out by anything”)、「真っ向から立ち向かえ」 (“Keep her facing it... Facing it—always facing it—that's the way to get through. You are a young sailor. Face it. That's enough for any man. Keep a cool head.”) という船長のアドバイスにジュークスはすっかり励まされ、「胸の鼓動が高まるのを感じ」、「自信がどっと沸き上がるのを感じる」。船長の言葉はジュークスを「何が起きようとも自分はやれるぞという気にしてくれるのだった」(89)。臆病で暴風の轟きにすっかり震え上がっているジュークスと対比され、船長の「指揮官の威信、権限、重荷」(39)が印象付けられている。ジュークスは、船長がただ甲板に姿を現しただけで、「強風の重圧のほとんどを、両の肩で受けとめてくれた」(39)という思いで救われた気になっている。

いよいよ南山号が危ないという時も、船の揺れによって散らかった部屋の中で、「我々をだらだらと堂々巡りの生活に縛りつけている、すべての些細な慣習のシンボル」(85)であるマッチ箱を所定の位置に戻すという「秩序感」 (“fitness of things”) を船長は失わない(85)。船長の秩序感を示す最も良

い例が銀貨の分配であろう。台風の目に接近して揺れがますますひどくなると、船艙では中国人クーリーたちの騒ぎが起こる。彼らの所持品の入った手箱が壊れて銀貨が散乱したため、彼らは銀貨を取り戻そうとして取っ組み合いを始める。「たとえ5分で沈むとわかっていても私の船でそのようなこと(銀貨を巡る中国人たちの乱闘)があってはいけない」(88)と言う船長は、散乱した銀貨をすべて回収してくるようジュークスに命じる。ジュークスは本格的な暴風の到来に乗じてクーリーたちが銀貨を取り戻しに来ることを恐れている(“They will fly at our throats, sir. Don't forget, sir, she isn't a British ship now. These brutes know it well, too. The damned Siamese flag.” (82-3))。ジュークスは銃を持ち出し武力でクーリーの騒ぎを治めようとするが、船長はジュークスに銃を仕舞わせ、クーリーから回収した銀貨を数えるのを手伝うよう命じる。船長は中国人に対して「公平に接する」こと(“Do what's fair”) (94)をモットーに、回収した銀貨を全員に均等に分配して船に秩序を取り戻す。クーリーへの冷静な対処と、台風を通過して彼らを福州に送り届けるという結果を伴った任務の遂行によって、船員たちから馬鹿にされていた船長は、「あの抜け作親爺にしては今度の事件なかなか見事に切り抜けたものだ」(102)と再評価されるのである。

4.

船長の想像力の欠如は、このように英国的な「知恵」では擁護できるが、語り手は先ほど引いた一節で英国的な「知恵」自体を皮肉っていた。この章では、以下に船長の言動に伺える微妙なニュアンスを探っていくことで、語り手がなぜ英国的な「知恵」に批判的であるかを考えてみたい。

国旗の件でジュークスが仕事を辞めると言った時、機関長のソロモン・ラウト(Solomon Rout)は、「せっかく良い職場なのに」と「わきまえ顔で咳払い」している(10)。ラウトは後で、「優しい伯父が興奮した小学生の言葉に耳を貸してやる感じで」、本当に辞表を出したのかとジュークスをからかっている。賢者ソロモンと同じ名前でも、「学者じみた細長い手」(11)をしているラウトの言動を「知恵」と結びつけることを語り手が暗示しているとするならば、ラウトの言葉は経験を積んだ大人の実践的な処世術を体現していて、ジュークスの態度は「小学生のように」子供じみてると解釈することは可能だろう。船長はジュークスと違って国旗を理由に船長という職を放棄しようとするほど愚かではない。ラウトのように南山号が「良い職場」であることをわかまえる「知恵」を幾らかは持ち合わせているようだ。船長のこのような態度は先ほど確認したように、船乗りの常識に照らして現実的な対処と呼ぶことができるが、金銭的な問題と無縁ではないという意味でも現実的だ。彼には本国に維持しなければならない家庭がある。本国で彼が維持していかなければならない資産は事細かに書き込まれている。船長は、「出窓の前にささやかな庭があり、奥行き深い立派なポーチがついて、玄関の扉には模造鉛のフレームに色ガラスがはめ込んである」ロンドン近郊の家の家賃として年に45ポンド払っている(14)。マックワー夫人は夫からの手紙を「家賃45ポンドの我が家の客間」で「ピロード底、金塗りのハンモック椅子」(93)に寝そべりながら読む。そこでは、「地元の宝石店で3ポンド18シリング6ペンスの正札がついていた黒大理石の時計」(94)が時を刻み、夫人の傍らには「タイル張りの暖炉」があり、「火床には石炭の火があかあかと燃え、炉棚には日本の扇子の数々」(93)が置かれている。手紙を読みながら夫人は、「こんなによい給料をもらっているのは初めてだというのに」(94)、夫がどうして家に帰ることばかり考えるのかと不思議がっている。船長は、これらの財産をまもり、本国での

生活を維持せねばならないという現実的な配慮から「シャム国旗がおかしい」というジュークスの訴えに取り合わずに事を穏便に処理しようとしたのではないか。台風に向って直進するという船長の判断も、勇敢であるように描かれてはいたが、台風を迂回すれば余計に石炭代がかかるという計算の下になされたものでもある (“Three hundred extra miles to the distance, and a pretty coal bill to show.” (33))。¹²

しかもこの決断は「人種的優越感」とも無縁ではない。船長が中国人に対して「公平に」接しなければならぬということは何度も繰り返していること(81,82,94,99)、そして、何よりもあからさまに「人種的優越感」を漂わせているジュークスとの対比で、船長があたかも中国人に対して「公平」だと判断している批評家が多い。ゲラールが銀貨の分配という行為に “the quiet heroism of ‘fairness’” を見出しているように、¹³ 船長がクーリーの騒ぎを治め結局船を窮地から救い出すという結末によって、ほとんどの批評家は「愚かな」船長像を修正せざるを得ないようだ。しかし、次の一節を見る限り、船長が中国人のことを「公平に」扱っているどころか、そもそも彼らのことを気遣っているかどうかさえ極めて疑わしくなってくる。あまりに船が揺れるのでたまりかねたジュークスが、船艙に閉じ込められた中国人を「気遣って」進路変更を提案した時、船長は「中国人を楽にしてやるために」進路を変更するなど、「これまで聞いたこともないような突拍子もない話」(34)として退け、台風の目に向かって直進することを告げている。

“Swell getting worse, sir.”

“Noticed that in here,” muttered Captain MacWhirr. “Anything wrong?”

Jukes, inwardly disconcerted by the seriousness of the eyes looking at him over the top of the book, produced an embarrassed grin.

“Rolling like old boots,” he said, sheepishly.

“Aye! Very heavy—very heavy. What do you want?”

At this Jukes lost his footing and began to flounder. “I was thinking of our passengers,” he said, in the manner of a man clutching at a straw.

“Passengers?” wondered the Captain, gravely. “What passengers?”

“Why, the Chinamen, sir,” explained Jukes, very sick of this conversation.

“The Chinamen! Why don’t you speak plainly? Couldn’t tell what you meant. Never heard a lot of coolies spoken of as passengers before. Passengers, indeed! What’s come to you?”

Captain MacWhirr, closing the book on his forefinger, lowered his arm and looked completely mystified. “Why are you thinking of the Chinamen, Mr. Jukes?” he inquired. (30-1)

ジュークスは船の揺れがひどいということに何とか船長の注意を喚起しようとしている。船長もそ

¹² Robert Foulke, “From the Center to the Dangerous Hemisphere: *Heart of Darkness* and *Typhoon*,” *Conrad’s Literary Career*, eds. Keith Carabine, Owen Knowles and Wieslaw Krajka (Boulder: East European Monographs, 1992) 142.

¹³ Guerard, 297.

の事実に気付いてはいる。しかし、その「どこが問題なのか」がわからないのである。国旗のエピソードの場合と同じように、想像力の欠如からジュークスの意図を理解できない船長の姿は確かに滑稽だろう。あるいは、“Anything wrong?” や “What do you want?” という返事を、激しい揺れにも動じない船長の「勇敢さ」の表れと解釈することも可能だろう。しかし、ここでは、対照的な二人の間での相互理解の失敗を、ユーモラスなものとして読んだり、勇敢さの神話に回収したりするだけで十分ではない。というのも、船長の想像力の欠如はクーリーの問題と絡められているからだ。リーヴィスのように想像力の欠けた船長の凡庸さを英雄視する読みや、反対にワットのようにそれがユーモラスに描かれているとする読みで説明し切れないのは、こういう場面である。「うねりがひどい」ということを、“Rolling like old boots” と表現しているように、ジュークスは「物をはっきり言わず」、「言葉の綾」(25)を使う傾向がある。一方、船長は「何でも文字通りに受け取るたち」で、ジュークスが「言葉の綾」を用いるのを他の場面でも諷めている。ここで、ゲラールその他の批評家のように、ジュークスの言う「乗客」を文字通りに解釈することは、船長と同じ勘違いをすることにならないだろうか。¹⁴ ジュークスが、クーリーたちを「野獣」(“brute”) と見なしていることについては既に触れた(83)。クーリーが発する「人間の言葉らしからぬ、しわがれ声のわめくような不可解な雑音」を聞くと、ジュークスはまるで「獣が演説を試みているような不思議な思い」がする(80)。また、彼は船が無事に目的地に到着しても尚、クーリーたちが船酔いで意気沮喪していなかったら、自分たちは「ずたずたに引き裂かれていたことは間違いない」と確信している(97)。このようなジュークスがクーリーを「乗客」だと思ってそう呼んでいるとは考えられない(「お荷物」の意であろう)。乗客に対するジュークスの「気遣い」とは、この揺れの中、船艙に閉じ込められたクーリーたちの不満が爆発して騒ぎが起きるのではないかという心配に違いない。しかし、船乗りとしてこのような心配は臆病さの表れとして受け取られかねない。ジュークスが「藁にも縋るような思いで」クーリーを遠まわしに「乗客」と呼んだのは、激しさを増す暴風と得体の知れない力を秘めたクーリーに対する恐怖に押しつぶされそうになりながらも、自分の弱さを隠しつつ船長にクーリーに対する懸念を理解させるためだったのではないか。しかし、文字通りジュークスが中国人を「乗客」扱いしようとしていると勘違いしている船長は、逆にジュークスが恐怖心を抱いていることを暴露させるような質問を次々と投げかけている。それ故ジュークスは会話にうんざりしているのである。ここで想像力の欠如からジュークスの用いる「言葉の綾」を理解できない船長を笑うことも可能だろう。しかし、船長の言葉は同時に、彼もまたジュークスと同じようにクーリーを「乗客」とは見なしていないということをはっきりと示している。「どうかしたのか」「どうして中国人のことを考える気になったのだ」という問いかけには、確かにジュークスの意図を理解できない船長の想像力の欠如がユーモラスに表わされているとも取れるが、それは、船長の側に中国人に対する配慮が全くないことの証明でもある。船長が racist と呼ばれる所以である。¹⁵

このように、船長の想像力の欠如は金銭欲や「人種の優越感」と表裏一体なのである。この時、“Had to do what’s fair, for all—they are only Chinamen. Give them the same chance with ourselves.” (88)という船長

¹⁴ Guerard や Kirschner は、クーリーに対するジュークスの「気遣い」を善意から出たもの、人道的なものとして解釈している。Guerard, 297. Kirschner, 8. または、Kolpuke, 505-6 参照。

¹⁵ Kolpuke, 506.

の言葉から、ワッツ (Cedric Watts) のように、船長が「フェア・プレイの精神」に則ってクーリーを“fellow-humans”として「公平に」扱っていると見ることはもはやできないだろう。¹⁶ 確かに、船長が船を直進させることを決めた後に、「戦いに備えた完全装備」(37)のために合羽を取ろうと手を伸ばした彼の姿勢が、「フェンシングの突き」に喩えられている (“He threw himself into the attitude of a lunging fencer”(36))。また、暴風という「敵」とたった一人で対決する戦士としてもその「男らしさ」が強調されている (“He was trying to see, with that watchful manner of a seaman who stares into the wind’s eye as if into the eye of an adversary, to penetrate the hidden intention and guess the aim and force of the thrust.” (40))。フェンシングやボクシングは、一対一で相手と対決し、スポーツ精神が十分に発揮される種目であった。ヴィクトリア時代において、男らしさを強調するスポーツ精神と愛国的な感情は切り離せない。帝国主義のスポーツに関わる面と軍事面は、人々に訴えかける極めて強力な基盤だったのである。¹⁷ 『台風』に刻み込まれている歴史的事項も、帝国の軍事面を喚起している。南山号が向かっている条約港福州は、アヘン戦争後の南京条約によって、英国が中国に自由貿易を強制するために開港させた港である。ジュークスが言うように、シナ海上では「領事」もいなければ、「母国の砲艦一隻いるわけでもない」から南山号上でクーリーたちが暴れても助けの求めどころがないが、福州に行けば南山号は、「軍艦の大砲がにらみを利かせてさえいれば安全」なのである(98)。南京条約の結果に満足しなかったイギリスは、さらなる市場開放を目論んでアロー戦争を仕掛ける。アヘン戦争からアロー戦争にいたるイギリスの対清国外交は、軍事力の勝利によって不平等条約を押し付けて、中国市場への権益を拡大したのである。船長の一連の行動の裏にある想像力の欠如が、語り手には金銭欲や「人種的優越感」と切り離せないものとして愚かしく見えてしまうのは、船長の一見“fair”な銀の分配という行為の裏に、実際は unfair な通商条約に基づき武力でもって展開された大英帝国の経済的侵略が透けて見えてしまうからではないのだろうか。

しかし、既に触れたように、船長を愚鈍な人物だと見なしていた批評家も、クーリーへの対処を評価し彼を見直している。台風を通過して目的地に到着するという大団円がもたらすカタルシスも手伝って、帝国に批判的な要素は見出しにくいものとなっている。ここで注意しなければならないのは、銀貨の分配という行為が、impartial であるはずの全知の語り手によって報告されるのではなく、手紙の中でジュークスによって報告されることである。

『台風』における手紙の効用は、単に全知の語り手によって語られる出来事に個人的なパースペクティヴを提供することや、陸上での生活と海上での生活を対比することだとされることが多い。¹⁸ しかし、注意してみると、語り手は、船長がどういう人物かを最もはっきりさせねばならない肝心のところで、船長の評価を登場人物たちの手紙における記述に委ねている。まず語り手は、第1章冒頭で主人公の風貌をコミカルに描いた後、気圧が低下し台風が接近しているということをそれとなく暗示

¹⁶ Cedric Watts, introduction, *Typhoon and Other Tales*, by Joseph Conrad (Oxford: Oxford University Press, 1986) viii.

¹⁷ 富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』(東京: 青土社, 1993) 192-211, 270-87, 290-306, 308-24.

¹⁸ Jacob Lothe, *Conrad's Narrative Method* (Oxford: Oxford University Press, 1989) 106. Ted Billy, *A Wilderness of Words: Closure and Disclosure in Conrad's Short Fiction* (Texas: Texas University Press, 1997) 94.

している。その後、語り手は国旗のエピソードの場合のように乗組員同士のやりとりにおいて彼らの人物像を順に紹介していく。しかし、第1章の終わりで全知全能の語り手は再び姿を潜め、各登場人物が家族や友人と交わす手紙の中で船長の印象を語る。ラウトは妻への手紙において、「とことん鈍い阿呆船長でも、悪党を船長に持つよりはいい」と述べ、「今は大西洋の定期船の二等航海士」をしている「旧友でかつて同じ船に乗り組んだ仲間」(16)に宛てた手紙の中でジュークスは、「どこか間違っても、鈍いから気がつかないんじゃないか」(17)と船長を馬鹿にしている。これらは、船長が「愚鈍な」人物だとする評価である。我々読者には早くから台風の接近が知らされているわけだから、このような「愚鈍な」船長が、これからやって来る台風という試練に果たして耐えうる人物なのかというサスペンスが生じる。¹⁹

ところが、読者、そしてもちろん乗組員の不安をよそに、このような船長が指揮する南山号は台風を通過して目的地にたどり着く。台風に向って直進し、暴風と闘いながらそれを克服する船長が勇敢な船乗りとして描かれていたことについては既に触れた通りである。そうすると、物語の最後において語り手は、台風を通過するという偉業をなし得た後の主人公と、その行為が偉大であったのかどうかについて論評せねばならないはずだ。しかし、語り手は自らの言葉でそれを語ろうとしない。再び登場人物たちの手紙の中で、船長に対する評価をさせているのである。ソロモンは妻への手紙において、“That captain of the ship he is in— a rather simple man ... has done something rather clever” (96) と述べ、ジュークスは、かつての仲間への手紙において、“I think that he got out of it very well for such a stupid man” (102) と述べている。そして、ジュークスのこの「意見」(18)が『台風』という物語を締め括る。コンラッドが最後の最後で、船長の“fair”な行動を、全知全能の語り手ではなく作中の一個人であるジュークス——「人種的優越感」で歪んだ視点しか持たない人物——に語らせることによって、“fair”という言葉の意味は、船乗りの仲間が共有するコンテキストに封じ込められる。

船長の手紙は、「宛先の女性より、(船長付きの)給仕の方がずっとおもしろがっている」ようで、給仕は、雑用の合間に機会を逃さず盗み読みしている(14)。ところが妻には夫の手紙は退屈で、理解できるはずもない(“She couldn't be really expected to understand all these ship affairs.” (93))。同じく妻には「とてもわかるまい」という理由で、船長の偉業についての真実をラウトが省略したことに対して、ラウトの妻は、“How provoking! He doesn't say what it is. Says I couldn't understand how much there was in it. Fancy! What could it be so very clever? What a wretched man not to tell us!” (96)と陽気に不平を述べている。『台風』の場合このように喜劇的であるにしても、本国で待つ女性に船乗りたちの仕事の意義が伝えられないという状況は、『闇の奥』のエンディングでのマーロウ(Marlow)とクルツ(Kurtz)の婚約者の対面を思い出させる。マーロウはクルツの最後の言葉を正確にクルツの婚約者に伝えなかった。これはStrausが指摘するように、「真実/秘密」の共有から女性が排除されているということなのだろうか。²⁰ 知り合いの婦人に夫の近況を尋ねられた船長の妻はありきたりの礼を述べた後で、夫が「まるで身体の養生のためにシナ海回りをしているとでもいう感じ」で、「(夫には)あちらの気候が合うんですよ」と答えている(95-6)。彼女たちは、確かに夫の仕事の意義が理解できず、また夫を英雄視

¹⁹ Lothe, 106.

²⁰ Nina Pelikan Straus, “The Exclusion of the Intended from Secret Sharing,” *Joseph Conrad, New Casebooks Ser. ed. Elaine Jordan* (London: Macmillan, 1996) 50.

する価値観も持っていない。しかも、そのことすら彼女たちは意識していない。彼女たちは自分たちの無知、無理解に対して無意識だが、語り手はそうではない。語り手は、船長の一見“fair”な行動のunfairnessを見抜いているからこそ、彼の行為を賢明だと判断できなければ完全に英雄視することもできないし、そのことを強く意識している。語り手のこの認識が、その背後に潜む作者コンラッドの認識にかなり近いものであることは容易に推測できる。しかし、作者はその語り手にも船長の仕事の意義について最終的なコメントをさせていない。“What could it be so very clever?”というソロモンの妻の素朴な疑問に、船長の偉業の意義に対する作者自身の疑問を重ねてみるならば、そこには複雑に屈折した回路を通して表明された作者の認識が表明されていると解釈することができるのではないだろうか。そして、それは、「男たちが昔から使い古してきた言葉など、形だけで意味は薄れたすりきれ物にすぎない」(15)と言って、最終的に船乗りたちの言葉で説明させることで船長の実体を「フェア・プレイ」を演じる英雄像に回収しようとする作者の言語観と決して無関係ではないのである。

5.

『台風』が初めて世に出た時、批評家たちは、マックワーに「はっきりとした象徴的な意図」を読み込み、『台風』を「慎重な意図に基づく嵐の物語」として読もうとした。しかし、コンラッドは序文の中で、そのどちらも特に自分の意図するところではなく、“it would be vain to discourse about what I made of it in a handful of pages, since the pages themselves are here, between the covers of this volume, to speak for themselves”と述べている。この言い方には、自らの作品をページ数が記された印刷本、市場に出回る商品としても意識していたことが滲み出ている。同じ序文において、“it was but a bit of a sea yarn after all”と述べている通り、コンラッド自身は『台風』を単純な海の物語として読ませようとしたようだ。²¹ これには、『台風』が、文学代理業者ピンカー(J.B.Pinker)との初めての仕事であり、しかも、掲載された雑誌が大衆に迎合する傾向が強かったペル・メル・マガジン(*Pall Mall Magazine*)であったことが大きく関係しているだろう。²² しかし、一見帝国の価値を称揚しているだけに見える『台風』にも、『闇の奥』に通じる帝国批判の要素が見出された。この物語のタイトルが、船長の「公平な分配」と銀貨を巡るクーリーたちの乱闘に焦点を当てているように思われる“Equitable Division”から“Skittish Cargo”を経て結局一見ニュートラルな“Typhoon”に落ち着いたという経緯は、²³ 帝国の称揚と批判の間でのコンラッドの葛藤を物語っているのかもしれない。しかし、コンラッドは、『台風』においても西欧列強による非西欧世界に対する経済的侵略という問題をしっかりと見据えていたのであり、次の『ノストロモ』では、さらにそれを英国人チャールズ・グールド(Charles Gould)の「物質的利益」に対する執着として展開させ追究していくのである。

²¹ Joseph Conrad, Author's Note, *Typhoon and Other Stories* (Harmondsworth: Penguin, 1990) 50.

²² Lawrence Graver, *Conrad's Short Fiction* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1969) 91-4.

²³ Joseph Conrad, Letter to Edward Garnett, 21 or 28 Feb. 1899. Letter to David Meldrum 3 Jan 1900, *The Collected Letters of Joseph Conrad*, eds. Frederick R. Karl and Laurence Davies, vol. 2 (Cambridge: Cambridge UP, 1986-) 169, 237.

参考文献

- 尾形勇・岸本美緒編 『中国史』 山川出版社 (2002)
- 富山太佳夫 『シャーロック・ホームズの世紀末』 青土社 (1993)
- 東田雅博 『大英帝国のアジア・イメージ』 ミネルヴァ書房 (1996)
- E.J.ホブズボーム 野口建彦・野口照子共訳 『帝国の時代1875-1914』 みすず書房 (1993)
- 吉田徹夫 『ジョウゼフ・コンラッドの世界——翼の折れた鳥』 開文社 (1980)
- Billy, Ted. *A Wilderness of Words: Closure and Disclosure in Conrad's Short Fiction*. Texas: Texas University Press, 1997.
- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1988.
- Conrad, Joseph. *Typhoon and Other Tales*. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- _____, Author's Note. *Typhoon and Other Stories* (Harmondsworth: Penguin, 1990) 49-52.
- _____, "To Edward Garnett." 21 or 28 Feb. 1899. "To David Meldrum." 3 Jan 1900. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Eds. Frederick R. Karl and Laurence Davies. Vol. 2. Cambridge: Cambridge UP, 1986-. 169, 237.
- Foulke, Robert. "From the Center to the Dangerous Hemisphere: *Heart of Darkness* and *Typhoon*." *Conrad's Literary Career*. Eds. Keith Carabine, Owen Knowles and Wieslaw Krajka. Boulder: East European Monographs, 1992. 127-51.
- Graver, Lawrence. *Conrad's Short Fiction*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1969.
- Green, Martin. *Dreams of Adventure, Deeds of Empire*. New York: Basic Book, Inc., Publishers, 1979.
- Gurko, Leo. *Joseph Conrad: Giant in Exile*. London: Frederick Muller Limited, 1965.
- Hewitt, Douglas. *Conrad: A Reassessment*. Cambridge: Bowes & Bowes, 1952.
- Houghton, W. E. *The Victorian Frame of Mind 1830-1870*. New Haven: Yale University Press, 1957.
- Kirschner, Paul. Introduction. *Typhoon and Other Stories*. By Joseph Conrad. Harmondsworth: Penguin, 1990. 3-31.
- Kolupke, Joseph. "Elephants, Empires and Blind Men: A Reading of the Figurative Language in Conrad's *Typhoon*." *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol.3. Robertsbridge: Helm Information, 1992. 501-12. 4 vols.
- Leavis, F.R. *The Great Tradition*. 1948; Harmondsworth: Penguin, 1986.
- Lothe, Jacob. *Conrad's Narrative Method*. Oxford: Oxford University Press, 1989.
- Michie, A. "The Yellow Peril." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. 164(1898) 877-90.
- Moser, Thomas. *Achievement and Decline*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1957.
- Porter, Andrew., ed. *The Oxford History of the British Empire: The Nineteenth Century*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Straus, Nina Pelikan. "The Exclusion of the Intended from Secret Sharing." *Joseph Conrad*. New Casebooks Ser.

Ed. Elaine Jordan. London: Macmillan, 1996. 48-66.

Watt, Ian. *Essays on Conrad*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.

Watts, Cedric. Introduction. *Typhoon and Other Tales*. By Joseph Conrad. Oxford: Oxford University Press, 1986. vii-xx.

Wegelin, Christof. "MacWhirr and the Testimony of the Human Voice." *Conradiana* 7 (1975): 45-50.

White, Andrea. *Joseph Conrad and the Adventure Tradition: Constructing and Deconstructing the Imperial Subject*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.

Abstract

Unlike most of Conrad's major works that have provoked interpretive arguments, *Typhoon* (1902) has been uniformly praised as a masterpiece of clarity and simplicity. However, critics disagree about its hero, Captain MacWhirr. MacWhirr lacks imagination, but the same lack of imagination enables him steer straight into the eye of a typhoon and come out of it with all his crew and two hundred Chinese coolies. The question of the captain's character is puzzling, for he is presented both as a hero and a fool. He is frequently regarded as an absurd fool embodying the universal wisdom of humanity. However, we can find Conrad's implicit criticism against imperialism in the captain's characterization, because it seems to suggest that heroic adventure and folly are two sides of the same coin.

Typhoon appears to be a typical sea story of the Victorian period that celebrates an unqualified kind of heroism, so that anti-imperialistic aspects of the story have often been neglected. However, considering the relationship between the British Empire and China after the Anglo-Chinese wars, we can surmise that the ambiguity of the captain's characterization reflects Conrad's complex attitude toward the Western economic invasion of non-Western countries. With its focus on the British pursuit of "material interests," *Typhoon* anticipates *Nostromo* (1904) and thus we would argue that it must be seen as a story no less complex than other stories in the Conrad canon.

シュトルムの短篇小説『遅咲きの薔薇』における トリスタン・モティーフについて

The Tristan-Motif in Theodor Storm's Novella *Späte Rosen*

深見 茂

Shigeru FUKAMI

序

以下の小論は、テオドール・シュトルム Theodor Storm (1817-1888) の短篇小説『遅咲きの薔薇』(1859)¹ におけるトリスタン・モティーフの意味の考察を通じて、この作品の解釈に資することを目的とするものである。はじめにその梗概を述べてみよう。

バルト海沿岸の町に立派な邸宅を構える友人を、語り手の「私」が二十年ぶりに訪問し、しばらく滞在する。その際、十二歳の長女と三歳になる次女の二人の娘に恵まれて暮らす友人が、妻の娘時代の肖像画を飾ってみたりして、結婚生活久しいはずの中年の妻に対し、異常な情熱を示すことを奇異に感じた「私」は、思い切ってその訳を尋ねる。それに対し、友人が語る夫婦の今日までの生活史の描写が、この本論使用のテキストにして12ページ弱に過ぎない短篇小説の主な物語なのだが、その内容が取り立てて異様なものというわけでもない。

すなわち、結婚当初、事業の蹉跌と新たに興した汽船会社経営に伴う困難のため、妻をも事業に巻き込んでのビジネス一色の生活に明け暮れる。そんな折、長女が生まれて間もないころ、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク Gottfried von Straßburg (十二世紀後半誕生、十三世紀初め頃まで生存) の著した未完の中世宮廷叙事詩『トリスタンとイゾルデ』 *Tristan und Isolde* (1210年頃) を手にする。この実業家も実は若い頃はドイツ古典作品に打ち込んでいた文学青年であったのである。それに引き替え、「私」は商売大好きな少年であったのに、今は逆に学問研究の道に入りこんでしまっていた。さてその折、友人の目の前で展開される物語の描写は、媚薬を飲んで互いにおのが情熱に身を任せる恋人たちの場面であった。この純然たる性愛の世界に魅せられた友人は、突如として妻の美と魅力とに目醒めたという。しかし、その瞬間は幼女が目覚めての泣き声に妨げられて去ってしまった。そして数年が過ぎて、今から三年前、次女が生まれた頃、事業もようやく順調に発展し

て余裕も出来、屋敷の改造、庭園の拡張等も実現したころ、友人は再び古典文学に目を向ける。そして昨年六月、おのれの四十歳の誕生日の早朝、友人は前夜に再び読んだ『トリスタンとイゾルデ』の場面に未だ陶然と魅せられたままである。それはシュトラースブルクの断片最後の部分、すなわち、追放されたトリスタンとイゾルデとが荒野の隠れ家で営む、鹿と性愛とのみを狩り求めるという、つまり食することをのぞけば、ひたすら愛欲三昧にふける生活の描写であった。その余韻に浸りつつ、朝の静けさの中、書齋に入った友人は、机上に一人の美少女の肖像画が飾られているのを発見する。それは妻の娘時代のものであったが、友人はここで妻への愛欲を蘇らせ、「かくて僕も中世ミネの愛の世界の盃から飲むことができたのだ。深く、したたかな一飲みを。余りに遅く——しかし、決して遅過ぎるということは無かったのだ！」(SW, S.437)

いかがであろうか。これを取えて一言で評することが許されるならば、傑作なのか駄作なのかよく判らない、不思議な作品としか言いようがない。ともかくこういう小説なのであって、要領を得ないのは必ずしも論者による要約の不手際のせいばかりではないのである。当然、研究史においても、シュトルム解明の鍵の一つと目されるような作品としての位置づけを得ることもないままに今日に到っている。しかしながら、さりとは他方、研究者たちには、この小品を無碍に無視し去ることも許されぬ事情があった。それは作者シュトルム自身が後年、この短篇をもっていわば自己の芸術的自立のメルクマールとなる諸作品の一つに数え入れているからである。すなわち 1868 年 1 月 21 日、ハルトムートおよびラウラ・ブリンクマン夫妻 Hartmuth und Laura Brinkmann に宛てた書簡のなかで『インメン湖』*Immensee* [1849]、『城にて』*Im Schloß* [1862]、『大学時代』*Auf der Universität* [1862]、『遅咲きの薔薇』[1860 上梓] 等々といった作品は、私でなければ書けないものです² と明言しているのである。更に言葉を続けて彼は、これらの作品が「すべて、至るところ完全に写実主義的特徴を備えながら、しかも全体の仕上がりは美と理想を描こうとの衝動に貫かれています³と自賛している。彼でなければ書けない、従って彼の作風確立過程の標識となるべきものだ、と聞かされてもまず誰もが納得できる最初の三作品と並べて、この『遅咲きの薔薇』もが四番目に名指しされていることはたとい不思議には思えても、やはり研究者としては無視できぬところであろう。

そこで注目されたのが、この小説の中心テーマである性愛賛美を支えているトリスタン・モチーフであった。この作品研究史は従って、トリスタン・モチーフ評価史であると申しても差し支えないほどである。そこで本論も、このモチーフの受容史を追うことによって、作品解釈の道を辿ってみたいと思うのである。

1

第一の受容段階：完全無視（フォンターネ・レベル）

まず、この作品に接した現代読者の多くに起っても不思議のない現象であるが、一体なんのために

トリスタン伝説が現れるのか全く理解できない、との受容レベルである。あるいは、全く記憶にも残らなかった、という現代読者もあるかも知れない。せいぜいで、余り見栄えのせぬ筋書きに色を添える単なる点景物程度にしか認識しない読者も多かろう。

面白いことに、実は、残っている一番最初の、従って最古の受容証言が、そのレベルなのであった。しかも、その証言を残したのが、シュトルムの友人で十九世紀ドイツ文学を代表する大家の一人であるテーオドル・フォンターネ Theodor Fontane (1819-1898)であったものだから、この事実はその後の作品評価にかなり影響したと思われる。すなわち彼は 1859 年 5 月 15 日、パウル・ハイゼ Paul Heyse (1830-1914) あての書簡の中で、主宰していた文芸誌『アルゴ』 Argo 第 5 巻の準備に関連して、「更にシュトルムが一篇の短篇 [これが『遅咲きの薔薇』であり、事実、『アルゴ』1860 年号に掲載された] を送って来ました。分量にしておよそ 9 段ないし 10 段分を占めるでしょう」⁴ と述べたのち、同月 19 日の別の書簡では、同じくハイゼに宛て、ベルリンにおける『アルゴ』同人集会の夕べについて報告して、次のように述べているのである。

昨晚 [それゆえ 5 月 18 日の晩と推定される] の我々の「リュートリ」例会 [「リュートリ」とは 11 人のメンバーからなるクラブで、「シュブレー河上のトンネル」という 1827 年創設の文化人クラブ傘下の別派。雑誌『アルゴ』の同人クラブ。シュトルムはその客分であった] について御報告しなければならない。シュトルムの短篇小説『遅咲きの薔薇』が朗読された。素材は次のごときものである。一人の商人が魅力的な妻を持っていながら、それに気付かず暮らしている。仕事にかまけて頓馬にも、愛も、情欲も、官能も、まともに感じられなかった、という訳だ。なるほど二人も娘がおり、一人は既に十二歳になっているのだが、一体どうして彼らが生まれてきたのか自分でも判らない。一切は、なにか知らぬ間に起こったという次第。だが、ようやく仕事の煩いも、まるで歯痛のように治まった。ほっと一息吐くと彼は、妻のために小さな日本風四阿なんぞを建ててやったりする。かくて彼は四十に達し、明日は誕生日というわけだ。早朝起きだしてきて、かはたれどきの薄明りのなか、家の中をござごそ歩き回り、すでに彼に捧げるために飾り付けられた誕生祝いの部屋の中に、一枚の魅惑的な油絵を見付ける。——それは妻の少女時代の肖像画、彼が結婚した当時のままの妻の肖像画であった。そこで彼は溜息とともに初めておのれが十三年ないし十五年のあいだ、間抜けにも全く鈍感であったことを悟る。しかし、「過ちを改むるにはばかりることなかれ」と考え、俺は十五年前には美しい妻を持っていたのだった、との意識を抱いて夫婦生活に励み、ないがしろにして来たことを取り戻そうと努め始めたという。だから——『遅咲きの薔薇』という訳だ。実際の状況は、私が今ここで叙述しているよりももっと酷かったよ。なにしろシュトルムが朗読しながらしょっちゅうブルブルガタガタ震えるものだから、話はなにかひどく深刻な様相を帯び始めちまってさ。⁵

これはもはや明確に作品そのものに対する全面的否定の評論であろう。まず第一に、十二歳の女の子、

さらには三歳の同じく女の子がいるということは、この十五年間、けっこう継続的にしつこくやるんじゃないか。それを今初めて性愛に目覚めるとは合点がいかぬ、というフォンターネの気持が、「なるほど二人も娘がおり、一人は既に十二歳になっているのだが、一体どうして彼らが生まれてきたのか自分でも判らない。一切は、なにか知らぬ間に起こったという次第」という言葉の中に、強い皮肉のニュアンスを添えられて滲みでている。次に我々の最大関心事であるトリスタン・モティーフにいたっては、「つまらぬエピソードなんぞを挿入しやがって」といった評言でもあれば未だしも救われるのだが、フォンターネは一顧だにしようとしな。というより、本章のはじめに少し触れたごとく、おそらく意識にも残らなかったであろう。せっかくトリスタンとイゾルデの愛の物語を挿入したシュトルムの苦心も水の泡というところである。

ただ最後に、この物語を朗読するシュトルムが、なぜか異常に興奮して絶えず震えていたことを鋭く観察していたことには注目を要する。「話はなにかひどく深刻な様相を帯び始めちまってさ」と同人が感ずるほど、この小説には特別の思い入れがシュトルムにはあるらしいことを、フォンターネは直観していたのであろう。一体それは何であったのだろうか。つまらぬ小品のようでありながら、不思議な作品と研究者に見られるにいたった所以である。更にこれに加えて、現代読者ならばおそらく、なぜトリスタン・モティーフのようなものが、さなくとも短い作品の相当量を占めて挿入されねばならぬのか奇異に感じるであろう。かくて、特別重要らしい不思議な作品、という印象と、奇異なエピソードの挿入との印象とが相俟って、トリスタン・モティーフに研究者の注目が引き付けられることとなったものと思われる。

II

第二の受容段階：反面教師として（ジャクソン・レベル）

こうして 1985 年にたってようやくこのモティーフに一定の評価を与える論文が、デーヴィッド・ジャクソン David Jackson によって書かれた。『テオドール・シュトルムの『遅咲きの薔薇』*Theodor Storm's Späte Rosen*⁶』という 8 ページほどのこの論文のなかから、我々の関心事にテーマを限って、その趣旨を要約するならば、中世紀においては完全な愛は夢想に過ぎず、それが現実化すれば、必然的に不倫の愛となってしまう。しかるに近代ブルジョア社会において完全な愛を貫こうとする時、そうした問題はなんの摩擦もなく克服され実現し得るのだ、とでもなるうか。だから、この小説の主人公が全うし得た愛の、いわば反対現象として中世紀の悲恋が持ち出されているということとなる。直接引用により、もう少し具体的にジャクソンの言葉に耳を傾けて見よう。

ゴットフリート [フォン・シュトラースブルク] の時代においては、およそ恋人たちが避難所を見付けられるような場所など存在しなかった。彼らの短い至福の時は——それはマルケ王の恩寵と寛容のおかげなのだが——荒野という「非現実の」、「大自然の」世界においてしか与えられ

得ないのである。他方、現代の結婚はかかる至福の時を、シュトルムの信ずるところによれば、安全で快適な物質的枠組みの内部において永久に保障し得るというのである。資本主義は現代のトリスタンとイゾルデに、きわめて「現実的」パラダイスを創造せしむることを可能ならしむるのである、と。⁷

たしかに、そののちの1992年、『テオドール・シュトルム。一民主主義的ヒューマニストの生涯と作品』⁸なる表題の評伝を著した学者らしい見解ではあるが、いかにも皮相的である。トリスタン・モチーフがこの短篇のなかで占める如何にも不自然な、そして不思議な位置の説明としては不満が残る。

III

第三の受容段階：性愛賛美の手段として（シュースター・レベル）

そこで登場したのが、1998年出版のイングリット・シュースター Ingrid Schuster のシュトルム論集中の一篇、『地獄と天国の狭間の愛：文学作品の引用と投影』 *Liebe zwischen Hölle und Himmel: Literarische Zitate und Spiegelungen*⁹における、『遅咲きの薔薇』でのトリスタン・モチーフ解釈である。

今回は、はじめから直接シュースターの言葉を引用してその趣旨を聞こう。すなわち、彼女の主張によれば、この作品でシュトルムが意図したことは、「性的願望と欲情を詩的に取り扱い、芸術的ヴェールを被せ、もって正当化し、同時代の読者に受容可能なかたちに仕立て上げる」¹⁰ ことであったという。そこで「シュトルムは、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの叙事詩『トリスタンとイゾルデ』を暗示したり、そこからの引用を用いたりすることにより、日常と義務との無味乾燥な世界に、愛と文学の世界を対峙せしめようと試みたのである。」¹¹ つまり、ジャクソン・レベルの場合のように主人公の愛と対立する反対例としてではなく、まさに主人公の愛を弁護し、これを十九世紀市民階級の常識的・道徳世界にあっても受け入れ可能なものとするための手段として用いたのだ、という事にでもなろうか。

では、その試みは成功したであろうか。上記の説を主張したシュースター本人も、残念ながらそれについては、やはり否定的である。

シュトルムは、この小説で文学作品からの引用を、極めて素朴な仕方です挿入してしまっている。すなわち、主人公は、かねてから愛好していたある本を読み、そこに広がる文学的かつ性愛的ムードに捉えられる。しかし、日常性のほうが依然なお強力である。[第一回目の欲情は、赤ん坊の泣き声でさまたげられたことを指す。]何年かの後、再読した時、はじめて彼は自分の人生を一変させることとなる。シュトルムの読者は、読書の持つこの効果を信ずるよりない。この「い

にしえの魔法の書」をたとい熟知している読者でも、その効果を迫体験して納得することはほとんど出来ない。トリスタンとイゾルデとが互いに感じた、あのみちならぬ思いや、愛欲生活へのわずかばかりの暗示など、性愛に目覚めさせられるためのモチベーションとしては如何に不十分なものでしかないか、は、フォンターネの反応〔フォンターネ・レベルの章で引用したハイゼへの書簡を指す〕が証明している——彼はこの問題には一顧だに与えていないではないか。¹²

という事となる。その結果、

『遅咲きの薔薇』においては、読書経験が語られることによっても、対応する世界像が生き生きと姿を見せることはない。トリスタンとイゾルデについての報告は文学的な説得力を欠き、アリバイ機能〔つまり自らの意志とかわりなく、欲情の世界へと引き入れられて行く力。娯楽的機能のことを意味しているのであろう〕さえ果たせていない。そこで働いている機能は、せいぜいで引用した著者〔ゴットフリート〕に対する敬意の表明と、この引用を知っており、その文脈に溶け込める教養を身に付けている読者に対する表敬くらいのものである。¹³

かくて性愛受容促進剤としてのトリスタン・モチーフ援用説のシュースターでさえも、その効用については未熟なものと断ぜざるを得ぬこととなっている。実は、この作品で未熟ながら始まったシュトルムにおける、文学作品の引用ないし投影手法が、以後の作品（『海の彼方より』（1864）*Von Jenseit des Meeres* など）においてそれなりに上達、発展してゆくことを論じたのが、シュースターのこの論文の趣旨なので、我々の作品において未成熟である、とされるのは、コンテクストの上から当然なのではあるのだが、それにしても、『海の彼方より』などではなく、この『遅咲きの薔薇』をこそおのれの芸術様式完成の見本の一つと作者が自負する作品にしては、このように低く評価されてしまうのはどうしてであろうか。

管見によれば、第一のフォンターネ・レベルは、朗読者の絶え間ない震えに現れた心理状態という、全く次元の異なる現象から直観的に予感していたにもかかわらず、第二のジャクソン・レベルも、第三のシュースター・レベルも、トリスタン・モチーフに本質的に内在する、ある中核的要素を、それが故意にか、無意識にかはともかくとして、見過ごしてきたからである、と考えられる。そして、それを明確に指示しようと試みたのが、

IV

第四の受容段階：不倫モチーフとして（コバタケ・レベル）

として本論の論述構成上、ここに規定し、挿入し得ると思われる一篇の小エッセーである。それは、2002年、『遅咲きの薔薇』考¹⁴と題して発表されたものであるが、そこで小島は、まず語り手である婦

国した人物は「友人 [=主人公ルードルフ] から聞かされる話をそのまま受け取る以外にない存在に描かれ」¹⁵ ていることを強調する。つまり、主人公が語る内容の真偽を吟味する能力のない人物としての語り手を強調することによって小島は、まさにその内容の真実さに大きな疑問を提起しようとしているのである。次に、主人公ルードルフの妻について小島は、「若いころは、かなり積極的な性格に描かれているが、粹部分の語り手である「僕」の見ている夫人は控えめでつつまじやかである。あまりに異っているように思われる」ことに注目する。そして最後に小島は主人公ルードルフに注意を移し、①彼は、ゴットフリートの『トリスタン』をひもといたのが、今十二歳になっている長女が生まれて半年位の頃であったと語っているが、「しかし、ここでなぜ作者は決った相手 [マルケ王] のある女性を愛する事になる『トリスタン』を選んだのであろうか」¹⁶ と、この箇所へきて一気に作品内在解釈を突き破り「作者」、すなわちシュトルム自身の意図を忖度し、②更に、ルードルフは「40歳の誕生日の前夜またトリスタンに触れたことを物語る」¹⁷ けれども、じつにその物語の場面の内容たるや、トリスタンとイゾルデの二人が、「不義ゆえに追放され荒野へ逃がれる [という個所な] のである」¹⁸ と、小島は指摘する。そして結論として、こう纏める。

上記のように、ここに登場する人物を探って行くと、長女が半年になるやならずのときから、次女が生まれるまでの8～9年の間に、また40歳の誕生日の朝までの3年間に何があったのだろうかと疑問にかられるのである。多少大胆な推測を働かせるならば、『トリスタン』を読み始めたとする時期に、情熱的な愛情を捧げる相手がルードルフの前に現れた。ルードルフが旧友に話していない妻の間には重大な夫婦間の危機があったのではないか。そのことを、ルードルフは『トリスタン』に託して、20年ぶりに再開 [sic/=会] した友人に語っているのではないかと考えるのである。¹⁹

そして、この物語で語られていることは「すべてルードルフが脚色した話であると示唆」²⁰ する論拠として小島は、この物語が語られている場面が、「さながら芝居の書き割りのようである」と聞き手の「私」が述べる感想を指摘してエッセーを結んでいる。

つまり、トリスタン・モティーフの出現は、主人公の過去に、伏せられた不倫行為があったことを示す合図である、という訳である。こんなことを主張されても、シュトルムという作家に関し全く白紙の読者ならば、証拠もないのに何をばかばかしい勘繰りを、との思いしか抱き得ないであろうし、また、それが当然の反応である。しかしながら小島は、ここで研究者には周知の、シュトルムの不倫事件を念頭において、トリスタン・モティーフの作品外在解釈の道へ踏み出すことによってこの短篇の分析を行い、以て一つの評価を打ち出す方法を提起しているのである。これは、方法論的には必ずしも純粋ではない混濁的道筋ではあろうが、以下の最終章において少しばかりその道を辿ることを試みてみよう。

V

第五の受容段階：抑圧と代償の合図として（本論レベル）

(1) ドロテア事件：

シュトルムは新婚早々、妻よりも三歳下、自分よりも九歳年下の女性と情交関係にはいる。この間の事情を日本人最初のシュトルム評伝と称して差し支えない一冊の著書の叙述を借りて追ってみよう。それは、宮内芳明著『シュトルム研究』²¹（1993）である。この評伝の大きな特徴は、徹底したフィールドワークを実施することにより、およそシュトルムが地理的に滞在しないし旅した一切の地点と軌跡とを忠実に跡付けるという方法により、作品ないし書簡に現れた場面の空間的地理的追体験を叙述の基礎に据えようとした点であろう。さて、この書の22ページ以下にこう書かれている。

ドロテアの出現

好事魔多し。シュトルムの楽しい新婚生活には間もなくひびが入ることになる。またまたシュトルムの前に美少女が現われたのである〔「またまた」とはとりわけシュトルムが学生時代、熱愛したベルタ・フォン・ブーハン Bertha von Buchan、またはエンマ・キュール Emma Kühl を指している〕。それは五年前に会ったことのあるドロテア・イェンゼン [Dorothea Jensen] である。その頃十三歳だった少女はもう初々しい十八歳の娘になっていて、シュトルム合唱団で歌っていた。またもや女性合唱団員である〔同書18ページで宮内が「文学青年であるシュトルムは、シュトルム合唱団でアルトを歌うこのまだ少女じみたコンスタンツェ [のちのシュトルムの最初の妻] に、同い年のベルタ [上記参照] の面影を感じとったのである」と記しているのを参照〕。

シュトルムはコンスタンツェとやつのことで新婚生活に入ったが、やはり彼女のクールな性格が物足らなかった。その様な時に、はつらつとした若いドロテアはなんとなくシュトルムの気を引いたのである。ドロテアはタクトを振る若い弁護士先生 [=シュトルム] に熱をあげ始める。シュトルムも彼女のひたむきなまなざしに気付き、悪からぬ気分となり、やがて二人は恋のとりことなる。フーズム市議員イェンゼン家の未婚の娘と法律事務所の新婚の若先生との仲はたちまち町中の話題となり、コンスタンツェの耳にも入る。コンスタンツェは反 [sic!=半] 狂乱になって離婚しても不思議ではない。七年目の浮気ではない。二年目の浮気である。新妻にとっては重大な事件だったはずである。しかしクールな彼女はじっと耐え、遂にドロテアを呼んで、二人だけで冷静に話し合う。そこで彼女はドロテアに「お友達としてこの家で一緒に暮らしましょうよ」と提案したのである。これは驚くべき話である。まさに妻妾同居を本妻が提案したのである。もちろんドロテアはそれに同意するはずはない。翌一八四八年二月にドロテアは他の町で家政婦をすることになり、フーズムを出て行った。

妻コンスタンツェの誠に寛大な裁量によって事件は一応解決し、シュトルムも救われたのであ

るが、シュトルムはそれでもドロテアのことを忘れられず、七年後の一八五五年に『アンゲリカ』というノヴェレ〔英語のノヴェラ。短篇小説のこと〕を発表して、自分の苦しい胸の内をさらけ出す。そしてコンスタンツェが死んでから一年後の一八六六年、シュトルム四十九歳の時に、まだ未婚のままシュトルムへの恋心をずっと持ち続けていたドロテアと結婚したのである。²²

[……]

事情をやや単純化した部分も無きにしもあらずながら、こういう評言が許されるならば、要領よく且つ面白く叙述されていると言えよう。説明を少し補足すれば、ここでも触れられているように、ドロテアは極めて情熱的なタイプで、ひたすら己れの恋にのみ生きる少女であり、事実その後、一切の縁談を退けて十数年後、上記のように遂にシュトルムの妻となったのである。また、シュトルムは合唱活動に非常に熱心で、自らも美しいテノールの声をしていただけでなく、行く先々で、合唱団を結成してその育成に力を尽くした。しかし合唱団指揮者と女性合唱団員、というのは、洋の東西を問わず問題を起こすものらしい。論者の周りにも以前、悪名高きコンダクターが一人ならぬいた。

それはともかく、我々のテーマにとって重要な補足は、実は、この「妻妾同居を本妻が提案したのである。もちろンドロテアはそれに同意するはずはない。翌一八四八年二月にドロテアは他の町へ家政婦をすることになり、フーズムを出て行った」という個所には根本的な事実誤認がある、と最近の研究が主張しているという点である。すなわち、シュースター・レベルで紹介した、イングリート・シュースターの論文がそれなのだが、彼女は、「ドーリス [=ドロテアの愛称]・イエンゼンが1848年以降、永きに亙ってフーズムを離れていた、との、繰り返し行なわれてきた主張は、さまざまの書簡個所によって否定される」²³ とし、「ドーリス・イエンゼンは1853年の秋——すなわちシュトルム一家がポツダムへ去るまで——ノイシュタット56番地 [=当時のシュトルム一家が住んでいた番地] に出入りしていた」²⁴ とした上、更には、1848年春、妊娠した妻コンスタンツェをゼーゲベルクにある妻の実家へ送り届けたのちフーズムへ引き返すシュトルムについてのゲルトルート・シュトルム（シュトルムの四女。家族ならではの手持ち資料によりシュトルム伝²⁵を著す）の証言を引用しながらこう断言している。

ゲルトルート・シュトルムの報告によれば、テーオドールはその夏、「一人で帰郷」したが、「彼の妻はさらに暫らく両親のもとに滞在した」という。これは誠に典型的な妻妾関係図である。なぜなら、彼方に妊娠中の妻を追い出しておき、家では夫とその情婦がたのしむ、というわけだからである。²⁶

なお、この説を補強するために、ここでどうしても触れておかねばならぬのが、さきの宮内論文からの引用中であつた、「遂にドロテアを呼んで、二人だけで冷静に話し合う。そこで彼女はドロテアに『お友達としてこの家で一緒に暮らしましょうよ』と提案したのである。これは驚くべき話で

ある。まさに妻妾同居を本妻が提案したのである。もちろんドロテアはそれに同意するはずはない。翌一八四八年二月にドロテアは他の町で家政婦をすることになり、フーズムを出て行った」とある個所の意味である。シュースターの主張が正しければ、一体このような虚偽の伝承はどこから発したものであろうか、が当然の疑問となろう。

これは、当初、ゲルトルートによって紹介され、後に、もっと正確に研究者によって書簡集のなかで全文提示された次の書簡に、おそらく依っているのではないかと思われる。すなわち、それは1866年4月21日、ハルトムートならびにラウラ・ブリンクマン夫妻にあてた、亡き妻コンスタンツェと、やがて妻に迎えようとしているドロテアの二人の女性への想いを告白した有名な書簡であり、その中でシュトルムは、こう述べているからである。(なお、この書簡は『遅咲きの薔薇』が、夫の、自分の不倫をバネとした、古女房への愛の再生の物語ではなかろうか、とのコバタケ・レベルにとって極めて重要な伝記的裏付けをなすものゆえ、参考のため、註第27番の下へ下記引用を含む関係箇所を全文引用しておく。)

帰還後の最初の夏、C. [=コンスタンツェ] は彼女 [=ドロテア] を私たちの家に招いておりました。それは彼女が私たちの家で暮らせないものか、を試みるためでした。しかし、ある晩ドロテアは泣きながら自分の部屋へ上がって行き、コンスタンツェが後を追いました。そして長時間二人だけで彼女の部屋に籠もっていました。それからコンスタンツェが私のところへ来て、彼女特有の愛情に満ちた素敵な柔和さをこめて言いました、「まだ駄目よ。辛抱強くしないと」。そして彼女 [ドロテアと推定される] は再び去ってしまいました。²⁷

しかしながら、この書簡の書かれた1866年から考えれば、「帰還後の最初の夏」とは、シュトルム一家が、ハイリゲンシュタットでの亡命生活に終止符を打ち、故郷の町フーズム地区の知事として「帰還した後の最初の夏」、すなわち1864年の夏のことを意味しているであろうことは明らかであって、彼の亡命前の1847年頃から1853年頃の間いずれかの滞在先または旅先からの「帰還」などとは到底考えられないのである。

いずれにせよ、本節において明らかにしておきたいことは、シュトルムは1848年ごろから少なくともポツダムへの亡命(1853)までの数年間にわたり、妻とドロテアという二人の女性と情を交わしていたとの疑いが極めて濃厚であるとの事実である。まさにイゾルデが、マルケ王とトリスタンという二人の男性と長年にわたり情交していた物語と重なるものであり、『遅咲きの薔薇』に不倫関係という事実の抑圧と代償、これを覗き見得るとするコバタケ・レベルの推論を補強するものであろう。端的に申せば、トリスタン・モティーフとは、妻の背後、または妻と並んで、常に今一人の女性の影を暗示するものであると考え得ることが、伝記的にははっきりした、ということではなかろうか。

(2) トリスタン・モティーフの実際

そこで次に、もっと具体的に、このトリスタン・モティーフが作品中に二度現れる時、それぞれどのような特徴を示しているかを吟味してみよう。

まず第一回目は、長女が生まれて半年ぐらいの頃、というから約11年半ほど昔のことである。主人公が読書をはじめ。場面は船上、幼い侍女の思い違いから、単なる葡萄酒であるとして出された媚薬を、二人が誤って飲んでしまう、あの有名な情景である。

「ためらいがちに飲んだ王妃は、心重くなり、

彼に手渡すと、彼も飲んだ」

さて、こうして古えの歌人の魔術が始まるんだ。すまいとしてもせざるを得ず、自由であると信じながら自由になることを恐れるという、このためらいと欲情のさまを僕たちは二人とともに体験する。止めどなく甘味な詩句が湧き出でて、その密やかに迫る調べで人の心をかき乱す。僕は麗しくも若き二人と一緒に船縁にもたれている様をありありと見る思いがした。二人は、密かに手を握りあいながら、それを見まいとして遥か沖合に目をやる。そして二人は互いに心の底まで相手への思いに酔い痴れておりながら、さりげなく他の話題を語るのだ、海のこと、霧のこと、風のこと、波のこと。――

[……]

トリスタンとイゾーテ [=イゾルデ] に対して今、仮借無きおのが掟を強いているこの別世界、歌人みずからも、作品の初めで述べているように、それと運命をともにすることを望んでいる、この愛の別世界のあることを、僕はいままで知らなかったのだ。(SW, S.432f.)

そこで主人公は目を妻に転ずる。

僕は書物から目を上げて妻を見やった。その頃はね、きみ、彼女の頬にはまだ青春の香が残っていた。[……] 彼女もまた、「愛の手毬」²⁸ であるイゾーテと全く変わらぬくらい美しいじゃないか。愛の盃などというのは単なる象徴であって、このような愛の狂気を生み出すのに、秘酒など実際には必要ないのではないか。(SW, S.433)

そして妻を抱きたいと思うが、赤子の泣き声で不発に終わる。

次に、第二回目は、今年の六月、主人公の四十歳の誕生日の前夜のこととなっている。場面は既に触れたように、これまた有名な、追放された二人の荒野での愛の生活の情景である。

恋の媚薬はその魔力を証したのだ。麗わしの王女イゾーテと王の甥トリスタンはもう別れることはできない。さしもの寛大な老王も遂に不倫の二人を追放した。しかし歌人は己れの高鳴る

胸を満足させるべく自らの愛児である二人の主人公を人里離れた荒野へと連れて行く。後を追うスパイもない。陽は輝き、草は薫る。途方も無い孤独のなかに居るのはただ彼女と彼のみ。二人をめぐってあるのはただ騒めく森と、目にはみえぬが空には小鳥たちの絶え間ないさえずり。二人は夕日を浴びて草原を歩み、玲瓏の泉の囁く場所へと赴く。二人はその菩提樹の木陰に座し、自分たちが夜を共に寝たあの岩屋のほうを振り返る。日の出とともに二人は露に濡れたヒースの原を騎行して狩りに出かける。弩をにぎり、馬をならべ、イゾーテは金髪をトリスタンの肩にまつわらせて。(SW., S.435)

誕生日の早朝、主人公は、昨夜読んだこの愛の世界に未だ陶醉したまま屋敷の庭をさ迷ったのち、祝いの部屋である自分の書斎に入って、例の妻の肖像画が飾られているのを目撃する。

——頭を少しそらし気味にし、輝くばかりの金髪は、今軽く後へ撫で付けられたばかりのよう。半ば開かれた唇には青春のさわやかな誇りが漂っていた。

僕は息をつめて立ち、じっとその麗しくも若々しきかんばせに見入っていた。自分が近くにいることを悟られてはならぬような気がしたのだ、不注意な吐息一つで一切が空中に霧散してしまうような気がしたのだよ。——この若々しく笑う眼差しが眺めている世界には春の太陽の光が一杯満ちているに違いない。僕は思わず頭を垂れた。彼女だ——彼女となら出来たに違いない、彼女とならあらゆる人の心が一度はみな憧れる、あの孤独の荒野へと僕だって逃れ行ったであろうものを——(SW., S.436)

そしてテラスで出会った妻の手をとり庭へおりてゆく。

そして白い朝着姿で、まるで少女のように僕と並んで歩きながら、妻が穏やかな目付きで僕を不審げに驚いたように眺めた時、そして彼女の手が軽やかに、任せ切ったように僕の手の中に置かれた時、僕は休えきれず彼女を求めてその前にひれ伏してしまったのだ。というのも、僕の命のすべての欲情が一時に目を覚まし、激しく止めがたく彼女めがけて迫って行ったからだ。(SW., S.437)

さて以上、いささかしつこいほどつぶさに引用して観察してきた第一回目、第二回目のトリスタン・モティーフの情景に我々は、ある共通した現象を見て取ることができる。すなわち、まず第一回目の場面においては、許されざる恋にも代える「麗しくも若き二人」を眼前にありありと見る思いに酔い痴れ、抑えがたい不倫の愛に狂う恋人たちにあこがれながら、現実に目の前にいる子持ちの妻を抱こうとしているのに対し、第二回目のトリスタン・モティーフにおいても、スパイも窺い寄らぬ荒野にあって、ひたすら愛欲のみに生きる恋人たちの姿を眼前に思い浮かべつつ、少女の肖像画の「麗し

くも若々しきかんばせ」への恋に目覚めながら、現実目の前にいる中年の妻の体を抱こうとしているのである。つまり、すべて妻の体一つに集中されてはいるが、その背後には、またはその傍らには「麗しくも若々しい」女性の体が常に前提として潜んでいるという構図である。かくて、これが第一節の伝記的構図におけるコンスタンツェとドロテアの関係と重なりあうものであることを、『遅咲きの薔薇』におけるトリスタン・モチーフの中に抑圧と代償の合図を追求しようとする我々の問題意識の立場から、ここで確認しておきたいと思うのである。

(3) 対概念世界の遍在

『遅咲きの薔薇』におけるトリスタン・モチーフの本質的機能は不倫の愛の合図であるとの見地を突き進めることにより、コンスタンツェの傍らに潜み立つドロテアの姿、中年の妻の姿の後に隠れ立つ「麗しくも若き二人」ないし「麗しくも若きかんばせ」、というシュトルムの世界の二重性を確認しながらここまで到った我々は今、忽然として、この短篇小説には、いくつかの反対概念ないし対をなす概念のペアを、従って二重性ないし背後世界を想起させるモチーフがちりばめられていることに思い至るのである。

すなわち、まず最初に、物語の導入部で聞き手の「私」が、あれほど文学好きの青年であった君が、どうしてまた算盤勘定の名手になってしまったのかと尋ねるのに対して、主人公である友人ルードルフがこのように答えている所にそれは出現する。

「イタリア式簿記法が」と彼はほほ笑みつつ答えた、「文学趣味への劇業になったのさ。尤もこの業が効くためには、自分の強い意志も必要だったけれどね。」(SW., S.428)

ここで言われている「イタリア式簿記法」とは、ヴェニスで発明されたとされる複式簿記のことである。今日あらゆる経済活動の基本をなしているこの方式は周知の通り、貸借の一方に記入された品目と数字とは必ず変容して他方にも出現して均衡をなすという、シンメトリーの世界像を前提として生まれた簿記法であり、ダヴィンチの『最後の晩餐』を引き合いに出すまでもなく、イタリア・ルネッサンスの世界観の産物であろう。従って、ここには二つの存在が変容を加えられつつ貸借のシンメトリーをなして出現し相対峙する世界に、主人公ルードルフがはまり込んで行くことが明確に暗示されていると言わなければなるまい。

次に、民族童話援用の暗示である。すなわち、主人公ルードルフは、妻が単に家庭内の問題のみならず、事業に関しても、いかに有能な助手であったかを讃えつつ、こう語っている。

かくて彼女は僕の妻になった。毎日僕が直面し、絶えず新しい課題を解決すべく僕に突き付けてくる生活の伴侶となってくれたのだ。あの頃はよく君に手紙を書いていたから憶えていると思うが、その時から以降、紛糾した問題が次々と解決されて行ったのさ。僕にはそれが彼女の手のお

かげのような気がしてならなかった。というのも、彼女は自分の立場から一切を適切に処理することを心得ていたからだ。彼女は、童話に出てくる黄金のマリーアのように、物言わぬ物象の言葉が判るみたいだった。通りすがりの樹々の中から、「揺すってちょうだい。私たちリンゴはみんなもう熟しているのよ！」と呼びかける声が聞こえたというあの娘みたいにさ。(SW, S.431)

この「黄金のマリーア」にまつわる物語の援用は、グリム童話集中の『ホレ小母さん』*Frau Holle* と、ベヒシュタイン Bechstein の童話集中の、『黄金のマリーアと黒マリーア』*Die Goldmaria und die Pechmaria*²⁹ とを混淆させて用いたものであるが、語らずしてここに、「黄金のマリーア」の背後に沈む不運な「黒マリーア」の存在が暗示されているのである。

そしてなによりも、「金髪のイゾーテ」のモチーフには、かの有名な「白き手のイゾルデ」の影が、言わずもがなの存在として読者に示唆されていることは明瞭であろう。

最後に、表題そのものを指摘しておこう。「遅咲き」(spät)の薔薇には、「早咲き」(früh ないし frisch)の薔薇が前提となるからである。更にこの「薔薇」そのものの線を、作品外在解釈に迄及んで追ってゆくと、もっとも重要な対立概念として注目されるものとして、あの少女の肖像画を囲む「豊かなツェンティフォーリエ種の赤薔薇の花輪」(eine Guirlande von vollen roten Zentifolien) (SW, S.436)が浮かび上がってくる。すなわち、美少女を囲む「赤薔薇」は当然「白薔薇」を想起せしめ、それは中年の妻の修飾語となるからである。その根拠は、シュトルムが、「赤薔薇」*Rote Rosen* なる詩で激情的愛を、「白薔薇」*Weißer Rosen* なる詩で、情熱的愛への懺悔の詩を歌っているからである。そしてこれらの詩は、そのいずれにも妻と愛人の両方の相が二重に潜りこませてあると考えられる複雑な構造を持ち、本来、これらの詩、およびそれに関連する一連の詩のツィクルスの紹介とその解釈をここに敷衍して論ずべきところであるが、本論で次第に明らかにしようとしてきた、シュトルム世界の二重性の指摘と、その抑圧と代償的顕現の実態という観点からは、作品論的に見て第二義的であるので、省略する。³⁰ いずれにせよ、我々はここで、「イタリア式簿記法(貸借対応のシンメトリー世界)」、「黄金のマリーア(黒マリーア)」、「金髪のイゾーテ(白き手のイゾルデ)」、「遅咲きの薔薇(早咲きの、若き薔薇)」、「赤薔薇(白薔薇)」といった合図の中に、シュトルムが周到に二人の女性の併存の暗示をちりばめていることを確認しなければなるまい。そして若い女性と中年の女性のイメージ、妻と愛人のイメージ、という二組のイメージが複雑に混在せしめられて見極め難くすらなっていることをも。

(4) 言説的特徴として

最後に一ヶ所だけ、この小説のなかで用いられている表現に注目し、その意味を吟味しておきたいと思う。すなわち、それは、肖像画に描かれている、かつて麗しく新鮮で若々しかった少女と、現在の中年の妻とが、実は同一の女性なのであることを忽然と悟り、妻への激しい欲情に目覚める場面の中である。

Sie, die das einst gewesen war ,sie lebte noch;[...] (SW., S.437)

かつてはこの様な姿で存在した彼女、
その彼女は未だ生きているのだ。

さて、時間は下って1866年4月21日、既に引用した、あの自分と妻とドロテアとの三角関係を詳細に告白した書簡のなかで、シュトルムは、こういう表現をしている。

Constanze ist todt. Sie lebt;³¹

コンスタンツェは死にました。
彼女は未だ生きています。

コンテキストを省略しているので判りにくいですが、後半で出てくる代名詞 *sie* とは、ドロテアのことである。だからここは「コンスタンツェは死にました（だからもはや存在しません）。しかしドロテアのほうは未だ生きているのです。」と訳せば完全に一義的文章となってしまうであろう。しかしながら、この文章を読み下すとき我々はふと、この *sie* とは、妻コンスタンツェのことなのか、と錯覚を起こす。否、錯覚を起こすように書かれているのである。だから「コンスタンツェは死にました。が彼女は未だ生きているのです」とも読まれることが期待されていると思われるのであり、従って我々もその期待を生かすように訳さねばなるまい。さらにこの書簡の文章解釈から、今度は逆上記の小説中の文章をも我々はあえて「かつてこの様だったあの彼女はもうおりません。しかし、この彼女はまだ生きているのです。」との意味をも読み込んで訳すことも可能となるのではなからうか。つまり、シュトルムの心理においては、コンスタンツェとドロテアとは対立かつ分裂しながら、しかも同時に渾然として一体であったと考えられるのである。

VI

結 語

一言で『遅咲きの薔薇』のファーベルを語れば、「一人の四十男の実業家が、久しくないがしろにしてきた古女房の性的魅力を見直した」というだけの物語となろう。しかし、そのような単純な筋書きの観点からさえも、恒常的に性交渉が前提でなければ生まれぬはずの二児の存在と、性的衝動の目覚めという根本的矛盾点は致命的に残る。そこを衝いたのがフォンターネ・レベルの評価であり、従って、この性的衝動と密着するトリスタン・モティーフは、完全に無視されてしまった。

しかしながら、他方、シュトルム自身は、この小説をもって、自己の芸術的様式完成の作品例の一つとしている。なぜか。

そこで、ジャクソン・レベルとシュースター・レベルなどの受容の試みが登場する。それは、トリスタン・モティーフの中に、或は階級や因習に縛られた不幸な愛の時代を、或はまた、古典文学からの引用というフィルターにかけられた性愛称揚の手法を、それぞれ見たものであった。

しかし、トリスタン・モティーフの要諦は、不義の愛への、また不倫の愛への甘味な陶醉ではないのか、という点に着目し、シュトルムの伝記的事実を脳裏に浮かべながら、この作品に一種の隠蔽と代償現象を見ようとする解釈が出始めた。コタバケ・レベルである。

こうした研究史の上に立って、本論レベルは、不十分ながらおよそ四つの方向から、この抑圧ないし隠蔽と代償の文学的表象に迫ろうとした。そこで浮かび上がって来たものはシュトルムの人生と文学に共通する、性愛の両面性ないし二重性であった。そしてその心理構造の特徴は、妻がありながら情婦を抱く、とか、若い女性を愛しておりながら妻を抱く、というのではなく、妻コンスタンツェの体を思い浮かべながら愛人ドロテアを抱き、妻を抱きながら若い女性の体を思い描くという、まさに男性の性的能力維持の要諦ともいえる大脳操作にあったのではないかと推測される。ここで、我々は、シュトルムがこの小説を朗読しながら震えていた、という異常な興奮状態の重要性を確実に捉えて記録した、フォンターネ・レベルの指摘に再び思いをいたし、シュトルムが自己の文学の芸術的様式の独自性の完成の例として『遅咲きの薔薇』をあえて挙げていることの意味とは、この抑圧と代償の美的形成、人間行為の重層性と多層性の様式化であったのではないかと、この仮説にいたった。これが本論レベルの現時点における受容段階であり到達点である。

使用テキスト：Theodor Storm, *Sämtliche Werke in vier Bänden*. Hrsg. von Karl Ernst Laage und Dieter Lohmeier. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main; Band 1: *Gedichte/Novellen 1848 – 1867*. Hrsg. von Dieter Lohmeier, 1987; S.427 – 438 (zitiert als: *SW*)

註

- 1) 使用テキストは上記。
- 2) *Theodor Storm – Hartmuth und Laura Brinkmann. Briefwechsel. Kritische Ausgabe*. In Verbindung mit der Theodor-Storm-Gesellschaft, hrsg. von August Stahl. Erich Schmidt Verlag, Berlin 1986, S.155.
- 3) Ebenda.
- 4) *SW*, S.1089.
- 5) Ebenda, S.1090.
- 6) David Jackson, *Theodor Storm's Späte Rosen*. In: *German Life and Letters* 38:3 (April

1985), pagina 197 — 204.

7) Ebenda, p.202.

8) David A. Jackson, *Theodor Storm. The Life and Works of a Democratic Humanitarian*. Berg, New York-Oxford 1992.

9) In: Ingrid Schuster, "Ich habe niemals eine Zeile geschrieben, wenn sie mir fern war" *Das Leben der Constanze Storm und vergleichende Studien zum Werk Theodor Storms*. Peter Lang, Bern/Berlin/Frankfurt a.M. usw., S.109 — 131.

10) Ebenda, S.112f.

11) Ebenda, S.111.

12) Ebenda, S.112.

13) Ebenda, S.121.

14) 小島泰 『遅咲きの薔薇』考。日本シュトルム協会会報 第39号・2002年4月。9—12ページ。

15) 同10ページ。

16) 同11ページ。

17) 同12ページ。

18) 同上。

19) 同上。

20) 同上。

21) 宮内芳明 シュトルム研究 郁文堂 東京 1993。

22) 同22ページ。

23) Schuster, a.a.O., S.39 (Anmerkung 116).

24) Ebenda.

25) Gertrud Storm, *Theodor Storm. Ein Bild seines Lebens*. 2 Bände. Verlag von Karl Curtius 1912/1913.

26) Schuster, a.a.O., S.41.

27) *Briefwechsel*, a.a.O. (=Anm.2), S.147. なお、ゲルトルートによる同所からの引用は、かなりオリジナルとずれている。文献学的に吟味すると、彼女の論述に不正確なところが多いことは研究者の間ではよく知られていることである。

さて以下は、この書簡のコンスタンツェとドロテーアの関係についてのシュトルムの告白部分の全訳である(S.145-147)。本論にとっても示唆に富み、未解明の諸問題の存在を暗示してくれる書簡である。

愛する友人たちよ

私は大変な懺悔を君たちにしなければなりません。そしてそれに続けて更に、大変な頼みごとがあるのです。私の知るかぎりにおいて君たちは独善的な人たちでもないし、また、少しは私を愛して下さるのだから、どうか好意をもって私の言うことを聞いてください。

私の人生と私の文学には二人の女性が関わっています。一人は私の子供たちの母であるコンスタンツェです。彼女は永きにわたって私の人生の星でありましたが、もはや生きておりません。他の一人は、私から遠く隔てられ、孤独で、しばしば使用人としての苦しい生活のためやつれ果ててまいりましたが、今も尚、生きてくれています。私はこの二人を愛してきました。いや、今なお愛しています。どちらのほうにより好きかは申せないほどです。ものすごい欲情をかつて私に起こさせたのは、今なおお生きているほうの女性です。君たちがしばしば読んで下さることとなったあの情熱的な詩は、今なお彼女の頭を飾る冠であります。この二人は、いろいろな点で全く違ってはおりますが、共に私が生涯で見だし得た最も甘味でやさしい魂を持った女性であり、愛する男のために無限の献身を捧げてくれました。このこと自体はすべて、うまく行けば、素敵なことでありましょう。しかし、故人となったほうの女性が既に私の妻となってしまう前から、今なお生きているほうの女性に対する欲情が私を襲ったのです。——ことの次第は次の通りです。

私が未だ婚約中、私の妹ツェツィーリエが、小柄で華奢な金髪の十三歳くらいの少女を連れて私の部屋にやってきました。二人は互いに服を着替えたりして、しばらく私の部屋にいました。二人が去った時、おやおや、あの子は私のことが好きなのだぞ、と悟り私は当惑しました。彼女がその頃すでに独特の魅力で私をひきつけていたことを、私は今もはっきりと思い出すことができます。

私が結婚してからも、ちょうど娘盛りになっていたあの子はよく私たちの家に来ました。私の新婚生活に一つ欠けていたものがありました。それは情熱です。私の手とコンスタンツェの手とが取り合っているのは、どちらかといえば静かな共感の気持からでした。彼女に対してはじめて情熱的な女性愛を抱くようになったのは、その発生からみますと、ずっと後のことです。[『遅咲きの薔薇』成立と解釈にかかわる最重要な作品外在解釈の論拠である。]しかし、私に対する情熱と一緒に生まれてきたかのごときあの子には、抵抗しがたい陶酔的雰囲気がありました。そして私自身も、同じ力を彼女に及ぼしていたようです。とにかく、私たち二人の間に激情的熱愛の関係が生まれてしまい、その繰返される、欲情への没我と反省の嵐は何年も続き、コンスタンツェと私を大いに苦しめました。

国外退去が救いとなりました。この禍が福となって、あの気持に打克つことができ、私の心の中で完全に激情は消滅したのです——というより、少なくとも完全な死の眠りついてくれたわけです。それから続く何年もの年月の間、私と、一切を承知しているコンスタンツェとの間には、人生の伴侶として、君たちもご覧になったように、稀に見る親密な関係が互いに形づくられたのです。しかしながら、今は捨てられ忘れられたほうの彼女は、全く希望もないのに、無限の誠実さでこの愛に操を立てていたのです。自分に近づくすべての男たちを退けました。私たちの古くからの知人ガンツァーが、振られた最初の人物です。こうして彼女は、自分の心の激情が治まったら、いつの日か、私やコンス

タンツェと共に暮せることを、唯一の幸せと夢見て来たのでした。というのも、気高い性格の二人らしいことですが、コンスタンツェはかねてから、彼女のことを気にかけていたのです。そして、いつかそのような暮らしが出来ればと考えたのは、私の意志ではなく、コンスタンツェの意志だったのです。帰還後の最初の夏のこと、C. [コンスタンツェ] は彼女 [ドロテア] を私たちの家に招いておりました。それは彼女が私たちの家で暮せないものか、を試みるためでした。しかし、ある晩ドロテアは泣きながら自分の部屋へ上がって行き、コンスタンツェが後を追いました。そして長時間二人だけで彼女の部屋に籠もっていました。それからコンスタンツェが私のところへ来て、彼女特有の愛情に満ちた素敵な柔和さをこめて言いました、「まだ駄目よ。辛抱強くしないと」。そして彼女 [ドロテアと推定される] は再び去ってしまいました。

コンスタンツェは死にました。彼女はまだ生きています。彼女のことを知っている人々は皆、彼女が女性中の女性だと申します。私がひっそりと彼女を胸に抱きよせ、家に入れたら、君たちはお怒りになりますか。今は亡き母をこよなく愛していた、私の子供たちも、大きい子たちも小さい子たちも、まるで曾て母が生きていたころ私たちの家に輝いていた陽の光の一筋でも帰ってきてくれるようにと、彼女を待ち望んでいます。更にもっと告白いたしましょう。愛する亡妻を呑み込んだ奈落を絶え間なく見つめることをやっとやめた時、私はただただ彼女だけを見つめていたのです。そして彼女が生きてくれている、私のために生きてくれている、ということ、筆舌に尽くしがたいほどの幸運と思い始めたのです。というのも、もし亡き妻への悲しみが私を襲うことが今後もしばしばあるでしょうが、そんな時、彼女は私を見捨てることなく、私を失くすまいと、そっと手を私の手の上におき、私があなたのそばに居りますよ、と感じさせてくれるだろうからです。たしかに容色の衰えた金髪の女性ほどみすぼらしいものはこの世にないかも知れませんが。君たちはきっと彼女を到底美しいとはいえないと思うでしょう。かつて、その色香に惑わされたのが私一人ではなかったあの子の魅力の多くは、若さによる容姿の優雅さに負っていたからです。しかし、彼女はそれでも、まだ昔のままです。そして私のうちに——ああ、愛するラウラ夫人、どうか、いやらしいわ、と私から顔をそむけないで下さい——私のうちに、この枯れしおれた白き薔薇 [本論で触れた通り、注目すべき概念である] に対し、あの青春の愚かしいまでの欲情のすべてが、再び目覚めたのです [かつて『遅咲きの薔薇』で妻を相手に示されたパターンが、今再び後添えの妻に対して展開しているのである]。この一ヵ月、彼女は妹のところにおります。白状いたしましょう。永らく閉ざされていた宝庫が今ひらかれて、彼女の手紙から溢れ出で、この老人の私を心の奥底までも恍惚とさせます。ところで、私は今、ドーリス [=ドロテア]・イェンゼンの話をいたしておるつもりなのですが、お判り頂いているでしょうね。それとも、まさか、とお考えでしたか。

以上が懺悔で、次にお願いの件ですが [……]

28) 使用テキストの註 (SW, S.1093) によれば、この「愛の手毬」(der Minne Federspiel)の「手毬」にあたる Federspiel という語は、中世ドイツ語では本来、鷹狩り用の鷹のことを意味する表現

であるのに、シュトルムはここでは明らかに「手毬」を表す語として理解している由である。

29) Vgl. Bechstein, *Sämtliche Märchen*, Artemis & Winkler, Düsseldorf/Zürich 1999, S.75 – 78.

30) なお、このツィクルス関連の一連の詩の分析と解釈としては、最近、次の論文が出た。加藤丈雄 変容の神秘 —— *Storm* の恋愛抒情詩《*Mysterium*》について —— 京都府立大学学術報告 人文・社会 第52号 平成12年12月 39–59ページ。

31) *Briefwechsel*, a.a.O. (= Anm.2), S.147.

Abstract

Although Theodor Storm maintained that his novella “Späte Rosen” was a successful example of his artistic originality, it has still not been well analyzed or commensurately valued. The author of this essay finds four dimensions of interpretation by four literary critics of the Tristan-Motif which appears twice in the novella. The first dimension, suggested by Theodor Fontane, is total ignorance. The second, advanced by David Jackson, is the feudalistic counter-example of a free, modern love life. The third, as claimed by Ingrid Schuster, is an attempt at a poetic interpretation of erotic passion. The fourth, put forward by Hiroshi Kobatake, is a hint of cloaked adultery. Expanding on this last dimension, the present writer finds as a fifth dimension of interpretation of the Tristan-Motif the poetically veiled oppression and compensation of the ménage-à-trois that Storm actually led with his wife Constanze and friend Dorothea.

Aperçus sur l'Épisode de la « Conversion de la Comtesse » dans le *Journal d'un curé de campagne*

Ritsuko NAGASHIMA

Introduction

Le *Journal d'un curé de campagne* consiste dans le journal intime qu'un jeune prêtre écrit en l'espace de quelques mois¹ et dans quelques lettres. Parmi les nombreux épisodes que rencontre le curé dans la vie paroissiale et qu'il rapporte dans son journal, celui constitué par son entretien avec la comtesse, la lettre de celle-ci et sa mort est certainement un des plus impressionnants et des plus émouvants. Mais aussi et surtout, cet épisode est celui qui, à notre avis, exprime le mieux dans ce roman, sinon parmi toutes ses œuvres littéraires, l'idée religieuse de Bernanos. Car, si le curé a entrepris l'entretien avec la comtesse dans le but de parler du problème de sa fille Chantal, il entend le secret de l'âme de la comtesse et finit par la faire se confronter à la question de son propre salut.

Dans cette étude, nous essayerons d'envisager en suivant les arguments des personnages, le cours des événements et les images employées, les questions que pose cet épisode, la question du salut, ou si on veut, de la conversion, ce qui permettra probablement d'éclaircir aussi la nuance qui existe entre l'idée de Bernanos et le catholicisme dit « orthodoxe ».

1. Bénies soient les fautes...

Un élément essentiel de l'argumentation du curé au cours de l'entretien repose sur la

¹ Le *Journal* n'est pas daté, mais comme le signale Elisabeth Lagadec-Sadoulet, quelques indices le font situer entre la fin novembre et la mi-février. cf. LAGADEC-SADOULET, Elisabeth : *Temps et Récit dans l'Œuvre romanesque de Georges Bernanos*, 1988, Editions Klincksieck, p.99

négarion du légalisme. Dès le début, contre le curé qui lui parle du problème entre elle et sa fille, la comtesse insiste sur la conformité de son comportement par rapport à la norme sociale et ecclésiastique.

Nous pouvons constater que la comtesse et le curé parlent en fondant sur des bases différentes. Le curé parle de valeurs absolues telles que l'amour, la justice devant Dieu et de la foi, tandis que la comtesse ne répond qu'en termes de valeurs limitées et relatives, telles que le « bon sens », la conformité aux normes ou la « pratique religieuse ».

« Trompée tant de fois, j'aurais pu être une épouse infidèle. Je n'ai rien dans mon passé dont je puisse rougir. » (1154²)

« Enfin, dit-elle en frappant du pied, nous serons jugés sur nos actes, je suppose ? Quelle faute ai-je commise ? » (1155)

« Je vais à la messe, je fais mes pâques, j'aurais pu abandonner toute pratique, j'y ai pensé. Cela m'a paru indigne de moi. » (1160)

La comtesse développe tous ces arguments pour se justifier auprès de la morale de ce monde. Elle ne se soucie pas, ou bien prétend ne pas se soucier de la dimension éternelle, gardant ainsi une attitude qui pourrait être qualifiée de pharisienne. C'est sa façon de se défendre, de conserver sa tranquillité d'esprit. Pourtant le curé ne lui parle d'aucune transgression des règles ni de morale, il ne fait que parler d'une valeur absolue qui est d'aimer.

« On se résigne à ne pas aimer. » (1153)

De ne pas aimer, ou plutôt de se mettre « hors de l'amour de Dieu » (1158), c'est tout ce qu'il lui reproche. A la comtesse qui dit qu'elle n'a rien dans son passé de quoi elle puisse rougir, il répond :

² Les chiffres après les citations renvoient à la page correspondante dans le *Journal d'un curé de campagne* in ŒR I.

« Bénies soient des fautes qui laissent en nous de la honte ! Plût à Dieu que vous vous méprisiez vous-même ! — — Drôle de morale. — — Ce n'est pas la morale du monde, en effet. » (1154)

Ici s'affrontent deux univers : celui de la Loi et celui de la Grâce. Pour le curé, l'observance superficielle de la loi est le plus scandaleux. Quand la comtesse mentionne sa « pratique », il prononce ces mots :

« Madame, n'importe quel blasphème vaudrait mieux qu'un tel propos. Il a, dans votre bouche, toute la dureté de l'enfer. » (1160)

Car ce que le curé met au-dessus de tout est le salut non par les actes, mais par la Grâce.

« [...] la faute à peine sortie de nous, il suffit d'un regard, d'un signe, d'un muet appel pour que le pardon fonce dessus, du haut des cieux, comme un aigle. » (1157)

Nous ne pouvons pas ne pas entendre ici, quelque résonance des conceptions de Luther, pour qui Bernanos semble avoir une grande sympathie, bien qu'il n'accepte pas totalement ses idées. Ce qui l'attire le plus chez cet « hérésiarque » est sa lutte contre le pharisaïsme dans l'Église qui anéantit la Grâce divine³.

La comtesse s'était réfugiée dans un monde où règnent le « bon sens » (1155), la morale, la légalité et « l'ordre » (1163), qui est un monde fermé sur lui-même. Par contre celui du curé est à ses yeux à elle caractérisé par la rêverie, le poème (1158) ou la folie (1159). Le premier pourrait être défini aussi comme une perspective qui consiste à croire que tout finit ici-bas sur la terre, c'est-à-dire qu'il n'existe qu'un bien limité, qu'une justice limitée, et une vie limitée. Dans cette perspective, il n'y a que des valeurs relatives, et c'est pourquoi

³ Voir notre essai *La Réforme et la Contre-Réforme selon Bernanos* in *Academic Reports of The University Center for Intercultural Education, The University of Shiga Prefecture, 2000*, pp. 113-130

Bernanos appelle les casuistes les « docteurs du Relatif »⁴.

Mais au cours de son entretien avec le curé, nous la verrons sortir sans qu'elle s'en rende compte d'où elle s'était enfermée.

2. Face à face avec Dieu.

Au début de l'entretien, la comtesse est fière et sûre d'elle-même, et la confrontation avec cette autre perspective que le curé lui prêche ne l'ébranle pas. « Vous voulez me jeter dans le trouble, vous n'y réussirez pas. J'ai trop de bon sens. » (1155), lui objecte-t-elle. Mais c'est, aussi paradoxal que cela puisse paraître, sa révolte qui lui ouvre un autre univers.

« Il m'arrive de rencontrer des pécheurs endurcis. La plupart ne se défendent contre Dieu que par une espèce de sentiment aveugle, et il est même poignant de retrouver sur les traits d'un vieillard, plaidant pour son vice, l'expression à la fois niaise et farouche d'un enfant boudeur. Mais cette fois j'ai vu la révolte, la vraie révolte, éclater sur un visage humain. » (1159)

Pour Bernanos, la révolte n'est pas une notion opposée à la foi. Il a en effet une sorte d'estime pour certains révoltés. Ce ne sont certainement pas des « docteurs du Relatif » qui peuvent se révolter. Car la révolte va contre l'imperfection ou la qualité limitée de la justice du monde. Autrement dit, ils ont soif d'absolu.

« Nul ne peut offenser Dieu cruellement qui ne porte en lui de quoi l'aimer et le servir. »⁵

Bernanos pense que certains êtres rencontrent Dieu en se révoltant contre Lui. La comtesse qui vivait sans « fautes » en observant « les pratiques » religieuses dit :

« Dieu m'était devenu indifférent. Lorsque vous m'aurez forcée à convenir que je le hais, en serez-vous plus avancé, imbécile ? » (1160)

⁴ *Grands Cimetières sous la lune* in EC I, p.416

⁵ *Ibid.*, p.379

La réponse du curé à ces paroles est la clef pour comprendre l'attitude de Bernanos vis-à-vis des « vrais » révoltés.

« Vous ne le haïssez plus, lui dis-je. La haine est indifférence et mépris. Et maintenant, vous voilà enfin face à face, Lui et vous. » (1160)

On ne peut pas se mettre face à face avec Dieu sans sortir du monde dans lequel on s'enferme, de celui du bon sens et de la morale. Une très belle image vient évoquer la transformation spirituelle de la comtesse.

« Il me semblait qu'une main mystérieuse venait d'ouvrir une brèche dans on ne sait quelle muraille invisible, et la paix rentrait de toutes parts, prenait majestueusement son niveau, une paix inconnue de la terre, la douce paix des morts, ainsi qu'une eau profonde. » (1162)

3. Donnez-lui tout.

Ce qui a résulté de ce changement, ou plutôt ce qui est apparu en même temps que ce changement, c'est la « résignation ». Ce mot prend chez Bernanos une importance particulière. D'abord dans la bouche du curé, il provoque chez la comtesse la révolte dont nous avons parlé.

« Il faut vous résigner à... à la volonté de Dieu, ouvrir votre cœur. » Je n'osais pas lui parler plus clairement du petit mort, et le mot de résignation a paru la surprendre. « Me résigner ? à quoi ?... » puis elle a compris tout à coup.

[...]

« Me résigner ? a-t-elle dit d'une voix douce qui glaçait le cœur, qu'entendez-vous par là ? Ne le suis-je point ? Si je ne m'étais résignée, je serais morte. Résignée ! Je ne le suis que trop, résignée ! J'en ai honte. » (1159)

Bien évidemment, la comtesse ne mesure pas la profondeur du mot, pour elle, il signifie supporter ou endurer. Ce que le curé lui demande dépasse la dimension de la manière de vivre. C'est la résignation totale dans un sens hautement religieux. Il lui dit :

« Il faut se rendre à lui, sans condition. Donnez-lui tout, il vous rendra plus encore. » (1161)

Et encore, tout à la fin de l'entretien, ils échangent ces paroles :

« C'est à vous que je me rends. — A moi ! — Oui, à vous. J'ai offensé Dieu, j'ai dû le haïr. Oui, je crois maintenant que je serais morte avec cette haine dans le cœur. Mais je ne me rends qu'à vous. — Je suis un trop pauvre homme. C'est comme si vous déposiez une pièce d'or dans une main percée. — Il y a une heure, ma vie me paraissait bien en ordre, chaque chose à sa place, et vous n'y avez rien laissé debout, rien. — Donnez-la telle quelle à Dieu. — Je veux donner tout ou rien. — Donnez tout. — Oh ! vous ne pouvez comprendre, vous me croyez déjà docile. Ce qui me reste d'orgueil suffirait bien à vous damner ! — Donnez votre orgueil avec le reste, donnez tout. » (1163)

Nous trouvons dans cette résignation ou dépouillement spirituel total quelque chose de commun avec l'idée du mystique allemand Eckhart pour qui l'homme peut s'unir à Dieu par le moyen de « Lâzen » (laisser) et uniquement par ce moyen.

4. Cela est déjà fait.

Pour convaincre cette révoltée qu'est la comtesse et la réconcilier avec Dieu, le curé ne lui prêche qu'une chose : la résignation. Comment est-il possible pour le curé que cet acte de laisser ou de se vider, de s'anéantir conduise l'homme à Dieu ? C'est sur la passion et la mort du Christ qu'il se fonde pendant l'entretien.

« Madame, lui dis-je, si notre Dieu était celui des païens ou des philosophes (pour moi, c'est la même chose) il pourrait bien se réfugier au plus haut des cieux, notre misère l'en précipiterait. Mais vous savez que le nôtre est venu au-devant. Vous pourriez lui montrer le poing, lui cracher au visage, le fouetter de verges et finalement le clouer sur une croix, qu'importe ? *Cela est déjà fait, ma fille ...* » (1162)

Si l'on imagine un Dieu tout puissant et parfait qui demeure au plus haut des cieux, l'homme n'aura qu'à déplorer la distance qui les sépare et sa propre imperfection par rapport à ce Dieu. Bernanos est étranger à une telle notion de Dieu. Celui qui a éprouvé la misère et le désespoir les plus effroyables n'était nul autre que Dieu — cette constatation amène l'homme à la reconnaissance de l'image de Dieu en lui-même, tel qu'il est sur la terre, en proie à la misère et au désordre.

Les paroles du curé : « Cela est déjà fait. » s'accordent avec les dernières de sa vie : « Qu'est-ce que cela fait ? Tout est Grâce. » (1259). Ces paroles aussi sont prononcées au moment où il est le plus anéanti et délaissé.

Le curé essaie de faire voir à la comtesse, au lieu qu'elle se damne, cette image de Dieu qui existe en elle. Pour Bernanos le salut n'est donc pas repoussé dans l'avenir, mais il est bien présent, accompli. Quant le curé prêche à la comtesse de « se résigner », il la pousse tout simplement à prendre ce point de vue, c'est-à-dire à passer de la position de « pas encore » à celle de « déjà », ce qu'elle fera, à la fin de cet entretien orageux comme nous le lisons dans sa lettre apportée au curé le soir même :

« L'espérance ! [...] Voilà qu'elle m'est rendue. Non pas prêtée cette fois, mais donnée. Une espérance bien à moi, rien qu'à moi, qui ne ressemble pas plus à ce que les philosophes nomment ainsi, que le mot amour ne ressemble à l'être aimé. Une espérance qui est comme la chair de ma chair. Cela est inexprimable. Il faudrait des mots de petit enfant. » (1165-1166)

La différence entre le « mot amour » et « l'être aimé », devrait être celle qui existe entre une notion abstraite et le fait réalisé concrètement dans la personne de celui ou celle qui est aimé. Cet exemple cité par la comtesse elle-même montre que l'espérance dont elle parle est donc une espérance réalisée concrètement : ce qui paraît contenir une contradiction, puisque l'espérance signifie bien évidemment l'acte d'attendre quelque chose qui n'est pas encore réalisé. La comtesse est consciente de cette contradiction. D'où les dernières paroles de ce passage : « Cela est inexprimable. Il faudrait des mots de petit enfant. », des paroles qui démontrent la discontinuité logique de ce changement qu'elle a vécu, d'une sorte d'élan spirituel. L'expression « des mots de petit enfant » souligne le fait qu'elle a passé dans l'univers qu'elle attribuait jadis au curé et qu'elle refusait : celui de la rêverie, du poème, ou

de la folie. Car, pour Bernanos, ce sont des enfants qui peuplent ce monde-là. C'est aussi la raison pour laquelle la comtesse considère le curé comme un enfant.

« Le souvenir désespéré d'un petit enfant me tenait éloignée de tout, dans une solitude effrayante, et il me semble qu'un autre enfant m'a tirée de cette solitude. J'espère ne pas vous froisser en vous traitant ainsi d'enfant ? Vous l'êtes. Que le bon Dieu vous garde tel, à jamais ! » (1165)

5. Du *Journal* à *Nos amis les saints*.

Cet épisode du *Journal* nous renvoie, par la ressemblance de quelques éléments, à un autre texte parmi les essais. Il s'agit de la conférence faite à Tunis, *Nos amis les saints*, que Bernanos a appelée « [s]on premier sermon »⁶. Onze ans après le *Journal*, tout à la fin de sa vie, Bernanos fait appel à l'image d'une mère qui vient de perdre son enfant. Nous citons le passage entier pour permettre la comparaison.

« Le scandale de l'univers n'est pas la souffrance, c'est la liberté. Dieu a fait libre sa création, voilà le scandale des scandales, car tous les autres scandales procèdent de lui. [...] Il y a en ce moment, dans le monde, au fond de quelque église perdue, ou même dans une maison quelconque, ou encore au tournant d'un chemin désert, tel pauvre homme qui joint les mains et du fond de sa misère, sans bien savoir ce qu'il dit, ou sans rien dire, remercie le bon Dieu de l'avoir fait capable d'aimer. Il y a quelque part ailleurs, je ne sais où, une maman qui cache pour la dernière fois son visage au creux d'une petite poitrine qui ne battra plus, une mère près de son enfant mort qui offre à Dieu le gémissement d'une résignation exténuée, comme si la Voix qui a jeté les soleils dans l'étendue ainsi qu'une main jette le grain, la Voix qui fait trembler les mondes, venait de lui murmurer doucement à l'oreille : « Pardonne-moi. Un jour, tu sauras, tu comprendras, tu me rendras grâce. Mais maintenant, ce que j'attends de toi, c'est ton pardon, pardonne. » Ceux-là, cette femme harassée, ce pauvre homme, se trouvent au cœur du mystère, au cœur de la création universelle et dans le secret même de Dieu. Que vous en dire ? Le langage est au service de l'intelligence. Et

⁶ *Nos Amis les saints* in EC II, p.1371

ce que ces gens-là ont compris, ils l'ont compris par une faculté supérieure à l'intelligence, bien qu'elle ne soit nullement en contradiction avec elle, — ou plutôt par un mouvement profond et irrésistible de l'âme qui engageait toutes les facultés à la fois, qui engageait à fond toute leur nature. Oui, au moment où cet homme, cette femme acceptaient leur destin, s'acceptaient eux-mêmes, humblement — le mystère de la Création s'accomplissait en eux, tandis qu'ils couraient ainsi sans le savoir tout le risque de leur conduite humaine, se réalisaient pleinement dans la charité du Christ, devenant eux-mêmes, selon la parole de saint Paul, d'autres Christ. Bref, ils étaient des saints. »⁷

Que Bernanos pense, au moment de faire cette conférence, au personnage de son roman, cela nous semble presque certain. Et ici aussi, il est question de la réconciliation et du salut. Dans ce texte, la question de savoir la relation entre la liberté et la résignation est plus clairement posée. L'homme, capable de se révolter, peut aussi se résigner par libre choix, et selon Bernanos c'est là la plus grande aventure de la vie, la sainteté⁸.

A la base de cet argument, nous reconnaissons sa croyance de plus en plus grande à l'unité profonde de Dieu et de l'homme. L'expression « devenant eux-mêmes d'autres Christ » est attribuée à saint Paul, mais celle de saint Paul est plus exactement : « Je vis, mais ce n'est plus moi, c'est Christ qui vit en moi. »⁹ L'expression employée par Bernanos, audacieuse dans un sens, devrait donc être considérée comme son interprétation de cette parole de saint Paul. Il dit dans la même conférence :

« Ceux qui ont tant de mal à comprendre notre foi sont ceux qui ne se font qu'une idée trop imparfaite de l'éminente dignité de l'homme dans la création, qui ne le mettent pas à sa place dans la création, à la place où Dieu l'a élevé afin de pouvoir y descendre. [...] Encore un peu plus profond, et l'âme se retrouve dans son élément natal, infiniment plus pur que l'eau la plus pure, cette lumière incréée qui baigne la création tout entière. »¹⁰

⁷ *Ibid.*, p.1379

⁸ *Jeanne, relapse et sainte*, EC I, p.40

⁹ Épître aux Galates 2.20 (Traduction Œcuménique de la Bible)

¹⁰ *Nos Amis les saints*, in EC II, p.1382

Nous reconnaissons ici son inclination pour le mysticisme, notamment celui d'Eckhart qui parle de cette même lumière incréée qui est dans l'âme et qui reçoit Dieu dans son état brut et ne fait qu'un avec Lui¹¹. Nous lisons dans le dernier cahier de Bernanos :

« Il ne s'agit pas de conformer notre volonté à la Sienne, car Sa volonté c'est la nôtre, et lorsque nous nous révoltons contre Elle, ce n'est qu'au prix d'un arrachement de tout l'être intérieur, d'une monstrueuse dispersion de nous-mêmes. Notre volonté est unie à la Sienne depuis le commencement du monde. Il a créé le monde avec nous... Quelle douceur de penser que même en L'offensant, nous ne cessons jamais tout à fait de désirer ce qu'Il désire au plus profond du Sanctuaire de l'âme.»¹²

Nous voyons là le point d'arrivée de son idée religieuse. L'épisode dit « de la conversion » de la comtesse contient déjà cette notion de la résignation qui consiste à se vider, à s'anéantir jusqu'à retrouver l'unité originelle de l'âme avec Dieu, dont on voit la forme extrême en Jésus-Christ. Michel Estève dit : « *Journal d'un curé de campagne* s'impose comme le roman de « l'imitation » du Christ dans la vie quotidienne »¹³. Comme pour lui-même, le curé a voulu pour la comtesse ce chemin, et cela, sur la base de sa croyance en cette image de Dieu, l'unité de l'homme avec Dieu. D'ailleurs que le curé glisse la lettre de la comtesse, après l'avoir lue, dans son vieux livre d'*Imitation* qui appartenait à sa défunte mère (1166), nous semble à cet égard assez symbolique.

Abréviations

ŒR I : BERNANOS, Georges : Œuvres Romanesques, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1984

¹¹ Voir par exemple son sermon en allemand 48 in *Deutschen Werke*, herausgegeben und übersetzt von Josef Quint, II, 1971

¹² *Dernier agenda de Bernanos*, cité par Albert Béguin dans *Bernanos par lui-même*, Seuil, 1954, pp.146-147

¹³ ESTEVE, Michel : *La Nuit de Gethsémani* in *Etudes Bernanosiennes* 18, 1986, Lettres Modernes, Minard, p.88

EC I : BERNANOS, Georges : Essais et écrits de combat I, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1971

EC II : BERNANOS, Georges : Essais et écrits de combat II, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1995

Abstract

This study intends to elucidate some aspects of Georges Bernanos' religious ideas through the episode generally called "Episode of the countess' conversion," in *Journal d'un curé de campagne*. His idea could be characterized in the first place by negation of legalism, which parallels the thoughts of Luther, with whom Bernanos seems to have some sympathy. Another aspect of his thought found in this episode consists in resignation or self-abandonment to be united in God. This could be compared with certain kinds of mysticism, especially that of the German mystic Eckhart. The inclination for mysticism is more manifest in his essay written one year before his death, *Nos amis les saints*, which treats also the question of salvation.

動詞の周期から見る「一」に関する副詞

An Analysis on Some Adverbs Beginning with the Word “Ichi” from the Point of View of Verb Cycle

呉 凌非

WU Lingfei

Abstract

Wu (2001) classified the verbs into three categories (zero-cycle verb, single-cycle verb and multi-cycle verb), and defined the concept of big cycle and small cycle of verbs. In this paper, the author analyzes some adverbs beginning with the word “ichi” from the point of view of verb cycle. The conclusion is that the adverbs beginning with the word “ichi” can be divided into three kinds: adverbs modifying zero-cycle verbs, adverbs modifying single-cycle verbs and adverbs modifying multi-cycle verbs.

1 はじめに

動詞をアスペクトの視点から捉えたときに、周期という概念を導入して分析を行えば、さまざまな言語事実が見えてくる。本研究は周期という概念で動詞を捉えた上で、さらに動詞の周期の視点から「一」に関する副詞、例えば、「一度」、「一通り」などについて考察したものである。

2 周期と動詞

呉(2001)は初めて動詞をゼロ周期動詞、単周期動詞、多周期動詞のように分類した。ここでは、周期で動詞を捉えてさらに「一」に関する副詞との関係を分析するために、もうすこし周期と動詞との関係について述べておくことにする。

Schank(1985)は動詞が記述する事象が複数の基本動作から構成されるというように捉えている。ここでは、動詞が記述する事象には具体的にどのような基本動作が含まれているかを問題にせず、一連の基本動作の存在を認め、そしてその一連の基本動作が事象の各局面を構成すると理解する。この考えを踏まえて、次に周期と動詞との関係について見てみる。

まず周期については、同一の事象が一定時間ごとに繰り返して現れる特性のことだと考える。動詞の中にはある種の動詞は対象の恒常的特性を記述し、事象的には、いくら時間が経っても局面的変化、すなわち一定時間ごとの同一局面の繰り返しは見られない。つまり、この種の動詞の記述する事象には周期性が

見られず、ここではこのような動詞をゼロ周期動詞と名づける。この種の動詞としては、日本語の場合、「ある、居る、尖る、…」など、中国語の場合、「有、是、属于、…」など、英語では、「be、have、know、…」などが挙げられる。

一方、ある種の動詞が記述する事象の全過程には局面が繰り返さず、ある時点になると、事象が終結し、ある種の状態に入る。このような事象全体の中に一つの周期しか含まない現象を記述する動詞をここでは、単周期動詞と呼ぶ。

このような動詞としては、日本語では「凍る、倒れる、外れる、…」など、中国語では、「破、亮、成、…」など、英語では、「reach、achieve、finish、…」などが挙げられる。

ゼロ周期動詞と単周期動詞以外の場合、動詞が記述する事象には、時間の推移とともに、さまざまな異なる局面が連続的に現れてくる現象が見られる。それらの局面は Schank の基本動作で構成されているとすれば、動詞を成立させる最小限の一組の基本動作が必ず存在しているはずである。この最小限の一組の基本動作によって構成される周期をここでは最小周期と呼ぶ。具体的に言えば、例えば、「一画を書く」を「書く」の最小周期だとする場合、「字を書く」は複数の「一画を書く」という最小周期の繰り返しになる。また、「一字を書く」を「書く」の最小周期と定義すれば、「手紙を書く」は「一字を書く」という最小周期の繰り返しとなる。逆に最小周期が完成されていない場合、動作も完成しておらず、動詞が表す本来の意味が成立しなくなる。すなわち事象を構成する最小限に必要な一組の基本動作のどれかが欠けていることになる。例えば、「叩く」という動詞に一連の動作が含まれていると考えられる。しかし、対象に動作が及ぼす前に中止したら、「叩いた」にはならない。このような時間の推移とともに局面が最小周期の繰り返しとなる事象を記述する動詞を、ここでは多周期動詞と呼ぶ。

以上は、アスペクトの視点からは動詞はゼロ周期動詞、単周期動詞、多周期動詞の三種類に分けられることについて述べた。続いて周期と「一」に関係する副詞、とりわけ最小周期と最大周期との関係について見てみることにする。

3 最小周期と最大周期と「一」に関係する副詞

最小周期については、前でも触れたように、動詞を成立させるために、最小限に必要とする一組の基本動作（局面）によって構成される周期のことと考える。一方、最大周期については、命題を成立させるために、最小限に必要とする一組の最小周期によって構成される周期のことと考える。その一組の最小周期は一つである場合もあれば、複数である場合もある。また、「走る、食べる、…」などは、最小周期一つ以上経過した時点で事象としては成立するが、「掘る、歌う、作る、…」などは、最小周期一つ以上経過しても事象は成立しない場合がある。たとえば、「トンネルを掘る」に関して言えば、途中で止めれば、「トンネルを掘った」にはならない。このような動詞については、最大周期の概念は有用であると思う。

次に最小周期と最大周期について、動詞類別的に見てみよう。

ゼロ周期動詞の場合は、局面上の周期性がないため、最小周期も最大周期も考えられない。単周期動詞の場合は、事象には一つの最小周期しか含まれていないため、最小周期が完了した時点で、事象が成立し、したがって、最小周期は最大周期と重なって同一のものとなる。多周期動詞の場合は、その最小周期と最

大周期はより分かりやすい。例えば「太郎は五歩歩いた」の例でいえば、最小周期が「一歩歩く」で、最大周期が「五歩歩く」となる。もちろん「太郎は十歩歩いた」だったら、この際の最大周期は「十歩歩く」となる。このように、最大周期は極めて語用的な概念であることがわかる。ただし、一部の動詞、例えば、「待つ、寝る、抑える、…」のような局面の維持を表す動詞については、最大周期は、動作終了時の最小周期の和で、分かりにくいことはない。問題はその最小周期をどう定義するかである。これらの動詞は「一歩歩く、一口食べる、一言言う」のような言い方ができず、最小周期はそう明瞭ではない。ただし、理屈上動詞が成立する瞬間があると想定できる。すなわち最小周期の存在は認められる。

以上は最小周期と最大周期を見てきた。次に「一」に関する副詞との関係について見てみよう。

「一」に関する副詞を考察の対象に選んだ理由は次のとおりである。

「一」は「一度」のように動作頻度の最小回数を表すこともあれば、「一通り」のように動作頻度の最大回数を表すこともある。しかも日本語では、「一」に関係し、副詞として使われる語はかなりある。これまでは、「一」に関する副詞をまとめて分析した研究はなかった。本研究のように「一」に関する副詞を最小周期と最大周期の視点から捉えることは、意義のあることだと思われる。

「一」で始まる語でかつ副詞として使えるものとして次のようなものが挙げられる。

一々、一応、一概、一撃、一時、一巡、一途、一段、一度、一同、一目散、一回、一括、一貫、一気、一挙、一見、一向、一刻、一切、一瞬、一緒、一生懸命、一心、一斉、一刹那、一層、一旦、一転、一杯、一発、一遍、一足、一言、一口、一頃、一筋、一度、一通り、一目

図1 「一」に関する副詞

ただし、図1に挙げている副詞のなかで、「一応、一同、一目散、一緒、一生懸命、一心、一斉」などは動詞の様態を表し、アスペクトの視点でいう本来の「最大」、「最小」の意味から外れているため、今回の考察の対象外とする。考察の対象となる副詞は図2に挙げているものとなる。

一々、一概、一撃、一時、一巡、一途、一段、一度、一回、一括、一貫、一気、一挙、一見、一向、一刻、一切、一瞬、一刹那、一層、一旦、一転、一杯、一発、一遍、一足、一言、一口、一頃、一筋、一度、一通り、一目

図2 今回の考察の対象となる副詞

以下では図2に挙げている副詞を周期別に見てみることにする。

3.1 ゼロ周期と「一」に関する副詞

前述のように、ゼロ周期動詞は周期的局面の変化が見られない動詞である。基本的には、動詞の否定形、形容詞述語はいずれもゼロ周期動詞と同様、状態を記述するもので、事象には局面的変化が見られない。本研究はそういう動詞の否定型と形容詞述語をともにゼロ周期の部類に入る動詞として扱う。

図2に挙げている副詞で、ゼロ周期動詞と共起できるのは、「一概、一段、一向、一切」の4つのみである。実際の使われ方を調べたところ、この4つの副詞は主に次のような文型で使われている。

「一概に・・・動詞否定形」

「一段と・・・形容詞述語」

「一向に・・・動詞否定形」

「一切・・・動詞否定形」

「一概」と共起するのは、ほとんど動詞の否定形で、実際の用例を調べたところ、「一概に言えない」という使い方がもっとも多く見られた。「一段」は形容詞述語と共起することが多いながら、「一段と面白く見るには」あるいは「一段と悪化」のような使い方も見られる。「一向」と共起するのもほとんど動詞の否定形で、具体的には、「一向に改善しない」、「一向に変わらない」などの表現が多く見られ、ほとんどの動詞との共起が可能である。「一切」と共起するのもほとんど動詞の否定形であるが、「一切ありません」、「一切しない」、「一切責任を負いません」のようなお断り表現としての使い方が多く見られる。

3.2 最小周期と「一」に関する副詞

副詞は動詞と共起する際に、その修飾範囲、すなわちスコープはさまざまである。大きく分けて考えれば、そのスコープは一つの最小周期内に限定されるものと複数の最小周期にわたるものの二種類があるように思う。一つの最小周期内に限定されるものとして、図2の中から「一撃、一見、一刻、一瞬、一刹那、一旦、一転、一発、一足、一口、一言、一目」が挙げられる。それらの語についてさらに具体的に見てみると、「一撃、一見、一転、一発、一足、一口、一言、一目、一気、一挙、一発、一括」などは「一」とそれぞれ動作性を容易に連想される語からの構成で、それぞれの動作性を表す動詞の最小周期そのものであるように思う。残りの「一刻、一瞬、一刹那、一旦」などはいずれも時間軸上の時点を表す語となる。

実際の用例として、「一撃」に関しては、「一撃で倒す、一撃必殺、一撃落札」などの使い方が見られ、ただし「一撃落札」の「一撃」はインターネットオークションの際に、「マウスをクリックする」を意味しているようである。「一見」の場合は、その用法は非常に限られており、「一見高価なものばかり並んでいるように見える」のように、「見える」との共起以外の用例はほとんど見られない。「一転」と「一発」はいずれも動作の瞬時性を表し、多くの動詞との共起が可能である。用例としては、「株価一転反落」、「一発で解消」などが一例としてあげられる。「一足」については、「足を一歩踏み出す」ということを意味するものであると考えられるが、単独で副詞としての使い方はほとんど見られず、もっぱら「一足早く、一足先に」のような使い方で見られている。「一口」については、やはり「口」に関する動詞の使い方のみ見られる。たとえば、「一口で言う」、「一口で食べる」などである。興味深いのは、「一口で二度おいしい」というような形容詞述語との共起も見られることである。「一言」に関しては、副詞として動詞と共起するときに、やはり「わかる、言う」などのことばに関する動詞がほとんどである。「一目」については、用例として、「一目でわかる」、「一目でほれる」などの使い方が多く、「一目でチェックできる」という使い方も見られる。

これまで見てきた副詞は、動詞的具体性が強く、共起できる動詞もかなり限られている。それに対して、「一気、一挙、一発、一括」は動詞的具体性がそれほどなく、その分自由度が高く、ほとんどの動詞との共起が可能である。

「一刻、一瞬、一刹那、一旦」などは、いずれも時点の表現で、瞬間の意味を表している。なかでは、「一瞬」と「一旦」の二つについては、多くの動詞との共起が可能で、実際に用例も多く見られる。用例として、「一瞬に奪われる、一瞬に恋するような、一瞬に力をかけるだけで」、「一旦停車し、一旦退室してから、一旦保存する」などが見られる。「一刻」に関しては、同じく瞬時性を表すことばであるが、単独での使い方は見られず、もっぱら「一刻も早く」のような使い方のみが見られる。「一刹那」に関しては、普段使わない表現であると思うが、調べた結果多くの用例が見られた。その一部を挙げておく。「一刹那でも忘れられません」、「一刹那に死では」、「一刹那に思い出された」、「一刹那で精魂を尽き果てた」。

以上はスコープ的に最小周期内の副詞（ここでは、このような副詞を最小周期タイプ副詞と名づける）についてみてきた。結論的には、次の二つの共通点が見られる。

- 1 動作の全過程において、最小周期に焦点を当て、意味的には、瞬時性あるいは一瞬の出来事を表している。
- 2 理屈的には、最小周期タイプの副詞は、最小周期に焦点を当てているため、動詞の継続型との共起は考えられない。実際の用例を見ても、共起する動詞が単周期動詞であろうと、多周期動詞であろうと、動詞の継続型、すなわち動詞の進行形は見られなかった。

3.3 最大周期と「一」に関する副詞

スコープ的に最大周期と関係していると思われるのが、残りの「一々、一時、一巡、一途、一度、一回、一貫、一杯、一遍、一頃、一筋、一通り」となる。これらの副詞をよく観察すると、さらに3つのグループに分けられる。すなわち「一々、一度、一回、一遍、一杯」のような動作頻度型、「一巡、一途、一貫、一筋、一通り」のような動作遂行型、「一時、一頃」のような時間幅をもつ時間幅型である。

具体的には、「一々」は「一々分ける」、「一々説明する」のように、同じ動作の繰り返しを表し、動作の頻度が複数回行われることを意味する。一方、「一杯」も「一杯食べる」、「一杯見る」のように動作の頻度が同様に複数回行われていると想定できるが、異なるのは、頻度の多さを強調している点である。「一度、一回、一遍」はいずれもある時点の行為の頻度が「一」を表す点で共通している。しかし、意味的な違いも見られる。その異同を次の用例でしめしてみよう。

共通点：形式的には、「一回ごと」、「一度ごと」、「一遍ごと」のようにいずれも「ごと」と共起することができ、「一回一回」、「一度一度」、「一遍一遍」のように、いずれも反復型を取ることが可能である。

相違点：次の例を通してその意味的な違いを見ることができる。

- 例1 一度にできる量 ○
 一回にできる量 ○
 一遍にできる量 ?

- 例2 一度にできること ○
 一回にできること ?
 一遍にできること ○
- 例3 この方法を使えば、一遍に解決できる。 ○
 この方法を使えば、一度に解決できる。 ?
 この方法を使えば、一回に解決できる。 ?

例1では、「一度にできる量」と「一回にできる量」はいずれもよりニュートラル的に事実を記述することができるのに対し、「一遍にできる量」が言えないのは、ニュートラル的にことを記述する以上の何かがあることが想定される。その特殊性は例3で見ることができる。すなわち、「一遍」は「一度」と「一回」に比べ、「瞬時性」を強調することが可能のようである。例2を見れば、「一回」に比べ、「一度」は行為の「完結性」を強調することができるということがわかる。

「一巡、一途、一貫、一筋、一通り」は動作を最後まで貫くという点において共通していると思われる。意味的に異なる点もある。その違いを図3にまとめてみた。

語	用例	強調
一巡 一途 一貫 一筋 一通り	打者一巡で一挙5点を挙げた 一途に生きてきた 一貫処理、一貫として取り入れる うなぎ一筋にこだわり 一通り読んだ上で	始まりから終わりまで ひたすら 連続 愛着 セット

図3 遂行型副詞の違い

「一時」と「一頃」は同じく時間幅型の副詞であるが、用例「退職金の支給を一時差し止める」、「ファイルを一時保存し」、「常用語の「連帯」は一頃流行りました」、「一頃人はどっと押し寄せて」からは、「一頃」に比べ、「一時」の方は「臨時的」あるいは「動作の中断」を表す意味合いが強いということが印象付けられる。

以上は最大周期に関係する副詞についてみてきた（ここでは、この種の副詞を最大周期タイプ副詞と呼ぶ）。最大周期は命題の成立に伴うもので、出来事の終了を意味する。したがって、最大周期に関係する副詞は動詞と共に起した場合、動作が終了し、動詞の進行形が用いられることがないはずである。しかし、遂行型副詞の場合、「一巡」と「一通り」を除いて、「一途」、「一筋」、「一貫」、そして時間幅型の「一時」に関してはいずれも「一途に待ちつづけている」、「一筋に貫かれている」、「一貫として実演を披露している」、「九大法学部で一時保管している」のように動詞の進行形の用例が見られる。これについては、さらに検討する余地がある。

3.4 副詞「ちょっと」について

これまでは、周期の視点から「一」に関する副詞について見てきた。副詞「ちょっと」は直接的には「一」関係するものではないが、中国語と結びつけて考えた場合、周期という概念に深くかかわっている副詞であるように思う。日本語では、「ちょっと」は使用頻度が高く、意味もきわめてアナログ的である。動作の最小限を表す副詞「ちょっと」を少しでもデジタル的に捉えようとすれば、それは、動作の一つの最小周期を表しているのではないかと考えられる。実際、副詞「ちょっと」を中国語に直すときに、次の2種類の訳し方が見られる。

日本語 ちょっと見せてください。

中国語 让我看一看。

让我看一下。

すなわち、「ちょっと」は中国語の「V-V」の「一V」あるいは「一下」に対応している。しかも中国語の「一V」と「一下」は最小周期を表す典型的なことばである。中国語の「一V」と「一下」については、(1)「少量」(2)「賞試(試し)」(3)「委婉(婉曲)」の意味を表すことができるといわれている(叶歩青 2000)。同じことは日本語の「ちょっと」についても言えるようである。

4 おわりに

以上をまとめて、次のように結びたい。

結論一 動詞を周期の概念で捉えた場合、ゼロ周期動詞、単周期動詞、多周期動詞に分けられよう。

結論二 動詞の進行局面の角度から、最大周期と最小周期のような概念は実際の言語分析に役に立つのではないかと考える。

結論三 「一」は最小と最大の両方の意味を持っていることから、「一」に関する副詞も最小周期と最大周期との関連性が見られる。

5 参考文献

- Schank, R.C 1985 『考えるコンピュータ』 石崎俊訳 ダイヤモンド社
- 呉凌非 2001 「動詞の周期とその周辺」 滋賀県立大学国際教育センター研究紀要 第6号 pp129-142
- 叶歩青 2000 「汉语动词重叠的语义研究」 <<汉语学报>> 第1期 pp48-52

情報化社会における情報倫理の意義
Significance of Information Ethics in Information Society

亀田 彰 喜 ・ 岡 田 章 彦^{*}
Akiyoshi KAMEDA and Akihiko OKADA

Abstract

As information technology has been developing since World War II, we have come to face a type of problem we have never experienced before. At first, the main function of computers was scientific calculation. Later, it was made possible that we could share databases between networked computers and that helped the further development of the information network itself. However, the more advanced and improved information technology becomes, the lower the moral standard of those who use it: they often intrude into a network in an unauthorized way, damaging important data. The ways of intrusion become more and more sophisticated as the technology progresses. Electronic commerce and electronic money are expected to be widespread from now on, but at the same time interference with commerce and falsification of data by some users familiar with the technology cause concern.

Nowadays the protection of the privacy of computer processed personal data from unauthorized access or alteration has become a global issue. As countermeasure to the exposure of privacy in the current information society, regulations on the flow of information and information ethics education come under review. In this paper, I take up the information ethics of information technology engineers and users. It is necessary to recognize the social and economical significance of information and to have an ethical sense in the current information society. Information ethics as a discipline is indispensable particularly to the rising generation who are responsible for the future information society.

1 はじめに

第2次世界大戦後、情報技術が進展するとともに新たな問題が発生してきた。コンピュータが開発

* 大谷女子短期大学

された当初は、科学技術計算を主体としたスタンドアロンとしての数理計算が中心であった。その後、コンピュータ間を回線で接続し、データベースの共用が実現し、そのことが情報ネットワークをさらに進展させていった。そして、情報技術が高度に進展し、その技術が多くの人々に流布するにしたがって、その修得した情報技術を悪用し、ネットワークに不正に進入し、重要なデータを破壊することがしばしば見られるようになった。このような事件は、ネットワークの情報技術が伸展するにしたがって、益々、高度に巧妙になりつつある。

今後、更なる情報技術の進展とともに、電子商取引や電子マネーが普及するものと期待されている。しかし、これらの将来期待されている電子商取引や電子マネーが実用化されるとともに、一部の情報の技術を修得した者により、ネットワーク上での電子商取引の妨害や取引データの改ざんなどが懸念される。これらのことから、情報技術に関与する人々に対する情報倫理に関する意識の高揚が求められる。

現在のように、インターネットが地球規模で普及し、われわれの日常生活においても情報ネットワークを利用し多くの情報に接し、それらがいとも簡単に入手可能になった。しかし、これらの情報を取り扱うにあたって、善悪の基準が不明確なまま、多くの事件にまき込まれることがある。このようなことから、社会人として情報倫理における教育が求められる。

2 情報ネットワークと情報倫理

一般に、倫理とは人間として正しく生きるにはどうすればよいのか、また、そのためには一体どのようにすればよいのかということを通して、現代社会における人としての生き方についての問題であり、社会での人間関係などの問題であるが、現在のような情報化社会において、新しい倫理の問題が噴出してきた。それは、インターネットが普及したことによる情報倫理の問題である。この新しい情報倫理の問題は情報ネットワークが普及するにしたがって、取り上げられるようになった。情報化社会における情報倫理の問題は、情報ネットワークの安全性やネットワークによる犯罪の問題から情報システムや情報ネットワークに関与する人間性が問われる問題となってきた¹⁾。

しばしば道徳と倫理はよく同類のものと考えられがちであるが、道徳は主として個人のあり方について対象とするのに対し、倫理は個人の行為が社会規範に照らし、善であるか悪であるか、また正しいのかそうでないのかを判断する基準について、対象とするものと考えられる。すなわち、倫理とは社会における個人の行動にたいする判断基準について取り上げることであろう²⁾。

さて最近、社会における情報化が進展するに従って多くの情報通信におけるトラブルが発生してきている。それに対し、情報ネットワークに関与する技術者およびユーザーに対し、情報倫理の意識が問題視されるようになった。この情報倫理の対象とされる範囲は、狭い対象としては、個人情報に対するプライバシー、組織的なレベルとしては企業における情報倫理、さらに社会的レベルとしての行政および国家における情報倫理、そして、地球規模の国際的レベルの情報倫理との4種の情報倫理が考えられる³⁾。

しかし、いずれにしても情報倫理は、情報ネットワークを介してコンピュータの技術者およびユーザーとの間での問題でもあり、情報ネットワークに対する安全性とシステムの保全の問題から端を発

し、情報に関与する人間の信頼性の問題でもある。

この信頼性を確保するためには、情報に関与する者として、他者の人権やプライバシーの尊重とともに他者の知的財産権や開発による知的成果を尊重し、情報システムやネットワークシステムの運用規則の遵守が求められる。

2.1 情報化社会におけるメディアの倫理

情報は色や形のないものであるが、今日の社会において社会や組織の中では大きな力を持っている。特定の組織において、情報を牛耳っていれば、たとえ組織の中で地位が下位であってもその組織をコントロールすることができる。すなわち、組織において、情報を掌握することは、その組織を掌握することにつながる。このことは、社会においても同じようなことが言える。

社会において、多くの情報を提供しているのが、マス・メディアである。マス・メディアは現代の社会において、また私たちの日常生活において、あらゆる面で大きな影響力を持っている。そのようなことから、マス・メディアに専門職としての倫理が求められる。

17世紀末から18世紀初にかけて、欧米でメディア関係において自由主義の風潮が広まった。その結果、いかなる責任に対しても自由であると拡大された観念が謳歌するようになった。そして、メディアは、読者に対して単なる情報と娯楽の提供者になりさがっていった。それは、メディアの中でも新聞は当時の政治や経済に対し、大きな影響力を持つとともに、広告による収入も見逃せないものがあったためである。

しかし、19世紀末になってアメリカの新聞社から信頼性の回復といったことから、報道における客観性という概念が生まれるようになった。政治的な力を排除し、正当性に基づいた報道を提供しようとする試みがなされるようになってきたのである。これがメディアにおける倫理の発端であろう。

このようなメディア倫理の意識は、AP通信社を中心に広まっていった。AP通信社は多くの新聞社との連合体として、また共同体として各新聞社と強い繋がりを持っていた。多くの加盟新聞社を増やすためには、加盟新聞社に提供する記事や情報は公正かつ中立でなければならない。このような観点からメディアにおける倫理意識が浸透していったと言える。そして、この倫理意識の高まりは、報道の自由と専門職としての重要な社会的責任を負うという意識から、1922年に全米新聞編集者協会を結成し、1923年にはジャーナリズム倫理綱領を採択することとなった。このようなジャーナリズムの倫理意識高揚の契機になったのは、高等教育機関での人材育成が進んだ結果でもある。

日本においても、メディアは活気に満ちた業界で自由と独立意識の強い気風があった。反面、責任および義務という概念は敬遠される傾向にあった。しかし、新聞の部数の拡大とテレビの普及に伴って、メディアは社会での世論の形成に大きな役割を担うようになり、公正な立場での報道が求められるようになった。そして、日本においても第2次大戦後の1946年に、日本新聞協会が新聞倫理綱領を採択し、その後、出版業界においても1957年に日本書籍出版協会が出版倫理綱領を採択している。さらにまた、日本雑誌協会も1963年に雑誌編集倫理綱領を採択している。

このように、各協会によって制定されたこれらの倫理綱領も違反に対しては、法的な意味合いは何ら持たず、会員内部の処罰にとどまっている。メディア以外にも、専門的職業の医師や法律家などに

においても倫理綱領は採択されている。しかし、多くの場合、このような倫理綱領の遵守の強制および処罰については多くの議論が未だ見られる⁴⁾。

2.2 情報通信における倫理

上述のメディアにおける倫理は不特定多数に対し、報道という形態での情報を提供していたが、情報通信は情報ネットワークといった通信媒体を経由して、これに接続している特定の相手を対象とし、情報を相互に提供している。このような点で、メディアと情報通信には違いはあるものの、情報といった無形の物を扱う点では共通している。しかし、情報はそれなりに経済価値と力をもった重要なものである。その重要な情報をねつ造、改ざん、破壊するなど、これらの情報を作動的に操作する行為に対して、何らかの抑制が必要である。法的規制にはいたらなくとも、何らかの倫理的抑制が求められる。すなわち、個人レベルでの倫理意識の向上が必要である。

情報通信における今日的問題として、不正アクセスがある。これは情報ネットワークを介して進入することを言うが、この行為は許可なく接続していることから不正行為となる。それは接続した行為が、他人のデータベースに対する不正操作につながるからである。不正アクセスの前提に、他人のパスワードの解読がある。パスワードの解読だけでは違法ではないとの議論もあるが、パスワードを解読した時点で、他人の情報システムに接続し、すでに進入していることになる。パスワードの解読だけでは、不法行為ではないとの意見もあるものの、パスワードの解読は、不正アクセスへの前段階としての行為とみることでもできる。

最近、政府関係や企業のホームページにアクセスし、ホームページの内容を改ざんしたり、破壊したりする事件がある。これらのケースは一種の業務妨害にあたり、電磁的記録の破損および虚偽の情報の伝送によりコンピュータ関連業務の妨害行為ということで、1987年の刑法の改正によって、コンピュータ関連業務妨害罪になる⁵⁾。

不正アクセスといっても、様々なケースがある。一つは、相手のパスワードを解読し相手の管理者としての権限を奪い、外部からコントロールするようなケース、二つめは組織において、一般ユーザーには与えられない機能を利用しようとするもので、その機能を利用して、企業における重要な情報を盗み出すケース、三つめは電子メールをLANなどでループ化させたり、無意味なパケット通信を長時間にわたり、行うといったケースなどで、いずれにしても著しく、パフォーマンスを低下させたり、情報ネットワークに支障をきたすことにもなりかねない⁶⁾。

情報関係に従事する専門家に対しては、データベース等の重要性に対する意識を高め、情報ネットワークにおけるユーザーのリスクなどを配慮し、情報に対する守秘などの認識をも深める必要がある。また、情報システムの管理者においては、情報ネットワークや情報システムの適切な利用規定を設けるとともに情報システムの開発や運用によって影響を受けるユーザーへの配慮が必要である。

3 個人情報とプライバシー

一般に個人の私的事柄に関して、他人の目に晒されて当人が不快感を持ったならば、プライバシーが侵されたと言えよう。しかし、現代の社会では何らかの個人的情報は、各個人が社会生活を営む上

において必要とされる。その個人情報が多くの人々の目に晒され、それが悪用されて当人が何らかの不利益を蒙った場合に問題が生じる⁷⁾。

今日のように、情報ネットワークが普及し、蜘蛛の巣のように張り巡らされている状況下では、他のサーバーに進入し、データベースの中から特定の個人情報を盗み出すことや、また書き換えられることが頻繁におきていることから、情報ネットワークにおけるセキュリティの問題が、最近重視されている。

アメリカではこのプライバシーに関して、1974年にプライバシー法を成立させている。それは情報の記録保管組織に対して、個人情報の存在の公表、そして、その自己の情報を知る権利、自己の情報に対する修正権、個人情報に対する収集の制限、収集された個人情報の内部での使用および外部への提供の制限、これらの個人情報に対する収集および管理、そして内部使用や提供が必要であり、かつ合法的に行われることを保証するような情報管理に対する責任、そして最後に収集された個人情報の情報管理体制の責任所在の確認などについてのものである。

プライバシーが、権利として社会的に主張されるようになったのは、新聞が大衆のメディアとして普及した1830年代からである。今までの古い共同体意識の生活から、新しい個人の生活を中心に意識する生活体系に目覚めるとともに、1890年に新聞の大衆化による個人の私生活の新聞の取材に対する拒否から、プライバシー権の主張に端を発する。

それ以来、プライバシーの権利に対する概念も進展し、現在ではプライバシーに対する権利の侵害については次のような不法行為として認識されている。

一つめは侵入であり、これはメディアの取材活動などにおいて電子的手段などにより盗聴したり、また盗み撮りなどする行為であり、倫理的にも許される行為ではない。

二つめは私事の公開であり、たとえ私事の情報も真実であっても、公開されることによって当人が経済的および精神的に損害をこうむった場合、それは倫理的にも不当であると言える。

三つめは公衆の誤認であり、これは個人の間違った情報を提供された場合であって、例えば当人の名前や経歴および肩書きなどを間違って提供された場合などで、このようなことは、倫理的に好ましくない。特にこれらのことはメディア関係の職業倫理として留意すべきことである⁸⁾。

近年、我が国においても情報技術の研究者として、また専門家として、電子情報通信学会では電子情報通信学会倫理綱領を定めている。そこでは、情報倫理についての基本理念として、「電子情報通信学会員（以下本学会員）は、電子情報通信の専門家として各自の専門技術の研究、開発実施を通じて、全人類社会の幸福と福祉に貢献するよう努力する」と情報技術の研究者としての自覚とともに基本方針を明示している。

また、プライバシーに関しても専門家としてまた個人としても「他者の権利の侵害が生じることを避ける。他者の権利には、所有の権利、プライバシーの権利などが含まれる」を遵守することを明記している⁹⁾。

最近、これらの個人情報やプライバシーに関係する問題として、平成14年8月5日から稼動した住民基本台帳ネットワークがある。これは国民に11桁の数値番号を振り付けて、個人情報としては住所、氏名、生年月日、性別の4種の情報をデータベースとして住民基本台帳として都道府県および各市町

村に情報ネットワークで各個人情報情報を管理し、提供していこうとするものである。

この住民基本台帳ネットワークシステムの稼働までの経緯について、振り返って見ると、

- ・1999年8月
改正住民基本台帳法の成立（小渕内閣）
（個人情報保護に法整備が前提を小渕首相が国会答弁）
- ・2001年3月
個人情報保護法案を国会に提出
（現在国会で継続審議）
- ・2002年8月5日
住民基本台帳ネットワークシステムが稼働
- ・2003年8月（予定）
各個人にICカードを配布開始
（住民票の写しの広域交付などを開始）

といった経過と予定である。

この住民基本台帳ネットワークシステムが稼働に際し、福島県矢祭町や東京都杉並区が不参加を表明し、横浜市が住民の選択により導入すると発表している。

住民基本台帳ネットワークシステムが稼働したことによって、児童扶養手当や恩給の支給などの手続きに、住民票の写しなどが不要となり事務手続きの合理化にはなる。2003年8月にはICカードが配布され、転入手続きも1回で済む。また、住民票の写しなどは全国どこでもとれるようになる。

行政においては、電子政府および電子自治体の基盤整備を進めることによって、ネットワーク上で許認可の申請なども実施可能となり、それによる需要創出効果は5.5兆円と考えられている。

住民基本台帳ネットワークシステムにおけるセキュリティの問題であるが、片山虎之助総務大臣は、「従事する職員に目的以外の使用は認めず、厳重な守秘義務を課す」とのことであるが、不安は依然として残る¹⁰⁾。

セキュリティ対策として、自治体によっては独自の対策を打ち出しているところもあり、鳥取県においては、システム障害や、不正アクセスが起きた場合は、独自の判断でネットワークを切断する方針を出している。また、総務省においても、住民基本台帳ネットワークシステムの稼働における緊急事態に備え、省内に緊急対策本部を設置している。

今後、この住民基本台帳ネットワークを活用することになるのであるが、このシステムに従事する職員に職務遂行にあたり、個人情報に対する情報倫理の意識が求められる。このような職務に該当する例としてやはり、電子情報通信学会倫理綱領に次のような事項がある。

「本学会員は、その職務の遂行に当たって次の各項を遵守する」として社会的信頼を得る主眼とした綱領で「職務上知りえた秘密を他に漏らさない」そして、さらに「職務上知りえた秘密を自分および他者の利益のために使用しない」と個人情報に関して、遵守することを明記している。

今後、このような倫理綱領なり法制度が、この住民基本台帳ネットワークに従事する職員に求められる¹¹⁾。

一般に、情報ネットワークや情報システムに関与する者にとって、法的に違反する行為としては、不正進入すなわち、利用資格のない情報ネットワークシステムに進入したり、データベースやソフトウェアを破壊する行為、また、情報ネットワークやその他の情報媒体を介してコンピュータ・ウィルスをばら撒くことや人権やプライバシーの侵害、そして著作権の侵害などである。

さらに社会通念上、好ましくない行為としては、匿名もしくは他人の名前で特定の個人を誹謗中傷する行為、誤った情報やデマを配布したり、何らかのチェーン・メールを転送したりするなどの行為は情報倫理の面から慎むべき行為である¹²⁾。

現在のような情報化社会においては、データベースの破壊や情報ネットワークの損壊は、経済および社会生活に多大の被害と損害を与えることになる。このことを早くから認識させ、情報技術に関与する者に対する倫理意識を身に付けさせる必要がある。そのためには、初等中等教育において、今般、情報教育が導入され、進められつつあるが、単に情報技術だけを習得させるのではなく、情報の重要性に対する認識を深めさせ、それに対する倫理意識を持たせる教育を進める必要がある。

4 情報倫理に対する教育

一般に、倫理とは人間として正しく生きていくにはどうすればよいのか、また、そのためには何をすべきなのかを自問自答しながら、われわれは現在の社会で、また複雑な人間関係のなかで生活している。しかし、今日のような情報化社会では、一般的な倫理概念をさらに超えた多くの情報化社会独特の社会的な問題が噴出してきている。それは、現在の情報化社会に対応した新しい情報倫理としての概念の確立が求められてきた。と、ともにコンピュータ犯罪が増えつつある今日において、早急にこの新しい情報倫理の概念に基づいた教育もなされなければならない。

情報倫理はコンピュータを使用し、情報ネットワークを利用するにあたっての倫理問題であり、情報技術の専門家として、またユーザーとして社会通念として、今後、認識しなければならない問題である。それは、情報システムや情報ネットワークの信頼性と安全性に関わる重要な問題でもある。そのため、情報技術に関わる専門家の間では、倫理綱領を採択し、情報倫理に対する意識を高めている。すなわち、それは専門家として、事実やデータの尊重、ユーザーに対するリスクへの配慮、秘密情報の守秘などであり、また同様に、情報システムや情報ネットワークの管理者においては、システム運用上でのユーザーへの配慮を行うとともに、システムの利用規定の作成し、実施し、情報倫理の認識のもとに、業務に携わることである。また、一般のユーザーに対しても、社会人として他人の人格とプライバシーの尊重、知的財産権や知的成果の尊重、情報システムや情報ネットワークシステムの利用規則の遵守が求められる。

そこで、これからの情報化社会を担う若い世代に対する情報教育の一環として、情報倫理教育の取り組みが導入されようとしている。情報倫理を新学習指導要領では、情報モラルとして取り扱っている。平成11年3月1日に新学習指導要領案が提示され、それには今回、新たに現代の情報化社会に対応すべく、はじめて中学校および高等学校に情報教育が課されることとなった。この新学習指導要領に基づいた情報教育が平成14年度から中学校で、平成15年度から高等学校で実施されることから、平成13年度までに各学校に情報教育のための設備の充実と、インターネットが利用可能な教育環境が

進められている。これから、中学校、高等学校で情報技術の教育が実施されるのであるが、現在、社会で問題になっている情報倫理、すなわち情報モラルの教育も重要視されている¹³⁾。

中学校学習指導要領の第2章第8節技術・家庭の情報とコンピュータの中で「情報化が社会や生活に及ぼす影響を知り、情報モラルの必要性について考えること」と明記しており、授業でインターネットを利用するとともに情報倫理としての個人情報の保護や著作権などについても指導することが求められている¹⁴⁾。

高等学校においては、新学習指導要領で新たに必修教科として「情報」が新設された。第2章第10節情報第3款の2において教科「情報」の内容について配慮する事項として、「各科目の指導において、内容の全体を通して情報モラルの育成を図ること」を指示し¹⁵⁾、教科「情報A」では、「情報の伝達手段の信頼性、情報の信憑性、情報発信に当たっての個人の責任、プライバシーや著作権への配慮などを扱うものとする」と具体的な指導内容について触れている¹⁶⁾。

さらに、高等学校学習指導要領第3章第7節情報の第2款の情報産業と社会の中で「高度情報通信社会を主体的に生きるための個人及び産業人としての在り方、著作権やプライバシーの保護、情報発信者の責任などの情報モラルの必要性及び情報のセキュリティ管理の重要性について理解させること」と情報の技術の習得とともに、情報に関する倫理意識の育成を強く教育の中で求めている¹⁷⁾。

このように、中学校、高等学校に新学習指導要領に基づき、新たに情報教育が導入されるが、次の時代を担う世代が教育課程において、現代の情報化社会における情報に対する意義と認識を深め、情報に関与するものとしての倫理意識を養うことが、より一層望まれる。

5 おわりに

今世紀は情報技術の発展に伴って経済社会のあらゆる分野が進歩してきた。特に生産分野や金融分野での情報技術の利用は顕著なものがあつた。しかし、コンピュータがスタンドアロンのように単体で技術計算や会計処理に利用されていた時代から、コンピュータ間を回線で接続したコンピュータ・ネットワークの時代に入って以来、ネットワークの影の部分の部分が突然表面化してきた。すなわち、現在の情報化社会で問題となっている不正アクセスによる重要なデータの改ざんや破壊、また個人情報のプライバシーの問題である。特に今日のようなインターネット社会においては世界的規模の社会問題となってきた。このような問題に対して、現在、対応策として倫理教育と法の2つの方法が考えられている。

このうち今般は、情報技術者およびそれに関与するユーザーに対しての情報倫理について取り上げてみた。情報倫理は現代の情報化社会に生きる人間として、情報に対する社会および経済的な意義と重要性を認識し、情報化社会に生きる人間としての不可欠な倫理意識をもたせることが、今後一層必要である。特に今後の情報化社会を担う若い世代に対し、情報技術の教育の課程での情報倫理における教育は必須のものである。

引用・参考文献

- 1) 廣瀬英彦編, 情報の倫理, 富士書店, 2000, 223-225.
- 2) 和田英夫・原田三郎・日笠完治・鳥居壮行, 情報の法と倫理, 北樹出版, 1999, 39-40.
- 3) 日本セキュリティ・マネジメント学会編, セキュリティハンドブックⅢ, 日科技連出版社 1998, 182-183.
- 4) 和田英夫・原田三郎・日笠完治・鳥居壮行, 情報の法と倫理, 北樹出版, 1999, 140-156.
- 5) 和田英夫・原田三郎・日笠完治・鳥居壮行, 前掲書, 1999, 186-195.
- 6) 名和小太郎・大谷和子編, IT ユーザーの法律と倫理, 共立出版, 2001, 103-104.
- 7) 越智 貢・土屋 俊・水谷雅彦編, 情報倫理学, ナカニシヤ出版, 2000, 16-20.
- 8) 和田英夫・原田三郎・日笠完治・鳥居壮行, 情報の法と倫理, 北樹出版, 1999, 164-167.
- 9) 日本セキュリティ・マネジメント学会編, セキュリティハンドブックⅢ, 日科技連出版社 1998, 195.
- 10) 日本経済新聞, 2002年8月5日.
- 11) 日本セキュリティ・マネジメント学会編, セキュリティハンドブックⅢ, 日科技連出版社 1998, 195.
- 12) 越智 貢・土屋 俊・水谷雅彦編, 情報倫理学, ナカニシヤ出版, 2000, 196.
- 13) 越智 貢・土屋 俊・水谷雅彦編, 前掲書, 188-192.
- 14) 文部省, 中学校学習指導要領, 財務省印刷局, 1998, 81.
- 15) 文部省, 高等学校学習指導要領解説 開隆堂出版, 2000, 81.
- 16) 文部省, 前掲書, 198.
- 17) 文部省, 高等学校学習指導要領, 財務省印刷局, 1999, 336.

通過域外乱を低減した周期的 ANC システムの安定解析

Stability Analysis of Periodic ANC Systems with Reducing Passband Disturbances

宮城 茂幸 酒井 英昭*

Shigeyuki MIYAGI and Hideaki SAKAI

Abstract: A new structure for narrow band active noise control (ANC) systems has been proposed by Kuo and Ji. Since the proposed structure is complicated due to two interconnected adaptive filters using the same internally generated reference signal, detailed properties have not been studied yet. In this paper the stability condition of this algorithm is analytically derived by using the Jury test. It is verified that 90° condition holds as a necessary condition for the algorithm to be stable.

Keywords: periodic ANC system, stability, filtered-X LMS algorithm, Jury test

1 はじめに

能動雑音制御 (以下 ANC) システムにおいて騒音源からの雑音検出には通常マイクロフォンが使用される。このようなシステムは広帯域 ANC と呼ばれる。これは検出マイクロフォンが広いスペクトル範囲の騒音源を検出することに由来する。一方騒音検出のためにマイクロフォン以外の検出器を用いることも考えられる。例えば回転体の発するノイズなど周期性のある信号の基本周期を検出するためにはタコメータなどが用いられる。この場合直接検出した信号を利用せず、その周期信号の周波数に同期したインパルス信号列あるいは正弦波信号を ANC システムの参照信号として使用することがある。このようなシステムは狭帯域 ANC システムあるいは周期的 ANC システムと呼ばれる。特に狭帯域 ANC システムのなかでも、参照信号として正弦波信号を用いるシステムは単一周期をもつ外乱を抑制する適応ノッチフィルタとして知られている。

狭帯域 ANC システムを構築するとき、通常の広帯域 ANC システムと同じ構成が用いられる。よく知られているように、ANC システムにおいては消去したい雑音に対して逆相となる信号を送出するラウドスピーカーが存在する。このラウドスピーカーから誤差信号検出マイクロフォンの間に 2 次経路が存在し、この間の伝達関数を考慮する必要がある。狭帯域 ANC システムにおいては、この 2 次経路フィルタの影響により通過域において周波数特性が不要な利得を持つことがあり、本来所望されるノッチフィルタの特性にならないことがある。また、これにより狭帯域 ANC システムの不安定性が引き起こされるおそれがある。

通過域での不要な利得を抑えるために、Kuo と Ji により新しい ANC システムの構成が提案されてい

*京都大学大学院情報学研究所

る。その構成では、別の適応フィルタを誤差信号の経路に追加し、誤差信号から通過域外乱の影響を除去している。この構成法の効果やいくつかの特性についてはすでに Kuo と Ji 自身により示されている。しかし、解析には 2 次経路フィルタと推定 2 次経路フィルタが一致するという仮定が使われている。これは実際のシステムにはあてはまらない。そこで、本論文ではそのような仮定をせずに、Kuo と Ji により提案された構成法を解析しその安定条件について考察する。

2 通過域外乱を低減したアルゴリズム

本節では従来の Filtered-X LMS(FXLMS) アルゴリズムおよび Kuo と Ji により提案された構成法について簡単にまとめておく。

従来の FXLMS アルゴリズムを用いた ANC システムのブロック線図を Figure 1 に示す。 $x(n)$ は参照信

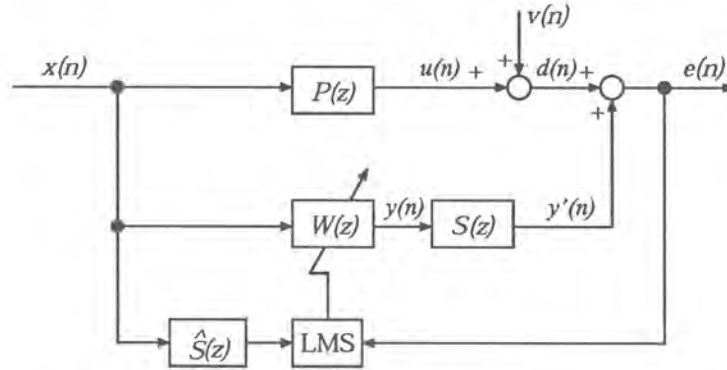


Figure 1: Filtered-X LMS アルゴリズムを用いた ANC システムのブロック線図

号である。 $P(z)$, $W(z)$ はそれぞれ 1 次経路および適応フィルタの伝達関数を表す。 $S(z)$ は 2 次経路の伝達関数であり、その推定伝達関数を $\hat{S}(z)$ で表す。すべての伝達関数は FIR フィルタで記述できるものとし、 $W(z)$, $\hat{S}(z)$ のタップベクトルを

$$\mathbf{w}(n) = [w_0(n) \ w_1(n) \ \cdots \ w_{N_w-1}]^T$$

$$\hat{\mathbf{s}} = [\hat{s}_0 \ \hat{s}_1 \ \cdots \ \hat{s}_{N_s-1}]^T$$

で表す。ここで T は行列またはベクトルの転置を、 w_i , $i = 0, 1, \dots, N_w - 1$ は $W(z)$ のインパルス応答列を、 \hat{s}_i , $i = 0, 1, \dots, N_s - 1$ は $\hat{S}(z)$ のインパルス応答列をそれぞれ表す。また N_w , N_s はタップ長であり、通常 $N_w \gg N_s$ である。 $\mathbf{w}(n)$ は LMS アルゴリズムにより以下のように更新される。

$$\mathbf{w}(n+1) = \mathbf{w}(n) - \mu e(n) \mathbf{x}'(n) \quad (1)$$

ここで μ は適応利得、 $e(n)$ は誤差信号、 $\mathbf{x}'(n)$ は $\hat{S}(n)$ の出力である。入力信号ベクトル

$$\mathbf{x}(n) = [x(n) \ x(n-1) \ \cdots \ x(n-N+1)]^T$$

を用いると $\mathbf{x}'(n)$ は

$$\mathbf{x}'(n) = [\hat{s}^T \mathbf{x}(n) \hat{s}^T \mathbf{x}(n-1) \cdots \hat{s}^T \mathbf{x}(n-N+1)]^T$$

と書ける。ただしベクトル長を合わせるため \hat{s} の最後の要素の後に適当な数の 0 を追加する。ブロック線図より $e(n)$ は

$$e(n) = d(n) + y'(n) = u(n) + v(n) + y'(n) \tag{2}$$

となる。ここで $d(n)$, $y'(n)$, $u(n)$, $v(n)$ はそれぞれ所望信号, $S(z)$ の出力, $P(z)$ の出力, $x(n)$ とは無相関な加法雑音である。

いま $w(n)$ が定常状態で $e(n)$ を最小にするような解 w_{opt} に収束したとし、タップ誤差ベクトルを $\Delta w(n) = w(n) - w_{opt}$ と定義する。 $\Delta w(n)$ と (2) 更新式は

$$\Delta w(n+1) = \Delta w(n) - \mu[u(n) + y'(n)]\mathbf{x}'(n) - \mu v(n)\mathbf{x}'(n)$$

と書き換えられる。過渡状態では右辺第 3 項の大きさは右辺第 2 項に比較して小さいので、その影響は小さい。しかし、 $w(n)$ が最適解 w_{opt} に近づくにしたがって第 2 項は零に近付き第 3 項の影響が相対的に大きくなる。このことは適応フィルタが最適解に近づくほど外乱の影響を大きく受け、本来の最適解に近づくのが難しくなる。このような性能劣化は [2] において指摘されている。 μ を小さくすることなしに、この影響を小さくするために別の適応フィルタを $C(z)$ を挿入する方法が [2] において提案されている。提案された構成のブロック線図を Figure 2. に示す。追加した適応フィルタ $C(z)$ により参照信号 $x(n)$ から $u(n) + y'(n)$ の推定値である $e'(n)$ を推定し、 $W(z)$ の更新には $e'(n)$ と参照信号 $x(n)$ を用いる。このことにより $v(n)$ が $w(n)$ の更新式に与える影響を低減している。

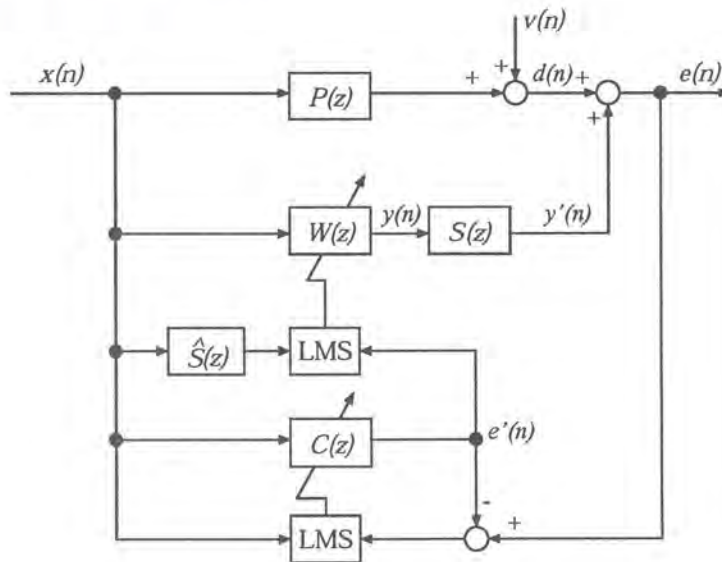


Figure 2: 通過域外乱を低減した Filtered-X LMS アルゴリズムを用いた ANC システムのブロック線図

3 周期的 ANC システム

3.1 従来型周期的 ANC システム

適応フィルタ $W(z)$ に入力する参照信号を内部で生成した正弦波に置き換えることにより Figure 1, 2 の両構成は周期的 ANC システムに適用できる。簡単のために、参照信号は単一の正弦波からなり、重みは w_0 , w_1 の 2 の場合を考える。この場合の構成を Figure 3 に示す。参照信号が複数の周波数成分を持つ場合は重み部分を並列に接続すればよい。このとき参照信号 $x(n)$ は $A \cos(\omega_0 n)$ で表せる。ここで ω_0 は正弦波の周波数であり、所望信号 $d(n)$ に含まれる抑圧したい信号成分の周波数と一致する。また A は振幅である。信号 $x_1(n)$ は -90° の位相推移器により生成される。それぞれの適応重みは以下の式により更新される。

$$\begin{aligned} w_i(n+1) &= w_i(n) - \mu e(n) x'_i(n) \quad i = 0, 1 \\ x'_0(n) &= \hat{S} A \cos(\omega_0 n + \phi_S) \\ x'_1(n) &= \hat{S} A \sin(\omega_0 n + \phi_S) \end{aligned} \quad (3)$$

ここで \hat{S} と ϕ_S はそれぞれ周波数 $\omega = \omega_0$ における $\hat{S}(z)$ の振幅と位相である。 $S(z)$ の出力は

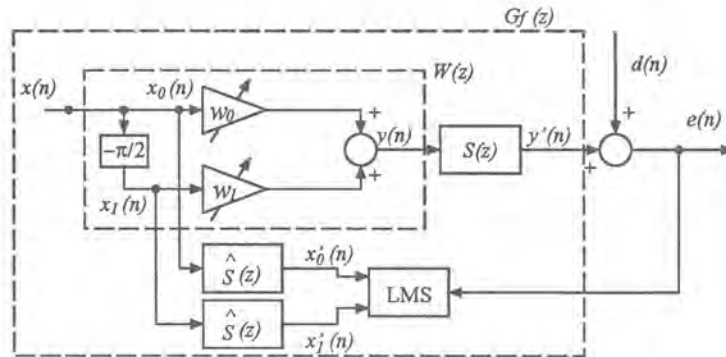


Figure 3: Filtered-X LMS アルゴリズムを用いた周期的 ANC システムのブロック線図

$$y'(n) = w_0(n) S A \cos(\omega_0 n + \phi_S) + w_1(n) S A \sin(\omega_0 n + \phi_S) \quad (4)$$

と書ける。ここで S と ϕ_S はそれぞれ周波数 $\omega = \omega_0$ における $S(z)$ の振幅と周波数である。(3), (4) に z 変換を適用すると、 $e(n)$ から $y'(n)$ への開ループ伝達関数 $G_f(z)$ は

$$\begin{aligned} G_f(z) &= -\mu S \hat{S} A^2 \frac{z \cos(\omega_0 + \Delta_\phi) - \cos \Delta_\phi}{z^2 - 2z \cos \omega_0 + 1} \\ \Delta_\phi &= \phi_S - \phi_S \end{aligned} \quad (5)$$

となる。したがって $d(n)$ から $e(n)$ への閉ループ伝達関数 $H_f(z)$ は

$$\begin{aligned} H_f(z) &= \frac{1}{1 - G_f(z)} \equiv \frac{H_{fn}(z)}{H_{fd}(z)} \\ H_{fn}(z) &= z^2 - 2z \cos \omega_0 + 1 \\ H_{fd}(z) &= z^2 - (2 \cos \omega_0 - \mu S \hat{S} A^2 \cos(\omega_0 + \Delta_\phi))z + 1 - \mu S \hat{S} A^2 \cos \Delta_\phi \end{aligned} \quad (6)$$

と書ける。もし $S(z) = \hat{S}(z) = 1$ ならば、上式は

$$H_f(z) = \frac{z^2 - 2z \cos \omega_0 + 1}{z^2 - z(2 - \mu A^2) \cos \omega_0 + 1 - \mu A^2} \tag{7}$$

と書き換えられる。これは従来の適応ノッチフィルタの伝達関数 [1] と一致する。

(7) と (6) の振幅特性の例を Figure 4 に示す。実線は (7) に、点線は (6) に対応する。ここで $\hat{S}(z) = S(z)$ と仮定し、 $S(z)$ として 64 タップの FIR フィルタを用いた。実線は典型的なノッチフィルタの特性であるが、点線には unnecessary ピーク値が現れている。これは $S(z)$ および $\hat{S}(z)$ の影響である。もし $v(n)$ の周波数成分がこれらのピーク位置に近いところに位置するとそれらは増幅され、これにより周期的 ANC システムの性能劣化が引き起こされる。

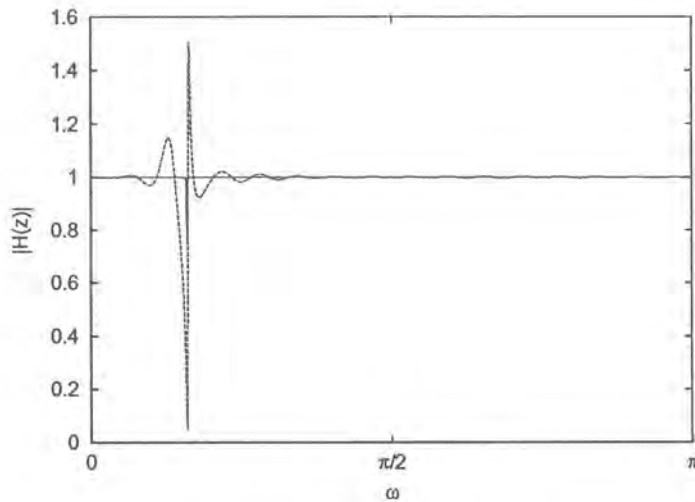


Figure 4: (6) および (7) の周波数特性.

3.2 Kuo の周期的 ANC システム

この欠点を克服するために Figure 5 に示される構成が用いられる。追加した適応フィルタの部分は従来の適応ノッチフィルタと同様の構造になっているので、 $e(n)$ から $e'(n)$ への伝達関数 $H_c(z)$ は

$$H_c(z) = \frac{\mu_c A^2 (z \cos \omega_0 - 1)}{z^2 - z(2 - \mu_c A^2) \cos \omega_0 + (1 - \mu_c A^2)}$$

と書ける。ここで μ_c は重み c_0, c_1 の適応利得である。 $e'(n)$ から $y'(n)$ への開ループ伝達関数は (5) と同じである。従って $d(n)$ から $e(n)$ への閉ループ伝達関数 $H(z)$ は

$$H(z) = \frac{1}{1 - G_f(z)H_c(z)} \equiv \frac{B(z)}{A(z)}$$

となる。さらに計算すると、 $H(z)$ の分母は以下の 4 次の多項式となることがわかる。

$$\begin{aligned} A(z) &= \sum_{i=0}^4 a_i z^i \\ a_4 &= 1 \end{aligned} \tag{8}$$

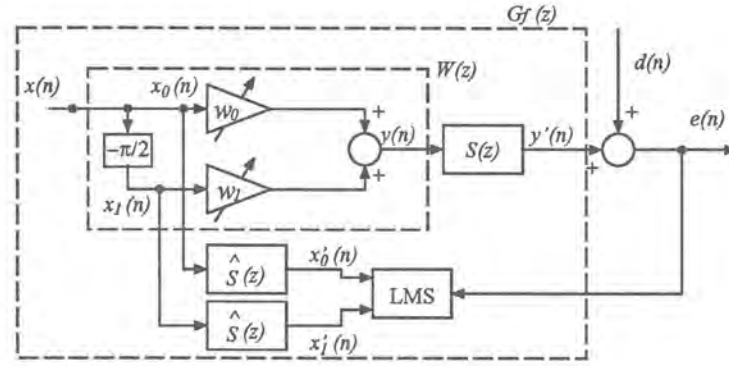


Figure 5: 通過域外乱を低減した Filtered-X LMS アルゴリズムを用いた周期的 ANC システムのブロック線図

$$\begin{aligned}
 a_3 &= -2(r_c \cos \theta_c + \cos \omega_0) \\
 a_2 &= r_c^2 + 4r_c^4 \cos \theta_c \cos \omega_0 + 1 + \mu \mu_c S \hat{S} A^4 \cos \omega_0 \cos(\omega_0 + \Delta_\phi) \\
 a_1 &= -2r_c(r_c \cos \omega_0 + \cos \theta_c) - \mu \mu_c S \hat{S} A^4 (\cos \omega_0 \cos \Delta_\phi + \cos(\omega_0 + \Delta_\phi)) \\
 a_0 &= r_c^2 + \mu \mu_c S \hat{S} A^4 \cos \Delta_\phi \\
 r_c &= \sqrt{1 - \mu_c A^2} \\
 \cos \theta_c &= \frac{(2 - \mu_c A^2) \cos \omega_0}{2r_c}
 \end{aligned}$$

4 安定条件

Jury テスト [3] を (6) に適用し Figure 3 の安定条件を確認する. その結果以下の条件が得られる.

$$\cos(\omega_0 + \Delta_\phi) > \cos \Delta_\phi \quad (9)$$

$$\mu S \hat{S} A^2 \cos \Delta_\phi < 2 \quad (10)$$

$$\mu S \hat{S} A^2 \cos \Delta_\phi > 0 \quad (11)$$

μ , S , \hat{S} および A^2 は正なので, (11) から $\cos \Delta_\phi$ は正でなければならない. 従って位相差は $|\Delta_\phi| < \pi/2$ の範囲に制限される. このとき (10) は適切な μ に対しては成立する. しかし, (9) より, ω_0 に依存して Δ_ϕ の範囲は更に制限される.

同様の手法を (8) に適用し, Figure 5 の安定条件について考察する. $A(z)$ は 4 次の多項式なので, 解析的に計算することは難しい. そこで, $\mu S \hat{S} A^2$ および $\mu_c A^2$ は十分小さいと仮定し, μ あるいは μ_c に関する 2 次以上のオーダーの項が無視できるものとする. そのとき, 以下の条件が得られる.

$$\mu_c A^2 < 2 \quad (12)$$

$$\mu S \hat{S} A^2 [-2 \cos \Delta_\phi - 3 \cos \omega_0 \cos \Delta_\phi + \cos(\omega_0 + \Delta_\phi)] > -(1 + \cos \omega_0)(2 - \mu_c A^2) \quad (13)$$

$$\mu S \hat{S} A^2 [2 \cos \Delta_\phi - 3 \cos \omega_0 \cos \Delta_\phi + \cos(\omega_0 + \Delta_\phi)] < (1 - \cos \omega_0)(2 - \mu_c A^2) \quad (14)$$

$$\mu S \hat{S} A^2 [2 \cos \Delta_\phi + \cos \omega_0 (-3 \cos \omega_0 \cos \Delta_\phi + \cos(\omega_0 + \Delta_\phi))] < (1 - \cos^2 \omega_0)(2 - \mu_c A^2) \quad (15)$$

$$\mu S \hat{S} \sin^2 \Delta_\phi < \mu_c \cos \Delta_\phi \quad (16)$$

(16) から必要条件 $|\Delta_\phi| < \pi/2$ が得られる。もしこの条件が成立するならば他の不等式は任意の ω_0 において μ と μ_c が適切ならば成立する。逆に、もし (12)–(15) を満たす μ と μ_c が与えられたならば、(16) より Δ_ϕ の範囲が得られる。

5 シミュレーション

(16) より得られた $|\Delta_\phi|$ に対する安定限界の正確さを確認する。Figure 6 に示すような周波数特性をもつ 65 タップの FIR フィルタを $S(z)$ として用いる。 $v(n) = 0$ とし加法雑音がないと仮定する。 ω_0, μ_c はそれぞれ 0.9694, 0.01 と固定する。 $\omega = 0.9694$ における $\hat{S}(z)$ の振幅は 1.888 とする。 μ は 0.0001 から 0.01 の間で変化させる。前節で導出した理論限界と、シミュレーションにより得られた結果を Table 1 に示す。 μ が十分小さいとき、実験結果は理論値と一致する。一方 μ が大きいとき、理論値と実験値の差は近似の効果により大きくなる。しかし μ が大きくなるにしたがって $|\Delta_\phi|$ の安定限界は小さくなるという傾向は同じである。

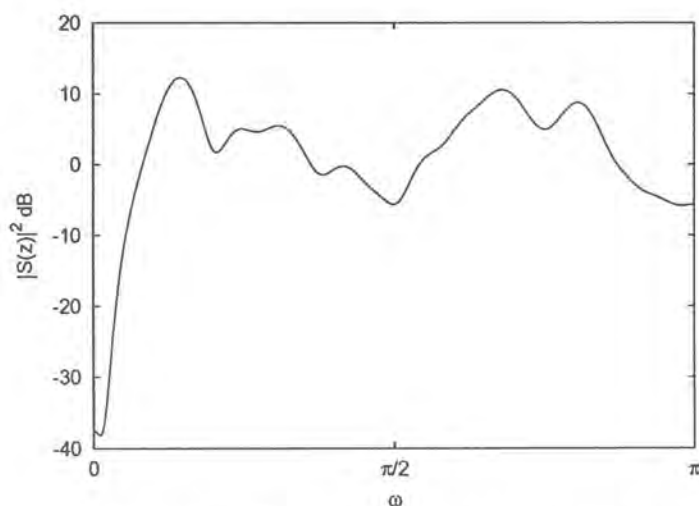


Figure 6: 65 タップ FIR フィルタの周波数特性

6 結論

Kuo と Ji により提案された周期的 ANC システムのための修正アルゴリズムの安定条件について考察した。従来の FXLMS アルゴリズムにおいてよく知られている推定 2 次経路伝達関数との 2 次経路伝達関数の位相差が 90° 以内でなければならないという安定条件と同様の条件が修正アルゴリズムにおいても必要であることを確認した。

μ	$ \Delta_\phi $ の理論限界	実験より得られた $ \Delta_\phi $ の限界
0.0001	1.535	1.51
0.0005	1.399	1.36
0.001	1.245	1.18
0.005	0.711	0.51
0.01	0.517	0.21

Table 1: 周期的 ANC システムが安定であるための位相誤差の限界値

References

- [1] Widrow, B., Glover, J. R., McCool, J. M., Kaunitz, J., Williams, C. S., Hern, R. H., Zeidler, J. R., Dong, E., and Goodlin, R. C., "Adaptive noise canceling: principles and applications," *Proc. IEEE*, Vol. 63, pp. 1692–1716 (1975).
- [2] Kuo, S. M. and Ji, M., "Passband disturbance reduction in periodic active noise control systems," *IEEE Trans. Speech and Audio Processing*, Vol. 4, no. 2, pp.96–103 (1996).
- [3] Kamen, E. W. and Heck, B. S., *Fundamentals of Signals and Systems Using MATLAB*. Prentice-Hall, Upper Saddle River, New Jersey (1997).

大学スキー実習におけるスノーボードの運動強度

Exercise Intensity of Snowboarding in Physical Education Classes

岡本 進

Susumu OKAMOTO

Abstract

The purpose of this study was to determine the physiological intensities of snowboarding in physical education classes. Heart rates during the exercise of snowboarding were measured on two male and three female university students. Heart rate was recorded continuously by using the heart rate monitor. Oxygen uptake in percent of maximal oxygen uptake during snowboarding was calculated from the equation of relationship between heart rate and oxygen uptake obtained during exhaustive rowing test on a rowing-ergometer.

Mean heart rate averaged 129.2 ± 10.4 beats/min and estimated oxygen uptake averaged 1.02 ± 0.36 l/min. These values correspond to $68.0 \pm 5.1\%$ of maximal heart rate max, $46.0 \pm 13.3\%$ of maximal oxygen uptake, respectively. The net energy expenditure during snowboarding for two and half hours averaged 0.082 ± 0.022 kcal/kg·min. Calculated RMR averaged 5.16 ± 1.50 . These results suggest that physiological intensity of snowboarding will be moderate.

1 緒言

レジャー白書2002年⁹⁾によると、余暇活動としてスノーボードを取り入れる人口が近年急増している。1997年のスノーボード人口は320万人であり2001年には530万人とわずか5年で65%の伸びを示し、そのほとんどが若年齢層で占められている。一方、スキーは年々参加者が減り、2001年には1,080万人となり、1993年の1,860万人からほぼ10年で58%減少したことになる。スノーボードの急激な普及の要因は、スノーボードがワールドカップやオリンピックで採用され、テレビなどの放映が増えたこと。装備が軽量で身軽であること。スキーに比べて短時間にレベルアップが図れ

ること。独特のファッションが若者の感性に触れたこと。スキー場が滑走斜面を解放したことなどが考えられる。さらには、スノーボード特有のサイドウエイスタンスがスキー初心者に見られる窮屈なブルーク姿勢と異なり、サーフボードやスケートボードと同様、スマートであると感じていることも見逃せない。

しかし、日本においては、このあまりの急激な普及に環境がついていかず、さまざまな不具合が生じている。たとえば、スキーヤーとの軋轢、専用ゲレンデの不足、指導者の不足、不十分な指導プログラム等の問題である。このような状況から望ましい環境条件を整備しようとする機運が高

まり、初心者指導のための安全で適切な指導プログラム、専用ゲレンデの整備が図られ、教材として取り入れられるようになり、高校や大学のスキー実習にスノーボードが導入されるケースが増えている¹⁰⁾。本学のスキー実習においてもスノーボードのニーズが高く、実習先のゲレンデがボーダーに解放されたのを機会に体験学習として2000年からスノーボードを導入する事にした。今後もさらに普及が進み、手軽に楽しめるスノースポーツとして、また、健康づくりのための運動として重要な位置を占めることになるであろう。

ところで、健康づくりのための運動として、スノースポーツの運動強度を扱った研究は数少ない。著者は前報¹⁵⁾において心拍数変動からスキー講習中の運動強度を推定したが、スノーボードの運動強度に関する研究は見当たらない。そこで、本研究では、スノーボード体験講習時の生理的運動強度に着目し、フィールドでの測定からスノーボードの運動強度をスキーとの比較によって明らかにし、運動処方や今後の指導計画立案に役立てることを目的とした。

2 方法

2.1 被検者

被検者は、本学健康・体力科学 I におけるスキー実習に参加した117名のうちの5名（男子2名、女子3名）を対象とした。全員が漕艇部に所属しており、スキーの経験日数は0～14日の範囲にわたっていた。実習はグループによる講習が中心であり、スキーの技能習熟度別に初心者班から上級者班にいたる12班に編成されたが、被検者はおもに初心者班と初級者班に所属していた。スノーボードの経験日数は1名を除き4名が全く初めての

経験であったが、スキー講習時と同じ班構成でスノーボード体験講習が行われた。

被検者には事前に実験の目的、方法および予想される問題点について十分な説明を行った上で、実験に参加することを承諾した。実習前に実験室で形態測定と運動負荷テストを受け、実習期間中は加速度計と心拍計を装着し、身体活動量と心拍数の測定を受けた。

2.2 形態の測定

形態の測定では、身長、体重および皮下脂肪厚を計測した。皮下脂肪厚は、皮脂厚計（栄研式）を用いて上腕背部と肩胛骨下縁部を計測し、これらの値からBrožecら¹⁾およびNagamineら¹⁴⁾の式によって体脂肪率を算出した。

2.3 運動負荷テスト

運動負荷テストにおける運動様式は、被検者が漕艇部員であることから日常的に慣れている漕運動とした。負荷はローイングエルゴメータ（コンセプトⅡ）を用いて、男子では100wattから、女子では70wattから始め、男女とも30秒ごとに10wattずつ漸増させ、オールアウトに導いた。運動中の呼気ガスは、エアロモニタ（ミナト医科学、AE-280S）により測定し、酸素摂取量を30秒間ごとの平均値として算出した。心拍数は、心電図モニタ（日本電気三栄、バイオビュー2E61VX）を用いて30秒ごとに測定した。これらの測定から、最高心拍数および最大酸素摂取量を求めた。最大酸素摂取量は酸素摂取量のピーク値とした。

被検者の形態、身体組成、呼吸循環機能およびスキー・スノーボードの経験日数を表1に示している。なお、測定は、滋賀県立大学健康体力測定室で実施された。測定時の室温は21℃、湿度は64%であった。

表1. 被検者の身体的特性、呼吸循環機能、およびスキー・スノーボード経験日数

被検者	年齢 (yrs)	身長 (cm)	体重 (kg)	体脂肪率 (%)	最高心拍数 (beats/min)	最大酸素摂取量		経験日数(日)		
						(l/min)	(ml/kg·min)	スキー	ホ-ード*	
男子	Y.S.	18	173.3	68.4	11.8	194	3.19	46.6	7-14	0
	T.O.	19	168.5	74.4	17.4	194	3.98	53.5	0	0
女子	A.N.	19	159.5	55.8	22.2	181	2.26	40.4	0	0
	S.O.	19	160.6	56.5	22.8	194	2.82	49.9	4-7	0
	H.N.	19	152.5	56.8	30.1	187	2.05	36.2	4-7	1-3

2.4 実習日程および講習内容

表2には実習の日程と講習内容を示している。1日目はバスによる宿舎への移動のあと、班編成を行うためにスキー滑走を約1時間にわたり実施している。スキーによる講習は2日目と3日目の午前中であり、スノーボードによる体験講習は3日目の午後に実施している。4日目は個人の復習を課題とする自由滑走であり、スキーまたはスノーボードのいずれかを選択させることになっている。スキーは技術班別講習であるが、スノーボードは初心者を選定した体験講習としたため、引き続きスキーの技術班のまま同一指導プログラムで実施された。指導プログラムはスキーでは大学スキー研究会編スキー教本²⁾に、スノーボードではスノーボード指導教本¹²⁾に準拠した。講習時間はいずれも2時間30分を標準とした。なお、スノーボードの用具はソフトブーツとフリースタイルボードであり、全員がレンタルを利用した。

表2. スキー実習の日程

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1日目									班編成
2日目		講習1 (スキー)			講習2 (スキー)				
3日目		講習3 (スキー)			講習4 (ボード)				
4日目		講習5 スキーボード							

2.5 加速度計による身体活動量の測定

身体活動量の測定にあたっては、加速度計（ライフコーダ、ズケン社製）を用い、起床時から就寝時まで腰部に装着した。この加速度計は4秒ごとに10段階で評価された垂直方向の最大振幅と頻度から運動強度を求め、性、年齢、身長、体重を考慮して1日のエネルギー消費量や運動によるエネルギー消費量を算出する構造となっている。

2.6 心拍数による運動強度の推定

心拍数の測定にあたっては、バンテージXL（POLAR社製）を用いた。電極はベルトで胸部

に装着して、左手首に装着したレシーバーで1分ごとに記録した。装置の設定と脱着は実習前後に宿舎にて行った。講習中の運動強度を心拍数から推定するために、漸増漕運動テストにおける心拍数と酸素摂取量との関係から一次回帰式(a)を求め、安静時から比較的軽度な運動強度までの回帰ライン(b)を想定し、(a)と(b)の2本の直線から被検者ごとに求めることにした。この場合、安静時の心拍数を60拍/分と仮定して、このときの酸素消費量を3.5ml/kg・分とした。

講習中のエネルギー消費量の換算にあたっては、心拍数によって推定した酸素摂取量に熱量変換の5kcal/lを乗じて求めた。（酸素1リットルの燃焼熱量を5kcalとした。）つぎに、エネルギー消費量を体重で除して、体重当たり単位時間当たりのエネルギー消費量（kcal/kg・分）を求めた。この値には安静時のエネルギー消費量も含まれているので、これをグロスのエネルギー消費量とした。安静時のエネルギー消費量を体表面積と基礎代謝基準値⁹⁾から算出して、これを除外した体重当たりのエネルギー消費量をネットのエネルギー消費量とした。また、運動時のエネルギー消費量から安静時のエネルギー消費量を差し引き、これを基礎代謝量で除してエネルギー代謝率（RMR）を求めた。

なお、スキー実習は平成12年2月21日から24日に長野県志賀高原一ノ瀬スキー場で行った。実習期間中の天候は概して晴で、実習中のゲレンデの外気温は-2℃～+5℃であった。

2.7 統計処理

スキーとスノーボードとの平均値の差異は対応のあるt-検定を基に行った。統計的有意水準は危険率5%未満とした。

3 成績

3.1 加速度センサーの日内変動

図1には実習1日目から4日目にかけて、加速度センサーの日内変動の一例（女子:A.N.）を示している。1日目と4日目では日程の大半がバスによる移動に時間を費やしているため、この時間帯における加速度センサーの振幅は小さく、頻度も少

ない。実技講習中の加速度変化のパターンに注目すると、講習1~3(スキー講習時)には振幅レベルが2のまま持続し、後半に一時的に大きな加速度が加わる特徴がみられる。もっとも大きな振幅レベルを示しているのは講習4(スノーボード)であり振動頻度も多い。これらのパターンは他の被検者においても同様にみられた。

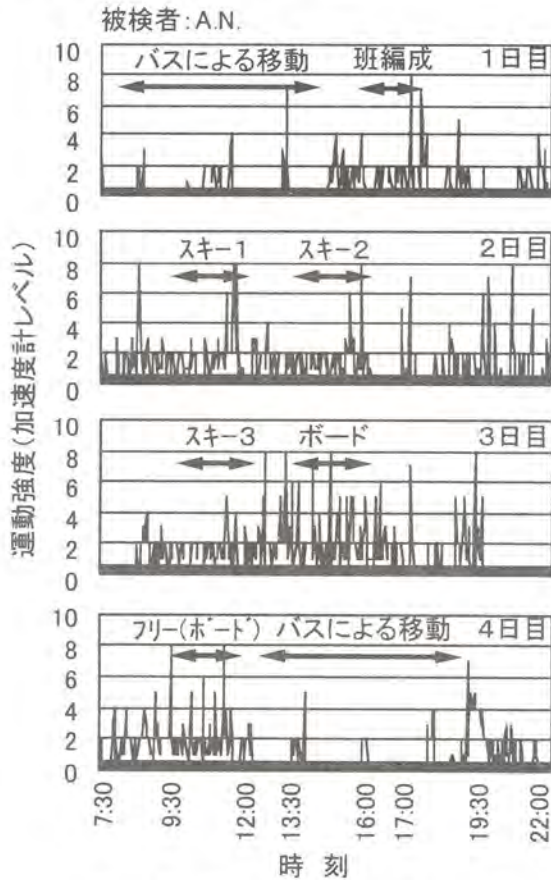


図1. 加速度センサーからみた実習期間中の運動強度の日内変動(一例)

図2には被検者全員の加速度計からみた実習期間中の運動量を平均値と標準偏差で示している。移動日を含む1日目と4日目はそれぞれ239kcal/日, 217kcal/日と少なくなっており、スキー講習のみの2日目は288kcal/日であり、スノーボード体験講習を含む3日目は307kcal/日ともっとも多くなっている。

3.2 心拍数変動

図3には被検者A.N.における2日目からの心拍数変動を示している。スキー講習中の心拍数は、

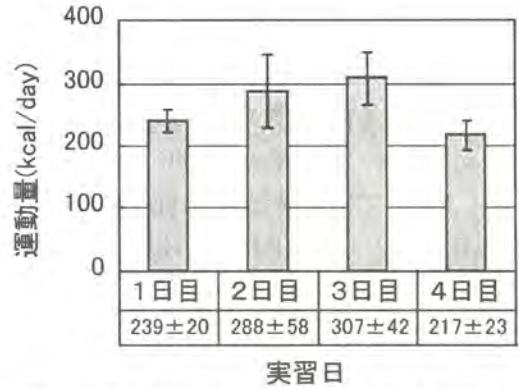


図2. 実習期間中の運動量(平均値±標準偏差)

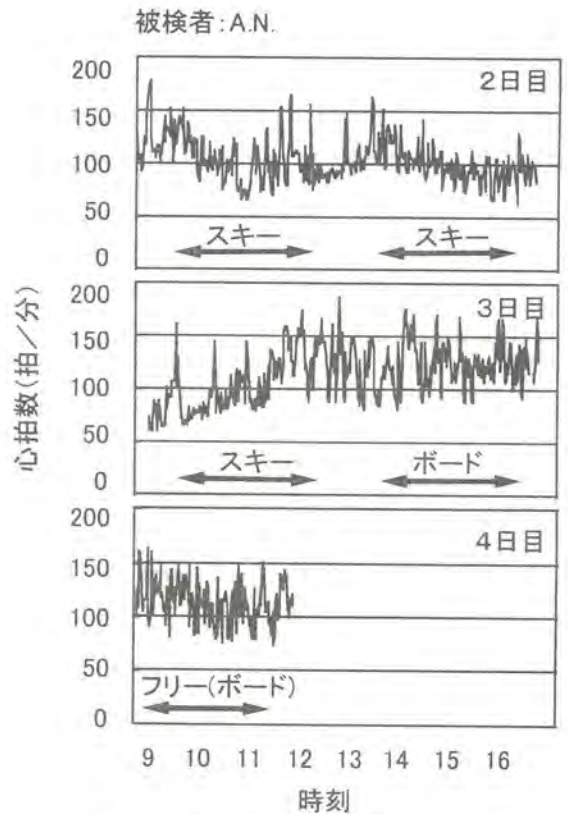


図3. 実習期間中の心拍数変動(一例)

定常状態を示すことなく、およそ80~120拍/分の範囲内で上下動を繰り返しながら推移している。スノーボード講習中の心拍数は、100~140拍/分の範囲内で推移しておりスキーに比べて高いレベルにある。自由滑走ではこの被検者はスノーボードを選択していたが、スノーボード講習時とほぼ同様な傾向を示している。実習期間中を通じての最高値は、175拍/分がスノーボードにおいて出現している。最低値は63拍/分が講習2(スキー)

において出現している。

3.3 講習中の心拍数出現率

図4には被検者A.N.における心拍数の出現率について、スキー（スキー講習1～3）とスノーボードとで比較している。両者とも分布のパターンは正規分布に近いが、スノーボードではスキーに比べてやや右にシフトした形となっている。

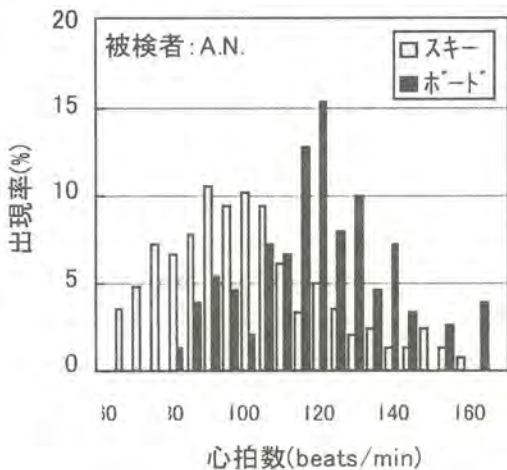


図4. 心拍数の出現率からみたスキー・スノーボード講習時の運動強度の比較(一例)

表3には、講習中の心拍数と推定された酸素摂取量からみた運動強度をスキーとスノーボードとで比較している。スキーの平均心拍数は103～128拍/分の範囲にあり全体の平均値および標準偏差は117±10拍/分である。スノーボードの平均心拍数は116～142拍/分の範囲にあり全体の平均値および標準偏差は129±10拍/分である。この平均心拍数は、最高心拍数に対する割合でみるとスキーでは56.7～65.9%、スノーボードでは59.5～72.9%の範囲にあり、全体の平均値と標準偏差は

スキーでは61.4±4.3%、スノーボードでは68.0±5.1%に相当している。また、講習時の酸素摂取量についてみると、スキーでは0.69～1.53l/分の範囲にあり、平均値と標準偏差は1.03±0.32l/分である。スノーボードでは0.79～1.85l/分の範囲にあり、平均値と標準偏差は1.27±0.38l/分である。最大酸素摂取量に対する割合はスキーでは37.3±11.6%であり、スノーボードでは46.0±13.3%である。これらの平均値を比較すると、いずれもスノーボード講習の方がスキー講習に比べて有意(0.01%水準)に大きい値を示した。

表4には、講習中の心拍数から推定されたエネルギー消費量からみた運動強度をスキーとスノーボードとで比較している。2時間30分にわたる講習時のグロスのエネルギー消費量についてみると、スキーでは519～1,145kcalの範囲にあり、平均値と標準偏差は776±240kcalである。スノーボードでは595～1,406kcalの範囲にあり、平均値と標準偏差は960±290kcalである。ネットのエネルギー消費量についてみると、スキーでは0.042～0.084kcal/kg・分の範囲にあり、平均値と標準偏差は0.063±0.019kcal/kg・分である。スノーボードでは0.051～0.107kcal/kg・分の範囲にあり、平均値と標準偏差は0.082±0.022kcal/kg・分である。これをRMRに換算するとスキーでは2.6～5.4の範囲にあり、平均値と標準偏差は4.0±1.3である。スノーボードでは3.2～6.9の範囲にあり、平均値と標準偏差は5.2±1.5である。これらの平均値を比較すると、いずれもスノーボード講習の方がスキー講習に比べて有意(0.01%水準)に大きい値を示した。

表3. 講習中の心拍数および推定された酸素摂取量からみたスキー・スノーボードの運動強度

被検者	講習中の平均心拍数		最高心拍数に対する割合		講習時の酸素摂取量		最大酸素摂取量に対する割合		
	スキー	ボード	スキー	ボード	スキー	ボード	スキー	ボード	
	(beats/min)		(%)		(l/min)		(%)		
男子	Y.S.	128	142	65.9	72.9	0.96	1.24	30.1	39.0
	T.O.	123	137	63.4	70.5	1.53	1.85	38.4	47.1
女子	A.N.	103	123	56.9	68.0	0.85	1.19	37.8	52.9
	S.O.	113	116	56.7	59.5	0.69	0.79	24.6	28.1
	H.N.	120	129	64.2	69.1	1.14	1.29	55.4	62.9
平均値	117	129	61.4	68.0	1.03	1.27	37.3	46.0	
標準偏差	10	10	4.3	5.1	0.32	0.38	11.6	13.3	
p	p<0.01		p<0.01		p<0.01		p<0.01		

表4. エネルギー消費量からみた講習時のスキーとボードの運動強度

被検者	講習時のグロスのエネルギー消費量		講習時のネットのエネルギー消費量				R. M. R.		
	スキー	ボード	スキー	ボード	スキー	ボード	スキー	ボード	
	kcal/150min		kcal/150min		kcal/kg·min				
男子	Y.S.	719	933	509	723	0.050	0.070	2.9	4.1
	T.O.	1,145	1,406	936	1,196	0.084	0.107	5.4	6.9
女子	A.N.	641	895	479	734	0.057	0.088	3.6	5.5
	S.O.	519	595	356	432	0.042	0.051	2.6	3.2
	H.N.	854	969	696	811	0.081	0.095	5.3	6.2
平均値	776	960	595	779	0.063	0.082	4.0	5.2	
標準偏差	240	290	226	274	0.019	0.022	1.3	1.5	
p	p<0.01		p<0.01		p<0.01		p<0.01		

4 考察

最近、加速度センサーの小型・軽量化が進み、日常生活活動に支障なく長時間の測定が可能となったことから、加速度計法による身体活動量測定およびエネルギー消費量推定が急増している¹³⁾。今回用いた加速度計は腰部上下方向の加速度の大きさと揺れの頻度から運動強度を判定する構造になっている。加速度変化を伴わない運動、例えばレジスタンス運動のような静的運動、水泳、ポート漕ぎ、自転車こぎなどの運動では不向きであるといえる。本研究ではスキーおよびスノーボード滑走時には加速度センサーが感知しにくいことが推察されたが、実習期間中の身体活動量の動態を明らかにする目的でこれを用いることにした。加速度変化のパターンは実習期間中の活動状況をよく反映しており、スノーボード講習時の振幅レベルはスキー講習より大きく、振動頻度も多い傾向を示した。実習期間中の運動量は1日目から4日目にかけて、239, 288, 307, 217kcal/日となり、スノーボード講習のあった3日目の運動がもっとも大きい値を示した。これらの値は、後述する心拍数から推定されたエネルギー消費量に比べてかなり低値を示した。

原田ら³⁾は、加速度計を用いた身体活動量の測定は、心拍数から推定した1日のエネルギー消費量を過小評価する傾向があるとしている。児玉ら⁸⁾は、活動日誌法と対比して、両者は高い相関を示すが、加速度計による1日のエネルギー消費量の平均値は日誌法から求めた値より小さいこと

を報告している。とくに両者の差が大きいケースとしてスキーを例にあげている。スキーでは腰部での上下運動が比較的小さいことから、加速度計で運動量を正確にカウントすることが困難であるとしている。加速度計は、対象者の負担も軽く、活動量がメモリーされ、実習期間中の身体活動量の変化パターンを評価する上では有用ではあるが、スキー・スノーボードによる滑走中の動作は加速度センサーが感知しにくいという構造上の欠点をもっており、エネルギー消費量を過小評価することを考慮する必要がある。

本研究における2時間半にわたるスキー講習時の心拍数と推定された酸素摂取量の平均値についてみると、心拍数では117拍/分であり、最高心拍数に対する割合は61.4%に相当していた。また、酸素摂取量では1.03l/分であり、最大酸素摂取量に対する割合は37.3%に相当していた。これらの値を前報¹⁵⁾と比較するとほぼ同値となっており、統計的に有意差は認められなかった。今回のスキー講習に関するプログラム内容、持続時間、運動様式、さらにはスキー場の環境温度が前報¹²⁾とほとんど変わらなかったことから、再現性が認められ、スキー講習中の運動強度は比較的低強度に属する運動であることが確認された。

これまでに、多くの研究者によって心拍数から各種スポーツの運動強度が求められているが、スノーボードを扱った生理的負担度に関する報告はきわめて少なく、掛水⁷⁾が大学におけるスノーボード授業に参加した男子5名の講習中の平均心拍数は119~155拍/分であったと報告しているに

すぎない。本研究はスノーボードの運動強度をスキー講習と比較することによってその運動特性を明らかにしようと試みたが、スノーボード講習時の平均心拍数は116~142拍/分の範囲にあり、相対的心拍数は $68.0 \pm 5.1\% \text{HRmax}$ 、運動強度は $46.0 \pm 13.3\% \dot{V}O_2\text{max}$ となり、いずれもスキーに比べて有意に大きな値を示した。また、講習中の心拍数から推定された2時間30分にわたるネットのエネルギー消費量はスノーボードでは779kcalとなりスキーの595kcalを有意に上回った。さらに、換算されたスノーボードのRMRは5.2となり、スキーの4.0より有意に大きい値を示した。これは、スノーボードが初心者者を想定した体験講習であって、滑走時間に比べて登行やバランス維持、転倒とそれに伴う起き上がり動作に終始していたこと。両足を固定されていることによる心理的恐怖感や慣れないボード操作が心拍数を上昇させる要因につながったと考えられる。伊藤ら⁵⁾は大学における正課体育実技授業中の心拍数から各種目のRMRを求めているが、それによるとソフトボール5.9~6.6、バレーボール5.0~5.6、バドミントン4.3~6.3、卓球3.6~4.7、軟式庭球4.0~5.8であったと報告している。本研究におけるスノーボードの運動強度を歩行速度にあてはめると100m/分に相当し、スキーでは90m/分に相当する⁴⁾。このことから今回の体験講習におけるスノーボードは、中程度の運動強度に属する運動と位置づけられよう。

これまで、スキー・スノーボードを全身持久性の向上といった観点から検討を加えた報告はほとんどみられない。それは、スキー・スノーボード本来の目的が用具を自由に操作して滑走を楽しむといった巧緻性にあり、エネルギー面よりサイバネテックスな面に重点がおかれているからであろう。一般に、全身持久力性向上のための運動強度は、 $70\% \dot{V}O_2\text{max}$ 以上の負荷で数分間以上の全身運動が必要であるといわれている。この点からみると、本研究のスノーボード講習時の心拍数および推定された酸素摂取量は、ともに有酸素能力を改良するための有効刺激となるかどうかは疑わしい。しかし、進藤ら¹⁶⁾は $50\% \dot{V}O_2\text{max}$ を

用いた60分間のトレーニングで効果があったと報告しているところから、低強度であっても時間を長くすれば体力水準の低い者にとっては有酸素能力に効果が期待されることを示している。また、今回得られたスノーボードのRMRは3.2~6.9の範囲にあった。運動強度としてのRMR2.1~4.0はやや強い運動となり、とくにRMR4.0は定常状態成立の上限である¹⁴⁾とされている。講習中には時々休息時間を挿入するなど、実習計画にはとくに配慮が必要であろう。

5 総括

本学学生男子2名、女子3名を対象に、加速度計と心拍計とを用いてスキー実習におけるスノーボード（体験）の運動強度が推定された。得られた成績を要約すると、以下のとおりである。

- (1) 加速度計によるセンサーのレベルはスキー講習に比べてスノーボード講習に高く、頻度も多い傾向を示し、スノーボード講習を含む実習3日目の1日当たりのエネルギー消費量は実習期間を通じてもっとも大きい値を示した。
- (2) 心拍数の分布状況を出現率で比較すると、どちらも正規分布を描くが、スノーボードではスキーに比べてやや右にシフトした形となっており、スノーボードの平均心拍数は 129.2 ± 10.4 拍/分であり、スキーでは 117.4 ± 9.7 拍/分であった。最高心拍数に対する割合では、スノーボードでは $68.0 \pm 5.1\%$ に相当しており、スキーでは $61.4 \pm 4.3\%$ であった。
- (3) 推定された実技講習中の分時あたりの酸素摂取量はスノーボードでは 1.02 ± 0.36 l/分、スキーでは 0.98 ± 0.15 l/分であった。最大酸素摂取量に対する割合はスノーボードでは $46.0 \pm 13.3\%$ であり、スキーでは $37.3 \pm 11.6\%$ であった。
- (4) 2時間30分にわたる講習時のグロスのエネルギー消費量は、スノーボードでは 960 ± 290 であり、スキーでは 776 ± 240 kcalであった。ネットのエネルギー消費量はスノーボードでは 0.082 ± 0.022 kcal/kg・分であり、スキーでは 0.063 ± 0.019 kcal/kg・分であった。RMRに換算したスノーボードの運動強度は 5.16 ± 1.50 であり、

スキーでは 3.95 ± 1.31 であった。

文 献

- 1) Brožec, J., Grande, F., Anderson, J.T. and Keys, A.: Densitometric analysis of body composition, Revision of some quantitative assumptions. *Ann. N.Y. Acad. Sci.*, 110, 113-140, 1963.
- 2) D.S.K. (大学スキー研究会) 編: スキー教本, 東京, 杏林書院, 1987.
- 3) 原田亜紀子, 川久保清, 李延秀, 岩垂信, 池田千恵子, 茂住和代, 南伸子: 24時間活動記録, 加速度計による1日消費エネルギー量の妥当性-Flex HR法を用いた検討-, *体力科学*, 50, 229-236, 2001.
- 4) 橋本勲: スポーツとエネルギー代謝, *臨床栄養*, 78, 30, 1991.
- 5) 伊藤稔, 伊藤一生, 北村栄美子, 小川邦子, 前田喜代子: 女子学生の体育実技授業中の心拍数の変動と運動強度の推定について, *体育科学*, 6, 65-76, 1978.
- 6) 自由時間デザイン協会編: レジャー白書2002-活動伸びるも市場に反映せず-, 自由時間デザイン協会, 2002.
- 7) 掛水隆: 東京電気大学におけるスノーボード授業, *大学体育*, No.72, 65-67, 2001.
- 8) 児玉宜子, 玉腰暁子, 西塚隆伸, 平野直子, 川村孝, 大野良之: 加速度計による1日のエネルギー消費量測定の妥当性-活動日誌法との対比-, *日本公衛誌*, 49, 643-647, 2002.
- 9) 厚生省保健医療局健康増進栄養課, 第五次改訂日本人の栄養所要量, 第一出版, 1994.
- 10) 榎本直文: 「スノースポーツコース」における大学体育目標「身体を理解」の開発研究, *大学体育*, No.75, 77-90, 2002.
- 11) Nagamine, S. and Suzuki, S.: Anthropometry and body composition of Japanese youngmen and women. *Human Biol.*, 36, 8-15, 1964.
- 12) 日本スノーボード協会著: スノーボード指導教本, 東京, 山と溪谷社, 2001.
- 13) 新実光朗, 武内陽子, 中村玲子, 大井浄, 加藤泰久, 横地正裕, 津下一代: 多メモリ-加速度計測装置付歩数計(生活習慣測定計)による身体活動の評価, *プラクティス*, 15, 433-438, 1998.
- 14) 沼尻幸吉: 活動のエネルギー代謝, *労働科学研究所*, 東京, 1979.
- 15) 岡本進: 心拍数からみた大学スキー実習中の運動強度の推定, *滋賀県立大学国際教育センター研究紀要*, No.5, 169-175, 2000.
- 16) 進藤宗洋, 田中宏暁, 小原繁: 自転車運動による50% $\dot{V}O_2\max$, 60分間トレーニングが成人女子に及ぼす影響, *体育科学*, 3, 58-67, 1975.
- 17) 吉武裕: エネルギー代謝測定法の応用的展開, *臨床スポーツ医学*, 18, 419-425, 2001.

高齢者の転倒危険因子および体力に及ぼす
ウォーキングと転倒予防体操の効果

**Effects of Walking and Physical Conditioning Exercise on Risk
Factors of Falling and Physical Fitness in the Elderly**

寄本 明

Akira YORIMOTO

Abstract

A study was conducted to investigate the effects of walking and physical conditioning exercise on risk factors of falling and physical fitness in the elderly. The subjects were divided into two groups; a group of 10 women [mean age (SD); 76.7 (4.4) years] who had one or more incidents of accidental falling down, and a control group of 23 women [age 72.3 (3.9) years] who never had an incident of falling. The subjects participated in a 6 month walking and physical conditioning exercise (light muscle training). Their height, weight, distribution of body fat, blood pressure, grip strength, maximum step length, one-leg balancing with open eyes, the sway at the center of pressure, functional reach test, step test, stepping (sitting position), jumping reaction time, vertical jump, and sitting trunk flexion were measured before and after this program. Furthermore, medical examinations by interview were asked at the same time.

Following this walking and physical conditioning exercise, step test, stepping (sitting position) and sitting trunk flexion in the falling experience group increased significantly after 6 months. In the control group BMI, systolic and diastolic blood pressure decreased significantly, one-leg balancing with open eyes, step test, functional reach test and vertical jump increased significantly by this exercise program. The physical fitness levels were found to be significantly lower in the falling experience group than in the control group. In conclusion, these results suggest that walking and physical conditioning exercise can improve both the risk factors of falling and physical fitness (muscular power, agility, flexibility and equilibrium function).

緒 言

高齢社会を迎えた我が国において寿命を延長

させるだけでなく、健康で活力のある長寿の達成が重要な課題となってきた。そのためには心身ともに良好で自立した生活が必要となり、寝たきり

にならないことが最重要視される。

高齢者が寝たきりになる原因は脳血管疾患が最も多く、次いで転倒による骨折である⁷⁾。骨折は下肢とくに大腿骨頸部の骨折であり、その大半が転倒を直接の原因としており、高齢者にとって転倒しにくい身体づくりが重要な体力基盤と考えられる。一方、転倒は女性の方が男性よりも高い発生率であり⁸⁾、転倒による骨折も女性が男性より1.8倍高いと報告されている⁹⁾。

そこで、本研究では高齢女性を対象に過去1年間に転倒経験がある転倒群と転倒経験のないコントロール群について、体力と転倒との関連を検討するとともに体力および転倒危険因子に及ぼすウォーキングと転倒予防体操の運動効果を検討した。

方 法

1. 被験者

被験者は、過去1年に転倒経験があるか或いはつまずきやふらつきがよく起こる転倒の危険性の高い71~84歳の女性10名(Falling群)と、転倒経験のない67~81歳の女性23名(Control群)、合計33名である。被験者の身体的特徴を表1に示した。

Table 1. Characteristics of the subjects

Subjects	Age (yrs)	Height (cm)	Weight (kg)	%fat (%)
Falling	76.7±4.4	146.7±3.4	50.6±5.9	26.1±3.8
Control	72.3±3.9	149.0±4.5	51.1±6.4	25.5±4.1

2. 運動処方

被験者は転倒予防を目的とし、ウォーキングと転倒予防体操を6ヶ月間実施した。ウォーキングは運動強度40~50% $\dot{V}O_2\max$ 程度で、運動時間は1回20~30分間以上を目標として行った。転倒予防体操は鈴木による転倒予防体操¹²⁾を基本として、下肢および体幹部の軽い筋力トレーニングおよび平衡機能向上のための体操を行った。なお、

運動頻度は3~4回/週を目標としたが、その実施に関しては各個人の意志に任せた。実施状況は運動の内容とその量を運動日誌として記録し、把握した。また、1ヶ月に1回程度は被験者が集まり共に運動をする機会を設け、運動継続のための啓発と被験者間の情報を交換を行った。

3. 形態・機能測定項目とその方法

ウォーキングおよび転倒予防体操の効果を見るため、運動実施期間前後に形態・機能の測定を行った。

形態測定項目は、身長、体重、BMI (body mass index) および体脂肪率である。体脂肪率は手部和足部に電極を装着し、インピーダンス法により求め、BMIは身長(m)と体重(kg)から kg/m^2 により算出した。さらに、循環機能として血圧を測定した。

機能測定項目は、転倒危険因子および高齢者の日常生活動作を反映していると考えられる10項目のパフォーマンステストを選出し実施した。

筋力としては握力と最大1歩踏み出しテストの測定を実施した。握力はスメドレー式握力計を用い所定の方法¹³⁾に準拠して行った。最大1歩踏み出しテストは両足を揃えて立位姿勢をとり、大きく足を1歩前方へ踏み出し、その際の爪先から爪先までの距離を測定した。踏み出した後はバランスを崩さず自力で姿勢が保持できることとし、転倒しないよう補助者を付けた。

瞬発力として垂直跳びを実施した。垂直跳びはメジャータイプのジャンプメータを用い、所定の方法¹³⁾に準拠して行い、転倒しないよう補助者が着地時に被験者の腰部を保持した。

敏捷性として座位ステッピングと全身反応時間の測定を実施した。座位ステッピングは浅めに椅子に腰掛け両手で椅子を握り身体を固定させ、足元の2本のライン(30cm間隔)の内側に両足をおき、20秒間の足の開閉を実施、内側に両足がついた回数を評価した³⁾。全身反応時間は光刺

激から跳躍反応をするまでに要した時間を1/1000秒の精度で計測するもので所定の方法¹³⁾に準拠して行った。

柔軟性として長座位体前屈を測定した。長座位体前屈は長座位体前屈計を用い、所定の方法¹³⁾に準拠して行った。

平衡性として開眼片足立ち、身体動揺、ファンクショナルリーチ、足踏みテストを実施した。開眼片足立ちは腰に両手をあて片足で立ち、支持足が動いたり、腰にあてている手が離れたり、支持足以外の身体部分が着地した時点までの時間を計測した。身体動揺度は重心動揺計のプレート上にロンベルグ姿勢で30秒間開眼で立ち、その間の重心動揺を測定した。ファンクショナルリーチはDuncan¹⁾の方法に従い、立位姿勢で立ち片腕を水平前方に挙げ肩と同じ高さに保ち、踵を挙げないようにし、可能な限り前傾させ、その時の第三指先端の移動距離を計測した。足踏みテストは立

位姿勢をとり、大腿が水平になる高さまで足を挙げる足踏みを10秒間実施し、回数を数えた。

一方、健康状況および生活内容に関して質問紙を用いて調査したが、本報告では割愛する。

結 果

1. 形態および血圧

図1には身長、体重、BMI、体脂肪率、収縮期血圧および拡張期血圧の運動処方前後の値をグループ別に示した。

身長は両群とも運動による変化はなく、群間の差も認められなかった。体重は転倒群で増加し、コントロール群で減少したが、群間の差は見られなかった。BMIは体重変化の影響から体重同様に転倒群で増加し、コントロール群で減少したが、群間の差は見られなかった。体脂肪率においては両群とも運動による変化はなく、群間の差も認められなかった。

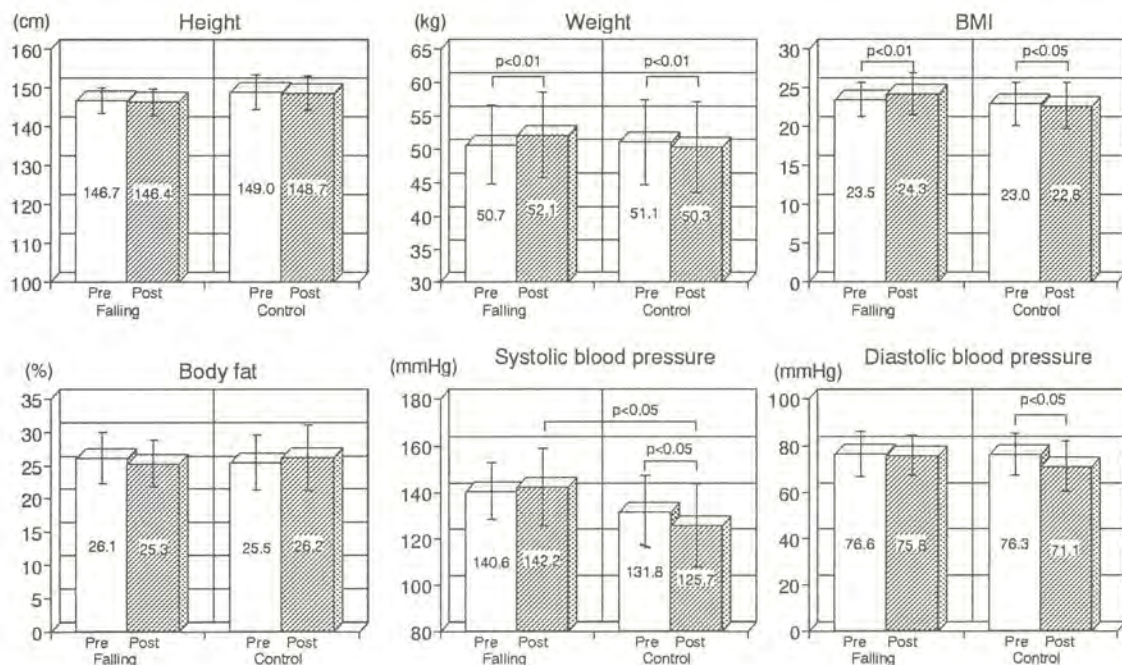


Fig. 1. The effect of exercise on height, weight, BMI, body fat, and blood pressure. Values are means and SD. The p values show the significant differences between pre and post 6 months training.

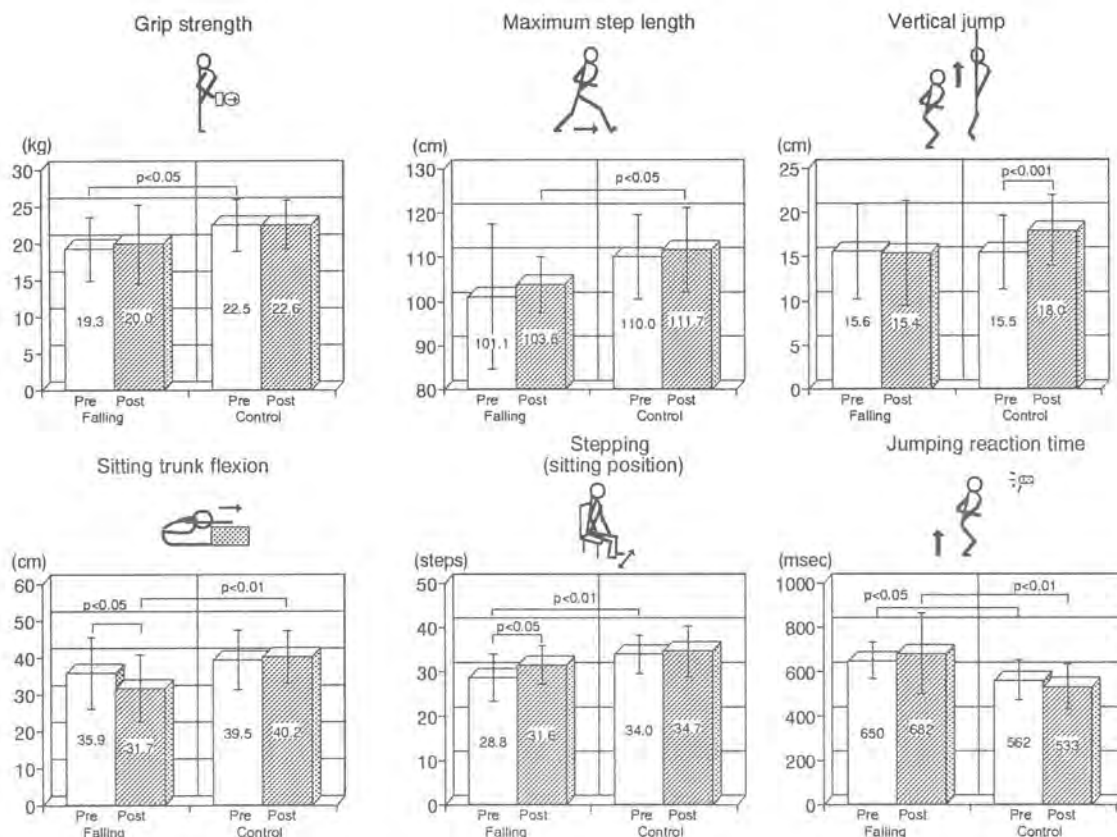


Fig. 2. The effect of exercise on muscular strength, muscular power, flexibility, and agility.

Values are means and SD. The p values show the significant differences between pre and post 6 months training or falling group and control group.

収縮期血圧はコントロール群で運動処方後に有意な低下が見られ、その値は転倒群より低い血圧であった。拡張期血圧でもコントロール群で低下が認められたが、群間に差は見られなかった。

2. 体力および転倒危険因子

図2には握力、最大1歩踏み出しテスト、垂直跳び、長座位体前屈、座位ステッピング、全身反応時間の運動処方前後の変化を示した。

握力は転倒群で増加傾向にあるが有意差は認められなかった。コントロール群は前後で差は見られないが、転倒群より有意に高い値を示した。最大1歩踏み出しテストでは両群とも増加傾向にあるが有意ではなかった。コントロール群は握力と同様に転倒群より有意に高い値であった。

垂直跳びは転倒群で前後の変化は見られな

かったが、コントロール群で有意に増加した。

長座位体前屈は転倒群で低下を示し、コントロール群より低い値となった。コントロール群では前後で有意な変化は見られなかった。

座位ステッピングは転倒群で有意に増加したが、コントロール群に比べ低い値であった。全身反応時間は両群とも前後で有意な変化は認められなかったが、コントロール群が転倒群に比べ短時間での反応を示していた。

図3には開眼片足立ち、身体動揺度、ファンクショナルリーチおよび足踏みテストの運動処方前後の変化を示した。開眼片足立ちはコントロール群で有意に増加し、その値は転倒群より高値であった。重心動揺度は運動前後および両群間にも差は見られなかった。ファンクショナルリ

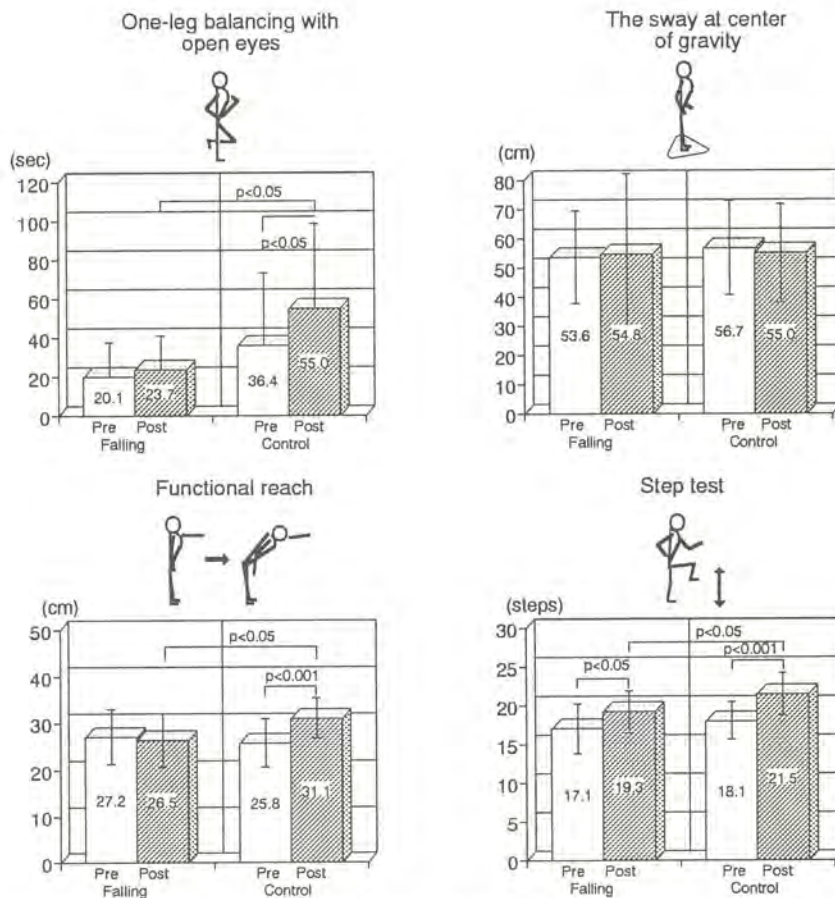


Fig. 3. The effect of exercise on equilibrium function.

Values are means and SD. The p values show the significant differences between pre and post 6 months training or falling group and control group.

一チはコントロール群で有意に増加し、その値は転倒群より高いことが認められた。なお、転倒群には前後で差は見られなかった。足踏みテストは両群とも回数が有意に増加していた。また、コントロール群は転倒群より有意に高値であった。

考 察

高齢期における著しい体力の低下は転倒と密接に関わり、転倒した場合、骨折を起こし、「寝たきり」に結びつく危険性が非常に高い。また、転倒を恐れて本人或いは家族の意志により外出をひかえ、家庭内での閉じこもりが発生してきている。その結果、身体活動不足がより顕著となり、体力低下および機能低下がより深刻な問題とな

ってきている。本研究では転倒を本人の意思からではなく地面またはより低い面に身体が倒れること⁹⁾という定義に従い、過去1年に転倒経験があるか或いはつまずきやふらつきがよく起こる転倒群と、転倒経験のないコントロール群と体力および運動効果を比較検討した。

転倒群はコントロール群に比べて、握力、最大1歩踏み出し、長座位体前屈、座位ステッピング、全身反応時間、足踏み、開眼片足立ち、ファンクショナルリーチが運動処方前或いは後で有意に低かった。すなわち、転倒群は筋力、柔軟性、敏捷性、静的および動的平衡性の各機能がコントロール群より劣っていることになる。転倒は身体のバランスの崩れによって引き起こされるが、バラ

ンス能（平衡性機能）は他の体力要素に比べ加齢変化が大きく、他の体力要素や歩行能力、特に下肢筋力や下肢パワーと高い相関を示し、下肢筋力が一定レベル以下になると急激にバランス能や歩行能力が低下すると報告されている^{4,10)}。下肢筋力の低下は平衡性機能の低下を来とし、転倒の危険性を増加させることになる。また、握力は前腕および手部の筋力測定ではあるが、下肢筋力をはじめ全身の筋力と関連が深く全身の筋力を代表する指標となる⁹⁾。さらに、握力の弱い高齢者は転倒の危険性が高いと報告¹¹⁾されており、握力測定の意義は大きいと考えられる。

ウォーキングおよび転倒予防体操の効果は、転倒群ではステップングと足踏みの成績が向上し、コントロール群では垂直跳び、開眼片足立ち、ファンクショナルリーチ、足踏みの成績が向上していた。転倒群では敏捷性、動的平衡性の機能が改善され、コントロール群では下肢パワー、静的および動的平衡機能が改善された。両群に見られるウォーキングおよび転倒予防体操の効果は下肢の敏捷性およびパワー、平衡機能の向上である。平衡機能の向上にはウォーキングの効果が反映したものと考えられ、中年者のウォーキングでもその向上は認められており¹⁴⁾、運動強度を少し落としたが高齢者でも同様の効果が得られたことになる。下肢系の敏捷性およびパワーの向上は、下肢および体幹部の筋力向上を目的に考案された転倒予防体操の効果と考えられる。一般に高齢者の筋肉では速筋線維が選択的に萎縮し、筋力の低下を起こすと考えられ⁸⁾、そこで歩行能力維持には大腰筋をはじめとする下肢系の筋群のトレーニングの必要性が報告されている⁹⁾。今回の転倒予防体操は身体の各部位の重さを利用した軽い筋トレーニングであり、下肢筋群へのトレーニングは単に歩行能力の維持だけではなく、転倒予防にとっても重要であることを示唆している。

さらにウォーキングや転倒予防体操などの運

動はふらつきの原因になっている脳血管疾患や起立性低血圧などの予防や改善効果があることが明らかになっている⁹⁾。

転倒群ではコントロール群との比較において、下肢筋力および下肢パワーの低下による平衡性機能や歩行に関わる機能の低下が転倒危険因子と考えられ、ウォーキングや軽い筋トレーニングによって筋力および平衡性機能の改善が期待され、転倒の予防に貢献する可能性が示唆された。

要 約

高齢者の体力および転倒危険因子に及ぼすウォーキングと転倒予防体操の効果を検討するため、過去1年間に転倒経験があるか或いはつまずきやふらつきがよく起こる転倒群と転倒経験のないコントロール群を対象に6ヶ月間の運動を実施した。得られた結果を要約すると以下の通りである。

転倒群はコントロール群に比べて、握力、最大1歩踏み出し、長座位体前屈、座位ステップング、全身反応時間、足踏み、開眼片足立ち、ファンクショナルリーチが運動処方前或いは後で有意に低く、転倒群は筋力、柔軟性、敏捷性、静的および動的平衡性の各機能がコントロール群より劣っていた。

ウォーキングおよび転倒予防体操の効果は、転倒群ではステップングと足踏みの成績が向上し、コントロール群では垂直跳び、開眼片足立ち、ファンクショナルリーチ、足踏みの成績が向上していた。転倒群では敏捷性、動的平衡性の機能が改善され、コントロール群では下肢パワー、静的および動的平衡機能が改善された。

ウォーキングや軽い筋力トレーニングによって筋力および平衡性機能の改善が期待され、転倒の予防に貢献する可能性が示唆された。

終わりに臨み本研究の遂行に援助を賜った今津町保

健センターおよび本学大学院生分木ひとみ氏に厚く敬意を表す。なお、本研究の要旨は第5回アジアスポーツ医学会において発表した。

文 献

- 1) Duncan, P.W., D.K.Weiner, J.Chandler, and S.Studenski, Functional reach: A new clinical measure of balance, *J.Gerontology*, 45(6), M192-197, 1990.
- 2) 井上哲朗. 高齢者の骨折－疫学, 原因, 治療, 合併症－, *日老医誌*, 34(6), 451-452, 1991.
- 3) 木村みさか, 平川和文, 奥野直, 小田慶喜, 森本武利, 木谷輝夫, 藤田大祐, 永田久紀. 体力診断バッテリーテストからみた高齢者の体力測定値の分布および年齢との関連, *体力科学*, 38, 175-185, 1989.
- 4) 木村みさか, . 平衡性指標と歩行能の関連からみた高齢者の立位姿勢保持能, *体育科学*, 27, 83-93, 1998.
- 5) 木村みさか, 奥野直, 坂本周亮, 永井由香, 岡山寧子, 小島光洋, 佐藤泉, 千葉とく江. 高齢者の転倒と体力について－健康づくり事業に参加した高齢者における調査結果－, *体育科学*, 29,91-105, 2000.
- 6) 金俊東, 大島利夫, 馬場紫乃, 安田俊広, 足立和隆, 勝田茂, 岡田守彦, 久野譜也. 長期間トレーニングを継続している高齢者アスリートの筋量と歩行能力の特徴, *体力科学*, 50, 146-158, 2001.
- 7) 厚生省長寿科学研究退行期骨粗鬆症の予防に関する研究班. 日本骨代謝学会雑誌, 11, 119, 1993.
- 8) 久野譜也. 加齢に伴う骨格筋の退行性変化, *医学のあゆみ*, 7, 613-616, 2000.
- 9) 折茂肇編集. 骨折 pp519 - 526, 転倒 pp527-526, *新老年学第2版*, 東京大学出版会, 東京, 1999.
- 10) 奥野直, . 高齢者の平衡能と下肢筋力との関連, 第52回日本体力医学会抄録, 202, 1999.
- 11) 新野直明, 中村健一. 老人ホームにおける高齢者の転倒調査, *日老医誌*, 33, 12-16, 1996.
- 12) 鈴木隆雄. 転倒予防体操, 社会保険出版社, 東京.
- 13) 東京都立大学体力標準値研究会編. 新日本人の体力標準値 2000, 不味堂出版, 東京, 2000.
- 14) Yorimoto,A., Effect of walking on risk factors of chronic non-communicable diseases and daily expenditure in middle-aged women. (Edited by H.nose, E.R.Nadel, T.Morimoto): *The 1997 Nagano Symposium on Sports Sciences*, Cooper Publishing Group, USA, 1998.7, 430-435.

国際教育センターの活動紹介

国際教育センターに関する研究費交付一覧

滋賀県立大学特別研究費交付一覧

・平成14年度 (4件、合計1,281千円)

区分	氏名	研究課題	金額 (千円)
特別	大谷泰照	日本の言語教育政策の動態調査	781
特別	石田法雄	報身 (Sambhoga-kaya) 阿弥陀仏に対する道元禅の立場における一考察	250
特別	小栗裕子	英語学習の動機づけ - 入学時と一年後を比較して -	250

滋賀県立大学在外研修費交付一覧

・平成14年度 (4件、合計1,121千円)

種類	氏名	研修先	研修期間	研修内容	支給額 (円)
短期	石田法雄	スイス ローザンヌ	平成14年9月1日 ~9月9日	ローザンヌ大学で開催された第9回国際真宗学会ヨーロッパ支部大会で論文 ("Time-Space Interformation of Myth into the Here and Now - the Zen Lineage and Dharmakara -") を発表し、引き続き第12回欧州真宗学会に参加した。その間に当大学教授ジェローム・デュコール博士と面談を行って、形而下の問題における宗教研究に対する共通認識を探り合い今後の共同研究の方向性の確認を行った。	318,540
短期	宮城茂幸	アメリカ合衆国 フロリダ オーランド	平成14年5月12日 ~5月19日	国際会議 (第27回 ICASSP) に出席し、ポスターセッションにて、研究結果を発表した。これは、既に画像モデルとして提案されている非因果性長相関モデルを狭帯域のモデルに拡張し、実際にテキスチュア画像を作成して、モデル推定のための一手法として有効な手法かどうか検討したものを発表したのだが、特にこのセッションの議長から、他研究との関連性や、参考にするべき研究についてのアドバイスを受けることができ、今後研究を進める上で大いに役立つ情報を得ることができた。	327,780

短期	寄本 明	大韓民国 ソウル	平成14年9月24日 ~9月29日	ソウルで開催された第5回アジアスポーツ医学会大会に参加し、「高齢者の転倒危険因子および体力に及ぼすウォーキングと予防体操の効果」の演題で発表を行うとともに、研究情報の収集と意見交換を行った。	128,320
短期 (予定)	小栗裕子	アメリカ合衆国 バルティモア他	平成15年3月20日 ~3月31日	バージニア州アーリントン、メリーランド州バルティモアで開催される2つの英語教育に関する学会に出席し、「動機づけ」研究の第一人者 Oxford 女史と意見交換を図る予定である。	346,360

滋賀県立大学共同研究

・平成14年度 (1件、合計800千円)

共同研究先	氏 名	研究期間	研 究 課 題	支給額 (千円)
大塚製薬(株)	寄本 明	平成14年7月20日 ~平成15年3月31日	たんぱく質補助食品がスポーツ活動後の体調に及ぼす影響 プラセボ群との二重盲検化群間比較試験	800

平成12年度特別研究費研究報告

宗教的神話(Myth)としての『大經』法蔵菩薩の実存的解釈

石田法雄

Dharmākara 法蔵菩薩 is not a historical figure. T'an-luan (476-542) asserts that Dharmākara was a bodhisattva with the "insight into the non-arising of all dharmas." In the Larger *Sukhāvāṭīvyūha-sūtra* 大無量壽經, Dharmākara established Forty-eight Vows 四十八願 and the Pure Land 淨土, becoming Amida Buddha 阿彌陀仏, the Buddha of *Amitābha* 無量光 (Infinite Light) and *Amitāyus* 無量壽 (Infinite Life). How could then a non-historical figure like Dharmākara and his Pure Land relate to us who live in the 21st century full of fears and troubles greatly caused by highly developed modern technologies and by our insatiate greed?

Dharmākara serves as the "myth," religious in an existential sense, which is not factual or historical but the ground or source of our aspiration to work for the betterment of the world in which we are living. Dharmākara is the myth of the past, for he appeared in the world "in the distant past—innumerable, incalculable and inconceivable kalpas ago" according to the Larger Sutra.

In the Larger *Sukhāvāṭīvyūha-sūtra*, the account of the Bodhisattva Dharmākara is introduced. The sutra goes back to the distant past, the past beyond our time concept. It was "innumerable, incalculable and inconceivable kalpas ago—A Tathāgata named Dīpaṅkara appeared in the world. Having taught and freed innumerable beings and led them all along the way of Enlightenment, he passed into Nirvana." After the Tathāgata Dīpaṅkara, many other Tathagatas or Buddhas appeared and passed into Nirvana.

"Then appeared a Buddha named Lokeśvararāja, the Tathāgata, Arhat, Perfectly Enlightened One, Possessed of Wisdom and Practice, Perfected One, Knower of the World, Unsurpassed One, Tamer of Men, Master of Gods and Men, Buddha and World-Honored One.

At that time there was a king who, having heard the Buddha's exposition of the Dharma, rejoiced in his heart and awakened aspiration for the highest, perfect Enlightenment. He renounced his kingdom and the throne, and became a monk

named Dharmākara. Having superior intelligence, courage and wisdom, he distinguished himself in the world. He went to see the Tathāgata Lokeśvararāja, knelt down at his feet, walked round him three times keeping him always on his right, prostrated himself on the ground, and, putting his palms together in worship, praised the Buddha”

After praising the Buddha Lokeśvararāja, the Bhikṣu Dharmākara said to Lokeśvararāja: “Respectfully, World-Honored One, I announce that I have awakened aspiration for the highest, perfect Enlightenment. I beseech you to explain the Dharma to me fully, so that I can perform practices for the establishment of a pure Buddha-land adorned with infinite excellent qualities. So please teach me how to attain Enlightenment quickly?”

After contemplating the vows for five full kalpas and choosing the pure practices for the establishment of the Buddha-land, Dharmākara proclaimed the Forty-eight Vows with the aspiration of saving all the sentient beings in the ten quarters through establishing his Pure Land. Dharmākara is now Amida Buddha. The Buddha Śākyamuni 釈迦牟尼仏, a historical Buddha, is the prototype of Dharmākara: a bhikṣu renounced his kingdom and the throne and became a monk named Dharmākara.

Dharmākara in the context of the Larger *Sukhāvatīvyūha-sūtra* is the mythical figure of the past. Dharmākara established Forty-eight Vows and his Pure Land in the great distant past beyond our time concept. The goal of Pure Land Buddhism is to be born into the Pure Land that Dharmākara established innumerable, incalculable and inconceivable kalpas ago. On the other hand, *ôjô* 往生 or birth, according to the teachings of Shin Buddhism or Jōdo Shinshū, is to come after one’s death as one attains shinjin 信心 in life. In this sense, the final goal of attaining *ôjô* or birth into the Pure Land is a matter of the future: the Pure Land is the myth of the future. What is it then that Dharmākara is the myth of the past while the Pure Land is the myth of the future? How do we understand Dharmākara (the past) and birth into the Pure Land after death (the future) in terms of a matter of time and space in the here and now?

This issue is discussed in the forthcoming paper, “Time-Space Interformation of Myth into the Here and Now—The Zen Lineage and Dharmākara—,” and in the forthcoming book, *Shinran and Dōgen*.

平成13年度短期在外研修報告

石田法雄

研修課題：Japan Foundation Symposium 2001 での論文発表と、スタンフォード大学仏教学者 Carl Bielefeldt 教授との面談

研修地：アメリカ合衆国、カリフォルニア州（ソーサリト市、バークレー市、パロアルト市）

研修期間：2001年9月10日～9月25日（16日間）

研修内容：

I. カリフォルニア州、バークレー市にある IBS (Institute of Buddhist Studies) 及び GTU (Graduate Theological Union) 共催による、同州、マリン郡ソーサリト市で開催された Japan Foundation Symposium 2001 にて論文を発表した。このシンポジウムは、1999年の長期在外研修でバークレー市に滞在中、IBS 学部長 Richard Payne 教授より今回の会合の開催相談を受け、それを機として2年後に実現される運びとなった。シンポジウムのタイトルは *Language and Discourse In the Transformation of Medieval Japanese Buddhism* で、会場はサンフランシスコのゴールデンゲートを北上してすぐにあるマリン郡ソーサリト市にある Green Gulch Zen Monastery という禅センターにて9月14日から16日まで開催された。自然環境に恵まれ、壮大な敷地を有するこの禅センターは、一般にも一部開放されながら、修行者達が住み、自給自足生活を営み生活している場所である。シンポジウムの論文発表者とそのレスポンドは、3日間を禅センター内に設けられているゲストハウスで共に過ごし、日中の発表・レスポンス・討論以外にも、夜はハウスに戻り暖炉を囲みながらその日の発表論文について議論し合った。論文は前もって提出されており、参加者は他の発表者の論文を事前に読んでシンポジウムに取り組んだ。特に、レスポンド担当者は、発表論文のクリティーク・討論の中心的役割を担った。

しかし、数日前に起こった9月11日のニューヨークでの同時多発テロにより、参加者人数は日本よりすでに渡米していた3名と、アメリカとカナダ西海岸からの数名と、東部からすでにカリフォルニア入りしていた数名で、主催者を含め10数名であった。そこで、参加出来ない発表者が続出したので会合を開催すべきかどうかの審議がなされたが、主催者側は、論文は全て提出され配布され読まれているので、本人あるいはレスポンドが不在ということもあったが、挙行することを決定した。

II. 9月10日、サンフランシスコ空港よりバークレー市にある IBS 大学院学生寮にある教員宿舎に到着する。9月11日朝、ニューヨーク市での同時多発テロのニュースをテレビでみる。皆、嘔然として何が起きているのかわからないまま、テレビの画像に釘付けになっていた。やがて、主催者

側の Richard Payne 教授、Daniel Leighton 禅師、Eisho Nasu 博士らとの面会をするが、テロ事件により、芳しい再会ではなかった。しかし、シンポジウムは行うという方向で、打ち合わせを進めていった。11日の夕刻、サンフランシスコ市の夜景がみえる場所で夕食を取るが、街は暗くなっても金色にはならず、アメリカ全土が沈み込んでいる感を受けた。暗く不気味なサンフランシスコの夜景は、第二次世界大戦以来だというニュースを耳にするが、特にアメリカ人は複雑な思いでいたのが手に取るようにわかった。以前、留学中に近くに住んでいたこともあったので、あの夜景は特別なものに映った。その後、県立大学から身の安否を気遣う連絡が多く入り、事件の深刻さをさらに感じさせられた。

9月14日から16日まで、Green Gulch Zen Monastery にて、シンポジウムに参加する。論文は“Shinjin and Satori in the Here and Now—Flowers Yet Fall As People Lament—”というタイトルで発表し、スタンフォード大学の Carl Bielefeldt 教授がレスポンドつまりコメントーターをつとめ、多く意見の交換を行った。論文内容は当紀要第6号（2001年12月）に一部修正を加え、掲載した。また、当日発表出来なかった論文は後日アメリカ宗教学会で発表された後受けつけられ、当日の発表を含む都合11篇の論文集を機をみて出版するとの報告が主催者側よりなされた。

Ⅲ. 9月17日から拠点をサンフランシスコから少し南下したところにあるパロアルト市スタンフォードにあるスタンフォード大学に移す。Carl Bielefeldt 教授との面談が中心であったが、新学期なので教授は忙しく、毎日1時間程度の面談に終わった。その間、宗教学部に設けられた Stanford Buddhist Center と大学図書館等を利用して最近の英文資料収集にあたり、教授の TA (Teaching Assistant) と RA (Research Assistant) と共に仏典を読んだりした。時間が許せば、近くにあるカリフォルニア大学バークレー校、GTU、IBS を訪れ、資料収集にあたった。

帰国は9月25日になるが、テロ事件により当日まで搭乗できるかわからない状況であった。その間、レンタカーは不足状態になり、移動に苦勞する日が続いた。また、星条旗を掲げた車が日毎に多くなり、路上でお互いそれを見つけると、だれかれかまわずクラクションを鳴らし合うという状態になり、一方、平和を訴えるアメリカ人、愛国心をさらに深めていくアメリカ人、不安を感じ怯えているアメリカ人、というぐあいに、様々な民族からなるアメリカの姿を垣間見る思いがした。その点、この度の在外研修は、論文発表につけ、面談・資料収集につけても、9月11日の影響を大いに受けてのものだった。

平成14年度短期在外研修報告

宮城茂幸

研修課題：Random Image Syntheses by Using a Narrow Band Long-Correlation Model

研修地：アメリカ合衆国，フロリダ，オーランド，2002 IEEE International Conference on Acoustics, Speech and Signal Processing

研修期間：2002年5月12日～5月19日（8日間）

研修内容：

短期在外研修の補助を受け国際会議 ICASSP (International Conference on Acoustics, Speech and Signal Processing) 2002 に参加することができた。以下会議の性格と研修内容について述べる。

ICASSP は毎年開催されており、信号処理の分野では有名かつ大規模な国際会議の一つである。主催団体はアメリカの電気電子工学関連の学会である IEEE の信号処理ソサイエティである。この会議が対象とする領域を列挙すると、音声信号、信号処理理論、画像および多次元信号処理、センサーアレイおよび多チャンネルシステム、電子音響系、工業技術、DSP システムの設計および実装、マルチメディア信号処理、信号処理用ニューラルネットなどである。会議実行委員会の発表によると一般講演の論文数は 1007 件、投稿論文数は 1770 件であったので採択率は約 57% である。採択数からも会議の規模をうかがい知ることができよう。採択された論文は 12 の分野に分類され、56 の口頭発表と 60 のポスターセッションに分けられた。それぞれのセッションは会期中 6 ないしは 7 つつ並行して行われた。これら一般講演以外にもチュートリアルセッションも充実しており、合計 11 のチュートリアルセッションが開催された。

筆者は適応フィルタと多次元信号処理について興味を持っているので、これらの分野に関連するセッションに重点的に参加した。特に強い印象を受けたセッションについて詳述する。

まず 1 つ目はチュートリアルセッションの一つである、A. H. Sayed の “Advances and Challenges in Adaptive Filtering” である。表題からもわかるように適応フィルタに関する話題を扱っている。その中でも特に適応フィルタの解析手法は参考になる内容であった。発表内容主に Sayed 自身の研究グループによりここ数年来進められてきた成果に関することであったが、全体を見通せる形で系統立てた説明であったので、非常にわかりやすかった。信号処理手法の解析法はともすると数学的になりすぎるきらいがあるが、Sayed により提案されている解析法は物理的イメージと対応づけることができるという特徴があった。

会期中 Sayed に直接質問をする機会があったので、Sayed の手法がサブバンド適応フィルタに適用できるかどうか尋ねた。その結果可能であるとの返答をいただいた。また今のところサブバンドフィル

タへの適用については誰も検討していないとのことで、新たな研究のヒントになった。

2つ目は筆者が研究課題の発表を行ったポスターセッションである。このセッションは“多次元信号処理理論”と手法と題して会議の4日目の午前に行われた。午前中であることもあって当初来場者数は少なく思われたが、昼が近づくにつれて来場者数は増加し、筆者はのべ10名の研究者に研究内容を説明することができた。このセッションの議長はフランスのJ. Zerubiaであった。Zerubiaは丁寧にも、このセッションすべてのポスターを確認し発表者の説明を聞いていた。筆者とも話をする時間があり、筆者のアイデアを評価するとともに2次元Wold分解との関連性を指摘した。今後の研究の参考とした。

3つ目は共著者として参加した、同日午後2つ目のポスターセッション“信号の再構成とフィルタ設計”である。このセッションにおいてはハイブリッドANCシステムにおける適応アルゴリズムの解析と題して発表を行った。なぜ適応フィルタに関する発表がこのセッションに組み込まれたかは不明である。プログラム作成に若干不満を感じた。このセッションはこの日最後のセッションであることもあり来場者数、質問者数とも少数であった。筆者は同じ分野のMorgan氏に会えることを期待していたが、残念ながら姿を見せなかった。

最後に全体的な感想について述べたい。研究発表の内容や構成については特に問題もなく、会議自体は非常に有意義であった。ただ一つ問題点として指摘しておきたいのは参加費用についてである。今回の開催場所はディズニーワールドで有名なオーランドであり、アメリカでは有名なリゾート地の一つである。会場はルネッサンスリゾートホテルであった。ここは会議の公式宿泊ホテルにも指定されていた。会期中室料は200ドルほどであった。複数名で部屋を共有する場合には、リゾートホテルとしては安いかもしれないが、筆者のように単独で参加する場合にはかなり高額である。このため宿泊ホテルは会場より少し離れた場所に確保せざるを得なかった。実際他の日本人参加者に聞いてみたところ、ほとんどの方が近くの安いホテルに宿泊しているとのことであった。また会議の論文集以外にも企業スポンサーのロゴが印刷されたバッグや筆記具などが参加登録者全員に配布された。これらはスポンサー企業から提供されていると思われるが、全額企業負担とも思えない。従ってこれも高額な参加費用の一因になっているのではないかと思う。もう少し会議全体の費用を抑え、潤沢な費用のない研究者にも開かれた会議にするべきではないかと思う。そうすることにより、よりいっそうこの分野の発展につながるのではないかと考えている。

国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

(前号以降)

【編著書】

大谷泰照：監修『社会人のための英語百科』、大修館書店、2002年3月、240

Ritsuko Nagashima : *Bernanos et l'Histoire*, Presses Universitaire du Septentrion, septembre 2002, 370

寄本 明（主婦の友社編集）：「はじめて知る高コレステロール」、主婦の友新実用BOOKS、主婦の友社、2002年7月、52-5

【発表論文】

大谷泰照：「国際的に見た日本の異言語教育」、『「先進諸国」の外国語教育—日本の外国語教育への示唆—』、大学英語教育学会関西支部、2002年3月、167-78

大谷泰照：「韓国の外国語教育」、*Lake*、滋賀県高等学校英語教育研究会、第18号、2002年6月、148-51

上村盛人：「ウォルター・ペイターの審美主義—「審美派の詩」について」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第6号、2001年12月、21-42

Hoyu Ishida : Shinjin and Satori in the Here and Now—Flowers Yet Fall As People Lament—, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 6, December 2001, 43-67

Walter Klinger : Learning Grammar by Listening, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No.6, December 2001, 69-88

小栗裕子：「英語学習の動機づけ—大学入学時と1年後を比較して—」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第6号、2001年12月、89-98

深見 茂：「テオドール・シュトルムの『水に沈む』について—父性の敗北と母性の勝利—」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第6号、2001年12月、101-16

Ritsuko Nagashima : Jeanne d'Arc et le *Journal d'un curé de campagne*, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 6, December 2001, 117-27

呉 凌非：「動詞の周期とその周辺」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第6号、2001年12月、129-42

呉 凌非：「论“了1”和“了2”」、『语言研究』、华中科技大学中国语言研究所、2002年1月、23-7

- 亀田彰喜：「情報化社会における介護福祉情報ネットワーク」、情報問題研究、第13号、情報問題研究会、晃洋書房、2001年6月、1-8
- 亀田彰喜・吉田勝廣：「電子商取引と中小企業の経営」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第6号、2001年12月、143-55
- 横田峰子・亀田彰喜：「情報化社会における介護福祉」滋賀文化短期大学研究紀要、第11号、2002年3月、31-42
- 亀田彰喜・吉田勝廣・岡田章彦：「中小企業の経営戦略としての電子商取引」、情報問題研究、第14号、情報問題研究会、晃洋書房、2002年6月、55-64
- Shigeyuki Miyagi : Random Image Syntheses by Using a Narrow Band Long-Correlation Model, *Proc of ICASSP2002*, Vol. IV, May 2002, 3557-60
- Hideaki Sakai, Takashi Someda and Shigeyuki Miyagi : Analysis of an Adaptive Filter Algorithm for Hybrid ANC System, *Proc of ICASSP2002*, Vol. II, May 2002, 1553-6
- 伊丹君和、藤田きみゑ、古株ひろみ、横井和美、寄本 明：「介護作業姿勢の腰部負担に関する研究」、第11回（平成12年度）フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団報告書、2001年10月、170-90
- 寄本 明：「夏季におけるウォーキング時の水分代謝と体温上昇」、ウォーキング研究、第5号、2001年11月、75-9
- 寄本 明：「運動処方としてのウォーキングの実際」、滋賀県立大学国際教育センター研究紀要、第6号、2001年12月、157-63
- 北村隆子、古株ひろみ、森下妙子、伊丹君和、寄本 明：「看護職の腰痛に関する研究—滋賀県下における看護職員の腰痛実態と体力—」、滋賀県立短期大学看護短期大学部学術雑誌、第6号、2002年3月、23-9
- 古株ひろみ、北村隆子、伊丹君和、森下妙子、寄本 明：「看護婦の腰痛予防に関する研究（2）女子看護学生の腰痛の要因、滋賀県立短期大学看護短期大学部学術雑誌、第6号、2002年3月、31-5
- 伊丹君和、藤田きみゑ、寄本 明、古株ひろみ、横井和美、久留島美紀子、北村隆子、森下妙子、牧野耕次、甘佐京子：「看護作業姿勢からみた腰部負担の少ないベッドの高さに関する研究（第3報）—ベッドメーカー連続動作による生体負担分析—」、滋賀県立短期大学看護短期大学部学術雑誌、第6号、2002年3月、43-7
- 中井誠一、新矢博美、芳田哲也、寄本 明：「スポーツウェアと暑さ対策」、臨床スポーツ医学、第19巻、第7号、2002年7月、763-7

【その他】

（印刷物＜翻訳、辞典、一般雑誌など＞、口頭発表、講演、社会活動、地域社会への参加など）

国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

- 大谷泰照：講演「翻訳の可能性と限界」、大阪YWCA講演会、2001年11月1日
- 大谷泰照：講演「日本人と英語」、日本言語政策学会、國學院大学、2001年12月8日
- 大谷泰照：講演「日本人と国際理解」、滋賀県浅井町教育研究所、2002年2月6日
- 大谷泰照：書評 一宮和一郎『21世紀に生きる新英語科教育法—EIA理論と教育実践—』、三修社出版、『英語教育』、大修館書店、第50巻第12号、2002年2月、90
- 大谷泰照：論説「戦争の世紀」と「戦争修復の世紀」、『日本言語政策学会会報』第3号、2002年3月、1
- 大谷泰照：座談会「新しい時代の留学生問題」、『交流』、滋賀県留学生交流推進会議、第12号、2002年3月、8-13
- 大谷泰照：論説「JACET40年の自省」、『大学英語教育学会創立40周年記念誌』、2002年3月、8
- 大谷泰照：講演「比較と対照—言語研究の方法—」大阪YWCA講演会、2002年4月11日
- 大谷泰照：論説「日本帝国海軍の提督たち」、『英語教育』、大修館書店、第51巻第3号、2002年5月、43
- 大谷泰照：講演「20世紀とはどんな時代であったのか—異言語教育の立場から—」、関西大学FDセミナー、2002年5月14日
- 大谷泰照：講演「桃山学院120年の歴史をどう見るか」、桃山学院大学講演会、2002年7月9日
- 大谷泰照：書評、JACET関西支部「海外の外国語教育」研究会『「先進国」の外国語教育—日本の外国語教育への示唆—』、『JACET通信』、大学英語教育学会、第134号、2002年8月、3
- 大谷泰照：論説「英語教師と「職人気質）」、『無限』、ATELAS研究会、2002年8月18日、148-9
- 大谷泰照：講演「海外の外国語教育から何を学ぶか」、大学英語教育学会関西支部「海外の外国語教育」研究会、2002年9月23日
- 大谷泰照：シンポジウム「言語政策と外国語教育」、大学教育学会全国大会、京都外国語大学、2002年10月1日
- 大谷泰照：講演「異文化接触と異文化理解」、大阪YWCA講演会、2002年10月10日
- 大谷泰照：論説「竹友藻風、高垣松雄、そして中野好夫のこと」、『桃山学院年史紀要』、第22号、2002年10月、1-16
- 大谷泰照：分担執筆「言語教育政策」他、『応用言語学事典』、研究社、2002年10月
- 大谷泰照：文部科学省スーパーハイスクール運営指導委員、2002年度
- 大谷泰照：分担執筆「20世紀は、果たして「戦争の世紀」であったのか」、『おおさかYWCA』、大阪キリスト教女子青年会、2002年11月、1
- 大谷泰照：講演「21世紀は、本当に英語の世紀になるのか」、愛知淑徳大学文学部講演会、2002年11月16日
- 大谷泰照：筑波大学現代語・現代文化学系外部評価委員、2002年9月-2003年3月
- 大谷泰照：年間論文被引用回数（2001年10月—2002年9月）鳥飼玖美子『TOEFL・TOEICと日本人の英語力』、講談社、2002年4月20日；伊達宗行『「数」の日本史』、日本経済新聞社、2002年6月3

- 日；岡戸浩子『「グローバル化」時代の言語教育政策』、くろしお出版、2002年10月1日、その他
19回（執筆者もしくは読者よりの通報により確認し得たもの）
- 石田法雄：出演「ラジオ・キャンパス」、KBS滋賀ラジオ「さんさんわいど滋賀 彦根・にぎわい・
まち暦」彦根夢京極サテライトスタジオ、2002年5月24日15時35～55分
- 石田法雄：講話「今を生きる一若きは美しく、老いたるはなお麗しー」、やすらぎ学級、草津市笠縫
公民館、2002年8月8日
- Hoyu Ishida : Presentation 'Time-Space Interformation of Myth in the Here and Now—The Zen Lineage and
Dharmakāra,' The International Association of Shin Buddhist Studies 9th European Block Conference,
Lausanne University, Lausanne, Switzerland, September 4 2002
- 石田法雄：滋賀県TOEIC推進協議会委員
- 石田法雄：財団法人滋賀県国際協会評議員
- 石田法雄：財団法人国際仏教文化協会評議員・研究員
- Walter Klinger : ESL game: Q&A cards for oral practice, *Hands-on English*, 12 (3), Sept-Oct 2002, 12-3
- 小栗裕子：研究発表「英語学習の動機づけ—大学2年次の初めと終わりを比較して—」、第28回全国
英語教育学会神戸研究大会、2002年8月23日
- 小栗裕子：研究発表「大学生の英語学習と動機づけ—入学時と1年後を比較して—」、大学英語教育
学会第41回全国大会、2002年9月8日
- 深見 茂：財団法人祇園祭山鉾連合会理事長、2002年
- 深見 茂：出演「ラジオ・キャンパス」、KBS滋賀ラジオ「さんさんわいど滋賀 彦根・にぎわい・
まち暦」彦根夢京極サテライトスタジオ、2002年10月4日15時35～45分
- 呉 凌非：発表「動詞の最小周期と最大周期」、言語処理学会、京阪名プラザ、2002年3月20日
- 呉 凌非：出演「ラジオ・キャンパス」、KBS滋賀ラジオ「さんさんわいど滋賀 彦根・にぎわい・
まち暦」彦根夢京極サテライトスタジオ、2002年8月2日15時35～45分
- 呉 凌非：発表「「一」に関する副詞について」、計量国語学会、大阪大学、2002年9月7日
- 呉 凌非：滋賀県行政経営改革・施策評価委員会委員、2002年4月1日～2003年3月31日
- Shigeyuki Miyagi and Hideaki Sakai : Stability Analysis of the Periodic ANC System Reducing Passband
Disturbances, *Proc of AdCONIP '02*, 221-5, Kumamoto, June 10 2002
- 宮城 茂幸：電子情報通信学会2002年度デジタル信号処理研究専門委員会委員
- 岡本 進：講演「健康体操としてのストレッチング」、県立盲学校職員健康教室、2001年11月13日
- 岡本 進：講演「運動と心拍数」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2001年11月20日
- 岡本 進：講演「運動とからだの仕組み、運動とストレッチング」、滋賀県レイカディア大学選択講
座、2001年12月3日
- 岡本 進：講演「生涯スポーツとしてのニュースポーツ—豊かなスポーツライフをめざして—」、平成
14年度滋賀県立大学公開講座、2002年6月15日
- 岡本 進：講演「これからの健康スポーツ」、滋賀県レイカディア大学必修講座、2002年7月4日

国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

岡本 進：講演「ニュースポーツのプログラム」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2002年7月31日

岡本 進：講演「高齢社会におけるニュースポーツの役割」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2002年8月1日

岡本 進：県スポーツ振興審議会16期委員、－2002

寄本 明：講演「スポーツにおける熱中症予防について」、福井市スポーツ少年団ジュニアスポーツセミナー、福井市体育館、2001年6月3日

伊丹君和、藤田きみゑ、寄本 明、古株ひろみ、横井和美、北村隆子、田中智恵、久留島美紀子、藤迫奈々重、柴辻里香、甘佐京子、森下妙子：「ベッドメイキング作業における作業時姿勢と自覚疲労度VASの検討」、第27回日本看護研究学会学術集会、金沢市観光会館、2001年7月27日

寄本 明：講演「運動医学の基礎、健康づくりと運動」、7市町合同健康推進員養成講座、東近江地域振興局、2001年9月7日

寄本 明：講演「転倒の原因と予防について」、身体機能測定、転倒予防教室、今津町保健センター、2001年9月11、12日

寄本 明：講演「運動と健康について」、彦根市康推進員養成講座、彦根市障害者福祉センター、2001年9月13日

寄本 明：講演「運動の生理学について」、今津町健康推進員養成講座、今津町保健センター、2001年9月26日

寄本 明：講演・実技「ウォーキング教室」、びわ町100日ウォーク、びわ町保健センター、2001年9月9、29日、12月16日

寄本 明：講演「生活習慣病予防のためのウォーキング その理論と実際」、在宅看護職講習会、滋賀県国民健康保険団体連合会大会議室、2001年10月11日

寄本 明：講演「健康づくりと運動」、健康推進員養成講座、サントピア水口、2001年10月18日

寄本 明：講演「運動生理学」、健康推進員養成講座、サントピア水口、2001年11月1日

寄本 明：講演「スポーツと健康づくり」、亀山ニュースポーツフェスティバル、彦根市亀山小学校体育館、2001年11月4日

寄本 明：講演「運動は本当に必要なのか?」、能登川町なごみ健康公開講座、能登川町総合健康福祉センターなごみ、2001年11月5日

寄本 明：講演「自分にあった運動処方作成と実際」、能登川町なごみ健康公開講座、能登川町総合健康福祉センターなごみ、2001年11月19日

寄本 明：講演「どうして身体活動・運動が大切なの?」、平成13年度寝たきり予防対策等普及啓発推進講演会、志賀町保健センター、2001年12月21日

寄本 明：身体機能測定・診断、転倒予防教室、今津町保健センター、2002年3月15日

寄本 明：身体機能測定・診断、個別健康教育、彦根市勤労青少年ホーム、2002年5月30日

寄本 明：「女性214人がやってコレステロールも中性脂肪も見事に減ったサッサ歩き」、『わか

さ』、2002年、9月号、44-5

寄本 明：「少し汗ばむ早さで歩くサッサ歩きは週三回で効果が現れ毎日なら高脂血は素早く治る」、

『わかさ』、2002年、9月号、46-7

寄本 明、岡本秀巳、中井誠一：「中高年者の夏季日常生活におけるエネルギー代謝と水分出納」、

第56回日本体力医学会大会、仙台国際センター、2001年9月19日

中井誠一、新矢博美、芳田哲也、寄本 明：「放射型鼓膜温度計による運動時の鼓膜温と直腸温の関

係」、第40回日本生気象学会大会、大阪大学銀杏会館、2001年10月13日

芳田哲也、中井誠一、新矢博美、寄本 明、森本武利：「体重計測より1日の水分出納を測定する試

み」、第40回日本生気象学会大会、大阪大学銀杏会館、2001年10月13日

古株ひろみ、北村隆子、伊丹君和、横井和美、森下妙子、甘佐京子、柴辻里香、久留島美紀子、山田

智恵、寄本 明、藤迫奈々重、藤田きみゑ：「看護学生の腰痛と食事に関する研究」、第21回日本

看護科学学会学術集会、神戸国際会議場、2001年12月1日

古株ひろみ、北村隆子、伊丹君和、横井和美、藤田きみゑ、寄本 明：「看護学生の腰痛に関する因

子の検討」、第32回滋賀県公衆衛生学会、ピアザ淡海、2002年2月14日

寄本 明、分木ひとみ、島田淳子：「エネルギー消費量および運動強度からみた生活習慣病予防とし

てのウォーキング」、第32回滋賀県公衆衛生学会、ピアザ淡海、2002年2月14日

分木ひとみ、島田淳子、寄本 明：「ウォーキングが血清脂質および身体機能に及ぼす影響—中高年

者を対象に一」、第32回滋賀県公衆衛生学会、ピアザ淡海、2002年2月14日

寄本 明、岡本 進、分木ひとみ、姜 徳鍋：「中高年女性の心拍数変動およびエネルギー消費量か

らみた運動処方としての歩行運動」、第6回日本ウォーキング学会大会、国立オリンピック記念青

少年総合センター、2002年5月26日

分木ひとみ、寄本 明：「中年者および高年者の運動機能に及ぼすウォーキング効果の相違」、第6

回日本ウォーキング学会大会、国立オリンピック記念青少年総合センター、2002年5月26日

伊丹君和、藤田きみゑ、古株ひろみ、横井和美、久留島美紀子、森下妙子、寄本 明：「看護作業姿

勢からみた腰部負担の少ないベッドの高さに関する研究—ベッドメイキング連続作業による生体負

担分析—」、第28回日本看護研究学会学術集会、パシフィコ横浜、2002年8月9日

Akira Yorimoto, and Hitomi Bunki : Effects of walking and physical conditioning exercise on risk factors of

falling and physical fitness in the elderly, The 5th Asian Federation of Sports Medicine Congress, Soul, Korea,

September 26, 2002

『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』

編集委員（○印代表）

語学系	小栗裕子
	山本 薫
情報系	○亀田彰喜
	宮城茂幸
健康・体力系	○寄本 明

2002年12月25日印刷

2002年12月25日発行

編集、発行

滋賀県立大学国際教育センター

522-8533 彦根市八坂町 2500

Phone: (0749) 28-8251

Facsimile: (0749) 28-8480

E-mail: report@ice.usp.ac.jp

(<http://www.ice.usp.ac.jp/>)

印刷

(有) 田中印刷所

彦根市小泉町 1042-1

Phone: 0749-22-0362

The University of Shiga Prefecture
The University Center for Intercultural Education
2500 Hassaka-cho
Hikone, Shiga 522-8533 JAPAN